
悪魔の脚本 『海神の歌姫 ~ Il diva del mare ~ 』

有月 仮字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の脚本『海神の歌姫』Il diva del mare』

【Nコード】

N6067X

【作者名】

有月 仮字

【あらすじ】

海神の怒りを鎮める、最高の歌姫《人魚》に近いと言われた奇跡の歌姫シャロン。彼女の双子の兄である少年渡し守カロンは空から落ちてきたシャロンの恋人、人魚の子孫である美しい青年貴族シエロと共に、最愛の妹シャロンの仇と取るため女装！犯人をおびき出すため記憶喪失の歌姫シャロンを演じ、華やかで腐敗した歌姫の世界に殴り込む。

海に関わるのは男、歌に関わるのは女だけ。これを破れば死刑！正体バレれば死は免れない少年歌姫の物語。

シャロンに友情を越えた愛憎を持つ親友歌姫エコー、シャロンに敵愾心を持つライバル歌姫シレナ、劣等感と羨望からシャロンを慕い憎む歌姫ドリユアス、シエロに惚れてるシャロンを憎む義姉歌姫マイナス、更には王位はどうでもいいけどシエロが欲しいライバル選定侯ナルキスト、王位のためにシャロンを嫁にと望む王子イリオン。誰もに愛され全てに憎まれた歌姫シャロン。彼女は誰に殺されたのか？

復讐のため恋人の振りをする内、シエロに恋をしてしまう少年歌姫カロン。犯人捜しを続ける中でカロンに惹かれ始めるシエロだが、先祖と同じ過ちは繰り返すまいと死んだシャロンを愛し続ける……奇妙な三角関係の行き着く先は……？

呪いと裏切りと愛憎めくるめくオールジャンル復讐劇。

海神の呪いの所為でBLNLGL女体化男体化あり。え？性別って何それ美味しいの？矢印あっちこっち。ジャンル不明愛憎渦巻くカオスなダークファンタジーかつミステリー？

0：悪魔の口上『海神の娘?』（前書き）

1話目からが本編です。これは世界観をなぞるための前書きのよう
なものです。

飛ばしてもなんら問題ありません。

0：悪魔の口上『海神の娘?』

> i333211 — 383 <

悪魔の脚本『海神の娘?』

むかしむかし、あるところにそれはそれはしあわせな終わりを迎えたくそつたれたファッソットまざー あつくな物語がありました。

例えるならそれはウンディーネという名の人魚姫らしくない人魚姫。

例えるならそれはフルトブラントという名の王子様。

どこその物語に逆らい、二人は無事に結ばれそれはそれは幸せな日々を過ごしました。

それはめでたしめでたし。……から始まる可哀相なお話です。

人魚姫との間に子供を授かった王子様ですが、子育てに励む人魚姫との生活に、違和感を感じ始めたのです。結婚とは人生の墓場。何一つ欠点のない健気で一途で優しく可憐で愛らしい妻が居ても、一人の女に縛り付けられるというのは男という生き物にとって苦痛でしかありませんでした。

その内、人魚姫にはない美德。人としてのマイナス要素。王子はそれに強く惹かれるようになりました。新鮮だったのでしょうか。その人間らしい悪徳が、何より魅力的に見えてしまったのでしょうか。ていうかお色気むんむんなお姉さんとか美味しいじゃない。

それはそのはず。人間との結婚で魂を得たとはいえ、元々彼女は

人間ではありませんもの。紛い物の人間です。人間になったつもり
の人間です。一度罵れば、彼女はまた異形に戻るわけですから。

要するに、人魚姫はケチの付けようのない女だったところにケチ
が付いたのです。

かつて愛した女ですが、今となっては存在自体が嫌味。王子は自
分が彼女に釣り合わないと思い始めました。彼女の寿命は人より長
く、いつまでも可憐な彼女に劣等感を感じていたのでしょう。或い
は彼の嗜好がロリから妖艶な女性、あるいは熟女の色香にシフトし
ただけかもしれませんが。どんなに可愛い女の子でも、飽きる日は
来る。

美人は3日で飽きると言いますし、数年耐えた彼はまだ頑張った
方でしょう。

(私でもすぐ飽きるわよそんなの。大体今時そういうの流行らない
と思うのよね悪魔的にも。人間の嗜好つても大分良い感じに歪ん
できたなら結構結構。どこぞの使い魔達が頑張ってるんじゃない？
私の部下は全然だけどね。あいつら締め切り破りまくるんだもの、
使えないわどいつもこいつもっ！後で拷問にでも掛けてやりましよ
う。うふふ。ああ、それはどうでもいいわ)

さておきさておき。その頃にはもう彼女のやることを為すこと言動
仕草その全て、何もかもが気に入らなくなっていたそうです。

とうとう他の女との再婚を決意する王子に、離縁を告げられる人
魚姫。

海の掟により彼を殺さなければならなくなった彼女ですが、こん
な屑男のために身代わりになり、代わりに命を落としてしまいまし
た。

ああ、なんて馬鹿な女なのでしょう。

(悪魔的にはここは大爆笑するところね。いやー……生で見えたかったわ。ちよつと覗くの遅かった。忙しくても録画テープ見るよりやつぱリアル放送時間に見るのが一番よね。今度から気をつけましょ(うつと)

ここで怒ったのは親馬鹿である海神です。

(娘に付ける名前が間違ってんぞもつろく爺とかはつつこんではいけません。海の世界も色々あるらしいのよ。なんちゃらネーム世代とか。このころは川とか泉関連の名前が流行ってたとか何とか。どこの世界も下らないことやっつてんのねえ……精霊クラスの存在まで俗世に染まっつてまあ……)

それはさておき、何かを呪うことに定評のある海神様。さつそく娘を裏切った王子と、彼の国を呪いました。

それ以来王子の子孫の男性は、海水に触れると災いを呼ぶ、更には性別が女性に変わるといふ呪いを駆けられてしまいましたとさ。

(髭爺っ！なんて美味しい呪いをつ！GJ海神！あんたとは良い酒飲めそうよ。地獄に来る機会あったら歓迎するわよ。まあ、来られたらの話だけ)

そんなこんなで呪われたその国は何度も水害に見舞われ、腐れ貴族共は空中に城を築いて逃げ出しました。

（よ、外道！悪魔的にそこそこ素敵だわ。人間の癖にやるじゃない！いいぞもつとやれ！）

しかしそのとばっちりを受けてしまうのは、いつの時代も最下層空に移り住めない哀れな貧しい人間達。

ああ、もしかみさまがいるのならどうぞあわれなかれらをおすく
いください（棒読み）

（え？海神？……世界観的にはこの本は神って概念がちゃんとするのねー。まあ精霊の王様みたいなもんなんだろうけど、一応神様としての分類しといてやりましょう。でも神様がラスボスなんてつまらないわー。神に反逆する俺かっこいいー的な呪いが解けたわやつたあ嫌ん愛してる結局ヒロインとくつつくEDとか私の時間返せって本破り捨てたくなるわよ。そんなん悪魔的にお呼びじゃないの。んな結末になった世界は片っ端から燃やして滅ぼしてやる。私はもつとどつろどろの人間にしか生み出せないカオスな愛憎劇希望。悪魔は悲劇か喜劇しか好きじゃありませんの。お解りかしら？……つてあんまり阿呆なこと書いてると数世紀後の私が恥ずかしがるから程ほどにしておくか。いや、でも自分をそうやって精神的に苛めるのも割とぞくぞくするかも。いや、やっぱ駄目！そろそろ真面目に書くわよ私！しっかりするのよイストリアっ！あんま阿呆な文章書いたら地獄の第七領主としての尊厳つてのが地に落ちるわ！ごほ

んっ！)

ああ、もしかみさまがいるのならどうぞあわれなかれらをおすく
いください(棒読み)

無論、悪魔である私は観察をするだけです。

幸い人魚姫は魂を持ったまま死ねたので、いつか人に生まれ変わ
れる日もあるでしょう。

その時こそ、再び筆を取る日。そしてこの物語が完結する日にな
ることでしょう。

【歴史と物語の悪魔】第七領主

？

> i i i i i o o 4 | 3 8 3 3 <

0：悪魔の口上『海神の娘?』（後書き）

魔王イストリアさん、はっちゃけてます。

この世界を観察し執筆した時代はまだ封印されて無くて現役だったんでしょう。

今回は契約するのかもしれないのか。それによってやっぱりファンタジーなのかミステリーなのかジャンルが行方不明。

出来ればじつと観察にまわって欲しいですので、彼女を満足させられるような悲劇を書きたいと思います。

これじゃあ私がい魔じゃないか……

警告全部チエックという色々危ない小説です。危険な香りを楽しんでいただければいいかと、思います、はい。オールジャンル美味しいです。

1：下町の少年渡し守

裏切りの王子

『今度こそ君を裏切らないと約束しよう。』

心変わりが人という生き物ならば……僕は人に生まれ変われなくても良い。

人になれた君と再び出会えたら……僕が裏切られても構わない。

愛していたんだ。

愛しているんだ。

動かない君を見て、ようやくそれに気がついた。

こんな僕を愚かだと嗤ってくれ。罵ってくれ。

愛しい僕のウンディーネ』

*

最愛の人の亡骸を前に、青年は安堵していた。

彼は思う。自身を苛む深い絶望。怒りと悲しみ。それが癒えることはない。そう確信できることは、至上の喜びだった。

(私は違う)

過ちを犯したその男と、自身は違つと心の底から信じられた。

「シャロン……」

華やかな舞台上で歌った、最高の歌姫。……その栄光や今は何処か。

路上に打ち棄てられた哀れなその遺体はまるで路傍の石。一目に人は、それがあの彼女なのだと気付くまで……かなりの時間を要するはずだ。

可憐な少女だったモノは今や冷たい。海のような青い眼をしていた彼女に似付かわしくない赤い血だまりに横たわる。青年は自身の身が汚れるのも気にせず彼女のもとへと跪き、抱き寄せて……ぷんと香る血の臭いに絶望を深く心へと刻みつけた。愛らしいその顔は見るも無惨に潰されて、直視出来るモノではない。それでも青年はそれを涙ながらに眺めるのだ。

まるで仮面を求めるように、垂直に顔面が切断されている。肉も骨もお構いなしに、真っ直ぐに、頭蓋の一部ごと持ち出されている。彼女を殺した人間は、余程彼女への憎しみ、そしてある種の劣等感を抱いていたのだろう。それは憧れ、或いは好意も入っていたのかも知れない。だって彼女の遺体の有様は、余りに猟奇的である。奪われたのは顔だけではない。彼女の腹には穴があり、子宮が引きずり出され……燃やされていたし、その咽も潰されている。最悪、死んだ彼女を見つけた人間……つまりは複数の人間の悪意を身に受けた可能性さえ有る。

彼女はとても素晴らしい人物だった。それ故理不尽に他人の憎しみを買う人でもあった。人間とは概して偏狭で醜く浅ましい。彼女の崇高なる心根の美しさは、人の目から見て……異様なモノだったに違いない。

彼女は人であり、その魂は人でなかった。人と呼ぶにはあまりにも、それは純粹で美し過ぎた。いつそ目眩がするほどに。

「シャロン……僕は幸せだった」

だから青年は確信する。失われた日々。それ以上の幸福を我が身が知る日は来ない。

「僕は、君を愛している……」

彼女が失われた今も、それは変わらない。この絶望こそ、永遠を
教えてくれるモノだと……その時彼は信じていた。

*

> i 3 3 3 3 0 5 — 3 8 3 <

海神の娘

『はい、私が先に彼を裏切りました。』

(。すでんたつ切裏を私が彼は当本、えいい)

だから殺されるのは彼ではなく……私であるべきなん
だと思います。』

(。すでのいなせ殺を彼はに私……らかるいてし愛を彼
どけだ)

*

> i 3 3 3 2 1 2 — 3 8 3 <

少年は空を見上げる。大嫌いなその空を。

この世で一番嫌いな色はあの空色だ。彼にとってあの空は、自分
たちからあまりに多くを奪って来た、憎しみの色だった。

船を漕ぎ、町を巡れば嫌でも出会う。東西南北に設けられた空へ
の道。閉ざされた城門の向こうには、天と地を隔てる長い螺旋階段。
その前には屈強な兵士の姿があり、簡単には通れない。

この階段の向こうには……城がある。城とは便宜上の名であり空
中に設けられた城塞都市とでも言えばいいのか。町の上にもう一つ
町がある。そう表現するのが恐らく正しい。しかし上の人間達はこ

の城下町……通称下町を町とは思っていないだろう。

精々、遺跡か廃墟。そんな認識。この町は捨て置かれている。一切の救済は無い。毎年水害により大勢の人が死んでいるが、国はこの下町のために何も行わない。上の人間達は天空に築いた自分たちの都市を箱船と呼んでいるとは、少年も聞いたことがある。

要するに金のあるお貴族様達だけが移り住むことが叶う安全な場所。あまり多くの人間が移り住んでは町が落ちる。空中に築くとはいえ、この時代の技術力では支えも無しに空に浮遊させることなど叶わない。しっかりとした無数の足場が海へと陸へと伸びて津波洪水から逃れるだけの空中都市。

住める人間の数は決まっているようで、時折空から人が落とされる。それは生まれて間もない赤子だったり、年老いた老人だったり。そんなものを見つucker度に、少年は思う。まるでここがゴミ箱みただいと。

勿論空の町から下町までは大分縦の距離がある。落下すれば唯では済まない。大抵は遺体となって発見される。それでも風に乗る、運良く助かる者も稀にいる。少年の知る限りでも1人、そんな人間が居た。

その幸運な友人も今はこの町から離れている。仕事で船に乗り、余所の国へと出かけていたはず。騒がしい友人がいなくなると、本当に音がない。聞こえるのは波の音だけ。

この静けさが日常になりつつある今に、少年は深く溜息を吐く。何も失われたのは彼だけではないのだ。

だから少年は、憎々しげに空を見上げる。小舟を漕いで城の下を通りかかれば、天空からこぼれ落ちる歌と音楽。

(腐れ貴族共が……)

この下町では多くの人間が毎年命を失っている。それを助けもせず自分たちはああして音楽に浸り踊り狂っていると思うと怒りすら

湧いている。

「だけどちつぽけなこの僕に、何が出来るだろう。そんな諦めを少年は拭い去れない。……だからこそ、空から落ちる調べに……縋る心もあるのだ。あの音楽。その中に彼女の歌が無いだろうかと耳を澄ませて、大切な人を奪われた悲しみを紛らわす。」

「……lalalarara」

懐かしい鼻歌で自分の心を慰める。

「綺麗な声ねえ……空から来たっていう歌姫さんかしら？」

「馬鹿ねえあんた。この国の起きても忘れたの？大体、一端空へ上がればよっぽどのことがないと下には戻れないって話じゃない」

「それじゃああの子男の子なの？勿体ないわあんな綺麗な声なのに……男じゃ歌姫にも楽師にもなれやしななんてねえ」

海に関われるのは男だけ。音楽を携われるのは女だけ。そんな妙な決まりがこの国にはある。だからその歌を歌うのは少年だろうという嗜好きの女性達の会話。

それが自分を指すことに気がついて、少年は口ずさむのを止めてしまう。聞かれていた。恥ずかしい。

少年は我に返ったその時だ。何者かに背後から話しかけられた。

「カロンちゃん、ちょっと向こうの通りまでお願い」

「毎度あり、綺麗なお姉さん」

「嫌だもう、口が上手いんだからこの子は」

「あ、すぐそこだね。それじゃタダでいいよ。お姉さんの顔に免じて」

「嫌ねえっ！カロンちゃん将来良い色男になりそうで今から怖いわー！」

満更でも無さそうに中年女性が笑う。少年の仕事は通路を海水に飲み込まれたこの下町を行き来する便利屋タクシー。船頭や渡し守と呼ばれる仕事。

少年の父は、彼が幼い頃に水害で死んだが、最期まで船を漕いで水に飲み込まれた人を救い続けた。そんな父が少年にとっての憧れで誇りだった。父の遺した船で、その後を継ぎ下町のために働くことは生き甲斐でもある。

(また、やつちゃった…)

しかし、そうは言っていられない事態が起きた。だというのに日々の稼ぎはそう多くない。金儲けと人のためは両立できない。そう思うのだが、どうしても親しみある下町の人々から大金を巻き上げることが出来ない。

「カロンちゃん、これお駄賃代わりに取っておきなさい」

女性は手にしていた買い物袋から、果物を幾つか置いていく。今日はまだ何も食べていなかったから正直有り難い。

「ありがとうございます。今後ともご贖員に」

笑顔で立ち去る女性に、にこりと笑って頭を下げる。

それじゃあ遅い食事にでもしようかと小舟を泊めて、腰を下ろした。目に入ってくるのはゆらゆらと揺れる水路の海水。水面に映る自分の顔。そこに誰かの面影が重なる。

金色の髪の海色の瞳。それがもっと長かったなら……少年のそれは別の少女のそれに近くなる。

「シャロン……」

シャロン＝ナイアス。今はシャロン＝ナイアード。
それは少年の妹の名だ。空に攫われた妹の名だ。

彼女は歌姫になると言い、貴族の養女になってこの町を出て行った。最初は引き留めたが、強い決意に根負けし……送り出すことになった。

歌姫は女性だけがなれる職業で、この国で一番の名誉職。下町の女の子だって皆一度は歌姫に憧れる。一種の通過儀礼のような憧れの職業。

この国は海神に呪われている。度々起こる水害は海神の怒りであるとまことしやかに囁かれるにはわけがある。

昔々の話だが、この国の王子は海神の娘と恋に落ち結ばれた。彼女の名前はウンディーネ。

それは愛らしく、心優しく……素晴らしい歌声の持ち主だった。

しかし海神は二人の結婚を認めず、王子と娘を呪った。海神は娘を男へと変え、それでも愛が誓えるかと王子を試した。それでも王子は変わらぬ愛を彼女に誓った。

二人の強い愛の絆を知り、海神は根負け。二人を祝福し呪いを解いた。……二人の間には子供も生まれ、それは幸せな……めでたしめでたし。そこで終わればどんなに良かったか。

現実はお伽話よりも残酷だ。王子は裏切りを犯した。

母になった娘より、娘である女の色香に誘われた。他の女との浮気を知ったウンディーネは深く嘆き悲しむ。その事実を知って海神は怒り狂った。

海神の怒りで国を災害が襲ったのを期に、王子はとうとうウンディーネを見限った。王子は彼女と離縁し、他の女を妻に娶ることを決め……海神は掟に従い彼を殺せと娘に迫った。

しかし裏切られてもまだ王子を愛していたウンディーネは、浮気を働いたのは自分だと言い王子を庇い、掟に背いたことで彼女に死が降りかかる。

最愛の娘を裏切つて、死なせる原因となった王子を……海神は深く憎み、王子と国を祟り始め、これまで以上の水害が国を襲うようになった。

その海神の怒りを静めたのが、歌姫だった少女。彼女の人魚の如き歌声に、海神は娘を思い出し涙したという。怒りが悲しみに変わる間は海神は災害を起こさず、嘆き悲しみに明け暮れる。

それ以来歌姫という職業が重んじられるようになり、歌姫になれば空に移り住むことが許され、社交界の一員に加われる。

国一番の歌姫には、《人魚》の称号が与えられ……王族との結婚が許される。

そんな玉の輿や名誉、身分目当てに人魚を目指す歌姫も多いが、そんなものを目指して……少年の妹が空に上ったわけではない。シヤロンはこの下町の現状を憂い、国王、王子に直談判。そして国の改革のために歌姫になりたい。海神と話して彼の怒りを解きたい。

歌姫の才能を見込まれ、貴族から養子の誘いがあった時……彼女はそんなことを口にしていた。

妹は兄の鼻肩目無しにも可憐であり、歌声にも魅力があった。必ずや人魚になることが出来るだろう。それでも少年は最愛の妹……最後の家族を失うことが嫌だった。

妹は世のため人のためと行動しようとしているのに、利己的でちっぽけな自分に嫌気が差した。それでもとても寂しかったのだ。

空に上れば滅多なことでは下に降りては来られない。それほど上での生活が素晴らしいのか、簡単には降りられない理由があるのかは下の人間からは何も見えない。唯想像するより他にない。

「おい、カロン。そんなに水面見つめて入水自殺でもする気かよ？」

突然肩を叩かれ、心臓が跳ね上がる。振り返れば外へ出ていたはずの幼なじみの姿がある。以前より小綺麗な格好だが、人懐っこい笑顔は相変わらずだ。

「オボロス！驚かすなよっ！！」

「悪い悪い。相変わらず元気ねえなーお前」

さして悪びれもせず友人が謝る。

「お前、いつこつちに帰ってきたんだ？」

「ん？つい最近。忙しいのなんのって」

彼は商家に仕える船乗りになったと聞いている。そこそこ稼ぎも良いらしく、以前は自分とそう変わらなかった細身の身体の肉付きは多少良くなっているし背も伸び健康的な印象を与える。彼自身、自分と友人の違いに気付き溜息を吐く。

「お前、客は？」

暇そうだった自分の姿を見ていたのだろう。オボロスはあきれ顔。

「今日はゼロ」

先程の女性からは金銭を取っていないから客とカウントは出来ない。友人はそういう意味で聞いてきたのだから。

「はあ………そんじゃ、俺を家まで運んでくれ」

「毎度ありー！」

金貨を数枚投げて寄越す友人に、カロンはにやりと微笑んだ。やはり持つべきものは友人だ。こちらの事情を理解してくれているため、話が早い。

「最近調子はどうなんだ？こっちは貿易で人手不足で忙しいのなんのって」

くたびれたように彼は言い、舟へと上がり込む。

「なあ、お前も船乗りなって海の男になんね？結構儲かるぞ？旦那様にお前のこと話したら、俺の友人って事で既に高評価！お前がその気ならいつでも雇ってくれるってよ」

その言葉は有り難い。しかし船頭も海の男だ。何より父の遺志を継いだ以上、おいそれと鞍替えは出来ない。そしてこの仕事は儲からないが誇りはある。誇りと金を天秤に掛け……こうして誘われる度段々金に傾いてくる心があるのはカロンも認めている。

「それに、シャロンの仕送りのためにも色々入り用だろ？」

そう。それなのだ。カロン自身、頭が痛い。

カロンが舟を漕ぎ、町を進む中……舟に寝転んだオボロスがぼんやり空を眺めて呟いた。

「しかしなあ……あのシャロンが社交界の仲間入りか」

この友人は妹に惚れている。兄であるカロンには筒抜けである。

「お前の嫁にはやらんからな」

「うわっ！出たよシスコンっ！」

毎度毎度の恒例行事と友人が懐かしげに苦笑する。

まだまだ幼いシャロンには、恋愛感情など解らずそれが伝わりはしなかったが、この友人が良い奴だと言うことくらいはカロンが誰よりも知っている。シャロンにその気が芽生えた時は、一発殴る程度で光彩を認めてやろうとカロンは考えていたが、シャロンは空へと行ってしまった。それは丁度、この友人が仕事に出ていた時だった。

それを伝えるのは心苦しかった。何故行かせたのだと罵られるかと思っただ、オボロスはそんなことはしなかった。唯一度、そうかと悲しげに呟いた後……何時も通り笑ってみせる彼はとても強い。「俺が稼いで金持ちなって、貴族になったらお前も使用人として空に連れて行ってやんよ」と笑う程度に。彼は前向きにシャロンとの再会を夢見ている。

そんなこと無理だと諦めているカロンとは違う。

「でも変な決まりだよな。衣食住の食住は他人から支援されてもいいけど“衣”は自分か血縁者で賄えだなんて」

歌姫の世界には、色々と思議な決まり事がある。オボロスの言うそれもその一つ。

華やかな衣装に身を包む方が人目を引く。高価な衣装を他人から送られることは、歌姫としての努力もせず一気に魅力が上がる。だからそれを防ぐための法らしい。歌と共に歌姫として成長し、歌の力で金を稼いでそれに相応しい衣装を身に纏うべき……そういう考えは正しいが、既にスタートラインからこれは酷い話。

貴族の娘が歌姫になれば、血縁者は金がある。しかし、シャロンのように養子に入った歌姫は……後ろ盾の貴族が血縁者ではない。なので食住の支援はできても衣装は自分の稼ぎで賄うしかない。

女の身では海には関われない。「父のように、人を救いたい」という彼女の願いは、歌姫になることでしか叶えられないものだった。その強い決意を知り、カロンは妹を送り出すことを決めた。今はその仕送りに励む毎日である。カロンが金を必要としているのはそのためだ。いくら妹が優れた歌声の持ち主でもボロ雑巾のようなドレスで歌っても馬鹿にされてしまうだけ。妹の実力に対応しい衣装を着せてやるのが、彼女の夢を叶えてやるための後方支援。そう考えるなら、オボロスの好意に甘えるべきなのだ。父の遺志も自身の誇りも捨てて、金を稼ぐ必要がある。

案外やってみれば楽しいだろうなと思う。友人は大変そうだが弱音は吐かない。彼と一緒に心強い。そうは思うのだけれど、この街に縛り付けられる心があるのだ。

もし万が一空での生活に苦しんで逃げ出してきたシャロンが空から帰って来て……そこに自分が居なかったら、彼女はどんなに寂しい思いをするだろう？

彼女の帰ってくる場所でありたい。あの家で彼女を温かく迎える自分でありたい。

だけど本当は知っている。それはいいわけだ。そして弱いカロン自身の願いに過ぎない。

国より人より妹が、自分を選ぶことはない。そんなことなら最初から空になど行かない。

だから彼女は帰ってなど来ない。そんな弱音を吐く妹ではない。一度決めたことは絶対にやり通す意志の強さを持っている。自分とは違う。

「シャロンの歌なら心配ない……俺がしっかりした服買ってやればあいつはすぐに人魚になれる」

あいつは外見も才能も思いも努力も十分だ。足りないのはそう……衣装だけ。

そつだ。そのためにも頑張らなければ。

「シャロン……」

お前が歌姫になれば、また会えるのだろうか？それとももつと遠くに行つてしまつて……二度とお前に会えないのだろうか。

支えるために頑張らないと。そう思う気持ちと、人魚にさせたくない気持ち。戻ってきて欲しい気持ち。矛盾した感情に振り回されて、こうして今日も船頭を続けている自分がカロンは酷くちっぽけで情けなく矮小な存在に思えてならない。

「カロンっ！前っ！」

「前？」

物思いに耽り下を向いていると、突然叫び出すオロボス。この辺りの道なら目を瞑つても舟を動かせる。何かにぶつかると言うこととはないはずだ。首を傾げながら、カロンは前方を見る。当然何の障害物もない。

「またお前はそうやって俺をからかつてっ……！」

元気づけようとしてくれるのは有り難いが、からかわれるのはあまり快いことではないと睨み付けるが、オロボスは上空を見上げたまま、今度は上だ上と叫んでいる。前とは彼から見て前の意味だったのか。

「上……？」

カロンは見上げる。確かに何かある。近づいてくる。落ちている。ふわと風に広がる色は人のそれとは思えない、とても綺麗な……

(空が、落ちてくる……)

一瞬目を疑った。下町なんかじゃお目にかかれなような綺麗な人。それはその衣服の質さもさることながら、その人自身の美しさ。人間じゃないみたい。まずはそんな第一印象をカロンは抱く。髪の色も瞳の色も本当に空を映したような色。光を浴びてその色は雲の白から明るい空色までのグラデーションを描く。この髪の毛と巻き取って刺繍をしたらどんなに素晴らしいものが出来上がるだろう。そんなことを考えてしまうような綺麗な色だった。

「大丈夫か！？カロン……」

どこかでオボロスが何か言ったが、よくわからない。というかどうでも良い。そんな風に感じるほど、今はその色だけが目に映る。広がった長い髪に視界を視線を奪われている。

だけど綺麗だったのはその髪だけではない。ゆつくりと瞼を開けたその人は、海水をそこに酌み取って閉じ込めたような美しいマリブルーの瞳。宝石みたいな目だ。そんな人が自分の上に落ちて来た。目を開けたと言うことは死んではいないようだ。しかしどうしたことか退いてくれない。その人は驚いているようだ。そこでカロン自身も気がついた。

此方に駆け寄り固まっていたオボロスも我に返ったようだった。

「って何してんだあなた！！突然空から降りて来て、その上……」

みなまで言うな。言わないでくれ。カロン自身、我に返って愕然とした。

「痛たたたた……やはり無謀だったかな」

その人の口から漏れた声は、女のそれではない。綺麗な声だが男のトーンだ。幾ら綺麗と言ってもそれは……よくよく見ると胸はない。こいつ男だ！しかもその出で立ち。何より大嫌いな貴族に違いない。そして何より……

(男なんかに貴族なんかにっ俺のファースト……)

この落下物とぶつかった際に、キスをされてしまった。その感触を思い出して羞恥と怒りでカロンは權を振り回す。

「ぎいやああああああああああああああああああああああああああああああああ！！貴族が空から降って来たあああああああああああああああああああつ！！」

事故だ。事故だとは言え、深く抉られた心の傷は癒えない。どういう風に落ちてきたらそんな風になるのか小一時間重力と風の関係について考えてみたい。

しかし此方に心の傷を負わせた相手とは言えば、平然とした顔でこんな事を言い出す始末。

「ここは舟か。丁度いい。下町の裏通りの三丁目まで運んでくれないか？」

「誰が運ぶかつ！さっさと降りろっ！」

カロンは青年を睨み付けるが目が合わない。しつかり視線を逸らしたまま彼は今のは事故だと言わんばかりで話にならない。

「金なら幾らでも出す。頼む、舟を出してくれ」

「嫌だ断るっ！俺は貴族が嫌いなんだ！俺は下町の人間しか舟に
乗せないって決めてるんだ！」

「カロン……そんなんだからお前の仕事儲からないんだよ」

カロンの背後でオボロスが嘆息していた。

「なあカロン」

「何だよ、今こいつ追い出すのに忙しいんだ」

睨み付けるが友人は、顔を近づけ耳打ちしてくる。

「見たところこの兄ちゃん、下町のことは全然わかってねえ世間
知らずだ。幾らでもぼったくれるから乗せてやれば？それに目的地
こっからすぐじゃん」

「だから尚のこと歩けて話だろ」

「道わかんねーんだろうよ。易い仕事で儲かるんらしいだろ。
目的地の俺の家からも近いしついでだと思って」

そういうことは自分が事故に遭っていないから言えることだとカ
ロンは行き場のない怒りから友人の顎を權で突く。

「うぐっ……がはっ！ちよっ……手加減っ！たんまっ……ほら！
シャロンのためにもここは耐えるんだ！」

お前もこうなりたくなかったら出て行けと、見せしめのように友
人を小突いていたら貴族男が食い付いた。

「シャロン？」

「あんた……俺の妹を、シャロンを知ってるのか！？」

これまで憎いと思っていた青年貴族が一変。もしかしてシャロン

の知り合い？友人か？妹は男女関係なく仲良くなっていたからあり得ないことではない。だがこの男がロリコンでないという証明も難しい。僅かな親しみと許し、それから確かな警戒心を持ってカロンは男に近寄った。

「落ち着けシスコン！シャロンなんてよくある名前だろ！」

だが友人からは後者が感じられなかったようで、此方の身を案じるような声が上がった。失敬な。俺だって警戒心くらい持つてる。例えば妹の名を出されたからって気を許すような阿呆じゃない。少なくともカロン自身はそう思っている。

だからオボロスが何か言ったが聞こえない。聞こえないぞ断じてカロンは友人無視を決め込んだ。

「ああ！確かにあの子によく似ている！そうか……君が、あの……」

「な、なんだよあんた！」

親しげに此方の頬に手を伸ばしてくる貴族。その手を払いのけながら、カロンは男を睨み付けた。すると彼は失礼したと優雅に微笑み……ひらひらと封書を見せるのだ。

「申し遅れたが、私は彼女の知り合いで……君に手紙を預かって来た。話を聞いてくれるねカロン君？」

名前まで当てられた。知り合いだというのはどうやら間違いなさそうだ。わざわざ手紙を届けてくれるなんて、実はこの男良い奴なんじゃないか？貴族にも良い奴がいるんだなあと少しだけカロンが感心していると、何やら物騒な声が聞こえてくる。あれは人の話し声、それからガシャガシャと鳴るのは鎧の音？

「いたか!？」

「そつちに落ちた!探せっ!」

その男達の声に青年貴族が狼狽える。オロオロしている様子が頼りなく、仕方ないという気になった。

「来い。こっちだ。ここからなら歩いた方が早い」

「え?」

「俺の家で聞いてやる!行くぞ!」

貴族の袖を引いて奔り出すカロンに、舟に残されたオボロスがまた何か叫んでいた。

「カロンー!俺はー?」

「お前は帰れ!降りろ!家すぐそこだろ!あ、あとちゃんと舟繋いどけよ!」

何やら不平が聞こえたが、当然黙殺。何とか無事に家までたどり着く。男は下町の家が珍しいのか家の中で挙動不審にあちこちキョロキョロしている。

妹の下着でも盗むつもりなら半殺しにしよう。そう思っていたが貴族は、男だと知っていても思わずどきつとしてしまうような笑顔で笑う。

「ここがシャロンの生家か……いい家だね。なかなか趣があつて幽霊とか出そうぞ」

「出るか!あんたは下町を何だと思ってるんだ!」

カロンが茶を叩き付けるとありがとうと奴はまた微笑み、優雅に

それを睨り出す。何をしても絵になる様が腹立たしい。

「……………で？話って何だ？さっさと本題に入れ」

こいつに任せてはいつまで経っても話が始まらなさそうだ。そんな予感を感じてカロンはさっさと切り出すことにした。それには貴族も茶を置いて、神妙な顔つきになる。

その様子だとわざと本題から逃げ居ていた、そんな風にも思える。

「それじゃあ単刀直入に言うよ」

「ああ、そうしてくれ」

「君の妹、シャロンが死んだ」

一瞬、何を言われたのか解らなかった。カロンは男を振り返り、彼を凝視。嘘だろうと目で聞くも、彼は残酷にも、絶対的な絶望を再び繰り出した。

「殺された」

その刹那、世界が割れるような音を聞く。けたたましい音。

(シャロンが、死んだ……………?)

その衝撃に目眩を感じた。しかしそれは幻聴だ。男から奪い取った手紙を、恐る恐る開け……………そこに冗談ですとかドツキリとか書いてあることを期待する。しかし、そんな悪趣味な妹ではないことは百も承知。それでもこのパンドラの箱に希望が残っていることを信じたくて、それに縋りたくて……………カロンは手紙を手を取った。

“カロンお兄ちゃんへ”

お元気ですか？私は元気でした。
本当なら、一生……この手紙がお兄ちゃんの目に触れることがないことを、切に願っています。

だけどこの手紙がお兄ちゃんの所に届いた時は、もう私がいなくなつた時なんだと思います。この手紙は信頼できる人に預けました。私に何かあつた時は、必ずこの手紙をお兄ちゃんに届けてくれるはずです。

お兄ちゃんに寂しい思いばかりをさせてしまつてごめんなさい。これからも寂しい思いをさせてしまうならごめんなさい。そして最後まで我が儘ばかりの私を許してください。

カロンお兄ちゃん……シャロン最後の我が儘です。どうかお願いします。人魚になって……私の代わりに歌ってください。そしてどうかこの国を……みんなを助けて”

全部を読み終える前に、もう涙が浮かんできた。必然的に下を向いているのだから涙が紙を濡らしてしまう。それでも文字は滲まず、彼女の強い意志をそこに刻んだまま。カロンの望むような言葉に変えてはくれない。

「彼女はいつも、君を自慢気に話していたよ」

青年貴族が慰めのような言葉を口にする。

「彼女は空では天才と呼ばれた。だけど本当はいつも自信が無く……本当は君の方が歌姫の才能があると言っていた。お兄ちゃんの方が上手いんだって、僕に嬉しそうに話してくれた」

「ねえカロン君。君は知っている？彼女の夢を」

当然だ。俺はシャロンの兄貴だぞ。知らないはずがない。あいつは最高の歌姫になって……

「彼女はね、本当は船頭になりたかったんだ。憧れのお父さんや君のようにね」

父親のようにになりたい。それは人を救う者になりたい。そういうことだと思っていた。

だけど違った。本当は同じ方法で人を救えるものになりたかった。そんなこと、俺は一度も打ち明けられたことがない。てっきりあいつが歌姫になりたいものだとはかり思っていた。だって歌姫は女の子みんなの憧れで……

その先入観こそが誤りだとカロンは知る。目の前のこの男は、兄である自分より……深く妹を理解していた。

「本当は歌姫なんかより……君のようになりたかったんだって。あの子は優しいからね。人を救うために人を蹴落とす歌姫という仕事をあまり快く思っていなかったんだろう」

誰もがヒロインにはなれない。大衆の心を得るヒロインは、枠が限定されている。だから他人を傷付け蹴落とす罵って……夢破れていく世界。この下町を救いたいというシャロンの瞳は……そこで何を見たのだろうか？

船頭は人を蹴落とさない。傷付けない。人を運ぶだけの仕事。だけど生と死を隔てる境界を越える仕事。溺れた人を、沈んだ人を、波に見込まれる人を寸前で救って命を運ぶ。父はそういう船頭だった。歌の才を持ちながら、歌姫にならなかった女を娶り、貧しいな

がらに幸せに暮らしていた。

母が空に攫われてからも父は船頭の仕事を続けた。何故母を取り戻しに行かないのか。金になる仕事をしないのか。カロンも幼心に彼を咎めたこともある。それでも死ぬまでその仕事を続けた父の背中、中にも認識を改めた。シャロンもそんな父の背中を見て育った。そこから強く感じるものがあつたのだろう。

同じものを見てそだったというのに、カロン自身は目の前の人を救うことしか考えられず、先のことは考えられない。改革など実行できる度量がない。そんな情けない兄の陰で幼いシャロンがこの町を救いたいと思うまでに成長したのは……喜ばしいこと。お前は俺の誇りだ。だけど、それでも……

(お前は立派だシャロン。だけど俺は……俺はお前みたいになれないよ)

国のために？他人のために？こんな時に、いきなりそんな事を言われても。

「最期の我が儘が……他人のためってっ！そんなのってないだろ！？」

大事な妹を失って、こんな気持ちで誰かのため？歌えるわけがない。こんな悲しい気持ち、悔しい気持ち……誰かのために祈れるか？無理だよそんなの。

「……手紙はありがとう。でも……もう帰ってくれ」

壁に背を付け膝を抱えて俯いて……なんとかその言葉を青年に向かって振り絞る。窓際で風に吹かれていた彼が、カロンの言葉に歩み寄って来た。それでも拒絶の意思は崩れない

「俺は歌えないし……男は歌姫にはなれな……」

不意に隣に彼が腰を下ろした。此方にピタリとくつついで、それでも此方は一切目もくれず……彼が歌を歌う。

とても綺麗な声。それは俯いていたカロンさえ、思わず彼の方を向いてしまう程。綺麗なだけではない。

その歌に詞は無い。今はどんな優しい言葉も慰めと感じてしまうから。だから彼は旋律だけを歌う。それこそ彼の優しさだ。それでもどんな慰めの言葉より、強く激しく胸を打つ。

悲しみが僅かに和らぐ、その優しい歌。そして妙な懐かしさ。既視感を覚える。

（この歌……何処かで）

此方の心に気付いたのか、ここで初めて青年は歌に言葉を付け足した。それにカロンは思い出す。

（この歌……俺とシャロンの歌だ！）

舟を漕ぎながら鼻歌を歌っていると、一緒に舟に乗っている妹が歌詞を付けて歌い出した。客が居ないときはそんな風に二人遊んで客が来ればカロンが恥ずかしくて何も歌わなくなるのを知り、シャロンだけが歌っていた。

《ゆらゆら 海の波間に 覗く暗い影は

ゆらゆら 星の闇間に 私求め縋る

嗚呼愛しい貴方 空と海の彼方に

二人歩く街並みが 何よりの幸せ》

その歌に人が集まり、一時期渡し守業は繁盛した。その噂を聞きつけシャロンを養子にと貴族が迎えに来たのだった。

それでもシャロンはあの歌はカロンと二人きりの時しか歌わなかった。人の気配を感じるとすぐに一緒に鼻歌に変えて、カロンが歌うのを止めると別の歌を歌い出す。

二人だけの秘密という暗黙の了解が、その歌にはあった。それが破れた。何だかそれは……とても裏切られたような気分だった。それでも妹に文句は言えない。憎しみを向けるべきは必然的に目の前のこの男となる。

(こいつ……シャロンとどういう関係なんだ?)

あの歌を教えるほどだ。もしかして……兄である自分と同等。或いはそれ以上に大切な相手?

(まさか、恋人……とか?)

兄である自分の許しもなく愛しの妹に手を出す輩は殺してやりたい。しかしその歌があまりに素晴らしいので睨むはずのカロンの目は戸惑うばかり。お前が歌姫になれよと言いたいくらい、彼の歌は素晴らしい。

「カロン君」

名前を呼ばれたことにも気付かないくらい、彼の歌にのめり込んでいた。そのことに気がついて気恥ずかしくなり、怒りでそれを誤魔化した。

「な、なななな何だよ!」

「彼女には人魚の才能があった……だけど君に会って確信した」

貴族がこちらを見ている。彼もまた泣きそうな顔でカロンを見る。

「素質だけなら最高に優れた歌姫だった彼女を越えるものが君にはある。君ならこの国を救う人魚になれる！どうか私と一緒に空に
来てくれ！」

彼から眼をそらせない。それでも領けない。固まるカロンに青年
は……尚も諦めず、語り続ける。その熱い思いに承諾は出来ないな
がらも拒絶も出来なくなっている。

「それに空に行けば……」

不意にだ。彼の声のトーンが影を孕んだ。

「彼女を殺した犯人を見つけることも出来るかもしれない」

「!？」

その一言。頭の中がクリアになっていく。考えもしなかった。そ
れでも一度耳にすれば離れない……魔法のような呪いのようなその
言葉。復讐。シャロンを殺した相手を……探してそして……

「君が望んでくれるなら、私も私の持ちうる限りの力と手段を用
いて、その復讐に手を貸そう。……どうする、カロン君？」

もし自分が断るなら。この男はきつと……自分1人でそれをする。
それを感じさせる何かがある男にはあった。

(本当にこいつ一体……シャロンの何なんだ?)

唯、この男は俺の敵じゃない。解り合える。同じものを見ている。もしかしたらこの世界で誰より俺の味方……？そう思わせる協和音のようなシンパシーを感じる。

だけどこの男は耳が良いんだな。カロロンがそれに気付く前に青年は目を見開いた。その直後、カロロンも聞いた。家の傍まで近づく足音。

「向こうから声がしたぞ！」

「今の歌、シエロ様だ！」

「カロロン！耳を塞いで！」

シエロ？それがこの男の名前だろうか。そんなことを思いながら、言われるがまま耳を塞いだ。それでもおとは完全には遮断できない。

「観念しろフルトブランドっ！」

人の家の扉を蹴破り現れる鎧の騎士達。人の家を何だと思って居るんだ。弁償しろ。

「大人しく城まで戻って貰いますよシエロ様……」

ジリジリと詰め寄る騎士達を前に、すうとシエロが息を吸う。そして……彼は歌った。

けど何も聞こえない。それでも頭が割れるように痛い。耳を塞いでいてもだ。

(これは超音波！？)

耳を塞がず波状攻撃の直撃をくらった騎士達は、その場に倒れ込

む。鎧の中まで反響して凄いいことになっていそうだ。だけど他人事ではない。耳を塞いでいたカロン自身も気が遠くなり……ついには気を失った。多分家の所為だ。気を失う直前に、カロンはその結論に至る。部屋が狭すぎて反響してしまっただ。もしこれだから庶民の家はとか言われたら後で一発ぶん殴ろう。

*

「……んん……」

目を開ける。見慣れぬ天井。天井？違っこれはどうやら寝台のようだ。だがそれは所謂天涯ベッドとか言う代物ではないか？カロンはそれが自分の生活水準から見えてあり得ないものだと考え、これは夢だと結論づけ一度目を閉じる。もう一度開ける。まだ見える。どうやら夢ではないらしい。

(ここ、何処だろう……)

現実ならば尚のこと、意味が分からない。とりあえず周りの状況を確認するため身体を起こす……

「よかった……気がついた？」

拳動不審なカロンの枕元で、カロン以上に拳動不審な男が居た。シエロだ。

ほっと安堵の息を吐く貴族。本当に心配してくれていたらしい。妙な感じだ。他人がそんな……貴族の癖に妙に馴れ馴れしい奴だ。色々と分からないことが多いが、自分を介抱してくれたのは間違いないようだ。

「……助けて？くれたんだよな。一応礼は言っておく。……ありがとう」

「ううん、気にしないでくれ。私が巻き込んでしまったようなものだし」

「だよな」

カロンが頷き正にその通りだと告げると狼狽える貴族。しかし次に狼狽えたのはカロンだった。

「って何だよこれっ！！」

何故か女物の服を着せられている。おまけにご丁寧に髪まで弄られ左右で結われていた。

「あはは、大丈夫大丈夫。似合ってるよシャロンみたいで」

「そうじゃなくて俺はっ！」

会話が噛み合わない。この男は独特な感じで話すから。

「君は今日から歌姫になるんだから当然だろ？男の格好じゃ歌姫になれないしねえ……」

「はあっ！？」

確かにそうだ。掟に従えば、男は音楽に携われない。職業に関する性差別は厳しく、なんでも法だけではなく宗教問題にも発展する大問題。あれやこれやとこれに背けば死刑にされる。だから男の格好のまま歌姫なんて当然無理。しかし女装したとしても……万が一その正体が露見すれば、人魚所の騒ぎではなくなる。死刑なんて、そんなの嫌だ。

「俺は女装なんて御免だぞ！」

髪のリボンを解き、シエロを睨むが奴と来たらにこやかに微笑するだけ。

「大丈夫だよ。僕が守る」

「守るって言ってもな……」

「君を我がフルトブラント家の養子にしておいた。我が家は後ろ盾としては申し分ない」

「は？」

「君は今日から記憶喪失のシャロンを演じて……歌姫をやって貰うことになるからよろしくお願いするね」

「ちよつと待て！俺は歌姫になるとは一言も言っただけ！承諾してないっ！」

カロロンが反論するも、シエロは思い出すよう嫌なことを言う。

「……君の家、もう彼らに見つかつただろ？」

確かにそうだ。家にはあの騎士達が来た。巻き込まれたってレベルじゃない。

「だからもう帰れない。帰ったら彼らに捕まる。君は誰かに保護される必要が生じた。だから私の家まで連れて来た」

「それじゃあここ……空なのか」

「うん、見てみる？」

窓の外を見せられた。その光景に息を呑む。

「凄え……」

城壁に囲まれた空中都市。空が近い。雲があんなに近い。

「貴族の身分によって住める高さが変わるんだ。フルトブランドの本家はかなり高い方だと思うけど。他のエリアにも別宅を置いていてここは一番低い層の屋敷。だから一番狭いし……散らかってごめんね」

「嫌味か？」

「あ、ごめん。そういうつもりじゃなくて……あんまり最近使っていないから掃除とか行き届いてなかったらと思って」

一番低い場所にある屋敷か。それでも十分立派だし、カロン自身の家に比べれば嫌味な程広い。

(でも……一番早く介抱できる場所を探してここに来たんだろうな)
そう思うとそれ以上悪くは言えなかった。

窓の外。屋敷より少し低い場所に街があり、城壁の隙間から下が見える。広がる海は果てしない。何処までも続いていそうな希望を感じさせる不確かさ。いつも見ているはずの海が、全く別のものに見えて不思議だった。

「王の居城まで行けば雲海を越える。もっと凄い景色が広がっている」

「へえ……」

自分たちが暮らす町の上に、こんな景色が広がっていたなんて。整備された歩道。美しい家々。箱船という町は確かに美しい。そこに住む者達の中身がどうなのかは別として。絵画を見ているような気分になる窓枠。街行く人々は皆着飾り、まるで人形だ。けれど

この華やかな町は下町の犠牲があつてのものだと思つと、この景色も歪んで見える。

「ああ、でもここに慣れるまではしばらくは高山病とかになるから気をつけて」

「ふうん……病気があるのか。それじゃああんまり空の上つて言うのも良いものじゃないのかな」

「まあ、住めば都さ。何処だつて」

シエロは変なことを言う。住めば都だつて？

下町を訪れた時のシエロの様子を思い出し、確かにこの男なら下町にも嬉々として溶け込みそうな感じではある。何というか、そう。貴族らしくないのだ。調子が狂う。

「……お前なんで追われてたんだ？」

つい物珍しさで脱線したが、聞きたいことは沢山あつた。吹き込む風に広がるシエロの長い髪。空で見るとより綺麗な色に見えるのは、ここが下より太陽に近いからだろうか。それともこの男の風変わりさが、この浮世離れた街にじっくり溶け込んでいるからなのか。

「彼らは今の殿下の手下だよ」

「殿下？」

「王様の子供。俗に言う王子様」

「王子様に追われるなんて、お前何したんだ？」

カロンの疑問にシエロは苦笑。君に会いたかっただけだよと笑う。

「別に何も。下に下りる許可を求めた。だけど私は殿下に嫌われ

ているから許可が下りず、許可無く空を降り、その妨害を受けた。わざわざ文句を言ったためだけに手下を追わせるなんてご苦労なことだよ」

「許可……?」

「箱船の民が下に降りるには王族の許可が要る。だけどこの許可を取るのが難しい。今回は緊急だったし、陛下には会えなかった。殿下も嫌がらせて許可をくれなかった。それでも選定侯家である我が家にもゲートはある」

「ゲートって……あれか? 階段?」

カロンの言葉にシエロは頷く。東西南北にある、この街へと続く階段。あの一つがこの男の家の持ち物らしい。

「無論許可が無くてもその気になれば降りられる。そもそもゲートの管理者がその許可を行っているはずんだけど、職権乱用がお好きでね殿下は。 “ 大事な選定侯家の跡取りが野蛮な下町に向かい怪我でもしたら大変だ! 連れ戻してやれ! ” と、なんともまあ親切な嫌味を送って邪魔してくる」

少なくともシエロに限ってはその掟を破っても咎められることはないらしい。向こうが親切心という建前で追ってきている以上は、それを知って少し安堵した。

「……ところでさ、そのさっきから出てくるせんてーこーって何なんだ?」

シエロは下町で使われないような難しい言葉を普通に使う。空気が読めない男だ。

「ああ、ごめん。選定侯ってというのは次期国王候補を所有する貴

族の家のこと」

「次期国王候補？王子様が居るのにか？」

「うん、だからこそ私は彼に怨まれている」

シエロが深々と溜息を吐く。

「殿下は王の子ではあるけど、この国は世襲制じゃない。次期国王候補の中から新たな王が決まる」

聞いてみたがよく分からない。この男が将来王様になるかも知れないというのだけはなんとか理解したが。

「結局お前、なんなんだよ」

「……僕は、シエロ＝フルトブラント。僕は選定侯家の人間で、ナイアード家に養子に入った君の妹……」

そう言えばまだ、ちゃんと名乗って貰ってなかったな。後は一人称が変わったことが少し気になった。

「シャロン＝ナイアスの恋人だった男だ」

*

(シャロンの……恋人……？)

今度こそカロンは絶句した。

目の前の男が、妹の恋人？あの妹が……もうそんな年に？男を作るような年に？まだそんな年じゃないだろう。まだまだ子供らしさの抜けない幼気なあの妹が、妹に……恋人だって！？

「……僕は、彼女を殺した相手を見つけ出し……この手で同じ目

に遭わせて殺してやりたい」

驚きのあまり言葉を返せないカロンの傍で、シエロは続ける。突然、低くなったそのトーンに思わずカロンは息を呑んだ。

シエロが怒っている。激しい怒気を隠そうともせず虚空を睨む。見えない敵と戦っている。それは彼の中と外にある。一人きりで、戦っているんだこの男は。

「シャロンと瓜二つの君が彼女を演じれば、人魚に近づけば……犯人は必ず現れる！」

シエロの海の瞳が炎のような激情に燃え上がる。つかみ所無くふわふわしたこの男が、ここまで怒りを顕わにしたのは初めて。

「君をこんな事のために利用するのは、巻き込んだのは本当に心苦しい。申し訳ないことをする。僕に出来る償いなら何でもする……！ だけど……っ」

「シエロ……」

情けなくも、とうとう男は泣き出した。だけど……流れたのは一筋だけ。両目一杯に堪った涙を塞ぎ止める。その全てを解放する術を、この男はまだ知らないのだ。それが出来るのはきつと……この復讐が終わる時。その日までこの男は、この悲しみを身体の内側に抱え込んで貯め込んで……押しつぶされて生きていく。それがとても可哀相だとカロンは思った。

「この怒りを、悲しみを……理解し一緒に復讐してくれるのは、きつと世界中を探しても君だけだ！君以外にあり得ないっ！そう、思ったから僕は……」

「……国のためっていうのは嘘だったんだな」

冷たい声が出てしまった。別に見下したわけではない。唯、どんな風に言葉を紡げばいいのか、解らなかったんだ。

「……軽蔑した？」

「いや……」

そつとシエロに歩み寄り、……意を決しカロンは片手を振り上げた。

「恋人の癖にあいつ守れなかった腑抜けだとか俺の大事な妹挨拶も無しに付き合っただとかそもそもお前らどこまでやった仲なんだとか！恨み言や言いたいことは山ほど有るが……むしろ初めてあなたに好感持った！」

その衝撃に彼の涙が散ったのか、驚きのあまり飲み込んでしまったのかは知らない。見ないようにした。唯、手が痛かった。

息を吸う。これから自分は引き返さない言葉を口にする。最悪死ぬかも知れない。

それでも大好きなシャロンを殺した相手。……そんな相手が今も生きていて、俺をこいつを苦しめている。それはあつてはならないことだと思った。

この男はカロンが協力しなくとも、きつと一人でそれに挑んでしまふ。そんな孤独な男が同士として自分を求めてくれている。それは、信頼と呼んでも良いのではないか？

この男は何故か俺を信頼している。深く信じている。その信頼を……裏切つてはいけない。それだけはしてはいけないような気がした。

それにもしもの話。もしここで降りて、噂でこの男の死を耳にしたら……どんな気持ちになるんだろう。

目の前で溺れかかっている人間。その命。救えるかも知れない。それを俺は見捨てて逃げることにならないか？ここに舟が櫂が無くとも……俺は船頭ではないのか？救える命があるのなら、少なくとも目の前のものは死なせない。それが俺の親父の仕事だったはず。

「そういうことなら、付き合っつてやるっ！あいつ殺した奴なんか…俺だつて許せねえよ……！」

「ありがとうカロソっ！一緒に犯人血祭りに上げて、シャロンの仇を取るっ！！」

感極まったと抱き付いてくるシエロ。下町は此方のテリトリー。いろんな匂いが溢れてる。あの時は気にならなかったが、香水でも付けているのかと今更気付く。甘くて妙に良い匂い。そして甘いのは他にも……奴の声だ。喜びの感情がそのまま宿ったその声は、此方の心臓がどうにかかなりそうなくらいの破壊力を持つ。とんでもなく良い声だ、こいつ。本当にこの男が歌姫やればいいのにと思っくらしい。こんな良い声でも歌姫になれないなんて……掟は残酷だ。

「つてそうやって俺に近寄るなっ！」

下町での一見を思い出し、その手を引き剥がす。そんな傷ついたみたいな顔するなよ。こっちが被害者なのに加害者にされたような嫌な気分だ。

いや、それはない。酷い。常識的に考える。分かり易く例えるならあれだ。強姦した側の男が、女に文句言われる前に自分が掘られたような顔をするようなものだ。やっぱり悪いのはこの男だ。俺は悪くない。

「でもある程度仲良しを演出しないと。君は僕の恋人だったシャロンの振りをするんだし」

「……っーことはいつもこんなノリで俺の妹にくつついてたんだなこの野郎っ！許さんっ！平手じゃ済まさねえっ！その綺麗な面ぼっこぼこにしてやんぞっ！」

拳を握って息を吐きかけ……奴の顔を見て、手が動かない。こんな女みたいな顔した男、殴れない。手を平手に変えるがやつぱり無理だ。仕方ないので足を思い切り踏んでやった。

そんなことくらいで涙目になるなよ。情けない男だな。でもやつぱり器用に泣けないんだなこいつは。また涙を飲み込んだ。

「はあ……面倒臭い奴」

とても年上とは思えない。妙な男との共同戦線。命懸けの復讐劇だっというのに、どうにも締まらない。この男がこんなふわふわした感じだから駄目なんだきつと。

カロンはこれからどうなるものやらと、深く深く溜息を吐く。

1：下町の少年渡し守（後書き）

空から可愛い女の子が振ってくると思うなよ！残念っ！野郎だ！

二次元だつてのに、世知辛いもんだぜ。

可愛い女の子かと思ったのに、やって来たのはネコにもタチにもなれるとんでもない野郎ヒロインだ。参ったね。

次回から続々女の子増えるけど、どうなることやら。

2：商家の歌姫

海神の娘の姉A

『きいい！許さんぞウンディーネ！前々から生意気だと思つていた！』

私だつて同じ海神の娘！十分美しいはず！多くの男がそう言つた！』

だと言つのに何故あの男は、私でなくあの女に夢中なのだ！あんな女！もはや精霊ですらない！汚らわしい人間だといふのに！』

*

「ちよつと！聞いてないわよつ！どういふことよ！」

「すいませんお嬢さん」

「すいませんで済んだらお仕置きは要らないのよファン一号つ！」

「ひいい！勘弁つ！お嬢さんつ！あと俺の名前はオボロスですつ」

「知つてるわよその位つ！お、オボロス〓ネレイス……ふん、庶民臭い気品のない低俗な名前ねつ！」

「それはちよつと俺に言われても困りますよお嬢さん。俺のご先祖様に言つてください」

「何よあんだ……男の癖に出世欲とか無いわけ？大金稼いで何処かの貴族の娘と結婚するとか考えないの？何のために働いてるわけ」

「え、ええと」

「あんたそんな考えも無しに金貯めてるの？馬鹿なの？死ぬの？」

「俺はお嬢さんの仰るとおり学のない馬鹿ですが、あんまり死にたくはないですね」

「誰も本気で馬鹿にしてないわ！そんなことも解らないの！？馬鹿っ！」

「すみません」

そりゃあないですよシレナお嬢さん。

どっちにしる俺は馬鹿ってことなんですネ。それはいいですけどそんなすぐ殴らなくても。

彼女の怒りはもつともだが、頭を下げるオボロスとしてもこんなことになるとは思わなかったのだ。

*

こんな気持ちで仕事なんか出来るかよ。と投げ出すのは簡単だ。ついでに自分の命も続けて投げ出す覚悟があるのなら。しかしそう言うわけもいかない。如何に親友……いや、悪友が行方不明で心配だろうと次の仕事に遅れるわけにはいかない。いかなかったのだが

……

(カロンの阿呆お)

オボロスは欠伸を噛み殺す。あれからしばらくカロンの家の傍は夜中まで怪しげな騎士が彷徨き回っていた。ほとぼりが冷めた頃様子を見に行つたが蛻の殻。ただ事ではない。

(あの貴族の揉め事に巻き込まれたと見て間違いないな)

名前は解らないが、空に行けば手がかりは掴める。元々空を目指していた自分だ。理由が一つや二つ増えたところで何も変わらない。オボロスはそう意気込んで、仕事に打ち込む気で居た。

オボロスの仕えるネイレード家は裕福な商家。空に移り住むにはまだまだ金が足りないが、下町ではちょっとした富豪。

空の皆様も高い所じゃ手に入らない物が多い。近隣諸国との貿易

により手に入れた物を彼らは高く買い取ってくれる。その物資を届けるために定期的に空に荷運びを行っている貿易商。つまり、旦那様の信頼さえ手に入れば空に行く仕事を任せて貰えることだって十分起こり得る。

元々はオボロス自身がシャロンに会いたかった。更にはシャロンが空に消えてから、沈んでいたカロンを励ますため、その近況を知ることが出来ればと思っていたが、そこにカロンと一緒にいたあの貴族の兄ちゃんの情報収集という仕事も加わった。それだけのこととは思ったが心配で眠れなかった。翌朝朝早くに再び出港する事が決まっていたが、何度も家の様子を見に行った。休暇がパーだ。オボロスはそこでうつかりというか当然というか寝坊し船に乗り遅れ……もう解雇される覚悟で主の下へ謝罪に行った。事件はそこで起こった。

「丁度良かったネレイス」

「は、はい？」

オロオロと室内を歩き回っていた雇い主。その商人はオボロスの姿を見るや喜色満面、生気を取り戻した顔になる。この分ならお咎めは無さそうだとこっそり安堵の息を吐く。

「人手が足りなくて困っていたんだ。お前は口が堅いし信頼できる……いずれ任せようと思っていたが、それが多少早まったと言うだけ。今回の件はお咎め無しだ！代わりにしっかり働けよ」

「はい！ありがとうございますっ！」

「それで早速仕事なんだが……これを空まで運んで欲しい」

商人は一人でも運べそうな荷包みを指差して、それを運ぶように命じて来た。

「え？」

「この通行書があれば、北のゲートが使えるようになる。これを娘の所まで運べ。道などは尋ねれば解るだろう」

あれやこれやと言わんばかりに首から証書の入った鞆を提げられて、荷物を抱えさせられる。そんなに重くは無さそうだ。

「空と言いますと、お嬢さん宛ですか？」

「ああ。生活雑貨と食品と一緒に運ぼうと思ったのだがあれから先程手紙が来てな。別として早く！今日中に送れと言われてな。あの階段を上りきれるような若衆が誰も居らず困っていた所だったんだ」

空へと続くあの長い階段。登れと？今日中に？何段あるのあれ。

血の気が引いたがそれでも名誉挽回、汚名返上のチャンス。さもやり遂げますみたいな顔をしておかなければならない。これも失敗したら今度こそ首が飛ぶ。

荷物を抱いてオボロスは走った。何故こんな時にカロンがいないのかと泣きながら走った。商家から北の城門まではそこそこの距離があった。底に来るまでで十分疲れたというのに、鬼のように長い螺旋階段。頭が回る。目が回る。もう何段上ったか解らない。上っているのか下っているのかも解らなくなる。それでも荷物を落とさないように大事に抱え、それでも1秒でも無駄にしないようひたすらにそれを登った。

あの細身の貴族の兄ちゃんがこの上り下りをしたとは信じられない。だから落ちてきたのかあの人。でも助かる高さから落ちたということは、いくらかは下ったはず。あのもやし兄ちゃんに出来て俺に出来ないはずがない。上からと下からじゃ話が違うとかそんな言い訳はしないっ！

「なんて下らないこと考えてる内に着いたあああああああああああああ！！」

……とまあ、そこから令嬢の屋敷を探し出し、ようやくここまで来たというのに。一年ぶりに会うお嬢さんは冷たい。以前はもう少し可愛げのようなものがあつた気がするが今はそれが木っ端微塵だ。それでもまあ、元々美人なお嬢さんだが外見は以前より磨きが掛かっている。これなら十分歌姫としての人気もあるのではないだろうか？

今回オボロスが届けさせられたのは歌姫の衣装だ。お嬢さんはシヤロンのように養子に入つて歌姫になつたのではなく、商家の娘という身分のまま歌姫になつた。だから後ろ盾というのは実家であり、血縁者なのでこうやってサポートを受けられる。しかしネレイド家は空に住んでいないので、こうやって上り下りの仕送り作業があるって話だ。一度だけしかしていないが、きつい仕事だ。意識が半分朦朧としている。よく荷運び役が逃げるって聞いてたけどそれはこの所為だつたんだなと、妙にオボロスは納得した。

「ふうん……新しい衣装、悪く無いじゃない。ファン一号！後ろ結んで！」

「ぎゃあああ！お、お、お嬢さんっ！下着姿で彷徨かないでくださいっ！！駄目ですよそんなの！嫁入り前のお嬢さんが……」

「うっさい！良いからやれって言ってるでしょ！」

頬を思い切り抓られる、痛い。

「へ、へえ！すみませんでしたっ！」

なるべく肌を直視しないようにしつつ着替えを手伝う。

「お嬢さん、メイドは置かないんですか？お一人の生活は大変でしょう？」

「お父様がこつちで何人か雇ってたけど全員解雇したわ、そんな金があつたら貯めて早くみんなをこつちに呼んであげたいもの。その時はあんたも扱き使つてやるんだから覚悟しなさいよ」

お嬢さんが歌姫になったのは、そうだ……家のためだった。水害の多い下町から家族と使用人みんなを上へ拾つてあげるため。ひねくれ者ではあるが、性根は優しい女の子なんだと再認識し、オボ口スは笑う。

「お嬢さんは優しいんですね」

「な、なによ……いきなり」

「ああ、いえ……大したことじゃないんですが、ちょっと知り合いを思い出しまして」

全然違うがほんの少しだけ……シャロン。あの優しい彼女と似ている。彼女よりも守る者が少ないが、その分深く思っている。ちょうどシャロンが空に上がったのもお嬢さんと同時期だったはず。それを思い出し、うつかり口にしてしまう。

「そういえばお嬢さん、シャロンって歌姫知ってますか？俺の親友の妹なんですけど……」

「はあ！？シャロン？なんでここであの女の名前が出てくるのよ！」

「え？ああ、お知り合いでしたか？」

「うつさい！馬鹿あつ！あんたなんか大嫌いつ！」

振り向き様の裏拳を叩き込まれて、気が遠くなる。

「ちよ、ちよつとオボロスっ！何勝手に気絶なんかしてんのよ！
しつかりしなさいっ！」

お嬢さんにごくがく身体を揺すられるが……無理だわ、これ。

*

「……っは！」

それから何時間だろうか。辺りはすっかり薄暗い。

という夢を見たんだぜ。とか言わせて貰えないらしい。ここが自宅でないことは一目瞭然。

「……はあ、俺情けねえ」

女の子相手に気絶させられるとは涙が出てくらあ。

オボロスが周りを見るとそこはお嬢さんに殴られた部屋、お嬢さんの借りている屋敷。毛布が掛けられていたが床に起きっぱなしにされたのだ。体中が痛い。

「お嬢さんー？」

辺りを探してみるが返事はない。辺りはすっかり薄暗く……改めて回ってみて、屋敷の広さを実感。こんな所で一人で暮らしているのかお嬢さんは。寂しくないんだらうか？

(へえ……でもまあなかなか立派なもんだ)

空への居住権が無ければ家は建てられない。だが歌姫はそのランクによって住む場所を提供される。

屋敷探しに手間取ったのも、旦那様から居場所を教えて貰えなかったのも、住処を点々としている……つまり、ランクが変動し次々広い屋敷にへと移り変わっていったということなのだ。彼女がこの一年頑張った軌跡を辿るようで誇らしげな気持ちになったが……下町で旦那様に言われたことを思い出し、妙な気持ちになった。そうだ。旦那様は言っていた。

「いいかオボロス。ただし、上で見たことは全て他言無用。下町に帰って来てそれを漏らすでないぞ？」

「は、はあ……解りました」

とりあえずそう言っておいたが真意は不明。これだけ娘さんが頑張ってるんだから、近況報告など求めるだろうと思っただが、土産話などには必要ないと言われていた。それが妙に引つかかる。言われてみればこの一年、お嬢さんの話を上に行ったという連中からも聞いていない。荷物の受け渡しはなにもお嬢さん相手だけではないから会わない、或いは使用人に渡しているのでお嬢さんに会わせて貰えない。そんなところかと思っていたが……

「仕事にでも行かれたんだかなあ……」

挨拶も無しに帰るのは失礼だ。小柄なお嬢さんには俺を運べず、毛布を掛けるしか出来なかつたのだろうし……そのお礼も言わなければなるまいと、オボロスは頷く。

第一鍵がないから戸締まりが出来ない。出ることは出来でもそれでは泥棒に入られてしまう。

「こいつは酷え」

調理場へ向かえば……そこは戦場だった。正確には戦場跡。どう

すればこんな有様になるのだろう。ゴミも凄ければ爆発?……天井には火柱の後まである。箱入り娘のお嬢さんだ。料理、駄目だったんだろう。

見ていられなくてそのまま掃除に着手し、長らく調理器具が暫く使われていないことを知る。これでは下から旦那様を送る食料も無駄だろう。お嬢さんに良い物を食べさせたいという親心がメイドの解雇とお嬢さんの料理の才能の無さにより粉碎されている。食材運んだ人間と育てた人間が哀れでならない。

食料庫を見ればまだ無事な食材も大分ある……が、もうしばらくで傷んで食べられなくなりそうな物もある。そう言った物を集め、何か拵えようと考えた。仕事帰りに何か食べて来られるのかもしれないが、違うかも知れない。仮に食べてきたとしても明日の朝食くらいにはなるだろう。

オポロスは鼻歌交じりに調理に着手。疲れた時は甘い物だっというしなと、デザートにまで手を出した。お嬢さんも仕事終わりにはきつとお疲れだろう。

しかし久々の料理は楽しい。船の上じゃあまり凝った料理も作れない。無駄に機材だけは揃ってるこの調理場は腕が鳴る。

「……何、してんの?あんだ……」

と、はしゃいでいる内に大分時間が過ぎていた。背後でお嬢さんの声。

「お帰りなさいお嬢さん。いや、食材が悪くなりそうなあったんで、処分するのも勿体ないんで使わせていただきました。明日の飯にでもして下さい」

「……」

「今日はお見苦しいところお見せしてすみません。毛布ありがとうございました」

なんだかお嬢さんは元気がない。余計なことをしたと気分を害されたんだろうか。

「お嬢さん？」

突然お嬢様が泣き出した。どうしたものかと此方がオロオロしている、そのまま俺に抱き付いてくる。

「お、お嬢さん！？」

緑の目を白黒させているオボロスも、これはただ事ではないことを知る。

「お嬢さん、落ち着いて下さい。とりあえず今、茶でも淹れます」

そう言えばこくと無言で頷くも、此方から離れてはくれない。動きづらいがそうも言ってはられない。余程辛いことでもあったのだろう。

湯を沸かし紅茶を入れて、ついでに先程作ったケーキを皿に切り分けテーブルへ。まだ涙目だったお嬢さんもそこでようやく離れて席へ。無言でそれに手をつける。

「……………おいしい」

「あ、ありがとうございます」

ぼつりと呟かれた言葉に、条件反射で頭を下げる。その後の沈黙が少し怖い。何があったのか何て俺からは尋ねられない。俯いて床を見つめるオボロスに、彼女は暫しの沈黙の後……………言葉を投げる。

「シャロン……」

またもや条件反射。思わず顔を上げる。

「シャロンが、生きてた」

「は、はい……？」

そりゃあ生きているだろう。雇い主のご息女が仰る意味が分からない。

「怖い……」

「お嬢さん？」

「私……見たの。あの子が、死んでるところ」

「シャロンが、死んだ!？」

頭を思い切りぶん殴られたような衝撃。シャロンが死んだ。その一文が何度も頭の中で鳴り響く。それでもそんなオボロス以上に動揺しているのはシレナという娘。オボロスの目にも、シレナが震えているのが見えた。

「……私も疲れてた。幻覚だったのかも。だけど……あれが幻覚のはずがない。……怖くて逃げて、だけど……次の日戻ったらもう何もなかった。血の後も何にもなくて……ぞつとするほど綺麗だった。それじゃあれが幻覚なら、私……」

「お嬢さん……」

「私、心の何処かであの子が死ねばいいと思ってたんだ! そうなんだわ! だって狡いっ! あの子はっかりっ!」

「落ち着いて下さいお嬢さん」

がくがくと青ざめた顔のシレナの肩を抱き、しっかりしろと語り

かける。

「俺はあいつの幼なじみです。話せばすぐにわかります」

「オボロス……」

「偽者なら俺には解る。だから安心して下さい。俺が確かめます。お嬢さんのようなお人が誰かの死を望むはずがありません！お嬢さんのお人柄は俺が保証します！」

この優しいシレナがそんな幻覚を見るはずがない。ならばそれは他人の見間違い。その死体か、或いはシャロン自身が。

「あんたに私の何が解るのよ！？私は、最低よっ！！」

「そんなことはありません！」

「なんでそう言い切れるの！？」

「言い切れます」

「どうして！？」

「お嬢さんが本当にそれを望んでいたのなら、その幻覚でここまです動揺するはずがねえっ！むしろ笑うところだ！けどお嬢さんが笑わない！だからそんなことを望んでいたはずがない！違いますか！？」

すぐ傍で啜り泣く声。気位の高いこの娘のことだ。使用人なんかの前で、これ以上情けない所を見せたくない、そう強がっているしやるのだろう。

それを理解したからオボロスも目を閉じ……見ない振り、聞こえない振りを貫いた。

「……そうね。そうかも、しれない」

長い沈黙の後、オボロスの言葉にシレナは頷く。

なんでもそれから下へと手紙を書いてくれるという。勿論シャロ
ンに探りを入れるという大前提ではあるが、それだけではあるまい。
シレナの今の精神状態では、一人でこの屋敷に住まうことが出来な
かったのだろう。オボロス自身、そんな彼女を放置し……シャロン
の安否も知れぬまま下町に戻るなど出来なかった。

2：商家の歌姫（後書き）

シレナお嬢さんはツンデレ（のはず）。

オボロスにはシャロンに夢中で全然気付いてません。
全世界のツンデレに謝れ。

3：呪われた人魚の末裔（前書き）

女体化警報。

主人公が健全にキャラ崩壊。男の子だから仕方ない。

3：呪われた人魚の末裔

> i 3 3 2 1 7 — 3 8 3 <

海神の娘

『お父様から贈られたその呪いは、とても奇妙な物でした。それでも私は信じました。そして彼も信じてくれました。』

だからこそ、一度……私の呪いは解けたのです。

私は、それが永遠に続く物なのだ……信じていました。』

*

昨日は色々あったが、一晩眠れば気持ちも落ち着いて来た。それに伴いシエロの危惧した高山病も落ち着いてきたように思う。

シャロンが死んだなんてまだ信じられない気持ちもある。犯人は勿論許せないが、カロン自身がシャロンの死を受け止めるためにもその死を辿るといのは間違っではない気がした。

シエロの言葉通り空へと伸びるその街は、上へ行くほど豪華な屋敷が増える。その分敷地も狭いが屋敷の数も減るので結果として屋敷が広くなるというおかしなことが起きていた。

「おい、シエロ！」

「カロン君、言葉遣い言葉遣い。今はそれでも良いけどそういうところからボロが出ると困るから、気をつけてね」

それではシャロンらしくないとシエロに注意を促されるが、それも言っただけでいられない。

歌姫になる。とは言ってもそれは容易いことではない。シエロから長ったらしい説明を受けたが、なんでもこの街は面倒なことが多

いのだ。

こうして歩くだけでも色々あって、歌姫シャロンだと解れば人が寄ってくる。だからそれを隠すためにカロンは何時も通りの格好……ではなくシエロの屋敷にあった昔のシエロの服というのを譲って貰った。要するに歌姫の女装をする俺がその歌姫であることを隠すために男の格好をするというわけのわからないことをやっているという事で。対するシエロと言えば……目立つあの髪を隠すために金髪のウィッグを被るのはよく分かる。だがしかし……彼の複雑な事情を知った今でも心がざわつき出す。

(詐欺だろう、あれは)

お前が歌姫になれ！今度こそそう怒鳴りたい。すらりと伸びた手足。女装するシエロはそりゃあもう見事な長身美少女だ。というか、女装とも言い切れないのがこの男の恐ろしいところだ。けしからんその胸についつい目が行ってしまう自分が何だか情けない。そう思いながらカロンは外出前の下の屋敷での一件を思い出していた。

*

「まず歌姫という職業について君に話しておく、衣装代だろ？それから歌うための場所代。これだけでも本当に馬鹿にならない。歌姫は本当にお金がかかる職業だ」

シエロが言うにはなんでも……それぞれ敷地の所有者、権力者が居て、路上で歌うにも許可が必要。そしてその場所を借りるためには場所代を支払う必要がある。無論、小劇場コンサートホールやオペラ座なんか借りるには、もっと馬鹿高い金が必要。

ただし、カロンの後ろ盾であるこのシエロという男も、選定侯と

いうこの国で四家しかないという最上位クラスの貴族。最低でも街の4分の1はこの男の勢力下と考えて間違いない。だからそこで歌う分には資金面での憂いは無いと見ていい。

しかしそのままでは歌姫としての勢力図も変わらない。他の勢力下に赴きファンを奪ってくるのが歌姫の仕事。そのために必要なのは、やはり金。場所代を借りる金と、人目を惹く衣装。更には土地の所有者との有効な関係、コネクション。あわよくばシエロ治めるフルトブランド家の勢力を拡大させ、憂いなく歌える地域を増やせばもつと良い。勿論色々勢力下でのしがらみもあるだろうからそれは簡単な話ではないが、場所代を安くしてくれるなどの配所は得られるようになる……実際シャロンの活躍によりそういったことは多々あったとのこと。

「今までシャロンが稼いだ金は？」

「全部活動費で消えてるよ。それはシャロンの養親に六割取られてしまう契約だ。シャロンは残り四割でやりくりしなければならなかった」

「ろ、六割!？」

「最初は八割だったんだけどね。僕が文句を言って此方の取り分を増やして貰った。君がシャロンという前提で行動する以上、これから面倒臭いことになりそうだけど策ならある。そっちは僕に任せ」

「わかった」

「ああ、だけど衣装なら僕の上の屋敷にシャロンが残した服がある。だからしばらく衣装の方は問題ない。とはいえ……いつも同じ衣装とか古い物ばかり着てはられない。早めに資金稼ぎが必要だ」

「なんで? 勿体ないのに」

カロンの言葉にシエロは苦笑。確かにそうなんだけどねと笑う。

「歌姫は歌うだけじゃなくて、多くの人々の憧れであらなければならぬ。つまりファッションリーダー、流行の最先端でもある。だから歌姫にとって衣装というのはとても大事なものなんだ」

歌うだけの仕事だと思っただが、意外と歌姫というのも面倒臭い仕事なんだと呆れ半分感心半分。カロンはよくわからない溜息を吐いた。なんとも面倒臭いことに巻き込まれてしまったが、乗りかかった船だ。今更投げ出せないと話を聞く。

「シャロンの最新の衣装は殺害時に汚されて……とてももう着られるような物じゃない」

服はオーダーメイドで基本職人の手で一着一着作られる。だから同じ物を作らせると言うことは、証拠が残る。それは材料の取引先までしつかりと。

シエロが下に大急ぎで降りてきたのはそのためだ。シャロンが死んだことが広く露見する前に、シャロンの身代わりを立てる必要があった。

シャロンの死を知る者は犯人だけ。それが理想。目撃者は自分だけであるべきだと、事態の収拾に踏み切った。勿論その作業に当たったシエロの手下はそれを知っているはずだが、そこから漏れることは絶対はないという人材にのみその仕事に当たらせた。シエロの味方はとりあえず信用していいらしい。

「でも俺をここまで連れてくる時にそれに気付いた奴が、シャロンと俺のことに気付くって言う可能性は？」

「君は人目に付かないよう隠して歩いたし、君を見た人間には僕の歌でその前後の記憶が飛ぶくらいの衝撃を与えた。あの騎士達も、僕を追うことは覚えていても君の顔は覚えていない。扉を壊したところから、あの家に僕が潜んでいたことは気付いただろうけど」

「なるほど……」

しかしシエロの歌を思い出すと、この男の肩書きが貴族では収まらない気がした。普通の貴族があんな超音波を出せるだろうか？

「先祖返りって知ってるかい？」

カロンの疑問に気付いたのか、シエロが先回りをして話す。

「人魚の血と王子の血は呪われている。だから王家はその血を薄めようとして来た。その結果王家の血は別れ、四つの選定侯家が生まれた。だけど時折人魚の血が表に現れることがある。僕はそれ。だからちよつと他の人とは違う色だろ？」

「人魚の血……」

この男が伝説の人魚の子孫。そう思うとなんだかこれまで以上に神々しく見える。通りであんなに歌が上手いのか。思い出しても綺麗な歌声だった。

「うん。だから僕の歌は普通じゃない。少しばかりそこも人魚と同じで、ああ言ったことが出来る。要するに僕の歌は努力でも才能でもなく、血の結果。無理矢理そうさせる歌。歌としての魅力なんて無い。時々便利ではあるけどね」

酷く自分を卑下するシエロ。あんなに綺麗な声なのに、彼は自分の歌が嫌いみたいだ。

そんなことよりとシエロは、話の方向を戻していく。

「衣装の話だったね。幸いファンにはお披露目前だったから、その一つ前の衣装で資金を稼げばいい……と言いたいんだけど、一つ

問題がある」

「問題？」

「シャロンは僕の、選定侯の恋人だった」

正直殴りたいがそれは事実らしい。

「選定侯の恋人って言うのは、この世界でとても大きな意味を持つ。僕が次期国王候補の一人だとは話したよね？」

「ああ。だから殿下下つてのに追われてたんだよね」

「うん。その次期国王を決定する要因が歌姫にある」

「歌姫に？」

どう関係有るのか解らなかったが、シエロは歌姫の言い伝えを口にする。その一節にカロンも思い出す。そうだ。人魚になった歌姫は、言い伝え通り“王子”と結婚できるという話だった。

だけどこの場合の王子という概念が、複雑なのだと彼は言う。

四つの選定侯家。その一つが今の王家。王子とはそのままの意味で殿下。そして残りの三家の跡取り。それもこの概念上では王子に該当するらしい。

「選定侯の恋人が人魚になれば、その選定侯が次期国王として決定される。人魚は一人しかねない称号だから。だけでもし、三人の選定侯の恋人から人魚が上がらなかった場合。フリーの歌姫が人魚になってしまった場合……この時は今の国王の息子。つまりは殿下かそのまま王位を世襲する」

長い歴史の中で、解釈が大分歪んでしまったのだろうとシエロが肩をすくめる。確かに変な話。人魚が王子と結婚できる、じゃなく人魚になれば王子にしてやれるっていうのに変わったなんて、この男共は歌姫に頼り切りなんだな。それとも……それだけこの国に

とって、歌姫という存在が大きかったのか。

「だから殿下は僕からシャロンを奪ってフリーの歌姫にさせようと、度々妨害して来た。これからもそれは続くだろうから、君も気をつけてくれ」

「解った」

「うん、お願いするよ」

シエロがふわと笑って、頭を撫でる。子供扱いされている気がした。

「それでなんだけど、選定侯の恋人というのが大きな立場であるのは理解して貰えた？」

「一応は」

頷くカロんに、シエロがほっと息を吐く。

「うん、だから選定侯の恋人には歌姫の例外としてある権利がある」

「ある権利？」

「通常、衣装は自分で稼いだお金か、血縁者の仕送りでしか賄っていけない決まりがある」

それは知っている。だからこそカロンもシャロンのために金を稼ごうと考えていた。

「だけど、選定侯は恋人に血縁者と同じように衣装の支援をして良いことになっている。シャロンが僕の恋人だと言うことは、僕の財産は彼女の物だと言っても過言じゃないよ」

「それじゃあ……新しく別の衣装を作ることも出来るってことか

「？」

そいつは凄いい！だって見るからにシエロは金を持っていそうだ。

「理論上はそうだね」

「理論上？」

シエロはどうも歯切れが悪い。

「それだけの特権を受けられる選定侯の恋人は、認定までが難しい。城から恋人認定試験を受け、それを認められ証書を得なければその権利は与えられない。そしてその紛失、再発行には再び試験を受ける必要がある」

「恋人認定試験……？」

なんじゃそりゃ。カロンが目を点にしていると、シエロが気恥ずかしそうに目を逸らした。

「どうにもこうにも、空の人々は娯楽に飢えていて悪趣味だ。普通の感覚でなら目の前で恋人達がいちゃついても苛立つだけだろう？」

「まあ、そうなのか？わかんねえけど」

「回り回った変態達は、それを観察するのがお好きだね。こんな妙な物を作り出した。選定侯が選ぶのは大抵優れた歌姫だからね。そんな歌姫は高嶺の花だ。試験と称して少しでもあられもない姿を見られるなら悪くないと思う輩もいるんだろう」

「あられもない？高嶺の花？」

なんだか不穏な響きがある。

疑問を浮かべるカロンとは絶対に視線を合わせないまま、シエロ

が嘆息。顔が赤い。

「そう言えばまだカロン君には話してなかったね」

「なんの話だ？」

「歌姫がどうやって資金を得るのか君は知ってる？」

「歌って稼ぐ。だろ？」

「半分正解」

「半分？」

やっぱりシエロは齒切れが悪い。

「それは元々実家が裕福で衣装も場所も自分で賄える歌姫だけなんだ。最初はみんな、違う仕事をしながらお金を貯めて、歌を仕事に出来る歌姫を目指す」

「兼業でもするのか？」

「うん。だけど普通の仕事じゃ、馬鹿高い衣装代と場所代を支払うことは出来ない。要するに枕営業」

「は？」

再び目が点になる。言葉としては聞いたことがあるが、華やかな歌姫の世界と幼く可憐な妹の姿には、それがすぐには結びつかない。つた。

「そ、それって娼婦ってことか!？」

「うん。若くて綺麗で可愛い女の子と寝られるんだ。みんな喜んで金を払うよ。そういう風に足場を固めて後盾を得て、立派な歌姫になった子もいる。そんなにあからさまに嫌な顔をしないであげてよ。彼女たちだって最初からそうしたくて歌姫になった訳じゃないんだから」

「でも……」

「養子歌姫は得に顕著な例だ。養子先の家から衣装代は支援して貰えない。だけど帰る家がない。もう歌姫以外の生き方が絶たれている。やるしかないんだ。やるしかなかったんだ……あの子も」

あの子。その言葉にカロンははっとする。

他人事として聞いていた。だけど違う。これはシャロンのことなんだ。

「お前っ！！シャロンにそんなことをっ！！」

自分よりも背の高い男。それでも構う物が。テーブルに上がってその胸ぐらを掴み上げる。

「……………」

「何とか言えよっ！！」

初めて心の底からこの男が憎いと思った。今なら殴れる。怒りのままに。

「……………僕だつてそんな風に伴侶を決める趣味はない。幾ら送り返しても、いろんな家が次から次へと送り込む。……………僕が断つても使用人達の目に留まれば、そこそこの小遣い稼ぎにはなるし、あわよくば取り次ぎをつて腹だろう。それも駄目なら他の家に送られるんだらうけれど」

胸ぐら掴み上げられて、それでも絶対此方と視線を合わせないシエロ。彼は俺を見ない。視線の先にはきつと、今もまだシャロンが見えているのだ。

「彼女との出会いはそうだ。ナイアード家も彼ら同様、後ろ盾欲

しさに娘を僕の家を送り込んだ。だけど……僕は、彼女を一目見て恋に落ちた」

恋に落ちたと語る彼。その声から滲む思慕と切なさの色。

シエロが本当に……どんなにシャロンを愛しているのかが伝わって来る。だからまるで此方まで口説かれているような錯覚に囚われる。そしてそれが違うことに気付いて此方まで切なくなる。人魚の血が為す声の魔力は恐ろしい。

「だから彼女を追い返すことが出来ない。僕が断れば他の男が彼女を抱くことになる。……だけどそんな風に彼女を抱けない。僕が好きになったのは歌姫だ。だから歌って欲しかった。娼婦の真似事なんかさせたくなかった」

「それであいつに……恋人になれって言ったのか？」

「うん……嬉しかったなあ」

シエロが顔を綻ばせる。幸せそうな笑み。だけど青い眼だけが今も悲しそう。涙が浮かんでいる。

「一目見たときから、あの子も僕と同じ気持ちでいてくれたんだって知った時は本当に……嬉しかった。どうにかなるんじゃないかってくらい……馬鹿みたいに舞い上がって、僕は……。幸せだったよ、本当に……」

過去形で語られる幸せほど、悲しい物はない。壊された、二度と戻らない幸せの形を見て、胸が締め付けられ……。カロンはシエロから手を放す。直視出来なかった。そんな悲しい目をした男の視線に耐えられなかった。

「彼女の理想を聞いて……。僕はそれまでどうでも良かった王位を

目指そうと思った。僕が王になって……彼女の夢を叶えようと思った。この国を変えて……彼女の生まれ育った場所を海神から守り……二人で生涯賭けて海神の呪いを解いていこうと思った」

「だけど僕は弱い男で……駄目なんだ。彼女を失って……それで理想を掲げることなんか出来ない。何も見えない……もう、何も」

他の女を娶ってそれで王になり改革を目指すことが彼女の理想を継ぐこと。それを理解していてもその選択は選べない。だからこの哀れな男は復讐を求めたのだろう。俺はこの男が俺の妹を、あの海よりも深く愛していることを知る。それを知ったカロンは、シエロをこれ以上罵ることが出来なかった。

「彼女の亡骸からは……証書が奪われていた。今や彼女が僕の恋人だったと証明する物は何も無い」

これまで積み重ねてきた全て、打ち砕かれた。希望さえ残らず徹底的に打ちのめされた。そんな男が……僅かでも俺に希望を見出したのだろうか？共に復讐を。共犯者に俺を選んだ。選んでくれた。

俺はシャロンの肉親だから、その繋がりはある。例えばシャロンを失っても、俺がシャロンの兄である事実は覆らない。それでもシエロとシャロンは他人だ。二人はまだ結婚もしていない。二人を繋ぐ目に見える形は、その証書だけだったのだろう。

「……その試験での、どんなのなんだ？」

「え？……カロン君？」

「受けてやるって言うてんだ！シャロンとてめえの証書っ、再発行させに行く！」

貴族の癖に、そんな捨て犬みたいな目すんな！情けない奴。

今度はカロンの方が目を合わせられない。

「でももクソもねえ！大体それ受けなかつたら俺はどうなるんだよ？」

「ええと、その権利がなくなるわけだから僕から衣装の資金援助は出来なくなる。衣装代を手に入れられなければ、他の歌姫に追い越されて人氣が廃れてしまう。人魚の称号は遠離る。そして“シャロン”である君の身柄をナイアド家が引き取りに来て、他の男の所に送り付けに行くだろう」

「そんなこと出来るか！大体俺は男だ。娼婦の真似事なんか出来るか！正体バレたら死ぬつてのに」

「あ、そうだよ。うん……それだとこの事情を知ってて尚かつ口外しないような相手としか営業できないよね」

「そんなのお前以外に誰が居るんだよ」

その事実互いに同時に気がついて、一瞬部屋の空気が固まった。それが解けた後、シエロがまじまじとカロンを見た。

「な、なんだよ」

気恥ずかしさから目を逸らし、それでも目は釣り上げて睨んだが……シエロはへらへらと笑いながら親指を突き立てる。

「うん、カロン君なら十分いける！愛しのシャロンにそっくりだし余裕で抜ける！」

「阿呆かお前っ！！ってそれが狙いかこの変態っ！！」

「あはは、冗談冗談」

シエロが両目をごしごし拭って、それを笑って誤魔化した。

「でもカロンの君……本当に良いの？試験って人前で僕といちゃつく振りしなきゃいけないし、正体ばれる一歩手前までの危険を冒すってことなんだよ？」

「一歩手前って？」

「ち、……着エロくらい」

「着エロか。着エロって何だ？」

「服着たまま本番的な」

思わず吹き出した。ちょっと待て。服着てれば正体バレないかもしれないが、しれないけど、しれないとはいえ……

「ね？嫌でしょ？わざわざそんな危険冒してまでやる必要ないよ。……まあ、ぶっちゃけた話隠れて見えないわけだから上手く演技さえ出来ればやらなくても済むとは言え……人前で喘ぎ声なんか出せる？」

「そもそも俺、喘いだことねえし喘ぎ声ってどう出すんだ？」

「ごめん、僕に聞かないで」

カロンの疑問にシエロは恥ずかしそうに俯いた。

「別に証書無くしても、恋人の振り続けていればそういうことしないでもさ……ある程度誤魔化して君に金銭流すことは出来るよ？」

「そうなのか？」

「うん、明細として何をして幾ら歌姫に与えたかを明記する必要はあるけど全てを監督されてるわけでもないし……歌姫の中には何もしていないでしただって書かせてお金だけ貢がせふんだくる人もいるくらいだし。でも税務署みたいに監視している連中もいるからあんまり多額の譲渡は難しいと言えれば難しい」

「なんなんだそのやけに具体的な例えは」

「いや、まあ、うん。あのね……知り合いがそのカモにさせてい

て、彼も彼だと思っけど気の毒に思っ

またどうでも良い方向に脱線しだしたシエロにカロンは溜息を吐く。

「別に、演技出来りゃやらなくていいんだよな？」

「カロン君？」

「それならやってもいい」

「え、だって……」

「いいかシエロ。俺はシャロンだ。俺はこれからシャロンを演じて行かなきゃならねえ。つまりは俺が疑われるような行動をしてはいけねえってことなんだ。じゃなきゃ犯人を誘き寄せるなんて到底無理だ。違うか？」

「カロン君……」

「シャロンがお前に惚れていたんなら、一目惚れしたつてのが事実なら……記憶喪失のシャロンだってまたお前に惚れるはずだ。つまり再発行に踏み切るのが当然の流れ。ごく自然流れ。……それをやらないつてのは俺がシャロンじゃないつて認めたことだろ。それじゃ犯人も食いつかねえ」

俺の正論に返す言葉もないらしい。ざまあねえぜシエロ。

「つておい、何もそんな泣かなくても」

言い過ぎたか。シエロがボロボロ泣き出す。つて俺より年上だろ
うが！情けない男だな。

そう思いつつ、カロンもどうしたらいいのかわからない。

元々涙もろい男だとは思ったが、これまで泣きかけてもこんなに
ボロボロ泣いたのは初めてだ。そんなに傷つくような言い方したか
？今……

しかしシエロは別にショックを受けているわけでもないらしい。

「あ、いや……カロン君は悪くなくて、僕はそんな風に言っ
て嬉しくて。うう、ハンカチ……ハンカチっ！うわ、何処かで落
とした！？僕ってどうして……こうなんだ。か、カロン君っ！向こ
うのタオル！吸水性の良さそうなの持って来て！お願いっ」

袖はもう濡れていて働かない。涙を何とか止めないとシエロが
焦る。

そんなに焦ることだろうか？確かに情けない男だとは思っが……

「別に男だっ……泣きたいときは泣いてもいいんじゃないのか
？」

「そ、そういうことじゃなくて……駄目なんだ僕はっ、ああっ
！もう駄目だ！」

「シエロ？」

最後の方、いきなり声のトーンが高くなった。怪訝に思っ彼を
見ると、何だか先程より目が合う位置が少し低い？縮んだ？

上から下。まじまじとシエロを見つめると、彼は恥ずかしそうに
胸元を押さえている。そんな女みたいなのよした仕草をするか
らお前は情けなく見えるんだと思ったが……事実、胸がある。

「え……」

どう見ても女にしか見えない。凄い綺麗で可愛いお姉さんだ。だ
けどそのはち切れんばかりのけしからん胸は何だ。男物の服に締め
付けられきつそうなその胸元。ブラウスのボタンが幾つか取れ掛か
っでいて、それに奴が真っ赤な顔で俯いている。悔しいが、可愛い。
なんて凶悪な生き物だ。鼻血が出そうになった。

「お、おい……シエロ……？」

「だ、駄目だよ！こっち見ないでカロン君！」

元々中性的な口調だったため、違和感なく女声にもよく馴染む。俺は鼻を押さえた。いよいよボタンが飛びそうだった。しかし目が逸らせない。仕方ない。俺は悪くない。男はみんなあれが大好きなんだ。俺は悪くない。

しかもさっきまでは何もなかったんだから当然ノーブラだ。そう思うととうとう鼻血が出て来た。この状況を深く考えるよりも、今はこの眼福を味わっていたかった。下町にはこんな可愛い女の子はいない。いたら歌姫として連れて行かれる。だから年上巨乳なお姉さんという概念がないっ！

そもそも下町の粗末な食生活では可愛い子はいても胸に脂肪がない！下町の巨乳はちょっと裕福な家のおばさん連中しかないんだよ！俺は垂れ下がった乳には興味ねえっ！あああの張り艶……服の上からでも涎が出そう。あわよくば触りたい。エロガキ言うな。こんな美人なお姉さん見たら普通のガキはそう思っただけだろうが。子供の特権利用して上手い具合あの胸元に飛び込みたい。ああくそっ！昨日抱き付かれた時に何故あの胸はそこに無かったんだ！！俺はその事実深く傷ついた。慰謝料を請求するのを取り下げの代わりに誠意を見せて貰いたい。というわけでもう一度俺に抱き付けてきてくれエロい身体のシエロお姉さんっ！！今すぐにつ！

「カロン君、ちょっと目が怖いよ……」

びくびく脅えてる様子が堪らねえ。でも恐怖より照れと羞恥心が勝っているみたいで赤らめた顔がとんでもなく凶悪なまでに可愛い。俺はこの人の手ブラになりたい。

「ええと……バレちゃったら仕方ないから話すけど」

俺としてはその手を離して貰いたい。ボタンが飛んで覗いて見える谷間をしつかり見せて欲しいものだ。

「僕は先祖返りで人魚と王子としての血が濃く出ている。その分呪いも色濃く出ている」

「……呪い？」

言われてみれば、シャロンと一緒に呪いを解くとか何とか言ってたな。どうでも良いけど。そんなことよりその胸で男装とか逆にエロいよな。

「うん。海神様は自分の娘を裏切った王子を、その血を祟った。

海に飛び込めば人食い鮫や人食い鯨を呼んでしまう体質で、王家に繋がる家の者は海で溺れたら絶対に助からないと言われている。これは男女共通だ」

今のところシエロのこのけしからんもつとやれ突然変異の謎はわからないような呪いの説明。だが俺としてはその脅威の胸囲のサイズの方が気になる。俺の手で測らせてくれないか？

「人魚と王子の子孫……その中でも男は呪いが強く出る。海の水、正確には塩を含んだ水に触れるとこうして性別が反転。女の身体になっちゃってしまうっていう呪い」

何てけしからん呪いだ。王様とか一般的に髭面の爺って印象があるんだがそれが婆に変化しても全く美味しくないが、これなら別だ。最高だぜシエロ姉さん。嗚呼、素晴らしいぜ海神様！この呪いをあげがとっつ！

「普通は海水くらいの濃度がないと駄目なんだけど、僕は先祖返りだから呪いが色濃く出て涙とか汗とかそういうのでも一定の量に触れると呪いが発動してしまうんだ」

「なるほど……だからか」

シエロが涙を飲み込む癖が付いていたのはその所為だったのかと妙に納得してしまった。

「でも汗でもって大変だな」

「うん。だから夏場は専ら屋敷に引き籠もっているよ」

涙を拭いながらシエロが苦笑した。

「つまり夏場はパラダイスだって事だな」

「カロン君？」

しまった。つい心の声が出てしまった。

「な、夏場はバスタイムって言ったんだよ！風呂でも入って汗洗えよな。まったく」

「あはは、そうだね。お察しの通り、塩分きっちり洗い流して身体を拭いて乾燥させればまた元に戻るんだ」

むしろずっとそのままでもいい。そう思ったのがバレたんだろうか。

「でも……カロン君、男の僕と練習するのは嫌でしょ？え、ええと……声の出し方もこっちの方が高音出しやすいから参考になると思うし」

「喜んでっ！ー！ありがとございますっ！ー！」

「そ、そんな……土下座なんかしなくても。お礼を言いたいの
僕の方だよ」

「え？」

「カロン君が、僕とシャロンの証書を取り戻そうって言うてくれ
て……本当に嬉しかったんだ。情けないけど、ちょっと……嬉しく
て、感動したんだよ」

さっきの涙はそういうことだったのか。女シエロの笑顔は凄く破
壊力がある。もう風邪でも引いたのかってくらい俺の顔が熱い。カ
ロンは息を整えるべく、深呼吸。

「で、試験ってどうなのなんだ？」

「うん。とりあえず審査役の前でいちやつけばいいんだよ。彼ら
が僕らをバカップルだと認定してくればそれで良いんだけど、過
去にも訳ありの偽装カップルが挑んだことが何度かあったみたい
なだけで……審査役は変態揃いだから彼らを呆れさせるくらいい
ちやつくってというのは難しい。そういう意味では歌姫の演技力が試さ
れる試験でもある」

「演技力？歌にそんなもん必要なのか？」

「そりゃそうだよカロン君。歌は唯の言葉の羅列じゃない。その
歌を作った人の気持ちや、歌劇ならその役である人物の心をちゃん
と理解し表現し切る演技力が必要。声だけ良くても歌唱力だけあつ
ても伝えたいことがなければ誰にも何も伝わらないよ」

俺が……シャロンになりきるってというのは、シャロンの気持ちを
演じきるってこと。それは彼女がそうしたように、この男を愛しき
ってみせなきゃならない。嘘偽りではなく……その歌の間は本心か
ら。

「……それでもカロン君は」

「やるって言ってるんだろ。俺も男だ。男に二言はない！」

「何てお礼を言ったらいいかわからないけど、ありがとう」

シエロは微笑み……そして胸元に添えていた手を離す。

「それじゃあ、……カロン君の、演技力の手助けのためにも……なるなら僕は」

<>i333157—383<

手を離れた瞬間揺れた胸を見て、鼻の奥から鼻血がどつと出た。屋敷で着ていたというシャロンの服だったのに、袖が変色している。ごめんシャロン。

「さ、触ってみる？」

「い、いいの!？」

いや、さっきからずっと触りたいか思ってたけど。そんな俯くほど恥ずかしそうなのに大丈夫なのか？

「僕はこれから出来る限りシャロンの反応を真似て頑張る。僕から君に教えられるのはそれくらいだと思うから」

「シエロ……」

「それじゃああの、……色々、適当に……好きにしてくれていいよ」

元が男とはいえ目の前には、嗚呼っ！胸元の覗くブラウス。手を伸ばせばそれにその中身にさえ触れられる！そんなエロい格好のお姉さんがこんな台詞を仰ってるんだ！何を迷うことがあるのか。生きてて良かった。

恐る恐る手を伸ばし、あと少しで触れると言ったところで……カロ

ンは我に返った。

「ってちよつと待たんかいっ！てめえっ！つまりお前は俺のシャロンにこういうことしたんだな！？結局したんだな！？やったんだな！？そうなんだろ！？」

「そ、そりゃあ恋人ですし」

「認定試験ではばつちりやったんだろうな！？あぁっ！？ふざけんなよこらぁああ！俺の妹汚しやがってっ！てめえも同じ目に遭わせてやるつか！？ええっ！？……………あ」

つい男の時と同じノリで胸ぐらを掴んだら、こっ……………なんていうか触れた。指に、手の甲手首。や、柔らかい。駄目だ。この魔力の前には怒りなんて怒りなんて……………

「くっ……………くそっ！」

もう自棄だ。怒りをぶつけるように俺はその至高の宝である脂肪を両手で驚掴みにし……………一瞬天国という物を見た。両手が幸せだ。何これ。何なのこれ。一度掴んだら魔法のように手が放せない。

しかし胸ばかり見ているのは恥ずかしい。視線を上げれば、やはり絶対に目を合わさないシエロがいる。これは羞恥からなのだろうとは解るが……………

「おい、シエロ」

「な、何？」

波駄目のその顔が可愛いので……………少し、苛めたくなった。

「お前がシャロンのお手本見せてくれるんだろ？見せてくれよ。

俺のシャロンはそんなに目を逸らしてばっかだったのか？あいつを

そんな目に遭わせてたなんて俺の中でお前の評価が最低野郎のどん底に下がるぞ。喘ぎ声はどうしたんだよ？」

「ううっ……こんなところばっかり兄妹揃ってそっくりだなんて」

さめざめと泣いているが、呪いが発動している今は幾ら涙を流したところで意味はないらしい。

「でも僕が言い出したことだし……じ、じゃあ頑張る」

俺の手の動きに、シエロが声を出した。そこからもう俺は動けなかった。手以外。

元々人魚の先祖返り。女になるとその声は男時の比じゃないくらいの魅了効果。しかもその声の甘さ……シャロンにそっくりだ。声真似の才能もあるのかこいつは。

驚きと共に、実の妹に手を出しているような妙な罪悪感、背徳感……だというのに手は止まらない。凄い、興奮する。

(やばっ……)

鼻の奥が熱い。鼻、押さえないと。しかし両手は悪魔の肉塊の膚だ！押さえられない。

人間ここまで鼻血って出せるものなんだなあと下らない感想と感動を味わいながら倒れるカロン。

しかし倒れた場所が悪かった……いや、良かった。シエロの胸に顔を埋める形に倒れたのだ。より鼻血が吹き出したのは言うまでもないが、俺はこの感触を生涯忘れないと思う。なんだかんだでいい人生だった気がするよ。でも出血多量で死ぬのか！。でも幸せかもしれないな！餓死とかより。こんな柔らかくて温かい物に包まれて死ねるんだ。

「カロン君、大丈夫？」

嗚呼幸せだなあ。誰だよ俺をこんな幸せから引っ張り出そうとするのは……

「……って俺、生きてるのか!？」

飛び起きれば昨日のデジャヴ。枕元にはシエロの姿。

天井までついた血の後を見て、俺良く生きてたなとさえカロンは思う。

「危なかったけど、なんとか」

俺は鼻血の大量出血で生死の狭間を彷徨ったらしく、目覚めたときは付き添いのシエロの服が変色していた。俺の鼻血を至近距離で食らってしまったんだろう。

「ごめんシエロ……」

「ああ、服のことなら気にしないで。君が無事で何よりだよ」

付き添いと掃除と看病とで着替えも風呂もままならなかったのだろう。シエロは女のままだ。本当にありがとございます。

「ね、カロン君。お腹空かない？」

「言われてみれば昨日からまだ何も食べてなかったな」

「どたばたしてたからねえ……」

シエロが申し訳なさそうに苦笑する。

「お詫びにさ、良いところに連れて行ってあげるよ！上の屋敷に

帰るついでに」

「良いところ？」

「うん。歌の勉強にもなるし……あそこの近くに美味しい店があるんだ」

「よくわかんねえけど、んじゃあ行く！」

*

(……そうだ。確かこんな流れで外に連れ出されたんだった)

カロンは今更のように空腹を思い出す。女シエロの胸を見たり触ったりしたためこっちも胸はいっぱいだ。幸せで。

しかし空腹を誤魔化すのは限度がある。思い返してみれば昨日食べたの、おばちゃんに貰った果物だけだ。

「くそっ！この街良い匂いばっかしゃがって！俺に喧嘩売ってんのか！？腹減って来るっ！」

「あはは、確かにお店から来る料理の匂いは堪らないよね」

そういつて笑う女シエロの微笑と胸元の方が堪らなくはあった。シャロンが天使なら、こいつは女神だ。食事に行くだけとはいえ、相手が紛い物の女とはいえ、これはもしかするとデートという物に分類されるのではないだろうか。そう思った途端に恥ずかしくなる。

(いやいやいやいや何俺っ！あいつの胸まで触って揉んでおいて、デートくらいで何を照れてるんだ！馬鹿か俺は！？)

今思い返すとあの頃の自分のテンションが信じられない。

俺だつて最初から女シエロと出会っていたら一目惚れとかしていたと思う。それが逆転したと考えるなら、シャロンがこいつに惚れ

たという話もあながち嘘ではないだろう。女であるシャロンには、男のままのシエロが……あの位の衝撃走るくらい格好良く映ったのかもしれないし。

「カロン君、はい！」

「え？」

「食べ歩きつての一度やってみたかつたんだ僕も」

あまり重いものだとかこれから食べられなくなると、小さな菓子を屋台から買って来たようだ。

「食べ歩き、やったこと無いのか？」

「下層街なら沢山あるけど、ここからも少し上……中層街からは殆どないかな。本邸のある上層街には皆無だよ」

「ふうん……」

にこにこ笑うシエロ。だけどやはりその目は何処かを見ている。

（ああ、そうか）

本当はシャロンとこうして食べ歩きとか……デート、したかったんだろうな。

そんな風を感じたカロンの沈黙。それに説明か言い訳か。静かな声でシエロは語る。

「シャロンはこの一年で凄い躍進を遂げた歌姫で、すぐ人気が出たからさ……お忍びで下層街にデートなんか行けなくて。仕事でなに行けるんだけど、ファンからすれば大好きな歌姫の恋人なんて天敵みたいなものだろ？僕は彼らに殺されても文句は言えない。百も承知さ。だから下層街での仕事の時は、あんまり付き添えなくて」

「……」
「それに、一人で食べ歩いてもなんだか恥ずかしいし悲しい人みたいでしょ？今日はありがとうカロン君」

いつもは下町のおばちゃん達の話に軽口やお世辞で返せたのに。こいつが相手だとどうして、ついつい口籠もる。本体が男とはいえないなんて、俺は俺が情けない。けどここでは畏まって「その笑顔が見られただけで結構ですよ嬢さん」とか、セクハラ紛いに「礼なら身体で払ってくれ」なんて言えるわけがない。こんな綺麗な人を前に言葉を並べても、言葉が霞んで消えてしまふ。この人の綺麗さに叶う言葉なんて無い。正確にそれを言い表すことも出来やしない。

(それに……)

どんな言葉を取り繕っても、シエロには届かない気がするのだ。シエロは俺を見ていないから。

だからカロンは相手が男の時同様に、こう返すしか無くなるのだ。

「別に、俺は腹が減ってるからついて来ただけだ」

「あはは、そうだよね。ごめんね」

でも俺の受け答えが面白かったのか、シエロはくすくす笑っていた。

3：呪われた人魚の末裔（後書き）

あれ……シリアスってなんだっけ？

女シエロとそのおっぱいにメロメロのカロン君。

双子の兄妹相手にリバを余裕でこなせる野郎ヒロイン恐るべし。

4：オペラ座の歌姫（前書き）

GL注意報

4：オペラ座の歌姫

海神の娘の姉B

『嗚呼。可愛らしいウンディーネ。愛しい私のウンディーネ。

お前は私の傍にこそ相応しい。

お前の可憐さ美しさ、その歌を理解できるのは世界に私唯一

人！

どうしてお前は解らない？どうしてお前は気付かない？

何故だ愛しいウンディーネ！

あんな汚らわしい人間に、どうしてお前は恋をした？』

*

台本にはでかかとその名が刻まれている。エコー＝アルセイド

……

その名はこの界限では余りに有名。今日の看板、主役はその人。

二人のヒロインですらない。

低音高音使い分け、年齢様々な少年少女役を演じる傍ら……青年、時には悪女さえも美麗にこなす。涼しげな表情でも、その声量は遺憾なく発揮される。歌姫シャロンに次ぎ、人魚に近いと謳われる歌姫。それが私の名前。

今日の劇は『波の娘』。この国が興るより前から伝えられて来た悲恋の話。それを知っていたからこそ、この国の伝説にある王子はウンディーネを裏切りはしたが……罵ることをしなかった。海に帰りさえしなければ、それは裏切りにカウントされないとでも考えたのだろう。これだから男は。

裏切りは身体の関係を意味するとも思っているのだろうか。エコーは台本を置き、溜息。裏切りは心から。他の相手を一度でも思ってしまったのなら、それは裏切りだ。だから今日与えられた騎士

の役は、どうしても気が乗らない。

それでも引き受けたのは……半年前と同じ劇だったからと言うしかない。

1年前は浮気相手の女……つまりもう一人のヒロインベルタルダ役にエコー。ウンディーネ役にシャロンが決まった。しかし今度はその二人のヒロインを行き来する騎士フルトブラント役でオフアーが来た。

前回の公演でシャロンはウンディーネの再来とまで謳われ、ウンディーネの代名詞と言わんばかりにあちこちでウンディーネ役を任せられた。だからこそ、シャロンがこの劇も受けるに違いない。そう思ったからこそエコーはこの気に入らない騎士の役を引き受けた。物語は悲恋。伝説とは違って二人は引き裂かれる。最後はウンディーネとの口付けによって騎士は死ぬ。

(……シャロン)

全てが上手く行っていれば、半年前見せつけられたあのシーン。他の公演では唇の横……頬にだとか寸止めとか……そんなやつた振りをするだけだという、恋人一途な歌姫シャロンが唯一、本当にやったキスシーン。それを私かなぞる。

親友の私となら嫌がらない。無理矢理こっちが動けば持ち込める。言い訳なら完璧。日々の多忙な仕事の疲れ。言い訳できる仕事量が私にはある。

(そう、疲れて足がふらついた。それで私はバランスを崩すの)

それで会場に来るであろうあの男に見せつけてやる。お前の大事な歌姫が、裏切りを犯すところを。優しいシャロンの事だもの。事故で私を怨んだり嫌うことはない。

それである男と不和になったあの子を、私が優しく慰めてあげる

わ。私だって……私にだって人魚の血は流れてる。

「楽しみに、してたのよ……シャロン」

また一緒に同じ舞台に。そう言ってくれたじゃない。ただど貴女は私を裏切った。

*

「準備は出来たか？」

「ええ。お兄様」

「エコーよ。俺を兄とは呼ぶな」

「俺には俺に相応しき美しい名がある。名は体を表す。この俺の美しさを的確に表現するにはその名が必要だ。故に俺はナルキスと呼べ。だが世界一素敵で美しいお兄様なら可」

エコーは呆れて溜息も吐けない。

いつもこうだ。これが十数年続けばそうもなるだろう。私の人生最大の不幸は、この男の妹として生まれてきたこと……ではない。もつとろくでもないことは多々ある。だからこの程度の不幸は全く大したことがないのだ。

「しかしお前のコンサートのチケットが完売だと？見る目がないな。明らかに俺の方が美しいというのに」

兄はナルシストだ。生まれた時からそうらしい。これは死んでも治らないと医者に匙を投げられた。兄はその匙に映った自分に惚れ惚れしていた。死んでも治らないなら死ねばいいのに。

チケットの販売前には「お前程度の女の歌に人が集まるか！俺の

サインと裸のブロマイドをつけてやる」などと迷惑この上ないことを言っていた。そんな猥褻汚物付きのチケット、私は金を積まれても要らない。

「兄様は愚かね。世の中の人が皆同性愛者だとも思っているの？男は男である以上、一定数の馬鹿はあやつて女に現を抜かす生き物なのよ。気持ち悪い」

「つまり女に現を抜かさないと、俺様が格好いい。そう……遠回しに褒めたのだな？まったく回りくどい妹だ」

十分貴方も気持ち悪いですと言ってやりたいが、他の男共よりはまだマシな気もするから困る。

「そう、流石兄様は聡明ね」

面倒なので適当に持ち上げて同意しておいた。

「ははは！そうだろう、そうだろう！どれ、では俺はこれからコンサートを控えたお前のために何か飲み物でも買ってきてやるう」

気をよくした兄は控え室から出て行った。そんな優しい俺格好いって奴ですわかります。煩わしい男。男ってどうしてあんなのかしら。

異性愛者でも同性愛者でも自己愛者でも私は苛立ち、嫌悪する。あれは私達とは相容れない別の生き物なのかしら？

ああ。気持ち悪い。後で塩でもまいておこう。いや、扉の向こう前に鏡でも捨てておこう。

今日は楽しいコンサート。私の私のコンサート。この天空都市箱船の中では、小さめのオペラ座。それでも今回はとびっきりのコンサート。

だって今回は女性限定ライブなの。汚らわしい野郎一杯のホールでのコンサートは拷問よ。あいつら汚らわしい目で私を見るもの。選定侯家の歌姫だとか。家が裕福だから、裏の仕事を経ずに歌姫をやっている処女歌姫だとか。そんなステータスで私を見る。私の歌なんか、きつとどうでも良いの。あいつら私を汚すことしか興味ないんだもの。本当、死ねばいいのに。もしも私が神様だったらまず就任1日目に男という男を全部火にくべ殺しているわ。エコーは深々と溜息を吐く。

「嗚呼……シャロン」

このオペラ座に来ると思い出すことがある。

それは1年前の今日この日。それから半年前のあの日のこと。

1年前……歌姫エコーはこのオペラ座で、彼女と……歌姫シャロンと競演した。シャロンは歌劇はあれがデビュー作。

歌劇はストーリーと曲もさることながら、歌と歌のバトル。如何に演じきり、尚かつ客に自分を印象づけるか。そしてそのためにどれだけ良い役を貰えるか。それが大事。

だと言つのにあの娘は小さな脇役。それでもそれを見事に演じきり……客の心を鷲掴みにした。誰もが違和感を感じなかった。まるでその役は、彼女のために予め作られていたみたい。そんな風にさえ思った。

経歴を洗えば生まれはあのゴミ溜めのような下町。歌の勉強も独学。私は初めて自分以外の天才を見た。それまでの私は、天才という生き物は血筋により何代にも重ね合わせて作り出される一種の血統書のような物だと捉えていた。けれど天才は身分に関係なく生まれるのだと、あの日私は認めざるを得なかった。歌姫シャロンは誰とも戦わず、誰もを打ち負かす不思議な歌姫。

その半年後、エコーはこのオペラ座で……同じ劇をシャロンと演じた。二人ともメインになる役だった。

その頃のシャロンは台頭して来ていて、人気も付けて来ていた。それでもまだ、エコーには及ばなかった。誰もがそんな二人の勝負に期待していた。当然舞台は大盛況！シャロンがエコーと同じ土俵まで登ったのはあの日のこと。誰もが引き分けだっただろう。それでも真相は違う。劇を終え……エコーは自分が負けたことに気がついた。

「ありがとう……楽しかった」

そう残したシャロンに、負けた。勝ち負けとか、そんな概念で歌を測っていたこと自体が彼女に劣っていた。如何に観客を楽しませられるか。その奉仕の心。それがエコーには欠けていた。今だって欠けている。

「また一緒に、歌おうね」

エコーの呟き……その後間をおかず、扉の前から戸惑う付き人の声。そしてノック音。

「きゃあつ……！あ……アルセイド様、そろそろ準備お願いします！」

「はい、解りました」

エコーはこれでもかというくらい扉を思い切り開ける。

案の定扉の前で鏡に惚れ惚れしていた兄と、さっと後ろに下がった付き人。

「傷つく俺もまた……絵になる。そう思わないかエコー？」

そのまま絵になって遺影になればいいとエコーは思った。割と本

気で。

その時は歌姫としての人気を下げることになるうとも、その葬式でいえーいとか寒いギャグを言ってもいい。だから兄様絵になれば？

*

「今日はよろしく」

「べ、別によ、よよよよろしくしてやらないこともないわよ！」

シャロンの代役。シャロンが蹴って代わりに収まったのがこの女。シレナ・ネレイード。シャロンは愛称でシレネと呼んでいた。

社交辞令の言葉に拳動が怪しくなっている。こんな情緒不安定な女に歌姫が務まるとは思えない。何を勘違いしたのかエコーに向かつて握手まで求めてくる。それには応えずエコーは心の底から溜息を吐く。

「本番では嘔まないで欲しいものね。シャロンならそんなことは絶対にしない」

「……っ！」

「私は才能のない凡人の貴女には全く期待していないの。だから勘違いしないで？貴女は台本通り、書いてあることだけをやってくればそれでいいの。それさえ出来ないようなら貴女、この仕事向いてないわよ」

「エーコっ……あんたっ……！」

「気安く私を呼ばないで。それはシャロンが私にくれた愛称なの。私はあの子の友達だけど、ネレイードさん？私、貴女と友達になつたつもりはないわ」

「っ……何よ。なんでそんなこと言うのよ！私があんたに何をしたって……」

「化粧の崩れたその顔で舞台に立つつもり？早く直したら如何？」

これ以上相手にするのも無駄。エコーは足早に廊下を立ち去る。

あの成金歌姫は歌姫としての才能がないどころか礼儀常識すら弁えていない。生まれが貧しい人間はシャロンのような例外を除いて概してああね。金で品性は買えないというのが哀れだけれどこればかりは仕方のないこと。品性は身分じゃない。これもきつと才能。あの子にはその才能すらないのね。

（それにあの性格。私が親だったら精神病院にでも叩き込むか、いつそのこと楽に死なせてあげてるわ。家の恥だものあんなの）

もつとも家の恥という点ではエコーも兄も怪しい所ではあるが、自覚しているエコーはそれを改める気すらない。人が人である以上何らかの欠点はあつて然るべき。極力それが少ない、或いは表面上そう見える人間が讃えられる。だから私はそう。唯それだけ。

「何をした」……ですって？」

才能もない癖に努力で何とかなるとでも思っているのが気に入らない。そんな空回りで心優しいシャロンの気を惹くのが気に入らない。あんな能無し、哀れんでやる必要のないのに優しいシャロンは舞台を譲った。あんな性悪女のために……中の下レベルの歌姫、あの女がギリギリ来ることが許されるこの中層街での公演のヒロインを！！

また一緒に歌おうという約束を破らせた。シャロンに私を裏切らせたのは貴女じゃないの。なのに何？あの被害者面は。

あの女を殺して、それでシャロンがこの役に戻るなら……私はこの手を汚したかも解らない。だけどあんな女でも、優しいシャロン

は友達で居てあげている。シャロンは優しいからあんなゴミのような友達のためにも悲しむし怒る。親友の私と天秤に掛けたら私の方が重いはずなのに、そんな私に向かって怒るんだもの。本当にシヤロンは優しい子。

貴女に出会ってのこの一年。とても短いはずなのに。何度一生を終えたか解らないほど私の中では濃密な時間だった。それは多分、永遠と呼んでも良いほどの密度。だっていつも貴女のことを考えていた。最初は敵愾心。それが興味に代わり……別の物へと昇格した。自分の心が貴女の手転がされているようで気に入らなかつたのも最初だけ。次はどんな気持ちも私の教えてくれるのだろう。貴女の隣にいてだけで、いつも心が躍ったわ。

でも、それももう終わり。

愛は愛のまままで留めるべき。完成されるべきなの。だからそれはとても悲しいことだけど、仕方ないことだと思っただけで諦めるわ。残りの人生ずっと貴女を想い続ける。この苦しみも愛という物。私が証明してあげる。あの男は男よ。絶対貴女を裏切るわ。

(それでも私は違うわシヤロン)

私は貴女を愛してる。

私だけは絶対に、貴女を裏切らない。

4：オペラ座の歌姫（後書き）

ヒロインシャロンにメロメロの親友歌姫。もうお前殺ったんちゃうの？

歌姫エコーさん、ガチ過ぎ。シャロンとキスしたいがために騎士役を引き受けたとか下心爆発してますね。

男を毛嫌いしつつ、シャロンには男性が歌姫の自分に抱いてるような劣情抱えてるってのが彼女の矛盾。

5：オペラ座にて

海神の娘

『私は何故人ではないのでしょうか。』

貴方と結ばれて、教会の祝福を得て……人の魂を得ても、人と同じ時間に暮らせない。

いつか貴方は私を残して先に逝ってしまうのです。

嗚呼、嗚呼……フルトブラント様。私は寂しい。寂しくて堪らないのです。

いっそのこの寂しさが病になって、私の寿命を縮めてくれればどんなに良いか。良いことか。』

*

これは不味い。シエロはそれを悟った。

「へえ！ここが連れて来たかった場所か？」

中層街のオペラ座。その外観にすっかり夢中なカロン。物珍しいのだろう。

ここはシャロンならよく仕事で来る場所だ。下見も兼ねて色々教えておくべきかと思った。

(だけど、よりにもよって……)

そうか、今日だったのか。すっかり忘れていた。今日の演目を見て失敗したとシエロは思う。

「元々はこの劇、ヒロイン役をシャロンがするはずだったんだ」
「へえ！」

そう告げればますますカロンはオペラに興味を持ってしまつ。しまつた。墓穴。

今日のメイン歌姫。その全てがシャロンと関係する人物。今後の方針を決める上でも顔と名前を覚えておくのは間違つてはいない。いないのだが……

(どうしたものかな……)

水の精霊と騎士の悲恋を描いたその悲劇。騎士フルトブランド役に歌姫エコー＝アルセイド。精霊ウンディーネ役に歌姫シレナ＝ネレイド。貴婦人ベルタルダ役に歌姫ドリユアス＝エウリード。配役的にヒロイン二人が真逆だと思つけれど、このミスマッチは仕方のないことだ。

貴婦人役はシャロンの引き立て役として選ばれた。今のシャロンと張り合える歌姫は……エコーくらい。そのエコーが男役になつたのだから、貴婦人は格下の歌姫を連れてくるしかない。酷ければ酷いほどシャロンが引き立つ。そう考えたのだから。それでも余りに酷いのはオペラ座の矜恃に関わる。ある程度見栄えが良く、ある程度血筋があつて、ある程度歌える歌姫。その条件で引つ張り出されたのが歌姫ドリユアス。おっとりした彼女がどこまで貴婦人を演じられるかも、確かに面白いかも知れないし、気の強い歌姫シレナがヒロインの精霊を何処までやれるか……客達も彼女の新たな可能性を求めて興味を持つ演目。

「うん、だけどチケットがないと入れなくてね。当日券も幾らかはあるんだらうけど」

もぎりの人に尋ねてみると、それも完売とのことで、パンフレットだけを買ってカロンの渡した。レストランに入り食事を待つ間、そこに書かれている歌姫達を彼に紹介することにした。賑やかな通りに面しているので少々の会話は周りには聞こえない。

「この青眼で長い黒髪ロングストレートの子が歌姫エコー。実力派歌姫で、シャロンの親友で、彼女はエーコと呼んでいる」

「綺麗だけどきつい感じの美人だな。これは口説くの大変そうだな。シャロンの奴よく友達になれたなあって感じの子と昔からそういうことあったけど……」

正直苦手だなと言うカロンの率直すぎる感想に、シエロは思わず笑ってしまった。全く持ってその通りだとシエロもそう思う。

「エコーの家はアルセイド家と言って、選定侯家の一つ。だから人魚の血を引く彼女の歌は周りから抜きんでている」

「選定侯……それじゃあこの子がお前のライバル？」

「いや、彼女のお兄さんが僕のライバル。もつとも彼は玉座に興味ないみたいだからアルセイド家の人達も困ってるみたいで、その分エコーに期待が掛かっているんだろうな」

「後ろ盾が実家ってことは、もしこの子が人魚になった場合どうなるんだ？殿下と結婚？」

「そうなんじゃないかと思うんだけど、その場合アルセイドの家が政治に関して強く口出し出来るようになる。仮に別の事態になってもアルセイド家の権威が増すのは間違いない」

「なるほどな。それでこの子は？」

次にカロンが指差したのは、その隣。ヒロインに扮する歌姫シレネ。

「この金髪碧眼釣り目の彼女はシレナ」ネレイド。シャロンはシレナちゃんと呼んでいた。元々下町の商家出の歌姫だから、君も聞いたことがあるかもしれない」

「ネレイド？……確かオボロスが働いてる所だ。へえ、あの家お嬢さんなんかいたんだ」

「ああ、君の友達の子かい？」

「まあな。……そういやあいつに何も言わないでこっち来ちまっただな。まあ、また仕事で遠出しただろうし気にならないか」

「そつか。ちよつと気になってたから良かったよ」

事態が事態だったとはいえ、急な技を使い過ぎた。説明に行くべきだろうかと思っただけ、これから何があるかも解らない。下手なことは言えないし、また下へ行き来するのは難しいなと思っていたから助かった。

「この子はシャロンの同期でシャロンは友達だと思ってるんだけど、彼女からは思われていない。同期の子が自分を置いてどんどん上へ登っていったらそうなってしまうのも無理はないね」

「…………それは、まあそうだよな」

「だけどシャロンは周りからライバルと言われているエコーよりも、彼女を好敵手と認めていた節がある。まあ、歌姫シレナは努力の人で、シャロンよりは遅いとはいえ上に上がってきているのは確かだよ。エコーは親友のシャロンが格下の歌姫に気をかけることが気に入らないのか、彼女に辛く当たっていたのは私も何度か目にしたな」

「こ、怖いなこのエコーって子。俺ちゃんと親友の振り出来るのか心配だ」

「大丈夫。君は事故の影響で記憶喪失なんだから。何とでもなるよ」

「……………だといいけど」

カロンは心配そうだ。仕事には僕も付き添ってフォローを入れていかなければ。

「それで、この子は？他の二人に比べて優しそうな感じだけど」
「良く言うならそうなるかもね」

カロンは最後の歌姫を指差す。他の二人に比べて目立たない印象の子だが、おっとりしているというか優しさや優雅さのようなものは持ち合わせている。

「この栗毛の彼女はドリユアス」エウリード。歌姫ドリスって略称の方が知られているかな」

「歌姫ドリスか……名前だけなら」

「彼女はよく下町公演に行くからね。すれ違ったことくらいはあるかもしれないよ」

「よく許可降りたなこの子」

「……あはは、彼女は殿下のお気に入りだね」

「殿下の？」

「うん。殿下は自分の敵じゃないお気に入りの子には甘いから。」

一番便利な場所にある南ゲートは自由に通れるみたい。南は王宮管轄門だから」

「ふうん……」

「この子ともシャロンは結構仲良くしてたと思う。下町を大事にしている彼女が好きだったんだろうね」

「へえ……」

説明するも、カロンは後半割とどうでも良さそうになっている。

この子正直すぎる。基本美人じゃないと話を聞かないのか。恐ろしいな下町っ子。この子あと数年したら凄い軟派師になっていたかも

しない。

「あの、聞いているカロン君？」

「き、聞いているよ！」

身を乗り出すと超高速で目を逸らされた。その横顔はほんのり赤い。どうやらパンフレットを見る体で居て、テーブルの上に載っていた僕の胸を見ていたらしい。本当に正直な子だなあ……そこには好感持てるけど、見られている側としては恥ずかしい。

「もう……」

こんな調子で大丈夫なんだろうか。もし犯人が女の子だったからって理由で殺意が鈍るようでは困る。

(僕は殺すよ。相手が誰であっても、絶対に……)

シエロは溜息を吐き、パンフレットを返して貰う。どの三人もシヤロンに関わっている。今回の事件に関わっていないとも限らない。

「でも面白いよなそれ。男子禁制の舞台なんだろう？」

「え？中層街からは正装が基本だけどそんな規定はなかったはず……あ」

三人の歌姫。その中でもっとも権力を持つのはエコー。パンフレットには男嫌いの彼女らしい一文が付け加えられている。色恋沙汰や醜聞とは縁のない、清廉人気歌姫の女とのキスシーンが見られるんだ。正常な男なら興味を持つだろう。

ちらと横目で向かいの通りを見れば、長い行列。開演時間まではまだあるが……入り口を見れば女装し侵入しようとした男性客が警

備員に連れ戻されている。

「どつちにしろ俺らじゃチケットあつても駄目だったって事か」

「いや……、そうだな。僕らなら入れる」

「え？」

「君はシャロンだ。このオペラ座は君がよく仕事で使う場所だし、今日の劇の主役はみんな君の友達だし、一番権力のあるエコーは親友だ。人が捌けた頃なら通して貰える。みんなに花でも贈りに来たつて言えばね」

「でも花なんて何贈るんだ？薔薇とか？」

「見栄えは良いけど止めた方が良いかな。一人勘違いしそうな子がいる」

「……え？」

「エコーには気をつけて。君に何かするとは思えないけど危険なことには変わりない」

「え、ああ、うん」

妹の親友と聞いても苦手というイメージが払拭できていないのか、カロンはよく聞きもせず忠告を受け入れてくれた。

「花は……百合が良いんじゃないかな。多分この中に犯人がいたら、いい挨拶になる」

やっぱりひとり勘違いしそうなのがいるけど、もし例の事件に関わっているならこの期に及んで勘違いも何も無いだろう。

「お待たせしました」

作戦会議が終わったところで料理が運ばれ始める。中層街はデー

ブルマナーにも五月蠅くない。下層と上層の交わる街。シャロンがここを好んだのは、多くの人に歌を聞いて貰いやすい場所だから。彼女の才能なら上層街で引つ張りだこ……それを断り敢えてここで歌うことを選んだ。本当は下層街が良いんだらうけれど、下層街にばかり向かうと他の底辺歌姫達の邪魔になると身を引いた。別にシヤロンは他の歌姫達の芽を摘むことが目的ではなかった。結果としてそうなってしまうことに深く傷つくような子だった。

(彼は、どうなのだらう?)

ちらと視線を向かいのテーブルに向ける。がつかつと食事を平らげるカロンの姿。顔は似ているけれど、この調子なら誰も気付かないだらう。歌姫シャロンがこんな風に食べるとは思わないだらう。

「口には合ったかな？」

「美味えっ！」

「なら良かった。お腹壊さない程度に食べてね」

口元のソースの汚れを拭いてあげると、じつと青い瞳が僕を見上げる。

「どうかした？」

「な、なんでもねえよ」

また目を逸らされた。ちょっとお節介焼き過ぎたのかな。

*

こんなに美味しい飯を食べたのは何年ぶりだらう。本当に目の前の人が女神様に見える。いや、その正体が野郎なんだとは知っては

ても。

(……………変な感じだ)

あんな風な優しい目。口元を拭われた時……シエロが一瞬母に見えた。顔も形も似つかない。大体母が攫われたのはずっと昔だ。顔なんか覚えていないが少なくともこの男には似てはいない。カロンはそう断言できる。

多分、それは理想の母親像。この優しさが俗に言う無償の愛というのに似ているような気がしたのだ。無論そんなはずがない。この男は復讐のために俺を持ち出した。俺を利用してはいる。だからそれは無償などではあり得ない。それでもシエロが親切なものには変わらないから、そう錯覚しそうになっただけ。

食事を終えた頃にはもう開演してしばらく経っていた。人もまばらなオペラ座へ俺達は向かい、シエロの説明により受付はすぐに通された。そのまま楽屋に花を置き……そっとホールへ足を踏み入れた。

扉を開けた瞬間聞こえてくる音の洪水。オーケストラの迫力。そしてそれに負けない歌姫の歌。調和するハーモニー……息を呑む。

(カロン……………)

(……………あ)

シエロに小声で呼ばれてやっと我に返った。

受付から用意された席があるとは聞いていたけれど、遅れて入って目立つような場所へは行けない。目立たないよう壁際の機材に腰掛けたシエロの膝に座って俺も舞台を見下ろす。パンフレットで見た歌姫達が音楽と共に歌う。

あらすじはパンフレットで目にしたが、オペラなんての生まれて

初めて見る。これまで俺が生きてきた場所とはまるで別世界。

パンフレットでは怖いと思った歌姫も、騎士の役になると格好よく見える。なにしろ歌唱レベルが他の二人とは桁違い。あの冷徹な眼差しも……精霊を冷たく罵る様にはびつたりだ。釣り目のオボロスの所のお嬢さんもなかなか様になっている。儂げとまでは言えないうが、裏切られた精霊の物悲しさを大いに語り、彼女は歌う。まるで最近何か、悲しいことでもあったみたいだ。

そしてもう一人の歌姫。他の二人に比べて印象に残らない子だと思った。それでも……歌った瞬間味が出る。騎士が彼女に心動かされるのも仕方ない。そんな風に思わせられる。彼女の歌は温かで、それで騎士への切なる片恋を物語る。

彼女たちの衣装……その本当の衣装は歌だ。歌一つであそこまで人が変わる。歌で着飾る彼女たちは、とても輝いて見えた。生き生きとしていて……ああ、この間までここにシャロンが居たんだ。ここで歌って呼吸をしていた。その息吹が感じられるのだ。彼女たちの歌の中から。

(俺がシャロンになるっていうことは……俺もあそこに……)

そう思った瞬間、肌が震えた。怖いのだろうか。こんな人前に立つと言うことが。いや、……違う。信じられないんだ。俺の妹がこんな凄いとこにいたなんて。あんな綺麗な音楽と一緒に、歌を歌える。バレたらお終い。そう思うと怖くて堪らない……だけど、ぞくぞくする。あんな舞台の上に立って、歌えたら……どんな気持ちになるんだろう。

俺は男なのに……この瞬間、俺は歌姫という物に憧れたんだ。下町の女の子達が一度はそれに夢見るように。

*

「どうだった？カロン？」

「……凄かった」

最後まで見たら人が多すぎて出て来られないし誰かに見つかったも厄介。クライマックス直前に開場を後にした。

「最後まで見たかった？」

「そりゃそうだけど……あれ、シャロンもやってたものなんだろう？」

「うん。ウンディーネ役の代名詞みたいな歌姫だったから。これからもよく仕事は来ると思うよ」

「そっか」

結末は自分でやって、知ることになる。そう思うと期待と不安で胸がいつぱいだ。

俯きがちに歩く俺の横で、シエロが暑い暑いとウィッグを外す……夜風に吹かれる髪がとても幻想的な色合いを出す。ここは月が下町よりずっと近い。だからだろう。本当に目に見える物全てがこれまでとは違う。

本当に別の世界に迷い込んだような不思議で、魅せられて……それでも恐ろしくて、心細い。

「今日の歌姫も頑張ってたけど、まだまだシャロンには及ばない」

「……それなら俺なんか」

「でも君ならシャロンすら越えられる。僕はそう思う」

「何でそう思うんだ？」

シエロを見れば、彼は……彼女は微笑んだ。

「僕も歌が大好きだから、歌が好きなのは解るんだ。君はシャロンより歌が好きだ。だから君は彼女より上手くなれる」

歌うのは才能でも血でもない。心であり魂なのだとしエロは教える。

「この街には本当に歌が好きな人は少ない」

ぼつりと呟かれた言葉はとても寂しそう。

「歌っている自分が好きな人。歌ってちやほやされたい人。歌で人の心を蹂躪、征服することが好きな人。歌を金儲けの道具にする人。そんな人ばかりだ。そういう人は声に歌に嘘が出る」

「誰にも聞かせないように、聞かれないように……ひっそりと歌う君は、この街の誰よりも歌を愛しているんだと僕は思う」

「そ、そんなの買い被りすぎだ、俺を」

カロンもあの舞台を見て……シエロの例える歌を愛していない者達のような気持ちを僅かでも味わった。

「カロン君、それは舞台の魔力だよ。舞台は人に夢を見せる。憧れという夢を」

「憧れ……？」

「憧れ自体は悪い気持ちじゃないよ。それはとても純粹な気持ちだ。憧れを捨てたり汚してしまう人より、今の君は素晴らしい人間だ。だってそれはそれだけ君の心が澄んでいる証拠だ。濁った心では何かに感動する事なんてなくなるんだ」

それを言うならこの人だって。俺の言葉なんか泣いた癖に。人の言葉で泣けるようなこの人は、自分なんかより余程純粹だ。

「憧れる気持ちが無ければ、希望も見られない。生きていくことが唯々苦痛になっていく」

「シエロ……」

この人は、憧れる者を持っていない。無くしてしまった。

シャロンを愛するだけでなく、彼女に憧れていたんだろう。それは思いが通じた後でも変わらず。

「シエロ……」

「何？カロン君？」

（お前は……まさか……）

復讐が終わったとのこと。考えていなかった。

どうせこいつのことだ「やった終わったね！ありがとうカロン君」とか良い笑顔で言っつてその後思い出したように泣いてそれから……また前を向いて生きていくのではないか。そんな風に決めつけていたけれど。

（この男には、希望がない……）

死ぬ、つもりなんだろうが。復讐が終わったら。何もかも捨てて。

その時俺のことは、どうするつもりなんだ？こんな空の上まで連れて来て。そのままシャロンとして生きて行けと？それとも何もかも忘れて、また下町に戻れって？人を殺した手で人を救う仕事をするなんて宣えというのか？

（ちょっと、待てよ）

おかしい。おかしいよ俺。

こいつは昨日会っただけの他人だろう。何でこんなに依存しているんだ？妹の恋人ってまるっきり他人だろ。どうでもいいだろそんな奴。

(でも……)

馬鹿げた妄想。そうと決まった訳じゃない。なのに何でこんなに動揺するんだ。怖いんだ？

「シエロ……俺がシャロン、演じきれたら……立派な歌姫になれば」

「……うん」

「お前も、俺に憧れてくれるか？」

「君になら大勢の人が憧れてくれるよ。絶対そうなる」

「お前はどうかだって聞いてるんだよ俺は！」

シエロは……たぶん人の声から人の心が解るんだ。だから俺の気持ち解るんだ。だからこいつは絶対に、簡潔にはいとは言ってくれない。限りなく遠回しに、いいえと言う。

「カロン君。憧れて言うのはね……子供の特権だよ。僕はもう大人だから……夢はお終いだ」

「でも夢を無くしたら生きていけないって……！お前が……！」

「カロン君、大人って言うのは死んでいく生き物なんだよ。そのために神様は、大人から夢や希望を奪うのさ」

さあ、帰ろうと差し出された手。それをそのまま掴んだら、俺は

俺が子供だと認めてしまう。こいつが大人だと認めてしまう。

「カロン君？」

シエロを追い越し、俺が手を差し出す。お前はまだ子供だ。俺より背高いし大人びた振りしてるけどお前だってまだ成人じゃない。下町の何もわからなかった世間知らずが一丁前に大人の顔だって？笑わせやがる。

俺は船頭だ。目の前の、命を拾う。簡単に死なせてなんかやるもんか。

俺が一番最初に憧れた、親父みたいに。例え俺が死んだって、一度船に乗せた命は守りきる。それが親父の……俺の仕事だ。

俺の手を掴まないシエロの手。それを權の代わりに引つ掴む。俺の身体が船。こいつは客。俺は渡さない。俺は地獄になんか仕えていない。俺が仕えているのはこうして生きている世界だ。俺が客を渡してやるのは生きる岸边、希望のある方向へ。

「大人の男つてのは下町では髭面のおっさんか爺のことを言う。

お前は髭面でもないし胸まである。そんなのは大人の男とは言わねえ。俺が認めねえ」

「そりゃあ今は呪い発動してるし」

「発動してなくても髭面じゃねえ」

「無理矢理過ぎるよカロン君」

小さくシエロが吹き出した。重苦しい空気が和らいでいく。俺が無茶を言えば言うほど、きつと。それなら俺はもつと無茶なことをこいつに言おう。捲し立てよう。いつそこいつが嫌がるくらい。俺を罵ってあの海に突き落としたいと思うくらいまで。

5：オペラ座にて（後書き）

カロン君はすっかりシエロにメロメロですね。

お前も一目惚れのクチだろうさては。双子揃って好きなタイプは同じとか、そんなのか。

しかしシエロはお姉さん状態でもシャロンちゃんにぞっこん。仇討ちをしたらそのまま自殺しそうなオーラが出てますね。

6：下層歌姫（前書き）

猥談注意回。

6：下層歌姫

貴婦人

『私の方が、ずっと前から貴方をお慕いしていましたのに。再び巡り会った貴方は、私ではなく他の女と添い遂げた。これが裏切りではないのなら、裏切りとは何のために作られた言葉でしょうか。おお、神よ!』

*

私、ドリユアス・エウリドは……この雰囲気は苦手です。先程まで同じ舞台上で呼吸を合わせていた皆さんが、一気にバラバラになる。そうしてまたすぐに喧嘩を始める。

「何よこれ？楽屋に差入れ？花なんて邪魔なだけじゃない。それに百合い！？私この花大嫌い！どうせなら薔薇にきなさいよ真っ赤で綺麗で情熱的な！」

シレネさんはそんなことを言う。だけど私はその花に、ドキと鼓動が大きく鳴った。

百合の花の花言葉。それは様々な意味がある。

「あら？綺麗じゃない。私は結構……この花好きよ」

白い百合の花束を抱え上げるエコーさん。誰から誰宛なのか確かめようとする気配もない。それが自分への物だと決めつけている。確かにとても絵になるけれど……それが気に入らなかつた。見下されたのだと思っただろう。シレネさんが目を釣り上げる。

「ちょっとエーコ！それ私のかもしれないじゃない！何勝手に」

「エーコは止めて。私はエーコ。それにまさかとは思うけどネレイドさんやエウリードさんに百合の花を贈る方がいらして？」

「ぐうっ……」

私も彼女も返す言葉がなかった。この中で裏の仕事をしていないのはエーコさんだけ。

純潔を意味する花は、穢れを知らない彼女にこそ相応しい。だからこそ彼女は疑いもせずその花を手に取ったのだ。

「私の好きな花を知っているなんて、誰からの贈り物かしら………
……兄様だったら即燃やす」

「ああ、それでしたら先程シャロン様がお出でになって。此方に置いて行かれました」

「ええっ！シャロンから私に!？」

受付の何気ない一言に、条件反射で反応する歌姫。親友からの贈り物だと知ったエーコさんは舞台の上でも見せたことがないような笑顔を浮かべ……気が付いたように固まった。それは私もシレネさんも同じだった。

「ええ。シャロン様、開演後にいらっしやっつて。でも仕事が忙しいご様子で……最後までご覧になれなかったようです」

何も知らない受付の人。その笑顔での言葉が怖い。脅迫にすら思えてくる。

この凍り付いた空気。三者が共に察知する。他の二人も何かを知っている。不仲とはいえ今日まで同じ舞台を練習し、成し遂げた間柄。目と目で言いたいことが解つたりもするのだなあと、なんとなく感慨深いです。

そうして私達は三人で顔を見合わせ、楽屋から人を追い出した。

「シャロンって嘘……あり得ないわよ」

「何故そう言い切れるの？貴女何か知っているの？」

「何よあんたこそ！す、素直に喜んだら？あんたの大好きなシャロンからあんたの大好きな花が届いたのに、なんでそんな顔してんのよ」

「“あなたはわたしを騙せない”……確かそれが、百合の花言葉です」

私が呟いた、百合の花言葉。それに二人が振り返る。エコーさんは目を見開いて、シレナさんは青ざめて。だけどそれは一瞬だった。優秀な歌姫さんはやはり違う。私なんかとは全然。二人はすぐに平然と何時も通りを取り繕った。

「それはどういふことかしら？」

「やっぱりあんた宛じゃないの？騙してること、あるじゃない。

エコー、あんたシャロンが好きでしょ。だからこの役引き受けたんでしょ？」

「ええ、好きよ。大切な友達だもの。嫌う理由がないわ。だけどそうやって下世話な話に展開させるあなたの脳味噌はとても下衆だと思っわ」

「ぐぐぐ……っ、そういうところが偽ってるって言うてんの！どうせあんたが殺したんでしょあいつのことっ！誰にも渡したくないからって！」

「殺した？……何の話をしているの？いきなり物騒なことを言うのね」

「私見たわ！一昨日上層街で、シャロンが血だまりの中倒れてた！」

「本当に見たの？確かめたの？」

「そ、それは……怖くてすぐ逃げたし。昨日見に行ったら何もなくて……本当綺麗なままで……疲れてて夢だったのかなって思ったけど」

「夢？そんな憶測の妄想で物騒なことを言わないで。シャロンに何かあったら、それこそ私が犯人殺しに行くわ。親友ですもの」

「そ、そりゃあ……私、ちよつと疲れてて……色々あんだのせいで精神参ってたし、胃薬とか飲んでたし……」

「胃薬で幻覚を見るなんてネレイドさんは器用でいらっしやるのね」

「こ、この女あつ！人が黙ってれば調子に乗ってっ！」

「下町の方言は難しいわね。いつ貴女が黙ったのかしら？」

「あの、あの……お二人とも、落ち着いてください」

「三下は黙らっしやいっ！」

こういう時だけ嫌になるほど息びったり。もう嫌だよこの二人。シャロンさんがいてくれたら……何とかしてくれるのに。

(シャロンさん……)

駄目だ私。そうやってすぐ……あの人を頼ろうとして。はあと、自己嫌悪に陥り溜息を吐く私の肩……いきなりそれを掴む手があった。

「ひいっ！」

「ドリスちゃん！ボロ雑巾みたなあんたにしちゃ頑張ったじゃない良い子良い子」

耳元が酒臭い。振り返れば赤ら顔の女性。

人払いを頼んだのにやって来るとは……空気が読めない人。そもそも酔いで正常な判断が出来そうにない。仕事が終わってまだ間も

ないというのにこんなに酔うほど飲むなんて……。それもオペラ座の中で。飲んで暑いからってドレスはたくし上げ胸元も大きく開けている。警備員さんが連れて行きそうなものなのに、この人のことだ。返り討ちにしてきたのだろう。手には酒瓶と鞭を持っている。

(なんで真っ先に私に絡むのよお……)

ドリスは半分涙目だ。しかしこんな人でも歌姫だ。私と同じ下層街の歌姫だからこうして縁がありよくよく絡まれる。それに、それだけの縁でもない。仕方ないのでしっかりと頭を下げ、挨拶をする。

「マイナーさん、お疲れ様です」

彼女の名はマイナス「ナイアード。奇跡の歌姫シャロン」ナイアードの義理の姉。シャロンさんが養子に入った家の娘さん。その縁で、シャロンさんの関わる舞台に殴り込み、無理矢理仕事を奪っていく嵐のような歌姫だ。春風のような笑顔のシャロンさんとは大違い。

「お疲れえ　メインがこんな小娘共にしては良い劇だったじゃない！まあ私の魅力があったから？舞台が映えたっていうか？やっぱり脇を固める実力者がいないと。底力っていうので歌姫の格つてのが解るってもんだわ」

「黙れ腐れ酔っぱらい！あんたまた本番でも音外したでしょ！この音痴！あんた才能無いわよ！さっさと引退しなさい婆！」

「黙れ小娘！20代舐めんじゃねーぞ！てめえみてえなツルペタにや、セクシー衣装やポンテージは着こなせねえだろ！悔しかったらその野郎みてえなおっぱいでかくしてみろや！そんな胸で一物挟んでやれるのか？ええ？」

「ぐぎぎ……んなもん垂れるだけよ！無駄肉脂肪女！あんたみた

いなSM女がオペラですって？シャロンの七光りがなきやSM以外の仕事来ない変態御用達歌姫が叫くんじゃないわよ！」

「シレネおぢょーちゃんのパンも変態さんよねえ？てめえみてえな乳首しかねえ野郎の胸みたいな幼児体型に突っ込んでよがってるような気色悪い野郎共だもんなあ？あー気持ち悪い！出世して夜の仕事も繁盛してるんだろ？中層街の歌姫さん？非処女が初心ぶつてんじゃねーよ！腐れビッチ！」

「うっさい！私だって好きであんな仕事してんじゃないわよ！」
「貴女たち、格式高いオペラ座の品位を貶めるような醜い争いは止めて欲しいわ。見苦しい」

いや、エコーさん。貴女もさっきまでその一員でしたよね。黙らっしゃいとかうくらいい、弾けてましたよね？

でもこの場で唯一の処女歌姫の発言は重い。重力よりも重い。重たく私達の心にのし掛かる。

「けっ、ナマ言ってるじゃねーぞ生娘歌姫さんがよお！将来お前みたいなつままない女娶る旦那が可哀相だな。男悦ばすテクもなければ、悦がる演技力もねえ！あーあーあー、こんな女の何処がいいんだかね。うちのシャロンにお前のあること無いこと吹き込んでやるうかい？」

この場における禁句が出た。だけどエコーさんは凄い。

「私の親友は誰に何を言われても、そんなことで誰かの評価を変えたりしないわ。自分の目を耳をあの子は信じてる」

極々自然に答えを返し、眼飛ばし……ついにはマイナーさんを楽屋から追い出した。その目力のやばさに酔いが醒めたのだろう。

「……余計な邪魔が入ったけど、エウリードさん。貴女は何か心当たりはある？」

「い、いえ！何も！私みたいな下層歌姫、中層街に来るのも初めてですし、もう恐れ多くて恐れ多くて」

上層街なんて私は知らない、わからない。そう伝えればそれもそうねとエコーさんは納得してくれる。

「それじゃあネレイドさん？今日はゆっくり休んだ方が良いわ。何の用があつて上層街まで行つたかは聞かないで置いてあげるけど、幻覚を見るなんてよっぽどよ？お医者様にでも行かれたら？」

そんな嫌味を囁いて、エコーさんは楽屋を出て行く。当然花束は彼女が持つて行つた。

「な、なななな何よ！あの女あつ！！」

地団駄を踏んでいたシレネさん。八つ当たりのように私を睨み付け……

「邪魔っ！そんなとこ立ってないでよどんくさいわね！」

肩にぶつかつて帰つて行つた。

「……………はあ」

私も帰る。荷物をまとめてオペラ座を出る。

結局何も変わらない。歌姫シャロンが居なくなつても何も変わらないんだ。あれほど大きな存在が消えても、今日も世界は回っている。

「可哀相なシャロンさん」

大好きな人と合法的にキスをすることが出来ずにふて腐れていたエコーさん。それは数日前まで続いていた。

そして今日。用意された特等席。結局誰も座らなかった。本番中何度もそこに視線が向かうエコーさん。それはそれで満足そうだったけれど。

「可哀相なエコーさん」

公演が終わって幕が下りて。観客達の話題はエコーさんの男装に盛り上がる女性達。それからヒロイン役の歌姫シレネはやはりシャロンに劣ると笑われる。だからこそエコーさんがもつと目立って、その引き立て役には丁度良かった。そんなことを言われる始末。

「可哀相なシレネさん」

そして……

(なんて可哀相な歌姫ドリス)

仕事が終わった。それでも下層歌姫ドリスの夜は終わらない。むしろこれから。これから行く仕事。考えるだけでも溜息が出る。

エコーがあればほど態度を大きく居られるのは、自分が綺麗だと知っているから。その身も心も。

最高の歌姫シャロンだつて結局は同じ。もう男に汚された女だ。彼女はドリスやシレネ同様、男を知っている。唯違うのは相手にした数。シャロンは恋人である身分の高い男一人……歌姫の世界の下

層を生きる底辺歌姫ドリスは、毎晩違う男の相手をしなければ生きては行けない。

(あの町を救いたい……)

下町のため。同じ願いを夢を持ってドリスもシャロンも歌姫になった。歌姫になった時期はドリスの方が早かった。それでもドリスは今日も底辺歌姫。シャロンは……シャロンは……。

何がいけなかったのか。何が違うのか。夢や理想だけではあの才能に敵わないのか。

エコーが歯牙にも掛けない歌姫シレネ。彼女をシャロンはちゃんとライバルとして見てあげていた。それでもドリスのことは、ライバルとすら見てくれない。

彼女は私を同士と友と言っけけれど、最高の歌姫と私は釣り合わない。その度どんな惨めな思いになるか、彼女には解らない。そんな風に哀れまれるくらいなら見下して欲しい。それが出来ないなら競い合うライバルだと認めて欲しい。そんな価値もないほど、私に歌の才能はないのだろうか。心で歌うことは、間違いなのだと云うのだろうか。

(私とシレネさん……何が違うの?)

ドリスは考える。下層歌姫と中層歌姫。没落貴族と成金商家。それとも相手にした人数? 女はその度女としての価値が下がっていくのだろうか。

(ふふ……不思議な話)

男の人は多くの女の人を相手にしただけ讃えられるのに。そう思うと涙が出て来た。

エコーが男を嫌う気持ちだが、今はとてもよく分かって。だけど男を知らないまま男を嫌う彼女と、男を知って男を嫌う自分とは……感じ方も見え方も、何もかもが違うのだ。

彼女の歌は男を知らないから深みがないとか言う人もいるけれど、それなら私の歌はきつと誰より深みがあるはず。それが評価されないと言うことは、結局そんなこと……どうでもいいんだ。関係ないんだ、歌に身体を重ねる事なんて。

次の仕事場。向かう足が重くなる。私はどうして彼女みたいに、私を思ってくれる人を好きになれなかったんだろう。

こんな私のことでも、二番目に好きだと言ってくれる人はいる。立派な人だ。二番目でも身に余る光栄。そんな人が相手なのに。

私は今もまだ、あの日のことが忘れられない。

「……リラ」

「……………」

気配を感じて顔を上げれば、恭しく礼をする女性の姿。嗚呼、彼女が男の人だったらな。そんな風にも思う。優しくて格好良くて頼もしくて大好き……私を守ってくれるこの騎士が男の人だったなら、私はきつとこの人に恋をしたことだろう。

「ありがとう、迎えに来てくれたのね」

そう微笑めば、うつすら彼女も笑い小さく頷く。リラは喋れないけれど、目と目で何でも通じ合える。

本当は今日の公演、見たかったんだろうな。そんな目をしている私の晴れ舞台。

場所があのおペラ座でさえ無ければ私も奮発するか頭を下げてでもチケットを一枚譲って貰っていたのに。

「ごめんね、リラ」
「……………」

リラが無言で首を振る。その気持ちだけで十分ですと私に言っている。

彼女は私の従者。私のような下層歌姫に従者なんて過ぎたこと。そう言っただけでも彼女は私から離れない。それはこのメリア「オレアードを拾った日からずっと変わらない。

それでも変わるものはある。私を見る優しい目。それが仕事の前はこうしていつもきつくなる。今だっただけ階段を上り始めたらほら……つり上がって細くなる。

私の境遇に怒ってくれる、そのリラの優しさがあるからこそ……私はこの仕事が続けられている。下層歌姫の私が上層街への階段を上るのは、いつも夜。

下層街で客との仕事の時は、この階段は登らない。今日は上での仕事私を待っているから、この階段を上るのだ。

「世の中って物好きっている物ね」

私なんかの何処が良いのかしら。自虐的にドリスが呟くとリラが否定の意を目で伝える。そしてこの足場の悪い階段で、バランス良く足下に跪き……手の甲へと口付けるのだ。

彼女のその口付けは、私こそが最高の歌姫なのだと伝えたがる彼女からの親愛の情だった。

「シャロンがいた頃から、そう思ってた？」

リラは今度はドリスの靴に額を擦りつけて、その爪先にキスをする。

言葉を発することが出来ない彼女なりの、誠意なのだろう。心の

底からそうでありますと、私に彼女が教えてくれる。

「……本当に物好きね」

こんな薄汚い小娘に、こうして付き添ってくれるなんて、おかしな人。ドリスが笑う。すると即座にリラが立ち上がり……ドリスの身体を抱える。

「リラ？」

一度頷きそのまま書けだし物陰に身を潜める。耳を澄ませば人の話し声。

この階段は古くなっていて今は殆ど誰も使わない。元々の所有者がそのまま放置した階段。それを誰かが歩いている。

それは少年と少女。

月に輝く綺麗な髪の少女は少年よりも背が高い。それでも少年は彼女をエスコートするよう、手を繋ぎ自分が先を歩く。

「お前の所為だ！馬鹿っ！」

「あはは！だっておかしかったから、つい。道も解らないのに歩き出すんだもの」

二人は仲良さそうに笑い合っている。

「……あの声」

少年の声。それには聞き覚えがある。まだ声変わりしていないのだろう。だから解った。

「……………あの子、あの時の……………!!」

シャロンに聞いた。シャロンを見て、気が付いた。シャロンがよく嬉しそうに話していた……………シャロンの兄さん。名前は確か……………忘れるはずがない。本人には聞けなかったけれど……………シャロンが口にする旅に、心に刻みつけていた。

「カロン……………君？」

「……………ただど下町にいるはずの彼が、どうして空へ？何をしに？そして隣にいるあの女は誰？」

「リラ！二人をつけて。どんなことでも良いから情報を！」
「……………」

一人ドリスを夜道に残すことを心配そうにするリラ。

「行って！」

それでもこう、強く命令すれば彼女は逆らえない。

「カロン君……………」

貴方は何をしに来たの？

ぞつと背筋に震えが走ると同時に……………これから向かう仕事先。そこでの事がドリスには憂鬱に思えて仕方がなかった。

6：下層歌姫（後書き）

歌姫さん達の舞台裏。はしたないね。仕方ないね。
ろくな女いない小説。

7：暗い月夜の暗い地下室

海神

『あの様な男、死さえ生温い！魂を抜き取り壺へと封じ深海に埋めてやるつぞ！』

*

「使えん奴らめ」

部下からの報告を受け、男は苦い顔つきになる。

「しかしアクアリウス様！」

「俺は奴を捕らえた以外の報告は受けたくないと言っただろうが」

あの男は腐つても選定侯。一度逃せば、その立場を使いのらりく
らりと逃げられる。奴が錠を破ったらそこでしっかりその細い首根
っこを捕まえてやらねばやらのだ。

これまでもそうやって何度も逃げられてきた。だからこここま
での苛立ちが生じる。この報告は何度目だろう。それでも部下の失
態を男は強く詰らずにはいられない。

「二度も言わせるつもりか？ならば言っただろう！貴様らは全く
使えん奴らだ！」

「そうは言いますがアクアリウスの旦那、微妙に一回目と違いま
すぜ」

「馬鹿っ！また余計なこと言いやがって！俺まで給料引かれたら
どうするんだ阿呆っ！」

使えない騎士二人の諍いに、三回目を言つてやろうかと思つたが、其程下らないこともしたくない。アクアリウスは三度目の代わりに深い深い溜息を吐く。

「もう良い、下がれ。今日はもう帰れ。この失態はまた後日の働きで取り戻せ」

「あつはつはっ！そいつは旦那無理つてもんだ。相手はあのフルトブランドですぜ？あの兄ちゃん波のようなお人でさあ、尻尾握るなんて次回があつてもそりやむりだ。波に尻尾はありやしません」

「だからお前は黙つとけ！……ははっ！アクアリウス様！我らが王！有り難き幸せ」

人払いの命を正しく理解したのは一人。もう片方は解つた上で茶化している可能性もあるので二人とも理解はしているのかも知れない。

「まったく……俺を何処まで侮辱すれば気が済むのだ、シエロ」

あの部下共に自分が心から敬われないのも、歌姫シャロンが思い通りにならないのも、全ては全てはあの男！シエロ＝フルトブランドの所為。

小綺麗で男らしさに欠けるあの男に王の座など相応しくない。王とはもつと威厳のあるこの俺のような者の事を言うのだ。

苦虫を噛み潰したよう苦い表情になるアクアリウスだが、寝所に現れる女の影に口を綻ばせる。

「入れ」

「失礼致します。アクアリウス様」

「よく来てくれた、ドリュアス」

その女は可愛気がないわけではないが、美しい歌姫達の中では霞んでしまう程度の美貌。決して醜くはないのだが、これと言って特徴もない。中の下とまでは言わないが、中の中。……そう、逆に何処かが醜ければそれはそれで人目を引くのだ。彼女にはそれが無い。何処までもそこそこ可愛い程度の女。だからその身体を弄んだとしても、大抵の男は翌日には忘れてしまっただろう。彼女より美しい者、或いは醜い者を見れば記憶が勝手に上書きされてしまっただけだから。しかし、そういう奴らは馬鹿だとアクアリウスは思う。真に素晴らしいきは彼女の歌。歌うときの彼女の笑みは極上の笑み。笑顔が女にとっての何よりの化粧などと臭い言葉は言いたくないが、この歌姫ドリス程その言葉に相応しい者は居ないだろう。

唯哀れなことに、この歌姫……歌う仕事がさほど来ない。来たとしても脇役では彼女の魅力を存分に発揮させることが出来ない。主役として舞台上に輝いてこそ、この平凡可愛い歌姫は、微笑みの化粧で最高の歌姫になれるのだ。

「今日は公演があったそうだな」

「はい」

「俺も行きたかったのだが。俺のような有名人が中層街など赴いては世に顔向けが出来ん」

「いえ、そのお気持ちだけで結構です」

俯く歌姫ドリスの肩を抱き、アクアリウスはその耳元で低く囁く。

「だが案ずるな。直にお前は上層街の歌姫になる。俺が王にさえなれば、シャロンは引退だ。世継ぎを生ませなければならんからな……その時はお前が人魚だ、国王の妾ともなれば誰もそれに文句は言わん」

そう囁けば彼女にも思うところがあるのか、ドリスは黙り込む。

「さて、ドリス。戯れの前に一曲歌ってみてくれないか？」

硬い表情の女を抱いてもつまらない。それにアクアリウスはドリスの歌を聞くのが好きで彼女を寝所に招いているところもある。

互いに忙しい毎日だ。毎晩とはいかないが、それでも日々の苛立ちを癒してくれる、この歌姫の優しい歌がアクアリウスは好んでいた。

高慢ちきな歌姫達とは違う、気取らない素朴な美しさが彼女の中には住んでいる。言うなれば他人を従える歌ではなく、隷属を歌う歌。それはつまりこの俺を讃える歌だと、アクアリウスは聞き入った。

ドリスが歌うのは、今日演じたという役ではない。劇の練習中何度も耳にしたであろう、ウンディーネの歌だ。この娘は、ウンディーネになりたかったのだろう。

「安心しろ、ドリス。俺がお前を人魚にしてやる」

歌い終えた歌姫をそっと抱き寄せれば、一瞬強張った身体もその手を此方の背へと回すのだ。

*

海神の娘

『言うなれば、悪いのは私でしょう。彼には私と出会うより前に、恋人と呼べる人がいたのですから。』

*

「ねえ、カロン君……」

長い階段。帰り道。突然シエロが身を寄せて、小さく囁いて来た。突然背中に両肩に質量のある肉感。カロンは動揺しかけたが、続くシエロの言葉に我に返った。

(誰かに後をつけられてる)

(何だつて！それって俺をシャロンだと思っているファン？)

(或いは……シャロンが生きてると知ってつけて来た、犯人への手がかりか)

(は、犯人の!?)

(しっ。気付かれないように)

つけられてるなんて言われたら、後ろが気になって仕方がない。

シャロンのファンならまだいい。その場合は俺をお忍びで変装している女と考えるはず。

(だけど……)

不味いのは後者。もし犯人に繋がる者が追って来ているのなら、カロンがここで女の振りをすれば逆に怪しい。死んだシャロンを演じている何者かだと知らしめることになる。どちらにせよこれからそうしていくつもりなのだからそれでも良いとは思うが、もしそれがファンなら……この人気の無さ。

シエロは言った。ファンにとつて歌姫の恋人は天敵。シエロはシャロンのファンに快く思われていない。殺されても文句は言えないと、シエロは言っていた。

それならここでカロンがシャロンと思われるようなことはしてはならない。他人の空似だと、俺は俺のまま男らしくしていれば問題はない。

ていうか、ここでの問題は俺じゃなくてシエロだ。

暗がりとはいえウィッグを外したシエロの髪は不思議な色合い。しかも今は女だ。今、カロン以上に正体不明の人物。追っ手にはシエロがどう見えているのだろう。女装男だと思われたらそれはそれでシエロの名誉に傷が付く。もし追っ手が殿下の騎士とかなら、殿下に付け入られる隙が出来る。シャロンのファンが追っ手なら、シエロに危害を加える可能性もある。そう思うといてもたつてもいられなくなる。本当に危ないのは俺ではなくて……シエロの方だ。

(んなこと言われても)

(……………わかった)

「うわっ!」

(動揺してるのは僕の所為にして)

不安から狼狽える俺を振り向かせ、シエロがその胸に俺を抱き寄せる。

「カロン君……………ごっち」

「は、……………はい」

豊かな胸に顔から埋めさせて貰った俺は口答えも出来ずそのままシエロに従う。不安も一気にその感触に吹き飛ばされた。

階段の中腹。ベンチが置かれた広場がある。そこへシエロはそつと上着を脱いで、ベンチの上へと敷く。そしてそこに寝かせられてようやく俺も「え?」と思った。

「し、シエロウアっ!?!」

動揺のあまり、なんか巻き舌になった。シエロじゃなくて発音的にシエラになってしまった。しかしそれは好都合と、シエロが笑う。

「うん、シエラね……酔っちゃったのかな。身体が……熱いの」

うつすら頬を染めて視線を外し……自身の胸元をくつろげるシエ口。誰かに追われているなんてこんな状況でなければ、きっと俺の鼻からは豪快に鼻血が吹き出ていただろう。だってそんなはしたないありがとうございますな格好で俺の上に馬乗りだ。

それが敵を煙に巻く演技だとは解る。それでもそんな女みたいな口調で話されたら、完全に何処からどう見ても女だ。

(そうか、……これがシャロンだと思わせないための策)

もし追って来ているのがシャロンのファンなら、こんなところでこんなこと……きっとシャロンが幻滅される。だから別人だと思わせればシャロンの名誉は崩れない。幸い今はシエ口が女だ。それを見せつければ誰も俺がシャロンだとは思わない。でも、誰かに見られてる。恥ずかしいはずだ。

(……こいつ、シャロンのために……そこまで)

元は男とはいえ今は紛れもなく女の子だ。追っ手のみならず俺に見せるのだから恥ずかしいだろうに。事実さつきよりも赤面している。そんな顔を見れば俺だって否応なしに赤面する。

それを端から見れば、確かに……シャロンとその恋人じゃない。別の男女の恋人だ。自身の羞恥心をもシエ口は計算に入れたのだ。昼間触った時は布越しだったそれが、今は直に触れている。惜しむべくは俺の服。それが結局その生の感触を隔てる。

それでも手を伸ばせば触れられる位置にその胸があるかと思うと……ごくぐりと咽が鳴る。

「昼間の続き……ね？君になら……何されても、いいから」

彼女はそう微笑んで、俺の手を取り乳房に触らせる。掌に吸い付くような柔らかさ。金の鷺鳥に触れたみたいに俺はそれから手を離せない。その言葉が嘘だと分かっても、頭の何処かで実はひよっとして本当なんじゃないかなんて考え出した自分がいる。そんな此方の浅はかさも知らず、シエロは俺の耳元に顔を寄せる。首筋から香る香水とか耳に触れる甘い息とか、もうどうにかなくなってしまっそうだ。頭がくらくらする。だけどそれは俺だけで、シエロの方には考えがあるらしい。小声で、でもしっかりとした口調で囁いてくる。

(……人違いだって解れば普通は、馬に蹴られる前に退散してくれ
ると思っただけだな)

(……まだ、いるのか?)

(うん、気配を感じる)

そんな格好で感じるとか言わないでくれ。変な意味で捉えてしま
いそうになる。

まだ此方を伺っているという追跡者を探るような口調のシエロ。
顔の赤みは引いていないが、その目は冷静そのもの。羞恥よりも復
讐心が勝っているのだ。

追っ手を追いかけて捕まえて吐かせればいい。俺はそう思う。け
れど失敗したときのリスクが大きすぎる。今のシエロは女だし、見
た感じ帯刀もしていない。何か武器は隠し持っているのだろうが、
それで何とかなるとは思えない。それに俺も子供だ。この月明かり
だけの道で敵を見失わずに生け捕ることは難しい。そう考えてシエ
ロは今それを抑えてこの場を撒こうとしているのだ。

今の状況を把握すれば……今日の前の人に演技とはいえ迫られて
どぎまぎしている自分が急に恥ずかしくなる。何やってるんだらう、
俺。シャロンの仇を取る。それは俺も異論がない。それでもその死

をまだ信じられない気持ちが強くて、真実を知りたいっていう思いの方が強いのが現状なんだと知ってしまった。

それでもシエロは違う。シエロは詳しく話してくれていないがシヤロンの死を俺よりも明確に知っている。だからこうしてこんなに怒っている。復讐のためなら何をしても良い、されてもいいと思うから、こんなに無防備なんだろう。別に俺が信頼されているとか、そういうわけじゃなくて。

（呪いのことは広く知られることじゃない。これが出るのはかの血を引く男って言ったけど今は血が薄まって来ている……呪いが発現しない人も多い。あつたとしても海で災いを呼ぶ方だけだね。知るのは基本は王だけで、実際呪いが発現した者と家族にだけ知らされる。呪いは王家の恥みたいなものだから……普通の人間は知らないし、これは他言無用でもある）

（つまりこんな僕を見て、それでも僕の正体に気付いたのなら……犯人に近い場所にいる人間は限られる）

（シエロ……）

シエロに掛かっている呪いのことを知っている人間は、同じ境遇の人間かその家族だとシエロは言う。けれどそんなことを言うシエロは考えすぎではないかとカロンは思う。だって目の前の人は元が野郎だと解つていても、呪いで女になつてるだけとはいえ……あんまりにも綺麗だから。

（あのさ……俺じゃなくてお前を追って来たって可能性は？）

（僕を？確かに僕が女装なんかしてるって弱みを握れば殿下当たりは喜ぶかもしれないけど彼は人魚の血が薄いからこの呪いはない。

この姿を見て僕と知ることには無いはず。この暗さなら髪の色まで解らない）

海に嫌われる呪いは全員が持つが、海水に触れて性別が変わってしまう呪いはある程度王子の血が色濃く出ていなければ駄目なのだとシエロは言う。その呪いが男に現れやすいと言うだけで、人魚と王子の子孫の男全てに降りかかるわけではないのだと言う。だけど今はそんなことを聞きたいのではない。

(そうじゃなくて……)

この人は鏡という物を知らないのだろうか。関心全てがシャロンに向いていて、自分が他人の目にどう映るかなんて考えたこともないのだろうか？何でこんな事いちいち教えてやらなきゃならないんだ。そうカロンは呆れながらも、追っ手を撒くため此方も芝居だ、いちいち教えてやることにした。

「お前、綺麗だし……人目を惹くよな、きつと」

「か、カロン君!？」

「この乳で何人の男誑かしてきたんだよ」

「ちよ、ちよつと誤解だよ!」

手を動かせば、シエロはくすぐったそうな声を上げるが、何も俺の勘違いではない。

そうだ。追っ手は何も俺やシャロンのためじゃないかもしれない。偶然すれ違ったこの人に目を奪われてついてきたストーカー野郎かもしれない。そんな奴にこの人の柔肌見せてやるなんて腹立たしいとさえ思う。

しかしシエロは俺の言葉を芝居の一環だと受け取ってくれたにも関わらず、恥じらいの表情だ。僕、と言いかけた口の形を私に戻し

……

「わ、私は……シエラは……貴方が相手じゃなければ、こんな事……」

嘘だつて解ってる。これは追っ手を撒くための演技だ。解つても鼓動が鳴るのを止められない。これはシャロンの物だ。解ってる。それでもまだ帰らない追っ手から見ても、俺達はちゃんと恋人らしく見えていないんじゃないのか？そういう言い訳に突き動かされるように俺はある欲求に苛まれる。

あれは事故だった。だけど今のこの人は女の子で、そこに触れたらどんな感じなのだろう。同じなんだろうか。違うんだろうか。そういう興味も言い訳だ。抱き寄せて唇を重ねてからそれが言い訳だったんだと思い知る。刹那、芽生えたのは深い後悔と罪悪感。触れた唇の感触はあの事故と同じだ。男の時のシエロと変わらず柔らかい。

呪いだとかそんなこと、頭の何処かでちゃんと理解していなかった。唯、自分好みの綺麗なお姉さんと仲良くできて満足していた俺は馬鹿だ。こいつはシエロだ。本当に、シエロなんだ。髪の毛一本までシャロンの物なんだ。俺の物じゃない。

多分、これさえシエロにとっては事故なんだ。別段その行動に対して照れてはない。それさえ彼女は、彼は微笑んでいる。

「ありがとう、カロン君。今ので撒けた。人違いだつて理解してくれたんだろうね」

「それじゃあ……」

「唯の出歯亀が変態かもしれないな……この街つて娯楽に飢えてる人も多いし、この階段を使う僕らを見て何か妖しい展開があると思つてつけて来たのかも。いるんだよね、人を見るのが好きな人つて」

シエロは素直に一波越えたことを喜んでいる。それから我に返つ

たよりに焦り出す。申し訳なさそうだ。

「僕なんかとあんなことさせてごめんね、気持ち悪かっただろ？」

追っ手の気配が離れた途端、シエロの身体も俺から離れる。そそくさとはだけた服を元通りに直していく。

「別に……俺は」

「カロン君もなかなか役者だね。これならこれからもきつと上手くやっけていける。君の協力は本当に有り難い、ありがとうカロン君」

謝らなければならぬのは俺の方だ。なのに俺から謝る機会を奪って、この後味の悪さをずっと抱え込めと言っのかこの人は。

気持ち悪くなかった。そう思ってしまった自分が気持ち悪かった。目の前の綺麗な人は、口付け一つなんかで奪えない。身も心も死んでしまったシャロンの物だ。だからこそ、事故や演技であんなことをしてもされても彼が悔いることはない。全てはシャロンの仇討ちのため。そのための身の破滅は厭わない姿勢が、カロンの胸を刺す。

（馬鹿だ俺……）

もしも最初から女のシエロに出会っていたら俺も一目惚れをしていたに違いない、だって？馬鹿は俺だ。最初に見たのは男の姿のシエロだったというのに、十分心が持つて行かれてしまっている。それこそ一目惚れと呼んでも良いくらい。じゃなきゃおかしい。そうだ。でなければこんなに苦しい思いをするはずがない。

この人が死んでしまったら、生きていけないなんて……そんな馬鹿なこと。思い詰めたこと。一瞬でも考えてしまったのは、俺がこの人を好きになってしまっていたからだっただ。

例え呪いでこの人が女になっても、この人はシャロンの物だ。俺に振り向くことはない。多分口吻以上のことをしたってそうなんだろう。絶望的なまでにカロンは、それを確信していた。

*

「でも、まあ……一時はどうなることかと思ったよ」

「それはこっちの台詞だ！」

やっと辿り着いた上層街の屋敷で、シエロが疲れたように息を吐く。反論はしてみたが、悪いのは自分なのだという自覚はカロンにもある。道も解らないのにシエロの手を引いた結果、あの階段へと迷い込んだ。嗚呼それならその道を使おう近道だとシエロが言った。その結果あんな事態になったのだ。

「あの階段は今滅多に使われない場所なんだけど……世の中には物好きな人がいるものだね」

確かにあの階段は街灯もない。月明かりがなければ通れる物ではなかった。

「……つまり追っ手は単にあの階段を使ってみようと思った物好きで、ついでに出歯亀だったってだけなのか？」

「危害を加えに来なかった所を見るに、僕はそう思っけどカロン君は違うの？」

「……シャロンのファンって女もいるのか？」

「そりゃあシャロンほどの歌姫になれば老若男女関係無しにファンはいるよ。歌姫に憧れる女の子は沢山いるだろ？」

「ああ、そうか。そうだよな」

「カロン君？」

「なら俺はあの追っ手は女だと思っ」

確信を込めてのカロンの言葉にシエロが目を瞬かせる。

「どうしてそう思うの？」

「シエロ、鏡見る。ついでにそのまま服でもはだける」

「いや、こんな明るいところでそれは嫌だよ」

「いいかシエロ、お前も男なら解れ。というか解るはずだ。追っ手が普通の男ならお前みたいな触りたくなるような胸をした綺麗なお姉さんがあんな格好したら横からかつ攫いに行くもんだ。相手が俺みたいなガキなら大した反撃出来ないままそれを見送ることになる。お前の言う見る方が好きな変態だって、こっち見てズボンとベルト落としてたとするとそんなにさっさと逃げられるとも思えない。気配が立ち去るのが早すぎた。前屈みだと考えるとそれはあり得ない」

「カロン君……僕より年下なのになんだか例えが気持ち悪いくらい具体的だね」

「き、気持ち悪い……」

常識を説いたつもりだったのに、お貴族様には下町の常識が通じなかった。自分が気味悪がられたようで少し凹んだ。

「でもそっか、女の子か。それじゃシャロンのサインが欲しかっただけかもしれないな」

悪いことをしたなんてストーカーかもしれない奴を気遣う余裕があるとは、本格的に駄目だこの男。いや今は女だけど。平時、のほほんとし過ぎている。復讐云々言う時は本当に鋭い目付きをする癖に。こいつがこっぴどく抜けてる奴だから俺は放っておけないんだ。

「そうだ、カロン君。しばらくのスケジュールなんだけど、シャロンの仕事をまだ君は出来ないし証明書がないとこれまで通りの活動も出来ない。事件のことも平然とはしていられないから、事件自体はあったことにしてもいい？」

「それでボロを出してきた奴から疑っていくってことか」

「うん。それで暫くの仕事はキャンセル。鈍器で頭を殴られたシヨックで記憶喪失とかその大事を取ってしばらく休業と届けて置くけど、それでいいかな？」

「ん、ああ」

手帳を取り出しシエロはサラサラと予定を書き込むシエロ。覗き込むと……

「凄え……ぎっしりだ」

「シャロンは忙しかったからねえ……人気歌姫だから仕方ないけど」

「お前ら会う暇あったのか？」

「うん、毎日会ってたよ」

「こ、このスケジュールで毎日だと!？」

「いやほらだって同棲してたし」

「あ、そっか。それなら会うよな毎日」

「うん、でしょ？」

「……」

「……」

「……シエロ？」

「……何かなカロン君？」

「兄である俺の断りもなく何勝手に俺のシャロンと同棲してんだこの野郎おおおおお!!何さらつと暴露してんだためえええええええええ!!」

「カロン君も男なら解るだろ？」

「解るかボケっ!」

思わず胸ぐら掴んで、また手が幸せになってしまった。さっきも少し本格的に触っておけば良かった。話と考え事で手の方が留守になっていた感が否めない。いや、ちゃんと喋りながら考えながら動かしてはいたが。感触をしつかり覚えることをしていなかった俺は馬鹿だ。

「だって愛する人が傷つくところを普通誰だって見たくないし守りたいと思うものだろ?」

「……は?」

何やら同棲云々の話の方向性がおかしくないかシエロ?恋人が同棲なんて俺にはいやらしい発想しか出て来ないのに。

「おい、何の話だ?」

「カロン君、一人言い忘れていた人がいる」

シエロはパンフレットを取り出して、脇役中の脇役の一人の名前を指差した。そこに記されている名前は“マイナス〃ナイアード”。

「ナイアード……?シヤロンが養子に入った家だ」

「うん、彼女はシヤロンの義姉さんだ」

メインの歌姫三人よりは大分小さな写真。映る女は美人だが気の強そうな、釣り目の女。カロンの趣味ではなかった。もしすれ違ったら挨拶程度に口説くかもしれないが、関わり合いにはなりたくないタイプの美女だ。

「元々シヤロンが僕の所に送られてきたのは仕事として。だから

仕事と言う建前で僕に会いに来て朝になれば帰る。当時のタイムスケジュールは向こうの家に握られていたから。恋人になってもシヤロンは忙しい。マネージャー紛いの仕事の手伝いを僕もしてるけれどフアンの手前あまり表立って付き添いは出来ない。あの頃のシヤロンが帰る家は僕の所じやなくてナイアードの家だった。……あ、何か飲む？珈琲に砂糖は？解った、入れるね」

唯話を聞くのも退屈だろうと此方を気遣うシエロ。貴族の癖に慣れた手つきでもてなしの準備を始める。使用人はここの屋敷にも居ないのだろうか？

「……だけどマイナスさんはシヤロンに冷たく当たった。歌姫というのは目立つところに傷を付けられない仕事だろう？それを理解した上で彼女はシヤロンによく暴力を振るつたんだ」

「……ゆ、許せねえ！」
「うん、僕も許せなかった。……よかったらどうぞ。一昨日焼いたクッキーだけ」

珈琲と一緒に出される焼き菓子。

焼き菓子なのは、いつ帰ってくるか解らないシヤロンのために……長保ちするものを考えたのか。それにあまり甘くない。チョコレートの甘さが控えめだ。歌姫であるシヤロンのためにカロリーまで考えられているようだ。それでも珈琲はほんのり甘い。良いバランス。

こんなもてなしにまで、カロンはシヤロンの影を感じる。一口目には、ここは本当は誰も踏み入れてはいけない領域で、シヤロンの物で……それを自分が侵してしまっているような後味の悪さ。二口目にはそれを吹き飛ばすような美味。三口目には……一昨日というキーワードが浮かび上がる。

一昨日、これはシヤロンのために作られた。つまりその日シヤロ

ンは帰ってこなかった。シエロが下町に降りてきたのが昨日。シャロンが死んですぐにと言った。それではシャロンが死んだのは……一昨日なのだ。この冷えた焼き菓子に濃厚に物語っている。シャロンの死が信じられない。それでもこんな手作りのお菓子一つ一つまで、シエロにはシャロンの死を囁いているのだなと思うと、一つ残らず平らげてやるしかないと思った。バリバリと後始末をしていくカロンの考えなど知らずに「気に入ってくれたならまた作るよ」なんてシエロはくすくす笑っている。人の気も知らないで。

「それで？何なんだよそのマイナスって女は」

「彼女はどうかやら僕に気があるらしい」

あまりにもしれつとシエロが言う物だから納得しかけて我に返って、飲みかけた珈琲吹き出すと同時に咳き込み鼻に入った。

「大丈夫？カロン君」

「お、お前なあ……」

俺に布巾を渡し、テキパキとテーブルの掃除を始めるシエロ。これまたやけに慣れた手つきだ。お前は本当に貴族かと、小一時間問い詰めた。詰りたい。

「それが原因で彼女がシャロンに辛く当たっているなら、彼女と同じ家にシャロンを置くのは好ましくない」

「シエロ……」

「だから僕が王になった時にナイアード家への最大限の支援の約束をし、恋人証明書を見せて当然の権利として彼女の身柄を譲り受けた。その証明書がなくなった今、マイナスがどう動いてくるかわからない」

だから今はまずその再発行が第一だとシエロが言ったのはそのためか。

「本当にありがとう、カロン君。君が再発行を手伝ってくれなければ僕は彼女から君をどう守ればいいのか悩んでいたんだ。お金と権力を使って家自体は大人しくさせられても、ああいう女性は止められないものだから」

「そんなに激しい女なのかこいつ……」

カロンは写真の女を不気味に感じた。なんだか本能的に怖い女だと思った。

「彼女はね……うん、……僕ももうあんまり関わりたくないよ。シャロンを助けに行く時も大変だったなあ……」

遠い目をしてシエロが小さく息を吐く。それ以上その件について話してくれない所を見ると、話したくないことなのだろう。

「でも君は大事なシャロンのお兄さんだ。危険なことがないよう僕が君を守るから安心して」

「“大事なシャロン”のお兄さん……ね」

シエロの決意の言葉。その何気ない一文が何故か勘に障る。シエロにとって自分はそういう認識なんだろう。昨日であったばかりの人間相手にそれ以上の認識なんて持てるはずがない。普通はそうだ。それでも此方はそうではないから、何だか不公平な気がした。

「カロン君？」

「なんでもねえよ。それよりさっさと風呂でも入って来いよ。い

つまで女のまままで居る気なんだ？」

「あ、そうだね。それじゃあお風呂沸かしてくるね」

「お前、そんなことまで自分でやるのか？貴族なのに？」

「え、ええと」

「屋敷の灯りも付いてないし迎えもないし驚いた。ていうかこの屋敷……人、全然居ないな」

「まあ、こんな時間だしね。資金面のやりくりもあるし使用人は必要最低限の人数残して父さんの屋敷に移動させて貰ったんだ。……自分で出来ることは自分でしようと思って」

歌姫の支援には金がかかる。勿論選定侯の家だ。金は沢山あるだろうが、だからといって無駄遣いは出来ないと自分の生活を切り詰めたのかこの男は。

「シャロンと僕のことは僕らの問題だから、それでフルトブラントの家には迷惑かけられないからね。それに下手に深入りされてシャロンを政治の道具に使われても嫌だ」

それもシャロンを守るための行動なのだと知って、昨日殴ったことが申し訳なくなつた。この人は本当に俺の妹のことを大切に思っていてくれたんだなとカロンは思う。少し寂しいけれど、それは有り難くなるほどだ。

「なあ、シエロ……」

「だから自炊は得意だよ。何か食べたい物があつたら言つて貰えれば僕が……」

「シエロ、シャロンは何処でどんな風に殺されたんだ？」

シエロの笑みが凍り付く。聞かれたくないことだつてのは解る。

それでもそこを教えて貰わなければ此方としてもこれから困るのだ。

ずるずると先延ばしにして何か取り返しの付かない失態を生む前に、
こういうことは早めに聞いておくべきだと思った。

「……そうだね。それを一番最初に話しておくべきだったかもしれない。……でも本当に凄惨な状況だったから」

シエロが話したがらなかったのは、カロンへの気遣いだった。それでもシャロンの死を明確に描くためにはそれを見なければ何も始まらない。

「カロン君、君はそれを見たらショックかも知れない。それでもシャロンに会いたいかい？」

確認をするシエロ。そこまで言うのだ。余程の物が待っているに違いない。それでも、シエロはそれを見た。見て、こんな抜け殻になって復讐を求めた。それなら俺も見なければならぬ。世界にたった1人の妹だ。誰よりも大事な家族だ。本当はシエロ以上に怒り狂わなければならぬのは俺自身だ。中途半端なこの気持ちこそ、シャロンに対して裏切りだ。

「会いたい」

「解った。付いて来て」

灯りを手に、シエロが立ち上がる。暗い廊下を抜けて階段を上り、一室の前。シエロが鍵を取り出しそれを開ければ……そこは書斎のようだった。それでも見れば生活感がある。ここはシエロの部屋なのだろう。

「その暖炉の下……ここから行ける」

シエロは暖炉の中の蓋を取り、暗がりへと続く梯子を指差した。下の階の分よりも下……恐らく地下まで下るとそこには部屋がある。部屋というか、浴室だ。そこへ降りてまず感じたことは肌寒さだった。

「元々そそっかしい僕はよく女になつてしまうことがあつた。人目に付かないようにさつさと男に戻るには自室から身体を洗える場所に行ける必要があつて、これはそのための部屋だつただけ……」

「シャロンはそこだよ」

硝子の浴槽。それはまるで棺桶だ。蓋の代わりに浴槽一杯を覆うような白いシート。浴槽内の水は凍つていて、シャロンの時を閉じ込める。

「これ……どうやって凍らせてるんだ？」

「僕は先祖返りだ。面倒なことも多い分、有益なこともある。海水じゃなければ僕の言うことを聞いてくれる水は多い。面倒臭いから魔法で凍らせているっていうことにしてくれていいよ。大体間違つてない」

「よくわかんねえけど、わかつた」

浴槽へと近づいて……それでもシートを取る勇気が出ない。そもそもシエロはどうしてシャロンをここへ？ちゃんと埋葬してやりたかと思うのが普通なのではないか？

(いや……)

復讐のためと考えるなら、死体は物的証拠。それを損なわずに

残すというのは確かに間違っていることではない。精神論を優先し地中へ葬ったら分解されてみずみず証拠すら葬ることになる。

それでもシャロンの死体を手元に置いておくと言うことは、とても危険なことだ。最悪犯人の悪意でシエロが犯人にされてしまう可能性すらある。

「なあ、シエロ。もしお前が人を殺したら、お前は罪に問われるのか？」

「僕は貴族だしそこまで重い罪にはならないだろう。ただし、次期国王候補からは外される。それならまだいい………けど僕とシャロンの間に何があったのか。暇な人々はその醜聞を騒ぎ立て捲し立てるだろう。僕が恐れることはそれだけだよ。殺されて尚、シャロンが汚されることが僕は怖い」

「それなら、どうして？」

復讐、犯人捜し。それは他の方法もあっただろう。わざわざ危険を冒す理由が分からない。

そうカロンの告げればシエロは小さく呟く。

「同じ理由さ」

「同じ理由？」

シエロがカロンの横を通り過ぎ、浴槽のシートに手を掛ける。

「ひっ！」

その惨たらしい有様に、カロンは言葉を失った。咽からはヒューヒューと、唯息が漏れるだけ。

シャロンは、シャロンだった物は顔の皮が剥がされている。それだけではない。脳から眼球から骨から真っ直ぐに切り落とした切断

なんとか振り絞った言葉にシエロは答える。

「現場の臭い。それから証拠」

「証拠？」

「シャロンの子宮は燃やされていた。だからそこから証拠は得られない。それでも彼女の身体には大量に付着していたよ」

「ふ、付着？」

「ああ、シャロンの死体は強姦の跡があった。そこから何者かの精液も見つかっている」

淡々と発せられる声。それでもそれは怒りに満ちている。感情を殺して説明に徹しているんだこの人は。

正直妹が何より可愛い兄の立場からすれば、どこぞの馬の骨とこの目の前のシャロンの恋人も同じように憎いことには変わらないのだが、それでもシャロンの気持ちを考えるならやはりそれは別物だ。

「証拠として持ち帰ってこれも凍らせているけど、今の時代の技術ではそこから犯人を導き出すのは難しい」

「お前の魔法なら……？」

こんな風にシャロンを凍らせられるシエロなら。そう思ったカロロだが、シエロは静かに首を振る。自身は万能などではないのだと。

「あのねカロロ君。そりゃあ海の精、川の水、そういう水の精はいるよ。そういう精霊ならこれは何処の水だと教えてはくれるだろう。だけどそれでも流石に僕も精液の精なんて名前の精霊は知らない。つまりこれが誰のかわんて誰にも解らない。最悪僕がこれを自分の中に入れて子を孕み、僕との相違点、父親との類似点を探すくらいしか方法はないかも」

「き、気持ち悪いこと言うなよ……そんなに思い詰めるなって」

事態が好転しなければシエロは本当にその位やりそうで怖い。子供を産むまでずっと塩水風呂に浸かる生活を続けてでもそのくらいやりそう。これ以上追い詰められたらそんな手段を選ばない気迫がある。もしかしたら俺が協力しないと断っていたら、その方法を探っていたのかも。そんなことを思ってぞっとした。

「少なくとも彼女に暴行した犯人は男だ。そいつが生きている彼女を犯したのか、死体になった彼女を見つけてそこから犯したのかはわからない。その時彼女に顔があつたのかどうかもわからない。それでもその時にはまだ子宮があつたんだろうとは解る」

「うう……うん」

「つまり彼女は殺される前に暴行を受けたと言っことだ。そいつがシャロンを殺したかどうかはわからないけど、その前後のシャロンについての情報は握っている」

シエロは淡々と状況説明をするけれど、俺は吐きそうになるのを耐えるので一杯一杯だ。さつき食べたばかりだから余計に。あんなに焼き菓子食べるんじゃないかと、今更ながらに後悔した。そんな力ロンから目を逸らし、シエロは不甲斐ないと言っように床へと視線を落とす。

「その時僕は上層街を歩いていた。丁度一昨日はシャロンが仕事が多く上がる……夕飯の時間に帰宅すると聞いた。それが嬉しくて、僕はいつもよりご馳走を作ろうと買い物に行ったんだ。上層街にはあんまり店はない。みんな自分の屋敷が街みたいに何でもあるからね。必要な物が在ればそれを作る人間を屋敷で雇えば良いだけなんだし。だから食材なんかは中層街まで降りなければ手に入らない。だから僕は中層街まで降りようと道を下っていた。その行き道での事だった」

帰り道でなくて良かったよとシエロは言う。荷物が増えては運べないからと。

「ちょうど中層街と上層街を繋ぐ道にはいくつか裏通りがある。

近道も多くて、僕はそこを歩いてきた。その時だ。路地から飛び出して来た奴がいた。そいつは妙に怪しい格好をしていた」

「怪しい格好？」

「うん。怪しいという文字が服を着て歩いているような妙な紳士服から露出している顔から首から包帯でぐるぐる巻き。髪も帽子と包帯でまるで見えない。目だけは辛うじて出ているが、それもサングラスで色は解らない。身体の丈に合わない妙に丈の長いズボン。そいつは一度転んだ。助け起こしたら礼も言わずにそいつは走って言った。あれは今思うと背丈を誤魔化すための厚底靴でも履いていて、それを隠すためだろう。だから最低一人は子供か女が犯行に関わっている……僕はそんな風に思う」

「そんな怪しそうな奴歩いていたら他に目撃談がありそうなものだけだな……」

「だからこそ、参ったよ。一昨日はとんでもない催し物があったんだ」

「催し物？」

「仮装劇だよ。それは観客もみんな怪しい格好！中層街から溢れてくる人は吸血鬼みたいなのもいれば仮面を付けた人もいればそういうミイラ男みたいなのも大勢いたし……紛れ込まれたらわからない。今日だって君から見れば観客達は十分仮装みたいな衣装だっただろう？」

「……ああ、確かに」

「ああいう街だから、普段なら僕もそこまで気にはしなかったはずだ」

着飾った人々は、たまに方向性を間違えていて仮装のような衣装で歩く人もそれなりに見かけた。ぶっ飛んだ感性が個性だとも思っているのだろう。

「だけどすれ違った時、その人からは血の臭いがした。どうにも怪しいと思った僕はその人が出て来た所に向かってみた。街の安全を守るのも選定侯家の人間の役目だから」

そこは本当に静かだった。いつそ不気味なくらい。まるで何かに誘われているようだと言え思ったと、シエロが言った。

「そこで見つけたのがこの手紙だ」
「手紙？」

これまで話に出て来なかった新たなキーワードにカロンは驚いた。

「うわ、これは……」
「全く悪趣味と言っしかないよ。筆跡を辿るところの話じゃない。ここから知ることが出来るのは、これが羊皮紙だつてことくらい。羊皮紙なんてどこの貴族も使うから何時誰が何処で買ったものなのかなんてわかるはずもない。悔しいけどこれだけでは手がかりにはならないものだ」

その文字は全てが規定で線を引いたような線を組み合わせた文字だ。筆跡の癖など到底ここから読み取ることが出来ない。しかし内容自体は解る。

“ 16時に上層街、いつもの場所で。
シャロン”

そう記されているが明らかにシャロンからではないだろう。

「いつもの場所っていうのは上層街でよく僕らが待ち合わせに使う店のことだと思う。嫌な予感がしたけど僕は手紙の通りにその時間に余裕を持ってその店へと向かった」

店主にはまたデートかとからかわれたが軽く流して時間を待ったとシエロは言う。気が気でなかっただろうな。

「上層街って普段あんまり人がいないんだ。だから僕がシャロンを上手く運べたし、現場の後片付けも行えた。上層街の歌姫は下に降りて近隣諸国まで歌の仕事を請け負うことがあるから。その間屋敷の警備を任されている者はそれぞれの家にいるけれど、滅多に街まで出て来ない。上層街の貴族ははそれぞれ屋敷に籠もって遊び相手を呼ぶか中層街にでも出かけて遊んでいるかだ。ベッドタウンみたいなものかな。だから上層街にはそんなに遊ぶ場所がない。だからその悲鳴が上がった時も店内には客は僕だけ、他に悲鳴を聞いたのは馴染みの店主だけだった」

「悲鳴？」

「ああ。若い女の声。それは決して大きな悲鳴ではなかったけれど近場だったことと高い伸びる声だったのが印象的だ。おそらく歌姫の誰かだろう」

それでも歌姫は星の数。上層街に仕事で来る歌姫は貴族の子飼いの歌姫？それでも昼間からは訪れない。晩餐会などにはまだ早かった。何のために上層街に来たのかわからないとシエロは目を伏せる。

「悲鳴の聞こえた方へと走ると、近くの裏通りにシャロンの遺体があった。その悲鳴から僕がそこに駆けつけるまでほんの2、30秒。その間にシャロンがこんな風になるとは思えない。悲鳴を上げ

たのは別の誰かだろう。その子は目撃者だと思っただけ……何し
る手がかりがこれくらいしかない」

そう言ってシエロが近くの棚から取り出したのは小さなロケット
ペンダント。

「僕は上着でシャロンの傷口を隠して運ぶことで、これには気付
かなかった。僕より後に駆けつけた店主にはシャロンが重傷を負わ
されたことだけ話した。屋敷には使用人を一人しか置いていなかっ
たのが幸いだった。僕は彼と事件の後始末を行った」

「その人は？」

「その内会える。今は情報収集に当たって貰ってる。信頼できる
人だよ。僕にとっては本当に……昔から良くしてくれる。家族か兄
弟のような大切な友人のように思ってる相手だ」

今は彼のことは良いだろうと、シエロがこのロケットへと話を戻
した。

「後から口封じに馴染みの店に金を渡しに行った時だ。店主から
これを見つけたと渡された。僕が現場の浄化に向かった時にはもう
証拠らしき物は他になかったから、駆けつけた途中で拾ったんだろ
う」

開けて見て。言われるままカロンは時計の蓋を開く。するとこれ
は小さな懐中時計だったのか、そこには文字盤……もう一方、蓋の
裏側には名前が彫られている。その名前にカロンは目を見開いた。

“オボロス”ネレイス”

そこには確かに、カロンの友人の名が記されている。

「僕がもう一度下に、彼に会いに行こうと思ったのは偏にこれのためでもある」

「何で!?!これオボロスの時計なのか!?!」

「下へ降りる前に名簿を当たらせてみたんだけど、報告ではその名に該当する者はいなかった。だからこれを本人が落としたとは考えられない」

「それじゃあ……あいつの家の者を盗んだ奴が居たとか?」

「……あのねカロン君、歌姫も女の子だ。僕らにはよく分からないことをする生き物だ」

お前今は女だとツツコミを入れたくなったカロンの視線に気付いたのか、シエロは頷く。

「僕が思うにこれはお呪いだと思うな」

「おまじない?」

「おそらくは意中の相手の名前を書いてそれを一定の期間、誰にも見られなければ恋が実るとかそう言った類の物だと思うよ」

「へえ……あいつが」

幼なじみの顔を思い浮かべるが、誰かに想いを寄せられるような人間には見えない。これが親しみ補正という物か。しかし第三者として考えてみるなら、確かにあいつは気の良い奴だし、そういうことがあってもおかしくはないのかもしれない。

(よくよく考えればあいつも可哀相な奴だよな)

シャロンに惚れてるからそう言ったことがあっても見向きもしないだろうし、そのシャロンと言えば空でシエロの恋人になってしまったし、あまつさえ……

ちらと視線を浴槽へ向けたカロンは、……それでもあの気の良い幼なじみよりシャロンの方がずっと可哀相だ。シャロンの時計はもう動かないのだから。

「でも、カロン君……君のお陰でこれの持ち主は大体解った。この街で彼に関わる人間はネレイドのお嬢さん、歌姫シレナしかない」

パンフレットでウンディーネに扮する金髪の歌姫……シレナを指さしシエロが頷く。

「話を上手く引き出せないのなら最悪彼女には正体を教えても良い。僕も探りは入れてみるけど、もし君が彼女と二人きりになる機会があつたら様子を窺ってくれ」

「……解った」

「これは君に預けるよ。その方が話を引き出しやすいと思うから」

時計を渡されて、頷いてカロンはそれをしまう。そこで部屋が静まった。シエロは知りうる情報全てを此方へ託した。それ以上今は言うことがないだろう。何か言わなければ。そう思うのだけれど、何を言っても失態になってしまいそうな気がしてカロンは口籠もる。そんなカロンを見て、シエロはシャロンの棺にシーツを被せた。これ以上姿を晒すのは誰にとっても辛いことだと言わんばかりに。

「シエロ……」

「カロン……君はシャロンを見て、どう思った？」

「お、俺は……」

酷い、可哀相、許せない。一瞬は感じたはずだ。それでもこんな証拠を見せつけられてもどこか漠然とした思いがある。目の前にあ

る物。あれがシャロンだつて認めたくない気持ちが高い。一年以上妹とは会っていないかった。女の一年は早い。カロンの知るシャロンと目の前のそれがどうしても重ならないのだ。

自分の知る妹は何処までも子供で、無邪気で。それがもう女で、恋人が居て……今は冷たくなっている。これはシャロンのはずなのに……俺にはシャロンに思えない。ちゃんと認められない。心が言い訳をして、今から逃げている。

「これは、本当に……シャロンなのか？」

「シャロンだよ。僕が保証する」

シエロが震える声で言い放つ。彼女の恋人であるこの男は、兄であるカロンには見えていないものが見えるのだろうか。その言葉自体に信憑性などあったものではない。それでも目には見えない確かな物を語るようにシエロが強く言い切った。

その思い切りの良さと裏腹、シエロはカロンとシャロンに背を向けて虚空を見上げる。俯いたままでは溢れてしまう物があるから。きつとそつだ。

「……こんなシャロンが人目に触れれば、人々は心ないことを言うだろう。輝かしい歌姫。誰よりも愛された歌姫。彼女の光の陰にはどんな闇があったのか……こんな殺され方をする程の女だ。余程酷い事をしたに違いない。ろくでもない女だったに違いない。……僕は彼女がそんな好奇の目に触れさせたくなかった」

シエロが泣いている。涙は呑み込める量を超え、両目から決壊、溢れ出す。

「シャロンの死体が見つければ、僕が殺人犯にされてしまうかもしれない。それ位腹立たしいことはない。それでもこんな姿のシャ

ロンを大勢の人間の目に触れさせることが僕には耐えられなかった。心ない人々にあることないこと風評されていく、シャロンを僕が見たくなかった」

誰よりもシャロンを想っているこの男が、犯人呼ばわりされるなんて……そんな酷いこと、俺だって嫌だ。愛する人を失って、本当は誰より辛いはずのこの人が……無実の罪で糾弾される。法がそうしなくとも、人の好奇の目にシエロまで汚されるんだ。それを理解し、カロンはシエロの気持ちを理解する。シエロはシャロンを見て、今の自分と同じ気持ちになったのだ。

(シエロ……)

目の前のこの人を守りたい。俺の片割れを深く愛してくれた人だ。この人を心ない言葉から、好奇の目から守りたい。この人がシャロンにそうしてくれたように、俺が。

「元々歌姫の世界では怨み妬みによる殺人事件が良くある。人魚に近づけばその的だ。選定侯の恋人という制度を作ったのもそのため。みんなが足を引っ張り過ぎては肝心の国を守れない。だからそう簡単に殺されないシステムを作った……はずだった。だからここ数代の歌姫は皆選定侯の恋人から上がっている」

シエロはこの遺体を見て悟ったのだ。これを公にしても、きっと法では裁けない。

犯人の一味が貴族の誰かならもみ消されてしまう。大した罪にもならない。

シエロが王になること、シャロンが人魚になること……それを望まない権力者も多いのだ。シエロには嘆き悲しみ憤る理由はあっても、シャロンを殺す理由は無い。それでも人の悪意がシエロに罪を

なすりつけることは、きつとある。

(ごめん、シャロン)

俺は酷い兄だ。お前の死に顔を見て、それでもその仇討ちよりも……この眼の前の人が心配でならない。

(でも、シャロン……お前がこの人を愛しているのなら)

この人が傷つき苦しめられることの方がお前はきつと辛いだろう。シャロンを失ったことを正しく認識できていないとはいえ、それはきつと俺自身にとっても悲しく辛いこと。だけど空にお前を送っだから、二度とは会えないと何度も聞いた。だからもう会えないのだろうと心の何処かですっていた。会いたいと思う度におそらくもう二度と会えないのだろうとも。

俺にとつてのシャロンは、一年前に死んでいたに等しい。だから今、死に急いでいるこの人を、目の前で生きていること人を、守りたいと思うのは何も間違ったことではないだろう。それこそシャロン、お前の望みであるはずだ。

「カロン……、まだ僕と共に復讐をしてくれると君は言うてくれるかい？」

「……俺は信じる。お前がシャロンの恋人だつて信じてやる。だから例え俺がシャロンを殺しても、お前だけはこの世界でシャロンを殺すことはあり得ない」

誰がお前を犯人呼ばわりしても俺は信じない。この人は、被害者だ。

「シエロ、俺はお前に付いていく。お前の復讐に付き合う。男に

「一言はねえ」

カロンは無理矢理、シエロの手を固く掴んだ。

「まずは仕事に復帰できるように、証明書の再発行からだ。その間も情報収集は続ける。それが今出来る最善策だろ？」

「うん、ありがとう……」

シエロがボロボロ泣き出した。自分のポケットを探り、ハンカチを差し出す。洗濯はしたがどうしても薄汚れたような変色が目に付く。元々自分が持っていた物だからこの屋敷では空の上では霞んでしまう。だから差し出すことに躊躇いがあった、今まで出せなかったけれど、辺りを見回しても他にある布はシャロンに被せているシートくらいしかない。それで涙をふけというのも惨い話だ。服の袖とか胸を貸してやるとか、そんな案もあるにはあったがシャロンの手前、申し訳なくてそれ以上のことは何も出来なかった。

唯この一日で、この男は本当に涙もろくなっただなあとかロンはしみじみ思っただけだ。

8：墜ちた歌姫（前書き）

少しエログロ注意。

エコーさんに引き続き、ちょっとGL注意報。

8：墜ちた歌姫

海神の娘

『歌えないことは拷問されたり生き埋めにされたりすることに似ています。』

それでも愛しい貴方。

貴方のお顔が曇ること、それは歌えないことよりも私には辛く苦しいことなのです。』

*

夜は長い。リラにとっての夜は苦痛だ。

大事なご主人様が帰って来るまで、その心は休まることを知らない。

仮眠中も常に神経を張り巡らせ、万が一この小さな家に侵入者があった場合はその排除を務められるよう警戒を怠らない。

……とは言っても主である歌姫ドリユアスは三流歌姫。下層街レベルの歌姫だ。好き好んでそんな歌姫の家に盗みを働く輩も居ない。それを理解しながら警戒を解けないのは、主から離れての不安を覚えるからだろう。

こうして横になり目を閉じていても、ざあざあと聞こえる雨の音。空の街は地上より雲に近い。上層街まで行けば雲海が見えるが、下層街はそうでもない。雲が近いと言うことは雨脚も強いと言うこと。ちゃんと雨水を流す設備が整っている場所なら良いが、下層街の外れにもなれば、そうでないところも多い。比較的空でも安い土地はそうなっている。水が流れてくる下層街でも特に下の方の居住区は雨に悩まされる。

この家は壁も薄い。リラの資金で家を移り住ませることや改築することは出来ない。金はあるでもまずドリスが領かない。後ろ盾や

家のない歌姫は実力相応の住処を貸し与えられる。このボロ家が今のドリスには相応しいと思われているのだ。本人もそれを弁え、目に見えるその逆境に負けずに日々頑張ろうと決意を新たにす。移り住むなど以ての外、そんな金があるなら下町の支援にあてなさいとリラが怒られる。

リラ自身、下町がどうなるかと構わないので、そんなことに自身の稼いだ金を浪費するくらいなら……日々少しずつ大切なドリスのために費やしたい。食事を安くやりくりしている振りでは実は自身の貯金からばれ無い程度に少しずつ横流し口から贅沢をさせてやっているのは幸いまだばれてはいない。これがばれたら他に主を甘やかす方法が無くなるので、今後ともひっそりと続けていけるように頑張りたいものだ。

嗚呼、なんて事を考えている内にまた分針が一蹴している。しかし、こんなに雨の音が五月蠅ければどちらにせよ快眠は出来ない。リラは身体を休ませることに務めることにした。

そんな頭の片隅で、ふと思う。傘を持って主を迎えに行くべきだろうか？

だが目立つ行動は立場上迷惑だ。朝方まで雨が止まないのならあの男も傘の一本や二本は寄越すだろう。

雨音に癖のように俯せになりかけた身体を起こし、リラは仰向けに体勢を入れ換えた。

すると少しだけ、雨脚も弱まった。……ような気がした。

*

かつて一人の歌姫がいた。その女の名前はメリア・オレアード。上層街の歌姫で、周りより頭一つ二つ分……いやそれ以上に抜きん出た才能があった。周りとは圧倒的な差を培ったのはその才能に傲らない努力の賜。その女は身を売ることとせす、歌だけで人々に認められついに人魚に王手を掛けた。

その何もかもが、他の歌姫にとっては不愉快極まりないことなのだとその女は知らなかった。努力することも歌を愛することも何も悪いことではないはずだ。しかし悪いことをせずとも理不尽に不幸は襲う物だと若い歌姫はそれを知らなかったのだ、とても愚かなことに…… これまでの彼女は幸運で幸せだったのだ。だからとても幸せな頭をしていた。

可愛い笑顔を浮かべる仲の良い歌姫。その笑顔の裏で女達が何を考えているかなど知らずに、その笑顔に浸っていた。女は可愛い物、美しい物が好きだった。無条件でそれを信じて疑わない愚かさを持ち合わせていた。その歌姫の心は男のそれに似ていた。恋に騙される男のように、悪い女に騙された。

ざあざあと、雨が降る。笑う男達の口は空の半月。高笑いの女の目と口は三日月のような悪意に満ちている。

押さえつけられた四肢。人気の歌姫が最後に歌った歌はなんとも醜い悲鳴だった。これまでの努力も、水の泡。努力と共に培われたプライドとも一滴、一滴となりこぼれ落ちる。そんな己が惨めで、情けなくて、女は泣いた。

二度と歌えないようにと差し向けられた悪意。もつと惨めにしてやろう。どうすればもつと惨めな姿になるか。奴らは考えている。ガチャガチャとベルトの外される音が聞こえる。女達が連れて来た男は、歌姫メリアに危険な感情を抱く類のファンだったのだろう。愛しの歌姫が苦痛に喘ぐ様が堪らない。汚れを知らない歌姫を踏みにじってやりたいという劣情の目。そんな視線に晒される。けれど振り払える力がない。それならせめて醜い物は見たくない。

だから女は、空を見上げる。とても綺麗な夜だった。次第にそれが翳って今は泣き出したようなあの空。風が招いたのはあの雨雲だけではない。招かれたのは私だと、その女は気が付いた。そして泣いているのもきつと私なのだ。声を出し、もう泣けない私の代わりに…… あの雨は、あの雲は、泣いている。

伝う涙が雨なのか、違うのかも解らない。解らないほどぐしゃぐ

しゃになる顔。化粧は流れる。哀れな歌姫。それでもまだ美しいと呼べる部類に入るのが、その女達は気に入らなかつたのだらう。

手入れをし長く伸ばした髪が引つ張られる。引き抜かれる。乱暴にナイフで切られる。勢い余つて頬にまで傷が付いた。身体が仕事道具の歌姫にとつてそれは致命傷に等しい。例え歌えなくなつても、まだ美しい女をもつと辱めようと、その顔にナイフを振り下ろす女自身のナイフを突き入れようとする男。

その寸前で、庇う者がいる。ああ、助かつた。安堵の息すら咽は痛む。

「っ……！」

助けてくれたはずの男達。あの醜悪な者共を追い払つた男達。しかしそいつはヒーローでも王子様でもなかつた。そいつは、そいつらは……どこまでも人間だつた。

ああ、もう助からない。それを見て取つたのだらう。決めつけたのだらう。それなら汚れを知らない美しい歌姫を最後に女にしてやる。女の身に生まれながら男も知らずに死に行くのはあまりに哀れだらうと決めつけて、自身の欲を肯定する男達。

嫌だと叫ぼうとも、咽からは何も出ない。血以外何も、溢れない。またもや手足を掴まれて、ドレスが引き裂かれる。乱暴に肌を這う手が実に気持ち悪い。

もう、壊れかけて居るんだ。壊しても良いだらう。そんな遠慮の無さで、押し入る輩。本来そう使う物では無い場所まで侵しに掛かつている。苦痛は確かにある。しかし咽を切られたばかりだ。その痛みに全ての意識が行つて、唯圧迫感があるだけ。それよりも奴らの手の方がずっと気持ちが悪い。

惨めだな。そう思いながら、さっさと死ねないだらうかと、ぼんやり考える。そんな無気力が氣にくわなかつたのか。とんでもないことを考えた奴が居た。

そう、それで終わりではない。喉の奥を突く激痛。咽を切られた女の口にそんな物を入れるだなんて狂気の沙汰だ。声にならない声で泣き叫ぶ。それがお気に召したのか何度も咽を犯される。今度こそ痛みで意識が飛んだ。その瞬間まで身体は揺すられていた。

「……………」

気が付けば誰もそこには居なかった。

薄汚い、暗い路地裏で……一人石畳に口付けていた。身体のうちこちが痛い。気持ち悪い。

けれど体温を奪う雨が、血も奴らの吐き出した物も、触れた悪意も感覚も……全て洗い流してくれるような気がした。人間とは嫌にしぶとい生き物で、こんなになってもまだ死ねないという不幸にまた涙が溢れた。

それでも助けを呼ぶ声は出せない。遅かれ早かれ私は死ぬのだ。

女はそれを悟っていた。その最期の時まで苦しんで苦しみ抜いて死ぬのだ。

嗚呼、余りに己が哀れで、嘲笑さえ浮かぶ。声の無い、その馬鹿げた笑いは誰の耳にも届かない。そのはずだが……ピシヤと水を打つ小さな足音。近づいてくる。

どうせろくなものではあるまい。今度は私から何を奪う者が来た？ 後は何が残されている？ 精々魂くらいか？ ならばそいつは死神か？

僅かに残された力で顔を上げれば、細くて白い足。丈の短くなつた古びたドレス。

目を見開いた少女。悲鳴を上げて逃げ出すか？ いや、違う。彼女は私を哀れんで……憐れんで、赤い水溜まりに膝をつく。

そして大丈夫よと言う風に、強い光を宿した目で優しく微笑んだ。そいつは死神ではなかった。この人は女神だ。その時、奪われた

のは……心臓ではなく私の心に他ならない。
嗚呼、それならやはり死神か。哀れなその女の魂はその人の手の中に握られてしまったようなものなのだから。

*

憂鬱な朝。最悪な夢見も、愛しい人の声が私を呼べば……至福の時へと変わる。歌姫ドリユアス。彼女の声はさながら魔法のようだ。

「リラ! どうだった!？」

早朝帰ってきたドリユアス様は、お疲れでしょうに帰宅早々私の元へと訪れる。パタパタと駆けてくる主はとても可愛い。ちよつと腰が痛そうな痛々しささえ可愛らしい。だがあの腐れ殿下、ドリス様の命令さえあればいつでもその首狩ってやる。私の女神を汚すとは、万死に値する。

リラは国王候補の一人に胸の中で憎悪の念を送った後、愛らしい主の手を取って、居間まで連れて行く。そこまで来て彼女に椅子を引いた後、認めた文を差し出す。

「……………」

私は言葉が話せない。だから見たこと聞いたことを文字として記しておいた。

「彼の名前は確かに“カロン”……女の名前は“シエラ”と言つたね。あんな所を歩いているということは中層街……いえ、上層街の歌姫かしら? リラ、知ってる?」

リラは首を振る。上層街の歌姫はそれなりにリラも詳しい。ここ
まで至った歌姫は広く名も知られている。それでもシエラなんて歌
姫は聞いたことがない。

(ドリス様はあの少年を好いていらっしやる……)

以前下町に居た頃に彼に救われたのがそのはじまり。下町をドリ
スが憂いるようになったきっかけだ。

しかし彼には恋人がいるようだ。二人の関係性は火を見るより明
らか。少年の顔はその目は目の前の女に完全に惚れていた。女だっ
て愛おしげに少年のその顔を見つめていた。あれは誰かが割り込む
ことが出来るとは思えない。

第一リラとしてもそれはそれで有り難い。これを機にあの少年の
ことは綺麗に諦めてくれればいいのに。何晩でも愚痴に酒盛りに付
き合っても良いから。

そうは思うのだが……それはリラの私情だ。あくまでリラはド
リスの道具。道具は私情を持つてはならない。常に主のためにあれ
だからリラは再び迷う。二人が恋仲だと伝えればそれは気分を害
される。どうした物かとそこは文字にも出来ず困ったことを思い出
す。

「それにしてもどうして彼が空にいるのかしら？」

ドリスの疑問はもつともだ。下町の人間が空に上がるには金かコ
ネ、それか才能と運が必要だ。女は歌姫になれば上れるが、男はそ
うはいかない。何処かの貴族の家の使用人にもなった、そう考え
るならなくはないが……

「彼が船頭を止めるとは思えないわ」

リラの考えはドリスによって、ばつさりと切り捨てられる。

「それならあの女が貴族。嫌がる彼を無理矢理使用人として空へ連れて来て、恋人関係を強要している。そうに違いない、きっとそうよ！リラもそう思うでしょ？」

それは些か早計だ。しかし別段否定する理由もなく、それに代わる答えもリラにはない。曖昧に微笑し頷いた。

ええ、まあ、たぶん。貴女がそう思うのならそうなのかも。そんなニュアンス。

「許せないわ、彼の誇りを汚すなんてそのシエラと言う女っ！殿下に頼んでその首根っこ捕まえてやるんだからっ！」

覚悟していなさいと憤る主は、珍しく強気。吹っ切れたような清々しささえリラは感じた。この所落ち込んでいたドリスがここまで元気になったのならそれは良いことだ。

(そう思いたいだけけれど)

どうにもそう思えないところがある。ドリスは元々気の弱く優しい娘だ。それがこんな強気になるとは……まるで先の公演で演じた役がまだ抜けきっていないのではないかとさえ思う。

以前のドリスならば、思い人に恋人がいたら想いを告げることもせず……そのまま身を引くような健気さがあつた。身を汚しても心までは汚すまいと歌う彼女は誰よりも美しい。理想と希望を確かにその目に宿していた。

それがどうだ。ここ数日で、その色が変わってきてはいまいか？希望が欲望、理想を現実、そんな風に塗り替えてしまった暗い瞳。シャロンという障害物が無くなったことで開けたと感じた道がシエ

ラという女によって塞がれた。ならばそれを排除するまで。そんな手段の選ばなさが垣間見える。

(命令ならば罪は被ろう。それで貴女の誇り高い心を魂を守れるのなら)

しかし従った先にこの歌姫が、尚も自分の中で輝くだろうか？どんなに人に埋もれても眩いばかりの歌姫が、今は鈍く光っている。そんな気がしてならなかった。

歌姫の世界では血生臭い陰惨な事件が絶えない。光と陰。歌姫としての栄光の傍には必ず陰がある。無事に人魚に上り詰めた歌姫が、何人人を殺したか。そしてそれが権力にもみ消されたか。そんな事件をリラはよく知っている。

そんな汚れた歌姫に海神の怒りが静められるだろうか？愛娘とは似ても似つかぬ輩が人魚を名乗る。それが海神のより大きな怒りを買って、災害を招いた例が過去には度々ある。

それでも人を陥れることを止められないのが人間という愚かな生き物だ。

だからこそリラは、今回の事件のことなどさして気にも留めていない。気掛かりだとすれば、それが主のドリスに悪影響を及ぼさないか、その一点。

確かにドリスはその身こそ汚れているが、高尚な魂の持ち主だ。海神も男だ。男を知る娘よりは知らない娘の方が好みではあるうが、その伝説の愛娘も男を知る女だ。好みと娘との化身は別物。だからこそ条件としても歌姫シャロンは優れていた。恋人一人しか男を知らない。しかし一人であろうと十人であろうと百人であろうと結局は同じ事。魂さえ汚れなければ犯されなければ十分人魚の資格はある。

だからこそ、ドリスは懸命に歌うのだ。流石に好きでもない男に

抱かれなければならぬ憂鬱な夜の仕事の前には、気乗りしない表情を見せるが、それでもここ数日……長年の重荷を下ろしたようにドリスはいつも以上の笑顔を見せている。おそらく今日の公演も成功したはず。これまでで一番良い演技が出来たのだらうとは、彼女の顔を見れば明らかだ。

歌姫シャロンの惨めなその亡骸は、全てに愛された歌姫も唯の間、自分と何ら変わらない女に過ぎないとドリスは知ってしまったのだ。

「人の怨みを買わないように生きるのって大変なことなのね」

リラの淹れたたを睨りながら、ドリスが小さく呟く。それを聞き、リラは主へと視線を向ける。

「だってそうでしょ？大勢の人間に愛されていたあのシャロンが、あんな事になった」

明日の我が身だとドリスは身震いをする。確かに。あの気に入らない男に、アクアリウスにこの歌姫は寵愛を受けている。そのバツクアップは大きい。シャロンが死んだ今となつては、あの男も妾などと戯れ言を言うことはない。このドリスを正妻にと考えるはず。ならば歌姫エコーさえどうにか出来ればドリスが人魚になることも夢ではない。

しかしエコーはシャロンとは違う。選定侯の恋人ではなく、自身が選定侯家の人間だ。流石に彼女に何かあれば大きな事件になる。怨みだけならシャロンなどよりあの歌姫の方が多くの者から買っていたようなものだが、無事なのはそこに起因するのだろう。

歌姫シャロンはフルトブランドという後ろ盾があっても、その仕事ぶりから彼と離れる時間が多かった。今回の事件はその隙を付かれたものである。

「だからジリジリと人魚になるのは危険なこと。なるなら一気にならないと」

とは言っても現状として歌姫ドリスが人魚など、鼻で笑われる。誰も歯牙に掛けない。

誰もが見下す、だからこそ……ドリスは殺されるほど憎まれはしない。ドリスの安全は保証されている。歌姫になるのなら一瞬で。それは確かに正論だ。

シャロンは時間を掛けすぎた。勢力を広げる前に知名度ばかりが広がった。だから他の選定侯の支配地の攻略に手間取った。彼女は才能が有り過ぎた。それが彼女の不幸。

ドリスにはそこまでの才能など無い。しかし、それこそ彼女の幸福なのだ。リラは認める。

「ねえ、リラ……リラは痛かった？」

ティーカップをテーブルへ置き、そつと此方へ近づいて……喉元に触れて来るドリス。

「……………」

私の咽には癒えない傷がある。本来私はあの日に死ぬはずだった。歌姫の世界とはそういうものだから。傷つき倒れる歌姫を目にしても、誰もそれを助け起こさない。運良く、運悪くファンに見つかつても……声を上げられぬ歌姫など蜘蛛の巣の蝶。食われ犯されるだけだ。

それは酷い裏切りだ。自分を応援し支えてくれると思つた相手まで、味方などではない。別の生き物。共生など出来ず、此方を捕食する虫虻、或いは獣。戯れに蝶を啜えてその羽をもぐ猫のように、

楽しげなその表情に、震え上がったものだった。

「リラは、人魚になりかけたんでしょ？……それで歌えなくさせられた」

他の歌姫、その手の物に咽を潰された。確か両腕も折られた。犯人を告げることも書き表すことも出来ないまま、野晒しの雨に打たれてそのまま死ぬはずだった。俯せのまま地に伏せてやがては増えた水かさに窒息するだろうか、そう思われた。

偶然通りかかった小さな少女。彼女が抱き起こすまでは。

「私は嫌。そんなの嫌。歌えなくなるなんて……きつと死ぬより辛いわ」

その言葉にリラは安堵する。ドリスは変わっては居ない。同じ歌姫として、歌姫シャロンの死を哀れむ優しさがそこにある。しかし、ドリスはシャロンが死んだことではなく、歌えなくなったことを哀れんでいる。ドリスにとって歌えることは何よりの幸せなのだと言い換えることが出来るだろう。

歌は魔法のようだと常々ドリスは言っていた。辛いときも苦しきときも歌えば幸せになれると。そう、あの日も。自分より重い女の身体を担ぎ引き摺り歩く少女は、医者への道すがらずと歌っていた。彼女の歌に不思議な力など無い。それでもリラは傷が痛みが引いていくような気がした。

自分のためだけに歌われた歌は、上層街の歌姫の自分から見れば……まだまた稚拙で技術もない。それでも不思議な温かさ、温もりを教えてくれた。

嗚呼、歌うというのはこういうことだった。これこそが、人魚の歌だ。かつて自分が目指した物は全て砂の城。だから一度荒波に吞

み込まれれば容易く崩れる。

「……………」

不安そうな彼女のために。リラは主の手を取って、優しく微笑んでみせる。

痛いのは咽ではない。歌えぬことでもない。例え物を言うことが出来たとて、リラには言えぬ言葉がある。

「……………」

「リラ……………」

本当に一番私が辛いのは、ドリス様……貴女がそんな風に辛そうな顔をすることですと、しっかりと目で伝えた後……帯刀していた剣を抜く。

そしてドリスから離れ、一通り技を見せ、腕が鈍っていないことをしっかりと見せつける。

何時如何なる厄災からも貴女をお守りいたします。だから何も怖がらないでと、彼女の足下に、リラは跪く。

拾われた命。何を惜しむか。使い道はこの人のために。

切り捨てたい男はいるが、何人でもいるけれど、そんな者達がこの歌姫の支援者ならば怒りも鞘に封じよう。

そうだ。幾ら汚されても、それでもやはりこの人が私には誰より神聖で、光り輝いて見えるのだ。その光が鈍く見えるなら、その他の人間などもっと光を無くして濁って廃れて腐っているはず。

何も彼女が悪いのではない。この世界自体が腐っていった。歌姫シャロンを失うことで。

これは、そう……それだけのこと。

「……………」

「ありがとう……リラ」

かつて人魚に近づいたこの私が言うのだから間違いない。貴女は人魚に相応しい。そう微笑んでその手の甲に口付けをした。

8：墜ちた歌姫（後書き）

元歌姫メリアさん。愛称リラ。

ドリユアスはニンフの一種。ドリスの苗字はドリユアスなエウリィデから来てるんでその相方はオルフェにして男にしようと思ったけど、某ゲームのキャラや某星闘士を思い出したので没。友人が真っ先に笑いそうだと思った。それか、響けお姉さあああんとか言われても困ると思った。

なので琴座を調べたらリラ。ん、じゃリラで。そんな感じ。こうしてまた女比率とGL要員が増えたのでした。

9：黒衣の男と見舞客（前書き）

エコー注意報。 || G L 警報。

シャロン注意報。 || カオス警報。

9：黒衣の男と見舞客

海神の娘

『知らないと言うことはとても幸せなことです。』

私は貴方を知る度に、貴方を知る喜びを感じることが出来るのですから。

だから貴方の話す話を聞くのは、とても心が躍ることですわ

『！』

*

翌朝カロンが目覚めると、何やら隣室から騒ぐ声がする。

(シエロの奴、何騒いでんだろ)

目を擦りながら、隣室へと足を運ぶ。するとシエロはその眉を寄せ重い息を吐き、憂鬱そうに頭を押さえていた。

「あのさ、アルバ……これはどういうことなのかな？」

「シエロ様のご命令通り、シャロン様は怪我でしばらく養生をと
いう情報を広めました故、このようなことになったのではないかと」

「それはそうだ。ありがとう！だけどねまだカロン君にも心の準備があるだろう？それをいきなり他の歌姫達に引き合わせるなんて無茶だ！何を犯人の一味かも知れない相手を屋敷に上げて珈琲まで出してるんだ！」

「ああ、彼がカロン様ですね。なるほど、確かにシャロン様によく似ていらっしやる」

「え？……ああ、カロン君起きてたんだ。五月蠅くしてしまつて

「ごめん」

「一体何の騒ぎだよシエロ」

欠伸を噛み殺しながら、カロンは尋ねてみる。

シエロがわめき立てていた先には一人の男。10かそこらかシエロよりも年上のように見える。20代後半くらいだろうか。彼は黒衣に身を包み、執事のような格好だが……その鋭い目付きからどうもその黒衣が暗殺者のそれに見える。

何処までも冷静なその男の傍ではシエロが我が儘な子供のようにしか見えないのが少しおかしかった。シエロは朝からオロオロしている。何か困り事のようなようだ。こんな姿を見ると自分より幾らか年上だろうに全くそんな気がしない。今日のシエロはちゃんと男に戻っているのに不覚にも少し可愛いと思ってしまった。屈辱だ。

「ああ、アルバが……ええと昨日話したたる？この屋敷に残っている唯一の使用人。彼はアルバーダ。アルバーダグアイタ。長いから専らアルバと呼んでるよ」

「お初お目に掛かります、カロン様」

シエロからの紹介に男は此方に一礼。じつと此方に向けられる観察するような目が少し不気味だ。

「え、ああ……初めまして」

それでも一応挨拶されたのだ。カロンもそれに応じる。

「それで結局なんだってんだよ？」

「ええ、それは……養生中のシャロン様の、知人友人様方がそれぞれお見舞いへといらっしやいまして。全員一度に來られても困るでしょうとそれぞれ別室へご案内しておきました。幸い皆様連れだ

っていらしたわけではなく、時間差攻撃で訪問されましたから」

「し、シャロンの知り合いいい!?」

「だから言ったんだ。まだカロン君はシャロンをちゃんと演じられるかわからない。今日の所はお引き取りをお願いしよう」

「しかしシエ口様。本当にシャロン様を心配し、訪ねた方も中にはいるでしょうが……そうではない方の方が多いのではないですか？みすみす犯人への手がかりを返してしまうのは悪手でしょう」

黒衣の男の言うことはもつともだ。カロンもそれはそうだと思われる。

「如何に歌姫、演技に達人な女とはいえ、所詮はまだまだ子供。

精神的には弱い部分もあるでしょう。ですから焼き付け刃なのは向こうも同じ。守りよりも攻めに転じる方が良いのでは？貴重な情報が失われる前にそれを刈り取る必要があります」

「そうは言うけど……」

「ではカロン様、此方をお召し下さい。それでシャロン様の部屋でお待ちを」

渋るシエ口を押しつけて、男は俺に着替えを手渡す。シエ口の意見など聞きもせず、ツカツカと扉へと向かう。

「では10分後に」

「ちよつと、アルバあつ……」

縦るシエ口を払いのけ、男は来客の元へと向かったようだ。

「……なあ、あれが本当にお前の信頼出来る人なのか？」

「……うん」

昨日のシエロの発言へ疑問が生じたカロンの尋ねるも、シエロは頷く。

「本当に？」

「有能なのは確かだよ。それに弱気になる僕の言葉を無視して僕のやりたいことをやってくれる。そういう意味では全く頼りになるよ」

しかしそう語るシエロはまたうつすら涙目だ。

「でも彼最近冷たいんだよ。年を取ると丸くなるっていうけど彼の場合は年々角張っていくよ。昔はもつと優しかったのにさあ……僕が慌てふためくのを見るのが好きとかそういう悪趣味開花でもしてしまっただ、きつと！」

「まあ、確かにお前が慌てる様は面白いかもな」

「カロン君まで、酷い……」

「じ、冗談だ、冗談だって！こんな時に呪い発動するなよ？」

「解ってるよ」

袖で目を覆ってから、シエロの声も平静を取り戻したようだ。

「それでカロン君、頼める？無理そうなら寝てるふりでもいい。

僕が向こうに適当に話をするから」

「いや、大丈夫だ。記憶喪失の振りすればいいんだろ？」

「うん。それで見舞客達から出来る限り情報を引き出そう」

「解った。最善を尽くす。とりあえず着替えただけ……シエロ、髪はどうするんだ？」

「そうだね……君はシャロンより短いから」

シエロは昨日自身が使ったウィッグを手早くカロンにセットする。

地毛と共に髪を結うことで固定をし、安全策を得た。

「うん、これで大丈夫。シャロンに見えるよ」

鏡に映る自分は、カロンの知る1年前の妹とは似ても似つかない。これが歌姫シャロンなのかと、胸が締め付けられる。シャロンの生の残り香に振れることで、昨日シャロンの亡骸を見たときよりもシヤロンの死を身近に感じられた。だから悲しくて……やっと悲しいと思えたことが、嬉しくてほんの少し安堵した。

「カロン君？」

「何でもねえよ。それで部屋っていつのは？」

「ああ、君が昨日泊まった部屋。あそこがシャロンの部屋だよ」

色々あったし深く考えずに使ったが、あそこがシャロンの部屋だったのか。再び隣室へと戻り、今度は何だか感慨深い。

「あのさ、シエロ……」

「何？」

言葉を言いかけた時、部屋を叩くノックの音。どうやらもう、来てしまったようだ。

「シャロン様、シエロ様。アルセイド様がお見えです」

シエロはよりもよってと言う顔だ。しかし妙に納得したような顔でもある。

(朝一で来てたんだ彼女が真っ先に……此方の迷惑お構いなしに)
(う、うわぁ……)

シャロンの親友と呼ばれる歌姫はなかなか激しいお人らしい。友情に厚いと考えるなら良い子なのだろうが。

「シャロンっ！」

扉が開いてすぐに黒衣の男を押しつけ飛び込む黒髪の少女。昨日舞台の上での男装も様になっていたが、少女らしい格好をしていると清楚で可憐な印象になる。気の強そうな感じではあるが美少女だ。そんな子がいきなり抱き付いてきたのだ。正常な男なら多少はドキドキしてしまう。例に漏れずカロンもそういう男だった。

「え、ええと……」

「シャロン、話しただろう？君の一番の親友のエコー＝アルセイドさんだ。君は何時もエーコと呼んでいたね」

「可哀相にシャロン……頭を殴られたんですって？大丈夫なの？」

「あ、ありがとうございます。頭はまだちょっと痛いですけど今はそこまですも……」

「敬語なんてそんな他人行儀は要らないわ、私達は友達でしょう？いいのよ、ゆっくり思い出していきましょう？私も手伝う。それが駄目ならまた一緒に、新しい思い出を作っていけばいいのよシャロン」

「ありがとうございます、エーコ……」

ぎこちなくだがカロンが微笑めば、張り詰めた雰囲気だった少女も優しく微笑む。あ、可愛いな。良い子だな。でもなんか重い。付き合つのはちょっと無理なタイプだな。喋ってカロンはそう思う。

「もう、病み上がりなのに昨日はわざわざ私に花を届けてくれたんですって？それにあの花大好きなの、本当に嬉しかったわ」

「でも私は……また貴女と一緒に同じ舞台に立てる方がもつと嬉しい。元気になったらまた一緒に歌いましょう？約束ね」

「あ、……うん」

話の流れで頷けば、笑みを浮かべたエコーに小指を絡ませられて指切りさせられる。この子は針千本飲ませそうな怖さがあるよなと内心身震い。それでも同ランクの歌姫ならば、否応なしに仕事は共にする機会もあるだろう。

「僕のシャロンのために、お忙しいところご足労頂き真に感謝しています、アルセイドさん」

「別に貴方のためではございませんわフルトブランド様。大切な私の親友、シャロンのためですもの」

何やら水面下で火花が散っている。シエロもエコー相手だと冷静に見える。というか二人とも互いを見る目がとても冷たい。どちらも選定侯家の人間だと言うから、天敵のようなものなのだろう。

「それでひとつお伺いしたいのですがアルセイドさん」

「あら？何かしら？」

「3日前のことです。貴方と仕事でシャロンが顔を合わせた時間がありましたね。その時シャロンが何か不審な人物に脅えたような形跡はありませんでしたか？」

「シャロンが？……そうね」

手帳を取り出したシエロに習い、エコーも自分の手帳を取り出した。

「私がシャロンと会ったのは11時の仕事ね。それで丁度良く休

憩が入ったから二人でランチを一緒にしたの」

「下層街でのチャリティーライブでしたね。失礼ながら貴女が下層街などで仕事をするなんて珍しいと私も驚いたものです」

「それは他ならぬシャロンからのお誘いだもの。私、下層街にあまり詳しくないの。シャロンが美味しい店があるから案内してくれるって言うから私つい引き受けてしまっただけ」

「下層街ですか。私も余り詳しくはありませんが、そうですね。シャロンからは“くろねこ亭”という店のランチが安くて早くて美味だと聞いています。デザートバイキングもやっているとかでも絶品なんだとか」

「ええ、その店ね。そうそう、シャロン覚えて……ないわよね。今度一緒にデザートバイキングに来ようって約束したこと」

「ご、ごめんエーコ」

カロンが極力記憶の中のシャロンを真似し、悪びれなく明るく苦笑すれば……エコーもいいのよと静かに首を振る。

「だからね、今朝一番であの店からケーキ買ってきたの。貴女と一緒に食べようと思って」

「あ、ありがとう!」

エコーは寝台傍の椅子に腰掛け、寝台備え付けのテーブルに箱を置く。

箱から出てきたケーキは下町では見たこともないような物で、宝石のように美しい。食べるのが勿体ないくらい。これで下層街レベルだというのだから、腐れ貴族は爆発すればいい。

「はい、シャロン」

「ちよ、ちよっとエーコ!私はそんなに子供じゃないわよ」

自然な流れではいあーんとかされたカロンは流石にたじろぐ。その照れは可愛い女の子にそうされたことなのだが、子供扱いされた怒りに見えるよう必死に務めた。シャロンはそういうところがあつた。何だかんだでませていた。俺が子供扱いするとよく怒る子だつた。

「あら、そう？ちゃんと食べられる？手とかは怪我してないの？」
「大丈夫だもん！」

エコーからフォークを奪ってケーキを口に運んで、一瞬天国が見えた。

「お、美味しいいい……」
「そう？なら私も朝の5時に店主を叩き起こした甲斐があつたわ」
「……出禁にならないと良いですねアルセイドさん」

シエロの苦笑にエコーがギロと鋭い視線を送る。やっぱりこの子怖い。

「それは心配有りませんわ。我がアルセイド家に楯突けばあのような下層街の店いつでも捻り潰してやれますもの」

「エーコ……そういうのは良くないよ。それに私のお気に入りのお店潰しちゃ駄目なんだから」

「ふふ、わかってるわよ」

エコーの様子を見る限り、俺のシャロンらしさはなかなか板に付いてるんじゃないか？そりゃあそうだ。何年あいつの兄貴やつてたと思ってるんだ。生まれてからこの十数年ずっとそうしてきたんだ。たかだか一年ちょっと離れた位でそれを忘れるカロン様じゃねえ。

その事実を実感できて、カロンは満足気に息を吐く。そしてふと、

シエロから送られる視線に気が付いた。

それはさつきまでのカロンを見る目ではない。目の前に、本当にシャロンがいるような……愛情深い視線を注いでくれている。それが演技だというのなら、この男も相当な役者だ。

(それとも……)

シエロにシャロンを錯覚させられるほど、俺の演技は素晴らしいのだろうか？ そう思うとカロンは嬉しくて、鼻が高くて……少し寂しく悲しい思いに囚われた。

「エーコ、ケーキって二つだけ？」

「シャロンの食いしん坊！」

そこが可愛いと言わんばかりにエコーが頭を叩く振りして頭を撫でてくる。

「歌姫たるもの、体調管理も仕事の一環！ プロフィールに嘘は駄目よ？ 嘘にならないように食べ過ぎで体重増やしたりは駄目なんだから」

「いや、そうじゃなくて。シエロのは無いのかなって」

「なんで私がああのお男なんかにお土産買わないといけないのよ」

「本人前に、素が出てますよアルセイドさん」

シエロのツッコミに、エコーがおほほと誤魔化し笑い。

(俺がシャロン……これがシャロンなら、きっと)

相手が恋人でなくても、もしそれが俺だったとしても妹ならこうするはずだ。

「シエロ……」

「何？シャロン？」

カロンの手招きに応じるシエロ。寝台の横へと膝をつき、顔の高さを同じにする。

「それなら半分こしよ？はい、あーん」

声が恥ずかしさで裏返らなかつただろうか。これはあくまで演技だ。そう言い聞かせて顔が熱くなるのを抑えようとする。

「そ、それなら不要よシャロン！私もう一個買ってくる！っていうかフルトブランド様！このケーキあげますわ！」

必死にそれを阻止しようとするエコーの前で、面食らったようなシエロが優しく微笑み俺の差し出したフォークを啜える。

「本当だ、美味しいねこれ」

目の前で華やぐ微笑みに、此方の顔まで赤くなる。

「で、でしょでしょ！？……って私店の場所も覚えてないんだけどね！あはははは！」

相手は女シエロじゃなくて男シエロだというのに、照れるというのは気が引ける。事故とはいえ二度もキスしておいて、今更間接キスクらいが何だというのだろう。浮かれる自分が恥ずかしい。

「くうっ……こんなことなら違うケーキにすれば良かった！」

ギリギリと聞こえる音は何だろう。視線を横へ移すとエコーが美少女面を歪ませてハンカチ噛み締め齒ぎしりだ。

「え、エーコ？」

「あ、あらもうこんな時間っ！近い内にまたお見舞いに来るわねシャロン！」

来た時と同じ勢いで扉の外へと出ていく歌姫。彼女に付き添うように、扉の前でスタンバイしていたアルバが彼女の退場に従った。

「ふう……」

そう溜息を吐くシエロの顔には二度と来るなど書いてある。

「なんか、すげー子だな……」

「ご覧の通り彼女はシャロンにベタ惚れさ」

「え？」

「もしも彼女が男なら、僕は彼女に暴行した犯人として真っ先に彼女を疑っただろう。そのくらいの危険さで彼女はシャロンに惚れている」

淡々と始まったシエロの解説に、カロンは目が点になる。

「だってあの子女の子だろ？」

「ああ、女の子だよ。それでも女の子は女ではなく人間さ。誰に何に恋をするかなんて誰にも解らない」

彼女の側面を特に否定もせずシエロは肩をすくめた。

「でも、君の演技で助かった。今度下町のくろね亭に情報収集に行ってみよう。その時はランチもいいかもね。本当、美味しくてびっくりだ」

「シャロンはお土産とか買って来なかったのか？」

「仕事帰りには閉まっているし、休み時間を買ったら悪くなってしまうから無理だったんだろうね。デザートは数に限りがあるから大変なんだとも言っていたよ」

「そっか」

ちよつと落ち込んだような表情のシエロが可哀相で、それにカロンの自身こんな美味しいケーキを出す店だ。ランチの方も期待できそうだと思う。

「それなら俺もランチ食べたい。今度行こうぜお前の金で」

「あはは、僕の歌姫様はお金がかかるな。うん、いいよ」

カロンの無遠慮な言葉にシエロが少し持ち直した所で、聞こえてくる足音。そしてノック音。

「シャロン様、シエロ様、ネレイド様がお見えです」

「ああ、ご苦労アルバ」

再び開いた扉。躊躇いがちに踏み居るは、昨日舞台で見た綺麗な金髪の少女だ。エコーとは違う方面に気が強そうな釣り目が今日は少し和らいでいる。そのためか皮肉なことに昨日よりもウンディーネ役に似合っている気さえした。

「ご機嫌よう、フルトブラント様。それからシャロン……」

礼儀正しく優雅に一礼する歌姫シレナ。成金とはいえ育ちは良い

のだろう。その仕草には品がある。格式高い貴族のはずのエコーがあんな登場だったのだから、その仕草一つで好感を覚えてしまうのも無理はない。

カロンのさえそうなのだ。それならエコーに手酷い扱いを受けたシエロはもつとそうだろう。そう思えばシレナに向かう微笑みに何か下心があるのではないかとカロンは苛立つ。

昨日見た劇でもそうだ。この子、シャロンと同じウンディーネ役だったし。ぱつと見はその恋敵の貴婦人っぽいし。シエロは浮気者の王子の子孫でもあるんだから、こういう子もタイプかもしれない。そう思うとカロンの手はシエロへと伸びる。

「痛たたたた、何するんだシャロン」

本当は頬を抓ってやりたかったが客人を迎えるべく立ち上がったシエロには、寝台で身を起こしたカロンからは届かない。仕方がないので尻を抓ってやるに留めた。

「ベーツーにー……なんでもないですわー」

涙目のシエロから視線を逸らしつつ、何故今シエロは女ではないのかと自分の不運さをカロンは呪う。どうせなら女が良かった。女の時に合法的に尻を触れる機会はないものか。

「あの……これ、うちの使用人が作ったものだけど」

エコーが持ってきたケーキの箱を見て申し訳なさそうにシレナが包みを取り出した。

その菓子にはどうにも見覚えがあった。材料は違うがカロンの親友が度々差入れにしてくれるそれに似ていた。だからだ。うっかりこぼしてしまった。

「あ！これってもしかしてオボロスの！？空に来てたの！？」
「貴女記憶喪失なんじゃないの？」

しまった。そう思ったところ、シエロがさらりとフォローを努める。

「ああ、そうなんです……彼女は空に来てからの多くが思い出せない状態なんです」

「まあ……」

助かった。シエロのその一言で、下町での話は普通に出して良いことにもなった。これは助かる。

「そうだ、お菓子には何か飲み物が要るね。アルバ、新しく仕入れた豆はどこに置いていたかな」

自然な流れでシエロが執事を引き連れ退室。シエロのフォローが無くなるのは不安だが、任せられた仕事があった。

「あの……シレナさん」

「……シャロンが私をさん付けなんて、何だか気持ち悪い」

「それじゃあ、シレナ」

「一度しか言わないわ。私の愛称はシレネ」

「それじゃあシレネちゃん。これ……シレネのかな」

首飾りを見せると、途端にシレナの顔が青ざめた。

「私が殴られた現場の近くに落ちてたんだって」

「私はやってないわ！私が見た時にはもうあんたが俯せで倒れて

たっ！

「うん、だから私もそうは言っていないよ」

この反応、この持ち主は間違いなくこの歌姫に違いない。カロンは確信した。

「それにシレネちゃん、私の脈まで確かめたわけじゃないでしょう？」

「そ、それはそうだけど……あんなに血が出てて、あんだ何ともないの？どうして生きてるの？」

「まだ頭痛いよー。あつちこつち怪我也治ってないし。だけどここのシャロンちゃんがそう簡単にくたばるとでも？」

「確かに殺しても死ななそう不貞不貞しさはあるわね」

「あはは、良く言われるよ」

「……………そういえばあんだ休憩時間にブラッドオレンジジュース飲んでたわね。土産に買ってたわね。……………まさかっ！あんだそれぶちまけたんじゃないでしょうねっ！？人に心配かけさせるなんてっ！私あんたが死んだんじゃないかってっ！昨日も幻覚だったんじゃないかってエコーの馬鹿に馬鹿にされて本当大変だったのにつ！」

突然怒り狂ったシレナに胸ぐら掴まれる。シャロン……確かに昔からブラッドオレンジ好きだったなあ。俺も好き。妹との思い出をしみじみと思い出しながら、カロンはシレナにがくがく揺すられる。だがこれ以上揺すられてたらうっかり胸に触れられて男だとばれてしまうかもしれない。

一応シャロンのバストサイズに合わせての詰め物をさせられたが、兄としては妹のシークレットナンバーを知ってしまったことになんだか微妙な心境になったが、それでも一応完璧に変装したのだ。しかしそれがうっかりずれたりしたら堪らない。

「痛いよシレネー……」
「ご、ごめんなさい」

傷が痛む振りをすればシレネはぱつと手を離す。

「……それ、中身見た？」

「うん。下町のこと思い出す切っ掛けもこれだよ」

当然嘘だがそう言えば、シレネは納得してくれた。

「はい」

「返してくれるの？」

「え、だってこれシレネちゃんのですしょ？」

そう告げれば、乱暴に首飾りを奪い返すシレネ。目を逸らしつつ風変わりなお礼の言葉を吐き捨てる。

「………これからは精々気をつける事ね。私もあなたなんか死んでしまえば良かったのにつて、多少なりとも思っているわ」

「それってオボロスのこと？あはは、大丈夫大丈夫。オボロスは身内みたいなものだしちょっとそういうのは私無理って言うか、シエロもいるし」

「違うわよっ！」

「え？好きじゃないの？」

「嫌いとは言っていないわよ！ってそういうことじゃなくてっ！」

真っ赤になって俯くシレネ。

「私……あなたに役を返すつもりで、上層街に行ったの。あなた

が今日は早く帰るんだって言ってエコーの誘い蹴ったの見たから」

「エコーの誘い？」

「うん。何でもお昼奢って貰ったお礼にディナー奢ってあげるって言われてたのよあんたは。別にこれは私もたまたまくるねこ亭でランチ食べてたから聞いただけで、あそこのランチ安くて美味しいから選んだだけで、一緒に食べたかったとかそんなわけでもないし勘違いはしないでよね！ていうか私が同じ店にいるのあんた達気付かないし……」

面倒くせえこの女。可愛い顔してるけど面倒臭いのが勝る。こんなのに好かれるとはオボロスも可哀相に。そう思いながらもカロンは頷く。

「だから夕方にここに来ればあんたに会えるかなって思ってた……」

「役を返すってそんな……昨日あんなに立派にやれてたよ」

「自信、なくなってたの。あんたが役蹴ってから、エコーの奴ますます風当たりきつくなって。それが私の技術不足なら仕方ないわ……だけどあいつ、私の全否定に掛かってるんだもの……辛いわ」

「シレネ……」

「あんたに私の気持ちが解る！？憧れの人にあんな風に真正面からどうでも良いことまで貶されまくるの！！あんたにはわからないでしょうね！あんたみたいな歌姫！誰かに憧れたこともないんですよよー！」

「そんなこと、ないよ」

シレネは歌姫エコーに憧れていたのか。先程の嫉妬女の側面だけでは「え？なんで？え？どこに？」と思わないでは居られないが、昨日の舞台を思い出せばわからなくもない。この子はあの演技をすぐ傍で見っていたのだ。惹かれるなどというのが無理がある。相手は歌姫シャロンと並ぶ上層街随一の歌姫らしいし、選定侯家の貴族だ。

成金商家の娘が憧れる要素は揃っている。

新たに与えられた情報を吟味しながら、カロンはシャロンの演技に努めた。シャロンならここで何というだろうか。それを必死に考えながら。シャロンは何故この子に役を譲ったのか。それを考える。

「私はここに来てからのこと思い出せないけど……昨日のみんなは凄い輝いていた。私は昨日のシレネ達に憧れた。私が貴女に役を譲ったというのならそれは、私が貴女のウンディーネを見てみたかったんだと思う」

シャロンは哀れみでそんなことはしない。するはずがない。それが相手を傷付けると知らないはずがない。あの子は人傷みに敏感だからそうするとしたらそれは、違う意味。

「私の、ウンディーネを……？」

「うん。シレネちゃんならあの役をどう演じるんだろう。そう思っ
つてわくわくしたんだと思うよ」

「あんたが、私の演技を見たかったっていうの？」

「だって私のライバルはエーコじゃない。シレネちゃん」

無論シエロの言葉の受け売りだが、その設定を俺は信じる。

「昨日のシレネちゃんを見て、それだけは思い出したよ」

「シャロン……」

しかし不味いな。上手く行きすぎた。最悪この子には正体ばらし
ても良いと言われたのに、まんまと騙されてくれてるよこの子。捻
くれてはいるが、良くも悪くも素直な子なのかもしれないと、カロ
ンはシレナを結論づけた。

「あ、でもシャロンちゃんには愛しのアモーレシエロがいるから恋のライバルにはなる気ないからね！」

「私はあるな女々しい男に興味ないわよ！」

「え、ええと……珈琲持ってきたけど、お邪魔だったかな」

相変わらず間の悪いシエロ。うつすら涙目。そこが女々しいと言われる所以か。これにはカロンも否定が出来なかった。しかしシャロンならばここで……

「きゃああああ！涙目のシエロ可愛い！いいいいいい！！こっちおいでおいでー！シャロンちゃんがなでなでしてあげるっ！」

我ながら自分の口から漏れる言葉が恥ずかしいが、シャロンならきつとこうする。下町で泣いてる子供見つけると大体こんなテンションだった。

「え？」

でも中身がカロンだと知ってるシエロは流石に戸惑う素振りを見せた。シレナはそれを第三者の前ではいちゃつくことに抵抗がある貴族の矜持と見て取っただらしい。

「なんか、お邪魔みたいなのは私みたいね」

出された珈琲をすすりながらシレナが苦笑。コップを皿に戻して早急に立ち上がる。

「いちゃついている暇があったら歌の練習もしなさいよ！復帰したときにあなたのレベルが下がってたら怒るんだから！」

「ではお送りいたします」

アルバが一礼、シレナを連れて再び下がる。その足音が完全に消えた後、シエロが視線をカロンへ向けた。

「どうだった？」

「やっぱりあの時計はシレネのだった」

「そっか」

「シレネはウンディーネの役を断りにシャロンに会いに来たんだって。憧れのエコーに大分苛められて精神的に参ってたとか」

「なるほど……」

「あとシャロンは休憩時間にブラッドオレンジジュースを買った。土産にも買ったらしい。シレネには血だまりがそれだと思わせ話を進めた」

「ふむふむ」

「シャロンはくるねこ亭でエコーにランチのお礼にとディナーに誘われたが、お前との食事のためにそれを断つたみたいだな」

「……そうか。それじゃあ一度くるねこ亭には行ってみる必要があるし、ありそうだね。アルバ」

シエロの声に、扉の前に戻ってきていた執事が室内に入る。

「幸い先のお二方は本日下層街には予定が入っておりません」

「歌姫ドリスは？」

「今日は下町での活動のようです。昨日のお礼とお見舞いに、近日に窺いたいと従者の方が訪ねてきましたが、それだけ伝えて帰って行きました」

「よし。それならカロン君！善は急げだ！今日はランチに行こっか！」

「しかしシエロ様、そのお姿では危険かと」

さつと懐から取り出した小瓶。それを勢いよくシエロにぶっかけるアルバ。とんでもない使用人が居たものだ。しかもっとけしからんのはシエロの胸だ。今のは海水だったのか。シエロは再び女になっている。

「ぶはっ！何するんだよ、……うあ、びしょびしょだ」

「では此方をお召し下さい」

愉快げに何処から取り出したのか解らない女物の服を、シエロに着せようとすする執事。

「ちよっ！いきなり脱がせないでよ！カロン君も見てるんだ」

「主の着替えを手伝うのも私の仕事にございます」

シエロが嫌がってるせいか無理矢理暴漢に襲われてる淑女の図にしか見えない。止めないと思うのだが、嫌がる女シエロの顔と声にドキドキして声が出なかった。まったくいつ見てもけしからんバストをしていやがる。あれは視界の暴力だ。横暴だ。故に目がそれない。

「シエロ様の豊満なバストのためにはしっかりとくびれを見せてメリハリが大事でございます」

カロンの視線に恥じらうシエロをお構いなしに、アルバは着替えを進めていく。

「なんだ、下着は着替えないのか」

「がっかりしたような声出さないでよカロン君……」

胸から視線を下に落とせば、ひいいと脅えたシエロの声。

「見ちゃ駄目！駄目だから！駄目だつてばカロン君っ！」

「お前何で女物なんか着てんだよ……」

昨日の女装のまま眠ってしまったんだろうか。いやそれならどうして男に戻ってるんだ。

「シエロ様は生来そそっかしくいらっしやいます。言うなればドジっ子です。予め女物の下着を着用していれば最悪何かあっても元から女と誤魔化すことが可能です。仮に男の時点でそれを見られたとしても変態と呼ばれるだけですみます」

「そんな理由で君は僕に女物の下着しか買つてこなくなつたんだよねアルバ」

「お言葉ですが、シエロ様の下着選びにはシャロン様が参加していたことをお忘れですか？」

「誕生日に女物の下着一式セットとかエロい衣装笑顔で渡された僕はどうすれば良かったんだろうか」

「カードには“これでエロシエロに進化してね”とか書いてありましたね。現に着せられていらっしやいましたよねシエロ様。それはそれはシャロン様のテンションも鰻登りで昨夜はお楽しみでしたねとしか言いようがありませんでしたが」

「あれからしばらくははいずり回る手の感覚が三日くらい残つたなあ……シャロン」

シエロは最愛のシャロンに随分と遊ばれて来たらしい。ますます記憶の中の妹からの乖離が激しいが、何だか納得してしまいそんな素質が妹にはあつたような気もする。好きな物は徹底的に弄り倒す傾向があつた。近所の野良猫はシャロンに撫でられすぎてストレスで禿げた。近所の捨て犬はシャロンにもふもふされ過ぎて常に動か

ない石のような無気力になった。本人は一緒に遊んでいるだけのつもりだったのだろうがオボロスの家には小鳥はシャロンに歌合戦で負けて無口になった。その悪びれない無垢故悪意じみた愛情が恋人という対象に向かった場合どうなるのか、俺は今それを見せられているのかもしれない。

「ですが、これもシエロ様の身を案じるがため。王家の秘密保持のためと私も心を鬼にして……」

「その割りにあんたなんかシエロの着替え手伝う手が嫌らしくねえか？」

その手は決してその胸や尻を揉んだりはしないが、着替えを手伝う振りで指で手の甲で際どい部分に触れている。なんとというか卓越した技術を持つ痴漢のようだ。それで手がかりを掴めず訴えるに訴えられない被害者のような顔をしたシエロがいる。

「口を慎め汚らわしい下町小僧が」

いきなり汚い言葉使いになった執事に押され、言葉を失うカロンの。

「こんな美女が前にいたら当然触るのが男だろう。大体脱がせた時にこの顔で男物の下着でも出て来い。気が萎える」

「シエロ、本当にこいつ使えるのか？ リストラした方がいいんじゃないのか？」

「ああは。もしもシャロンが居なかったら僕、いつか彼に食われてそうな気がして来たよ」

「いや、笑い事じゃないからな。危機感持てよな。何うまい冗談言ってみたいな顔してるんだよ。こいつ本気でやりかねない顔してんぞ。今のすっごい変態面してる」

「いや、だってそりゃあ呪いでこんな身体になるけど僕は男だよ。

アルバだつて紛い物の女よりは普通の女の子の方がタイプだろう？
そんな身の危険なんてあるわけないじゃないか」

「まったくその通りでございます」

「あはは、だつてよカロン君？」

駄目だこいつ……まるで危機感がねえ。実際襲われるまで何も解らないに違いない。一瞬身の危険を教えさせてやろうかとも思ったが、「演技の練習？」とか首を傾げられたら俺が凹む。

「アルバの女好きは根っからだよね。昔の方が優しかったのは僕を女だと思つてたからとか呪い発動時の方が優しいのもその所為だったりして」

「まったくその通りにございます」

「あはは。だつてよカロン君？むしろ気をつけた方が良いのはカロン君だよ。シャロンみたいで可愛いし」

「いえシエ口様。私にも選ぶ権利というのがございます。下町の溝鼠などに食指が動きません」

「て、てめえ……好き放題言いやがつてっ！」

「大丈夫だよカロン君は可愛いよ！僕は余裕で食指が動くよ！」

「阿呆かつ！」

そんな風に褒められても嬉しくない。どうせ“シャロン”にそっくりだからって話だろ。第一口ではそんなことを言う癖に、実際は何もしない。ああ、その軽口が憎い。縫いつけるか塞いでやりたい。一発殴つてやろう。そう思つて顔を上げた時……鼻血が出た。ドレスを着る前の下着とコルセットにガーターというなんともまあ……あれな姿だ。誘つているとしか思えない。

「くそっ……」

「おやおやカロン様。確かにシエ口様は美しい方ですが、その

精神は男性でいらつしやいます。それを理解していながらその様とは私と貴方のどちらが下劣で低俗な変態なのでしょうね」

アルバには敬語を使われる方が嫌味だと感じるのは何故なのか。カロンはアルバを睨み付けたが鼻血姿ではどうにも決まらない。

「もう、アルバ！カロン君を苛めないでよ。カロン君は思春期だし紛い物の女の裸でも見せられたらそれだけで鼻血が出てしまうようなラインハイトでピュアナ子なんだから」

「シエロ様は一度ラインハイトとピュアの意味を調べ直すことをお勧め致します。そんなことを言っているからあの下町小娘……げほん、シャロン様に襲われたり掘られたりするんです」

「え？」

一瞬何を言われたのか解らなかった。しかしシエロは頬を赤らめている。

「や、止めてよアルバ！そういうこと言つのは！」

「おいシエロ、俺の妹は女だぞ？お前らこそなに言つてんだ？」

「おやおや……実のお兄様の癖にそんなことも知らなかったんですか」

「いちいち勘に障る奴だなおまえ」

大げさに溜息を吐くアルバにカロンは拳を握る。シエロを殴れない分こいつを殴ることにしよう、これから。

「あ、あのねカロン君。まだ君に一つ言い忘れてたことがあるんだけど……シャロンは唯才能があるだけじゃなかったんだ」

「どういう意味だ？」

「シャロンも僕と同じで呪われていた」

「シャロンが呪われる？俺らの家系に人魚と王子の血でも入ってるのか？」

「ううん、そうじゃなくて……一つ昔話をしよう。この国に伝わる人魚の話だ。この国で広く知られるのは二人の結婚後の話、そこからの浮気の話だ。だけど呪いはそれより以前……語られない部分にある」

「……語られない部分？」

「海神に呪われたのは王子だけじゃない。人魚ウンディーネもなんだ。あの劇はその二人よりも昔の話だからああだけど、その二人の悲恋から海神は人間界に娘を送り込むことを止めたのさ。人と水妖の恋が破局する……魂を得る喜びの先に魂を失う悲しみがあるのなら、魂など持たためま滅んだ方が良く。その方が娘達にとっても幸せなことだと考えた」

一度の裏切りは、人と水妖の世界の交わりさえ絶つ原因になったのだとシエロは語る。

「つまり僕のご先祖様の時代では、水妖と人の恋はタブー。それは許されない恋だった」

「へえ……そうだったのか」

「うん。だから海神は人間と想い合った娘と、王子を呪った。他の娘達が危険な恋に胸を躍らせることがないように、見せしめだよ」

「自分の子供を呪うなんて……酷い親だな」

「他の娘達の幸せのために心を鬼にしたんだよ。再び娘達が裏切られることがないように。それも親心さ」

シエロは自身を呪う神をも否定はしない。不思議な人だとカロンは思う。

「王子にかけられた呪いは僕のそれと同じ。海水に触れれば性別

が変わる呪い。海神の娘にかけられた呪いは……恋した相手と同じ姿になる呪い」

「え？」

「男に恋すれば男に。女に恋をすれば女に。犬猫に恋をすれば犬猫に。鳥に恋すれば鳥になる。虫に恋すれば虫になる。……勿論性別まで同じ物にね」

「それって何か意味があるのか？」

「大ありさ。例えばカロン君……もしも今の僕が君の恋人で、結婚してこれから初夜を迎えようとする時に……突然男になってご覧よ。大抵の人はそこで百年の恋も冷める。その程度なんだよ、人の恋なんて」

溜息を吐くシエロの言葉。咄嗟に否定の言葉は出なかった。

「そう、そうなればきつと……いつかは冷たく罵るはずさ。海神の酷いところはそう……二人の結婚式の後にその呪いをかけた。花嫁が花婿を拒むと言うことは、世継ぎを必要とする彼の立場からすれば大問題。他の妻をと考え始めるのも無理はないよ」

「でも……」

「うん。でも海神の娘だって辛いはずだよ。正体を告げれば嫌われるのは目に見えている。このまま隠し通せば少なくとも罵られるまでは傍にいられる。彼女はそう考えたんだろうな」

どちらを選んでも破局は避けられない。そういう呪いだ。酷い話があった物だ。二人を呪い、今なおシエロを崇る海神に、カロンは苛立ちを覚えた。

「だけど他の女と彼が寄り添う様をもう見ていられなくなっただ。彼女は罵られる覚悟で彼に正体を明かした。こんな私を見て、それでも愛してくれますかと」

「正体、ばらしたのか？」

どうせ別れることになるのなら、自分の手で。そう思ったのだらうか。

けれどそんな勇氣ある行動、よく選べたものだと言わんと驚くカロンの、その勇氣に運命が味方したのだと言った。

「彼はそこでこれまでの彼女の辛さを思い知った。彼女を厭い始めた理由に自身を襲う呪いもあった……しかし呪われたのは自分だけではなかったんだって知って、前にも増して彼女が愛しくなつたんだらう。の、……呪われたまま二人は結ばれて、そこで二人の呪いは解けた」

シエロが恥ずかしそうなのでカロンは詳細にはツツコミを入れないうことにしたのだが、アルバの方は俯く主をからかいたくて仕方がないようだ。

「はて？浅学の私にはそこるところよくわかりませんねえシエロ様？何がどうなって二人が結ばれたんですか？その可愛らしいお口からはつきり言っていただきませんと。誰が何処に何をどんな感じにどんな体勢で？」

「そ、そんなの僕は知らないよっ！」

もう止めてと両耳押さえる女シエロにまた一筋、カロンの鼻から流血が出た。

「と、兎に角だよ。そこで一度めでたしめでたしになるわけなんだ。だけどその数年後に王子が彼女を裏切った。もう今度こそ許せないという海神は彼を海への生け贄と所望した。そうしなければ国を滅ぼすと怒って……それで海に捧げられることになった王子に海

った時期がある」

「ま、マジで？」

「でもそのままだとシャロンの命が危ない。歌姫としての仕事に支障も出る。だから僕らは呪いを解くことにした」

呪いを持つて言うことは、つまりそういうことをするってことだよな。カロンはまた詳細を突っ込むのは止めておいたが、黒衣の男は容赦ない。

「んじゃ、貴方に海水ぶっかけて女にすればいいじゃない。それとも今のままやられたい？」との声の後にシエロ様の寝所からはそれはそれは艶やかな悲鳴が上がったのを私はまだ覚えておりますが」

「嫌ああ！わ、忘れてアルバっ！！うっう………だってシャロン激しいんだもん。痛かったなあ………あれは流石に」

「し、シャロン………」

一応元はお前が女なんだから、そこで抱かれてやるという選択肢はなかったのか我が妹よ。ああ、でも確かに一度そう決めたら誰が何を言っても聞かないところは昔からあった。ミックスベジタブルは何が何でもニンジンだけ毛嫌いし残す執念深さがあった。そんな親の仇を見るような目でニンジンを見る妹の心だけが当時は理解できなかつた物だ。カロンはそこでやはりグリーンピースだけ払いのけた皿を差し出し固い握手を交わし妹とニンジングリーンピース交換条約を交わしたことを思い出していた。ちなみにコーンだけは油断するとどちらの皿からも消える。親父がコーンが好きだったのだ。年甲斐もなく我が子の皿に少なめにコーンを仕分けるといふ非道な側面を持った父親だった。後にシャロンとコーン死守戦線同盟を結んだのは別の話である。ってそんなことは今はどうでもいい。シエロの話に耳を傾け直す。

「その後はシャロンの呪いも半分解けて、僕と同じ物へと変わった」

「なんで完全に解けなかったんだ？」

「僕らまだ結婚してなかったから」

「ああ、なるほど」

「でも塩水と真水で性別を変更させられるというのは歌姫シャロンにとって凄いメリットだった。僕とは違うところと言えば、発動条件。彼女は全身水に浸かるか或いは、水を飲むことでシャロンの呪いは発動。だから人前ではよく水じゃなくてジュースを飲んでたね」

シエロとは呪いの度合いが違うらしく、随分と勝手が良い。切り替えが便利に出来ているようで汗や涙程度で変身することはなかったようだ。しかし……

「メリットって……？お前と日替わりで色々楽しめるって話か？」

「な、何てことを言うんだカロン君……そ、そりゃあシャロンの気分であっちこっち僕は振り回されたけど」

シエロが遠い目をしている。よくも俺の可愛い妹を汚しやがってと殴りかかった相手が、その可愛い妹に汚されたと知った日に、兄とはどういう目をすればいいものなのか。この様子から見ると、男のままの時にやられてしまったことがあつたんだらうな。………
………ええと、それくらいされたら、まあ………お相子でシャロンの初めてがシエロに奪われても仕方がないような気もする。

「メリットっていうのは歌姫として。彼女の二つ名は奇跡の歌姫。彼女は性別を変えることで本来女性ではあり得ない音域を行き来出来たんだよ」

「あつ……………」

「少年と少女、女と男の声をさせる彼女に歌えない歌はない。他の歌姫達と絶対的な差を見せつけたのは彼女の才能と努力のみならず、この呪いのためでもある」

「シャロン……………」

「凄い。シャロンは呪いを歌に変え、歌姫になったのだ。そう思うと自分には、妹ほどの才能は無いように思える。シエロは俺を買い被りすぎだ。本当に俺で役に立てるのか、不安になる。」

「彼女は人魚の生まれ変わり……………そんな彼女が人魚になって海神との対話に望めれば、きつと彼との和解も可能だ。下町を襲う水害もやがては消える……………全てが上手く行くと、僕らは信じていたんだ……………」

「シエロ……………でも、俺は」

「さて、長話でお腹空いたね。久々の外食だ！楽しみだなあ……………行こうかカロン君！」

「シエロ様、そのままの格好ではシャロン様が目立ちます」

「でもシャロンとして聞き込みに行くならそれが自然だろう？僕は知り合いの歌姫の振りでもするよ。生憎歌姫シエロは神出鬼没さ」

「シエロ……………？それって昨日使った偽名？」

「半年くらい前かな。シャロンの仕事で欠員が出てさ、……………あの頃のシャロンには中層街で初めてメインの役を貰った大事な仕事だったんだ」

それまでもちよい役は貰っていたがメインの役、初めての「大舞台」だったんだとシエロは言う。絶対成功させてやりたかったと。

「だけど王子役が重傷でね……………中止になりかけた。だれかそれなりに歌えて見栄えの良い歌姫は居ないかって話になったんだけど、

そんな子当日に探しても無理だろ？そこで僕はシャロンに有無を言わず塩水をぶっかけられた」

「シャロン……」

「確かあの日のシエロ様はシャロン様に楽屋に連れ込まれ呪いを発動され“引き受けないとその胸もう1カップ上がるくらいに揉みしだく”とか“そのでつかい胸が本来の使い道が出来るように中に出されたいわけ？サッカーチーム作れるくらい孕ませるわよ”だとか“これでも領かないなら私も呪い発動して引き受けるって言っても後ろも前もあん言わす”とか脅されてましたね」

「だ、だからアルバ！そういうことは言わないでっば！シャロンのお兄さんの前なんだよ！？」

「し、シャロン………」

お、女の成長って早いんだな。一年そこらで自分の知る妹像から離れていくシャロンの姿。いや、確かに女シエロの胸は本当に魅力的だが。

「その後は最終的に“引き受けてくれたら今晚は大人しく私が抱かれてあげるわよ”とか言われて引き受けたんでしたねシエロ様。いやはや、そのような外見でもシエロ様は男性でいらっしやるんですねお可哀想なまでに」

「うう、……何とでも言う方がいいさ。そりゃあ僕だって男だしシヤロンにそういうやましい気持ちはあるけど、僕は別にシャロンとなら何でもいいしどっちでもいいし」

「なるほど。結局俺のシャロンに手を出したって言うのは事実なんだな」

「ご、誤解だよカロン君！いや、そんなに誤解でもないけど」

「おい下町小僧、何故そこで私の足を踏む」

「カロン様だ、クソ執事。女に手なんか挙げられるか」

「ちよ、ちよっと二人とも喧嘩しないでよ！あー！」

シエロが自分の足に躓いてテーブルの上のカップを引つ繰り返す。

「やれやれ。流石はシエロ様。一日一度は何もないところで転ばれる術にかけては他の追従を許さないだけありますね」

「ぼ、僕だつて直そうとはしてゐるんだよ」

「いえ、それはおそらく死んでも治りません」

「ひ、酷いよアルバ！……嗚呼！ごめんカロン君！折角の服にシミが……っ！アルバ！すぐに着替えと洗濯の準備を！僕は掃除をするよ」

「いいえシエロ様。もう暫くでランチの時間にございます」

アルバはさつとシエロの手からモップと雑巾を奪って、俺が昨日着た服をそのまま押しつける。

「行ってらっしゃいませシエラ様」

優雅に一礼する男は、そのままカロンとシエロを廊下へと追い出した。渡された衣服からは、昨日密着したときに移されたのかシエロがつけていた香水の香りがする。

（あの男！洗濯しないまま寄越したな！）

そう思いながらも、ほんの少しだけ有り難いような気がしたのは多分気のせいだ。カロンは必死に自分に言い聞かせた。

9：黒衣の男と見舞客（後書き）

多くは語りませぬ。

エロー……ああ、エロー。

シャロン……うん、シャロン。

10:くろねこのとおりみち(前書き)

エロス注意報。 深読みするべからず。

今回は精神はB Lだが肉体的にはN L警報

10：くろねのとおりみち

海神の娘

『貴方の心を彼女から、私へ移す言葉が一つどこかにないものでしょうか？

彼女が嫌いなわけではありません。唯、それ以上に貴方が愛しいのです。

それか物語のように、口付け一つで何もかも上手くいかないものでしょうか？

それだけで私の心は貴方から離れられませんのに、貴方は今日もふらふらと……

あの海に浮かぶ海月のようですわ。』

*

「何だよあの男！格好付けやがって！」

「ふふふ、でも頼りになるでしょ？」

「どうせ俺は年下で頼りねえよ」

「そ、そんなこと言ってないよ！」

下層街をシエロと歩く。腹を立てているカロンの後ろを慌ただしくシエロが続く。

昨日は夜だったから良かった。昼間だとシエロに視線が向かう。そういう男共を見つける度眼飛ばして歩くカロンは忙しい。

周りの淑女達からは自分は可愛いナイトだこと笑われているようだ。それは微笑ましいと言うような物ではあったが多少は嘲笑の意もあつたのかもしれない。それはシエロにも届いていたのか、少し恥ずかしそうだ。

「あのさ、カロン君。僕たちつてさ、端から見ると……」

恋人に見えるのかな。そう言われると思って、取り乱さないよう
予め答えを用意しておこう。そう思ったカロンだが……

「シヨタコンのいけないお姉さんとそんな悪女に騙されてるいたい
けな男の子の図に見えるのかな……」

おろおろとするシエロの見当違いの図にカロンは思わず転びそう
になった。

「お、お前なあ……誰がシヨタだ！誰がガキだ！何だその斜め45
度にぶっ飛んだ発言は！」

「いや、だって周りの人笑ってるし。僕ってそんなに変態みたい
な雰囲気出てるのかな」

「いいか！普通変態はそういう心配しない！しないから変態なんだ
！よってお前は変態じゃない！わかったか！」

「は、はい」

「大体10も20も年が離れてるわけでもねえのに細かいこと気に
するなつてんだよ。どうせ3つか4つ程度しか変わらないんだろ？」

「う、うん……そうだけど」

「なら、気にすんな。行くぞー！」

これ以上アホらしいことをシエロの口から聞きたくない。無理矢
理その手を掴んで歩き出したカロンの背中にシエロの声。

「あ、あのさ！カロン君……」

「まだなんかあんのか？」

「ええと、あのね……道、こっち」

もう100メートルは進んで来た後ろの道を指差され、流石にカロンも眉をつり上げた。

「そういうことは早く言え！」

「い、ごめん。僕すっかりしてて」

詰まるところ、エコーのケーキの箱に付いていた地図さえあれど……シエロもくろね亭の位置を知らなかった。

*

「はあ……」

「何だよ急に」

ようやく見つけた店は客で賑わっている。なんとかランチには間に合ったがデザートの方は完売だ。店主の頬が曇っていたのは多分エコーの所為だろう。

そんな店内で席について……食事を待つ間、にこにこシエロは笑いながらカロンを見る。

「いや昼間からこんな風にゆっくり出掛けるの、本当に久々だなあって思つて。お昼に外食なんて本当暫くぶりだ」

外食は昨日もしただろうに。久々の外食とシエロは言っていた。ああ、そういうことかとカロンは思いながら水を啜る。

シャロンが有名になってからは下層街からのファンに目の仇にされていたと聞く。シャロンとデートするなら比較的ファンの質にも落ち着きのある中層街、上層街となったのだろうな。

「僕は結構この下層街の賑やかさが好きなんだ。……色々あつて最近は全然来られなくなっちゃったけど」

昨日は通り過ぎただけだったが、下層街には確かに活気がある。街角で歌う歌姫達。笛や弦、それからあれはアコーディオンか。様々な音色が溢れる。だからこうして食事を待つ時間も苦ではない。天上の音楽。いつも船へと落ちてくる音楽はこの街から聞こえて来ていた物だったのか。

下からと上からでは見える景色がこうも違う。確かに悪くはないとカロンも認めてやった。けれどシエロは別のことを言う。

「でも一昨日初めて降りた地上は、下町は……何だか別世界みたいで楽しかったよ。時間があればもっと色々見たかったんだけどそうも言つていられなくてね」

「ふうん……」

「僕には絶対叶わない夢だけど……いつかあの青い海を泳いだりぶかぶか浮かんだり出来たらどんな気持ちになるんだろう。そう思つてあの青を見ていたんだ」

不思議なものだ。下の人間は空に憧れるのに。空に住むこの人は、地上をそんな風に眺めていたのか。人間はつくづく無い物ねだりをする生き物。シャロンを失つてまだ彼女を求めるシエロはその最たるものだ。失つた物ばかりを見て、今ある物に決して満足しない。自分ではその悲しみを埋めてやることは出来ないのだ。だけど気晴らしの付き合いくらいは出来ないものか。

「俺は貴族は嫌いだけど……」

「うん」

「泳げない理由があるんじゃないやねえ。お前は下町に来て俺の舟に乗せてやる」

「え、いいの？」
「お前は特別だ」

言った後に恥ずかしい台詞だったと我に返ったが、シエロは嬉しそうだ。それに気にしていないみたい。気にする方が阿呆らしい。

「下町の中、舟で案内してやるよ。その時は」
「うわぁ、楽しみだなぁ！」

シエロは笑う。それでもその笑みは明日を見ては居ない。だからそんなに軽はずみに楽しむ振りが出来るのだ。結局何一つ、俺の言葉はこいつに届いていない。こうして隣にいても、そう。

「お待たせしました」

会話の途切れを見計らったわけではないだろうが、運ばれてくるランチ。スープとライスとサラダとメイン皿と小さなデザート。格式もテーブルマナーもあつた物ではないが、確かに味の方は確かなものだ。

「ってデザートはジェラートかよ。早く食べねえと」
「これはブラッドオレンジかな。いいね、さっぱりしていて」

食後にしては溶けてしまつと食前デザートに洒落込んだ。

「もしかしてここって、土産のジュース売ってるのか？」

店先の会計の方を見ればなるほど、確かに売っている。シャロンが休憩時間買ったジュースとはこの店のものだったのか。

「そうだ。休憩時間って言えばシエラ、……歌姫シレナとエコー。それからシャロンの仕事は何時までだったんだ？」

「エコーとは12時まで。シレナもだね。ここのランチは14時までやっている。13時から3人とも仕事があつたみたいだからここにいたのはその辺りまでだね。シャロンの次の仕事は中層街での仕事に向かった。他の二人は下層街でのチャリティーライブをそのまま14時半までやってた」

「同じ仕事なのに時間が違うのか？」

「出演時間の差だよ。仕事量は二人よりシャロンの方が多い。一番人気はシャロンだから当然とはいえ……ね」

「なるほどな。それでシャロンの次の仕事って言うのは？」

「……僕はあの包帯紳士から血の臭いさえしなければ、それはシャロンかも知れないと思つたかもしれない」

「え？」

「いや、もしかしたらシャロンの悪戯に付き合わされた誰かかも。シャロンがあの日やってた中層街での仕事。仮装劇なんだよ。いろんな衣装に何回も着替えて歌って踊る。僕に仕事が長引きそうだから待ち合わせ時間変更を頼まれて、あの日の中層街の雰囲気僕を驚かそうとしたのかも。ほら？シャロンにはそういうところがあるだろう？」

「確かに俺が出かけた際に家の戸棚の中に隠れて、探し回ってる後から脅かしに来るような妹ではあつたけど……」

「仕事が今ほど無かつた頃のシャロンにはそれよくやられたよ……僕も」

シャロンの無邪気な悪意を思い出し、二人で遠い目になる。シャロンは人を驚かすのが好きだった。

「で……でも、流石に包帯男なんて。シャロンはそんな衣装用意してなかつたんだろ？」

「うん。だけど周りの人がどうかまではちょっと……それにシャロンは信頼できない相手に僕とのことを頼むとも思えない。だから勿論他の人間、犯人側からの接触という可能性も大いにあり得る」

「唯、シャロンの悪戯に乗っかって犯人が悪巧みをした線も捨てきれない。その場合はある程度シャロンと親しい相手が関わっている。そういうことか」

「うん。僕が彼女の周りの歌姫から洗ってみているのはそのためだよ」

「……まあ、その仮装劇の辺りのことを調べに中層街にも行く必要があるのかもな」

「そこはアルバと中層街の使用人に頼んで一応は調べて貰っているよ」

またあの男の名前。本当に信用できるのだろうか。屋敷でのやり取りを思い出し、カロンは頬杖をつく。

「ま、いいや。んで？その後の他の歌姫は？」

「エコーとシレナは、15時から二人は中層街で二日後の公演に向けてのリハーサルを行う予定だったみたい。だけどエコーとシレナの喧嘩でリハーサルは中止になった。だからこの間のアリバイはなくなってしまうんだよ」

「喧嘩って、どうして？」

「アルバの情報に寄ると、……シレナのウンディーネ用の衣装が壊されたんだ。それは本人の管理責任の無さから来る、プロ意識の欠陥だとエコーに罵られた。シレナはそこでエコーがやったんじゃないかと疑って大騒ぎ。リハーサルが15時からということは着替えの時にもう既に二人の喧嘩は始まり、15時過ぎには二人はオペラ座を後にした。メインの二人が消えれば歌姫ドリスも歌姫マイナスも仕事が出来ない。ここで歌姫四人は16時まで空白の時間を持っているようなものだよ？」

「……アリバイを認められる奴は居ないのか？」

「歌姫シレナは一度泣きながら自身の中層街の屋敷に戻ったというのは目撃されている。そこから泣いて泣いて……役をシャロンに戻すことを考えた。シャロンが夕方に上層街の屋敷に帰宅することを思い出し、後は目立たないように服を着替えて上層街へ。そしてシヤロンの死体発見……と推測することは出来る。だけど歌姫シレナは僕以上に使用人を持たない。全て解雇したと風の噂で聞いたよ」

「オボロスは……そっか。3日前はまだ下町にいる。2日前に俺と会った時は最近船から帰ってきたって言ってたし、……ていうか何であいつ空に来たんだ？」

「うんそうだね。一度彼とも話をしてみるべきかもしれない。……よって一番すんなりとアリバイを認めてあげたくなる歌姫シレナには、15時半から16時までのアリバイは無し。好意的に解釈してあげたくなるから白とはいかない。そこに犯人が隠れ潜んでいるかもしれないからね」

疑わしきは疑え。シエロはそんな口ぶりだ。ああ、また冷たい目をしている。

「君だって話してみれば彼女が一番、今のところはマシだと思うだろうっ？」

「そりゃあまだ二人しか話してないし。エコーと比べたら誰だってマシに思えるだろ」

「僕はマシに見えた順から疑心レベルを上げて見ることにしているんだ。そうすれば情報の取りこぼしも少なくなると思うから」

「容赦ねえな」

「容赦してあげる理由がないよ」

「シエロ……」

ああ、俺はその頃空にいらなくて良かった。もしその日、俺がここ

にいたら……誰よりもシャロンを殺しそうにないという理由で俺にこの目が向いていたかもしれない。

3日前に空にカロンはいなかった。だからこそ一定の信頼を預けて貰っている。シエロが下町のカロンに助けを求めたのは、事件解決のため絶対に犯人に成り得ない助手が必要だったのだろう。

（もしかしたら……）

シエロはアルバですら疑っている心があるのかもしれない。何度も信頼できる人だよと繰り返し返すのは、信頼できていない、疑いたくない一心から来る甘えか弱さか。容赦する必要がないと言いながら、容赦している。

（それなら俺は……）

あの執事をも疑う勢いで、俺は俺なりに情報を集めて行かなければならない。そう考えるなら中層街での情報全てを白紙に戻す。全ての歌姫のアリバイはなし。歌姫シレナは15時半からなどと生温いことは言わない。15時から16時までのアリバイが無い。

「シエラ、歌姫ドリスとマイナスのその日の仕事を洗ってみたか？」

「15時のリハーサル以前の？二人はこの下層街でそれぞれライブをしていたはずだよ」

「なら物のついたで。これ食い終わったらその辺りの情報確認に行こうぜ？何か新しい情報があるかも知れない」

「……解った」

シエロが頷くのを見て、とりあえずこの話はここまで。カロンはスリーブに手を付ける。

「そついやシエラ、歌姫達には協力者みたいな相手はいるのか？」
「事件当日、シレナには無し。今は下町から連れてきた使用人のオボロス君。エコーには……無し。足を引つ張る相手としては彼女のお兄さんのナルキス。ドリスには従者のメリアという女性が居る。マイナスは、下僕として複数の男女を連れている」
「……となると男が周りにいるのはエコーとマイナスか」
「いや、でもエコーの兄には無理だよ。あの男が女を襲うとは思えない。そんなことするくらいならナルキスは鏡の前で一人遊びにでも耽るさ」
「え、ええと……」
「会えば解る。否応なしにね」

自己愛者がシャロンに乱暴働くとは思えないと、シエロは言い……その線で怪しいのは複数の人間を従えている歌姫マイナスだと言う。

「上層街にはモラルがある。どんな性欲塗れの変態貴族も外で何かをしようとする者は居ない。基本的に屋内に連れ込むさ。彼らは衣装やらシチュエーションに五月蠅いからね」
「お前が言つと説得力があるな。やっぱお前変態か」

言われてみれば気を失っている内に空に屋敷に連れて来られて女装させられたりしてた。それを思い出したカロンは前言撤回に走る。

「か、カロン君……」

シエロは肩を落としていたが、溜息一つで心を切り換えた模様。

「それじゃ、話を戻すよ」

「ひ、卑怯だぞ！そうやって身を乗り出す振りをして机に胸を寄せ

るなんて!」

「……いや、僕からは何も言わないでおくね」

そういう発想をしている君こそ実は変態何じゃないのかいみたいな視線を送られる。ちよつと心外だ。俺はあくまで正常な男だ。故に断言する。その胸は凶器だ。

そう思い目を逸らした……窓の向こうにもっと凄い巨乳が揺れている。

「なっ……!?!」

しかも凄い露出度。なんて危険なドレスだ。ドレスって言うて良いのかあれ。水着というかボンテージみたいなものじゃないか。流石に際どいところは隠れているが、悩ましげなその肉体は……隠す方がいけないような気がする。

「大丈夫?カロン君?」

「ぶはっ!」

伝う鼻血を拭ってくれるシエロだが、身を乗り出して来た所為で谷間が、谷間が!

「安静にしてた方が良いな。こっち来てカロン君」

椅子を並べて俺を横にし、その太腿を枕に貸してくれるシエロ。いや、シエロ様。全体的にはほっそりしてるので傍目にはそこまできにしなかったが、必要なところにはしっかり肉が付いているのがシエロだ。柔らかくむちむちの肉感の太腿、膝枕は天国だ。頬が緩んだのは俺の所為じゃない。このけしからん太腿が悪い。混乱した頭のカロンだったが、遠くで入店の鐘が鳴るのを知る。その直後、気

の強うそんな女の声と客のざわめく声がした。

「なんだい？随分と繁盛してるじゃないか。結構なことだね。けどこのマイナス様の席がないとは言わせないよ？ランチ3人前。さあ、案内して貰おうか」

「申し訳ありません、本日のランチは完売いたしました」

「ふざけんじゃないよ！私がどれだけこの店に通ってきてやってると思ってるんだ！この恥知らずが！」

その女のドスの利いた声。それも凄い声量だ。一瞬辺り一帯が静まりかえった程だ。

「申し訳ありません。ですが本日は……」

「これはこれはマイナー様！毎度ご贖員に！申し訳ないですなこいつ新入りでしてまだこのことよくわかってないんですよ。さあさあ此方へ！」

奥から来た店員が、受付を押しわけその女を何処かへか招いている。皮肉にもそれはカロン達の後ろの席だった。その女が通り過ぎる時の角度が凄かった。袖やスカートは有るのに、胸から尻までは水着のような露出度。スカートにもスリットがありその太腿を大胆なまで見せつける。そしてその足には黒のガーターがなんと扇情的。ドレスにも皮のベルトをふんだんに用いて、拘束具のようなエロスがある。ああ、さつき窓の外に映ったのはこの人だったのか。カロンは妙に納得した。女は赤いドレス。その赤が見事なまでに映える長い黒髪。赤と黒の波長を上手く着こなせるスタイル抜群の美女だった。シエロよりも胸が大きい。けどこの服ならシエロにも着こなせそうだ。ていっか見てみたい。シャロンがシエロに危ない衣装を贈ったという気持ちも今更ながら共感できた。

カロンが鼻の奥が熱くなるのを感じていると、店先では店員達が

何やら口論をしている。

「馬鹿かお前！あれは常連客じゃなくてクレーマーだ！断ると面倒なことになる、適当に案内しとけ！」

「ですがあんなの他のお客様の迷惑ですよ！店の質が下がります！」
「それでも金払いのいいお客なんだよ！食べるだけ食べてクレームでタダ飯にでもされてみる！それならいろいろ勧めて金出して貰う方がいいだろうが！」

嵐のような客に、店は戸惑っているようだが、女本人は気にしていない。

（彼女が歌姫マイナス……彼女は大声だから耳が悪いんだ。だからあんまり小声の言葉は聞こえない）

（……あ、あいつが）

シャロンを虐待したという義姉。じっくりその顔拝んでやろうと顔を上げるが……後ろの席には誰もいない。

「ひゃああああ！」

「シエラ？」

突然シエロが悲鳴を上げる。何事かと思った時にはカロンは床へと落とされた。

「その姉ちゃん、良い尻してんな」

「嫌、止めて下さい！」

見れば先程の女がシエロを吊り上げ胸と尻を揉んでいる。なんと
いう早業か。シエロの両手には手枷と鎖。それを梁に繋いで足が着

かないほどに浮かせている。

こうなれば両足をばたつかせるくらいしか出来ないが、暴れればスカートの中身を公衆の面前に晒すことになる。照れ屋のシエロにそんなことが出来るはずもなく、羞恥に震えている。その様を、女は舌なめずりをし悦に浸る。

突然現れたあまりの非日常。その光景にカロンは言葉も出ない。

「ふん、胸の方も悪くない。感度も良好。だが、こっちの方はどうかな？」

胸を触っていた手がそのまま服の中へと突っ込まれ下へ前へと伸ばされる。

「ひつ、やあああ、やだ！」

「嫌嫌言う割りにこっちはもう濡れ濡れじゃねえか。欲求不満かい美人さん？なんなら今日うちに来るか？とびっきりの快樂で、たっぷりいたぶって泣かせて啼かせてやるぜ」

「な、何してるんだあんたっ！！」

「カロン君ん……」

色っぽい喘ぎ声。半泣きしているシエロに我に返った。そりゃあ泣くだろう。下着の中まで触られてているんだ。でもその顔もう少し見てたいような気がするのは多分気の所為だ。気の所為に違いない。

「お前がこの姉ちゃんの彼氏かい？ああ。こりゃ酷え！まだガキじゃねえか。まだ毛も生えてねえ剥けてねえガキはお家に帰ってママのおっぱいでもしゃぶってる」

「その人は嫌がってる！さっさと離せ！」

「嫌だね。私はこの女が気に入ったのさ。雰囲気があいつに似てる。

おまけに本当に、良い声で啼きやがる。それに見てみるよこの白い肌。さぞかし鞭と蠟の跡が映えると思わねえか？なあ？」

ぐっと俯くシエロの髪を掴み、顔を上げさせるマイナス。

「あっ！」

しかし不味い。シエロのウィッグは結う暇など無かったからさほど固定されていない。あんなに乱暴に掴まれたら……

「！」

ばさと広がる空色の髪。美しい青に人々は目を奪われる。店内が、いや外から様子を窺っていた人々も呆気にとられたように放心状態。シエロに魅了されている。

「あの髪の色……まさか」

「稀に現れる謎の歌姫……歌姫シエラ様なのか！？」

「う、歌姫シエラだとお？んだよ、んなの聞いたことねえぞ？」

「彼女は中層街にしか現れない歌姫だ。下層街クラスの歌姫が知るはずがない」

「この私を馬鹿にしたのは何処の何奴だ！！」

「ははは！俺だよ俺！この俺の美貌に免じて歌姫マイナス、その子を放せ」

「はあ！？」

歌姫マイナスが目を釣り上げて辺りを見回す。すると颯爽と現れる男が一人。

「嗚呼、俺はなんて罪作りな男なんだろう！」

不意に流れる哀愁漂う音楽。それから男を照らすスポットライト。男はどこかで見たことがあるような深い黒髪。それから海のように深く美しい青目を持つ。嗚呼そうだ。歌姫エコーのそれに似ている。

（おいシエラ、何であいつの歩いてる所にスポットライト当たってるんだ？これ何の演出だ？）

（彼が選定侯家の一つ、アルセイド家現当主。ナルキスⅡアルセイド。エコーの兄で歩くナルシストだよ。あれは全部私財を投げ打つての演出らしいよ）

（貴族って奴は……貴族って奴は……）

見れば確かに。いつの間にか天井近くの梁の上には黒子みたいな者がいてライトを持っているし彼の後方には少人数の楽団がちやっちやら演奏をしている。

「こんな風に助けてしまつては、また俺に恋い焦がれる哀れな乙女が増えてしまう。嗚呼！しかし悪いな！生憎俺は俺以外の人間に興味はない！怨むなら惚れた自分を怨め娘よ！」
「……………」

シエロから挙動不審ではなく無反応を引き出すとはあの男、凄い。シエロは他人の振りをしようと目を逸らしている。しかし男はそれさえ好意的に解釈する図太さを持つ。

「照れているのか。確かにこの俺の美しさは直視出来ないだろう」

好意的に解釈した結果、この自己愛者はシエロへの好感度も上げたらしい。格好いい俺を格好いいと言ってくれる女が好きなのあれ

だ。

「……おい、下僕共。なんか勘に障るからこの男半殺しにでもしてやれ」

マイナスはピシャと鞭で床を叩く。すると予め客に扮していた彼女のファンが居たのだらう。全員がその合図に服を脱ぎ、これまたいろいろ際どい恰好になる。そしてそのままナルシストを襲いに行く。

「ふっ、このような醜い者に襲われて尚光り輝く俺が俺は恐ろしい」

何て言うか汚らしいおっさんに美女が凌辱されるエロマンガって良いよねの反対バージョンで下賤に襲われる俺美しいと悦に浸っているナルキス。

これにはマイナスも引いている。これはいたぶっても愉しくない部類の人間。何をされても「辱めを受ける俺のこの表情格好いい！美しい！喘ぎ声まで素晴らしい！」と興奮するだらう。これは下手なMより質が悪いとドン引きだ。

（な、何て奴だ……）

どんな言葉や暴力も、全ては自分への賛美歌か自慰行為に変えてしまっ、何とも恐ろしい男。今朝見たエコーとは別のベクトルに怖い。

「な、なんだと!？」

「相手が脱ぐなら此方も脱ぐのが礼儀だらう。生憎見られて困るよ
うな粗末な身体はしていないのでな」

スポットライトに照らされる、男は服を脱ぎ捨てる。一切の迷いもなく一糸まとわぬ姿に。確かにそう言うだけのことはあったが、昼間から公衆の面前で全裸になる貴族なんて何処の世界にいるだろうか。

ちらとカロンが視線をシエロに送れば、シエロは目を逸らしたまま絶対零度の微笑、ていうか冷笑を絶やさない。その喧噪を聞くのも忍びないという表情。余程あの男が苦手というか嫌いなのだろう。同じ選定侯でライバルというだけの理由でもないような気もする。

しかしあの全裸の男、強い！丸腰にもかかわらず華麗な身のこなしで敵の攻撃をかわし、全てを沈めていく。

「ではいくぞ！これで止めだ！美しき素晴らしき至上の宝！国宝ナルキス様を讃え賛美し崇め奉り恐れ戦き戦慄する旋律の美しきナルキス様の歌っ！なあゝるきゝす様あはかつこいゝゝうつくしいゝすばらしいゝつたらせかいちいいい」

その下らない歌詞が男の口から漏れた瞬間、一昨日シエロの歌を聞いたときのような衝撃が襲い来る。確かに認めよう。その声だけは美しい。いや、一応顔もなのか？

「か、歌詞はとんでもなく稚拙で酷くてどうしようもないし下らないのに、無駄に美声だあの変態！」

「ぶつちやけ彼にはそれ以外の取り柄がないよ」

「残念だけど一応イケメンの部類に入るんじゃないのかあれ」

「中身で全てがマイナスさ。あれをイケメンと呼ぶくらいなら僕はラーメンでも担々麺でもお面でも仮面でも何でもイケメンと呼ぶことにするよ」

目は決してナルキス達の方へは向けずにシエロは吐き捨てる。そんなにあの男のことが嫌いなのか。シエロがここまで人を嫌悪する

のは初めて見た。

しかし男の歌は本物だ。どんな魔法を掛けられたのか、近場でその波状攻撃を食らった人間は立ち上がることも出来ない。

見れば店内で無事なのはカロンとシエロ、それからマイナスとナルキス、この四人だけ。

他の人間達は男のふざけた歌にうつとりと恍惚状態。あの男も選定侯家の人間。それならこれも、人魚の歌か。

「く、くそお！あんな下らない歌で私の下僕を！！」

「さあ、その子を放すんだ」

緊張感を表す音色の渦。よく考えれば歌の最中もメロディーとスポットライトは健在だった。雇われてる人達には免疫があるのか、それとも耳栓でもしているのか。遠目には後者のように見えた。目で見た感じでちゃんとBGM出せるってあの人達何気にスキルが高い。

「歌姫マイナス。妹から噂は聞いているが、お前の考えは間違っている。美しい者をいたぶることで更に美しさを見出しているようだが……真の美しさは何時如何なる時も揺るぎなく美しいものだ」

「は？」

「つまりそこにあるだけで美しさには限度がある。故に美しき者は俺のような最高に美しい者の傍に置くことで、更に輝く！俺は太陽！その娘は月だ！なんなら歌姫マイナス、お前もその月に加えてやっても良い。三流貴族を愛でる俺の懐の広さを光栄に思え。その愛を対価にその子を放せ」

「普通に嫌だ。このでか乳の姉ちゃんには痛みと恐怖と快楽をたっぷり教え込んでこつからどこまで胸がでかくなるか試してみようだよ。一月も乳首責めだけやってればその内自分から腰振って泣いて欲しがる淫乱に調教出来る気がするし、こいつ素質あるぜ」

「大丈夫かシエラ？くそつ、これ外れねえ」

二人の変態が対峙している内にカロンはさっさとシエロの拘束を解こうとするも、鎖は頑丈で外れない。素手で引き千切るのは無理そう。テーブルに備え付けのナイフ。それを手に外そうとするが上手く行かない。どうしよう。そう考える内に一人の女が現れる。どこから来たのか。見れば開いた窓からだ。

短い金髪で、飾り気のない服に帯刀した剣。一瞬男かと思ったが顔立ちには女性らしい美しさが残る。男装の麗人のようなその女性は剣を抜き、素早くシエロの拘束を解除。

ついて来いと言う風に首を動かし、窓の外へ。変態二人は変態講義に夢中でそれに気付いていないようだ。

「行けるかシエラ？」

「うん、ありがとう」

シエロはテーブルに少し大目に金を残し、カロンと共に窓から外へ。店内ではまだ変態二人が言い争っていた。

しかしこの人は誰だろう。このままついて行って良いものか。歩みを進める度に迷いが生じるカロンを見て、シエロは思い切った言葉を女へ投げかけた。

「あの、歌姫メリアさんですよ？今は歌姫ドリユアさんの従者をしていると、風の噂で聞きました」

これは本人に聞くではなく、カロンに教えるためだろう。ドリスの従者。今朝聞いた話に出てきていた人だ。

「……………」

女は振り向き視線をシエロに。何か言いた気ではあったが彼女は何も話さない。

「助けて下さり、ありがとうございます。貴女が此方にいらつしやるということはドリユアスさんのライブはこの辺りであるのでしょうか？助けていただいたお礼のご挨拶も兼ねて一度お伺い出来ればと……」

メリアは首を振り懐から一枚の紙を取り出す。見れば最近の歌姫ドリスのイベント表だ。

「あ、今日は下町でライブなんですか。……あ、でも明日は此方にお帰りなんです。嗚呼、でもお疲れのところお邪魔するのもよくありません。後日お礼の品を何か贈らせていただきますね。本日は真にありがとうございます」

シエロはイベント表を受け取り、一礼。そのままカロンの手を引いて中層街へと歩みを進める。

「そうか、リラさんはドリスと一緒に行動していないこともあるんだな。まさか彼女が残っているとは思わなかった」

「シャロンのシエロと同じ理由とか？」

「それはないよ。そこまで歌姫ドリスは今人気がない。男装の麗人とはいえ相手は女性だ。恋人ではないし嫉妬の対象にはならないだろう」

「そうか」

「うん。それに彼女は竖琴が上手いんだ。ドリスのライブでの伴奏を務めることも多いから……一緒に下町に下っているとばかり。ド

リスと仲が良すぎて殿下から許可が出なかったのかそれとも……ドリスからの命令か」

「ドリスの命令？」

「彼女に何か探らせてるっていう可能性も捨てきれない。……歌姫ドリス。表面上は歌姫シレナよりも穏和で好意的。だが、彼女にもまだまだ裏がありそうだ」

「好感を覚えた相手ほど疑えって奴？」

「うん、そういうこと。女の人は、怖い生き物だからね」

「なんだよそれ」

「いきなり縛られてセクハラされた僕が言つと説得力があるだろう？」

「悲しいくらいにあるな」

二人で苦笑し合うと、シエロがカロンの服の膨らみに気付く余裕が出来た。

「ところでカロン君、それ何？」

「お前大目に支払っただろ。値段を見たら丁度良かったから……シヤロンが土産に買ったっていうブラッドオレンジジュース持って帰ってきた」

カロンが腹から取り出した瓶を見て、シエロが目を見開いた。

「え、えええええ！何時の間に！」

「下町生まれを舐めるなよ。ていうか帰り際店先通つたる。これも何かの手がかりになるかも知れない」

「そっか、流石カロン君！凄いなあ！僕じゃそんなこと出来なかったよ。あの二人の所為で聞き込みもパーだし……」

「聞き込みってそもそも何聞きたかつたんだ？」

「歌姫エコーの様子だよ。何か不審な点は無かつたかどうか。シャ

ロンに夕食を断られてカツとなつてとか積み重なった怒りとかそういうのが無かったとも限らないだろ？」

「そこはシレナに聞けば良いんじゃないか？」

「第三者の視線での情報が欲しい。シレナはエコーに憧れているのなら、その情報は偏っているだろうから」

「……なあシエロ、その紙見せてくれ」

「え？はい」

先程の女から渡されたドリスのイベント表。何時何処の何に参加しますよというファン向けの情報だ。それをカロンは3日前を辿った。ファン向けのものだからハーサルなどの情報は書いてはいない。それでも……

「下層街での下町支援、チャリティーライブ。歌姫ドリスも参加してたんだ」

「なんだって!？」

シエロが紙を覗き込む。

「本当だ。彼女は午前の部に出ていたんだね。シャロンとエコーとは入れ替わりで顔を合わせない時間帯だ」

「ドリスの従者があの店の近くを通りかかったってことはあの辺りにはドリスも詳しいんじゃないか？もしかしたらエコー達が来る前に既にあそこで食事をしていたとか……いや、これは出来過ぎか」

「……でも完全には否定も出来ない。そうだね。ドリスと話す機会にはその辺の探りも入れてみることにしよう。アルバからの話だと今朝うちに来たという従者も彼女だ。彼女が言うには……いや、彼女が持ってきた手紙には近日中に何うとある」

「手紙？ドリスのか？」

「うん。メリアさんは喋れないから」

「え？歌姫だったの？」

「だから歌姫じゃなくなっただ。彼女は10年程前人魚まで近づいた……だけど咽を潰されて暴行に遭った。そして歌姫としての生命が絶たれた。最悪、今回のあの子と同じ事になっていたのかもしれない」

「……だから俺達を助けてくれたのかな」

「それはないよ。だってもしそうなら彼女は僕らの正体に気付いていて、シャロンの死まで知っていることに……」

そこまで言っただけでシエロが足を止めた。そこは昨日と同じ。中層街と上層街を繋ぐ階段。こうやってこんな話が出るのも人がいないからに他ならない。

「どうしたシエロ？」

「そうか。その可能性もあるんだね。ありがとうカロン君」

「え？」

「だけどそれなら、何故？どうして？そうやってしまう。殿下辺りが何か情報を流したか？いや……だけどあの男は僕の呪いを知らないはずだ。ナルキスの阿呆もそこまで馬鹿ではない。それならどうして……」

何気ないカロンの言葉に、シエロは考え込んでいる。それについて行けずカロンは戸惑うばかりだ。

「……そうか、最低限あの腐れ殿下は僕が下町に降りたことは知っている。奴らの記憶は飛ばしたとはいえ、あの家で倒れていたんだ。片っ端から情報を集めればあそこがシャロンの生家でシャロンには兄が居ることは解るかも知れない。それで僕が誰に会いに行っただかを把握した？」

不可能ではない。不可能ではないがとシエロは苦い表情。

「あの馬鹿殿下がそこまで頭が回るとは思えない。うっかり愚痴を漏らしたのを歌姫ドリスが聞いて、そこで彼女が推理し理解した。そう考えるなら……」

「考えるなら？」

「歌姫ドリスは侮れない。彼女は唯の三流歌姫ではないかも知れない。何かとつもない物を抱えているような気がする」

カロンはその言葉にごくりと息を呑む。それに続いてシエロもだ。シエロの不安が此方まで伝わってくるようで怖い。

それに気が付いたシエロが優しく微笑み、大丈夫だよ……とは言ってくれない。真剣な眼差しで、腰をかがめて視線の高さを此方に合わせ、両肩に手を置く。そしてゆっくり言い聞かせるよう言葉を紡ぐ。

「カロン君。彼女にはエコーと同等以上の警戒心を持って接して欲しい。僕も出来る限りフォローはするけど、何があるかわからない」

シエロも不安なのだ。それが解った。巻き込んでおきながらカロンをシャロンの二の舞にしてしまわないかと、それを恐れている。再びあの光景を見せられることを恐れている。そうならないために、も自分は大丈夫だと見せつけてやらなければならない。

「気をつけるのは……お前だろ」

「え？」

屈まれたと言うことは丁度いい位置にシエロの胸があると言うことで。これ以上は言わずもがな。

「この尻軽女が！シャロンというものがありながらあんな女に好き放題触られてるんじゃないやねえよ！」

「ひっ！ちよっ！だめ！やめっ…！カロン君まで悪ノリしないでよ！僕が喘ぎ声の練習しても意味ないんだからあっ！」

「勉強不足の俺には全然わかんねーな！もつと教えてくれよシエラ先生え！」

これもシャロンのためだ。シャロンの物でありながらあんな女に触られたシエロが悪い。シャロンの兄としてこの浮気者を罰する必要がある。だから怨むなシエロ。……そういう言い訳でその胸を思い切り揉みしだく。

「それ以上は階段では危険ですよお二方」

上方から降る男の声。見上げれば黒衣の男、アルバーダ。カロン達はもう屋敷の傍まで来ていたらしい。

「アルバあ……」

助かったと言わんばかりのシエロに少しカロンは苛立った。

「何だよ折角俺が気を紛らわせてやったつてのに」

「何処の世界であんなセクハラ紛いの気晴らしがあるんでしょうね？気が晴れたのはカロン様だけなのでは？」

「そ、そうか。あれはカロン君なりの気遣いだったんだね。ありがとうカロン君」

そうじゃねえだろ。今回ばかりはアルバとカロンの意見があった。互いにそんな目でシエロを見ていた。

「アルバも今帰り?……それじゃあ城に申し込みして来てくれたのかな?」

「はい。再発行の試験の届け出をして参りました。後は本番を待つのみです」

「そっか。ありがと。日取りは?一週間後くらい?」

「いいえ。明日の夜です」

「ああ、そっか」

「善は急げと言うことですし、早めに証書を取り戻す方がいいですよ。最短日程で申し込みました」

「ちよつとふざけんな!明日だつて!?そんないきなり!!」

「つて、あああああ明日あ!?酷いよアルバ!僕だつてまだそんな心の準備が!!」

「はいはい面倒臭いお嬢さん方はこちらへどうぞ」

軽々とカロンとシエロの首根つこを掴んだ執事はそのまま二人を屋敷へ運び、浴室へと叩き込む。

「ちよつ!何するんだよアルバ!外から鍵まで閉めるなんて!!」

「塩水風呂と真水風呂を用意しておきました。お好きにお使い下さい」

「アルバあつ!お風呂場でなんて痛いじゃないか!ここはシャロンに襲われたトラウマスポットなんだぞ!それに僕はふかふかのベッドじゃなきや嫌だ!」

「そんな甘えもあるとは思いましたので、防水マットレスの寝台を放り込んでおきました故何の問題もございません」

「つて問題しかねえだろうがあああああああああああ!それにそつという問題でもねえだろうがあああああああああああああああ!」

カロンのツツコミが無駄に広い浴室内に響く。その声に振り向く

は、浴室の扉を内から半泣きで叩くシエロ。その手にはまだ拘束具が残っている。なんとというかエロい。

「試験突破のためです。面倒臭いので手っ取り早く練習でもなさって下さい。私は夕飯の仕度が忙しいので、これで失礼。ああ、のほせないよう温度は適温にしておりますので問題はありません」

スタスタと扉の前から遠離る足音。その足音が希望、無音が絶望と言わんばかりに震えるシエロ。

「ど、どうしようカロン君」

聞きたいのは俺の方だ。カロンは視線を逸らす。すると何やら置いてある。

(……………ご丁寧にあの野郎、風呂場にシャロンセットまで置いてやる)

これに着替えて練習しろとも言うのか？

(くそっ……………！)

不意に歌姫マイナスの言葉を思い出す。あの時のシエロはあんな風に辱められて、否定の言葉が出なかった。シエロだって本当はこういうこと、……………したいのか？さりたいのか？

思い出すのはマイナスにセクハラされているシエロの表情。はつと目を奪われ動けなかった。だけど他の奴にあんな顔にさせられるなんて嫌だ。どうせなら……………そう、どうせならこの手で。

「か、カロン君？」

「……シエロ、シャロンのためだ」

カロンは服を脱ぎ、シャロンの衣装に身を包む。それに戸惑うだけのシエロの手を引き寝台へと押し倒す。

「れ、練習……する、んだよね？僕は女のままで大丈夫？」

試験は最悪誤魔化してもやれる。そのために練習が要るとは聞いた。だがまだそんな練習はしていない。今からそんな練習程度で間に合うとは思えない。だからこそ、ここで……俺がお相手に持つて行けるだけの理由が欲しい。俺だって男だ。一方的にされるばかりなんて嫌だ。

「練習じゃない」

「え？」

「俺は本気でやる」

状況を理解していないシエロの手。拘束具を寝台へと括り付け、そのまま馬乗りになる。こうまでされれば流石の鈍いシエロでも危機感を持つてくれた。

「か、カロン……君？」

「要するにちゃんといちゃつけるように、俺たちがそういう心を持つてるようになれば良いんだろ？」

「そ、そう……なのかな、でもそれって……そんないきなり無理だよ」

「ああ、無理だな。だから無理矢理でも意識出来るようにする」

「意識って言われても……」

「仇討ちが終わるまでで良い。俺を本当にシャロンだと思い込め。でなきゃ何時か俺もお前も必ずボロが出る」

「ちよつ……駄目だよ！止めてよカロン君！」

こんなに強く拒絶されたのは初めてだ。胸を触った時もキスをした時も演技の一環だと笑って流してくれたシエロが本当に嫌がつている。顔は妹と同じなのに、何がそんなに嫌だつて言うんだ。お前だつて愛しのシャロンと同じ顔なら余裕とか言つてたじゃないか。

「今は俺が……私がシャロンなんだから。ねえ……シエロ」

「……僕には、シャロンは裏切れない。例えカロン君。君でもだ」

シャロンの声を言葉を姿を真似たところで、お前はシャロンではない。その断定が深くカロンの胸を抉った。

「シエロ……これは劇だ。全部嘘だ。何一つ本当なんか無い」

役者は役のためにキスやベッドシーンを演じることはあるだろう？これもそれと同じだ。シエロとシャロンという恋人同士を演じるために必要なことだ。嘘を限りなく本当に見せるためには、本物と同じ事をしていく他にないじゃないか。

そんな建前で……一時でもこの人の視線をシャロンから自分へ移せるなら、どんな嘘だつて吐こう。

「犯人を殺すまでだ。それまでで良い。その間だけ……俺を好きになつてくれ。お願いだ……シエロ」

「カロン君……でもカロン君は、カロン君だよ」

「俺はシャロンだ！」

もう何を言つても無駄だ。乱暴に口付けて、そのドレスをはぎ取った。見開かれた目から大粒の涙が溢れる。飲み込むこともせずシエロは涙を流す。

何もかもが終わるまで、シエロは一度として俺をシャロンと呼ばなかった。耳に残る俺の名前を呼ぶ声が、呪詛のように繰り返される。それは相手が気を失ってからもだ。耳に残って離れない。

「……………随分と楽しんだみたいだな溝鼠」

どれくらい時間が経ったか。鍵の開けられる音。現れた黒衣の男はカロンを一瞥、泣き崩れたシエロを抱きかかえ出口へと。

「これがあんたの狙いだろ」

その背中に声を投げればしらばっくれる男の声。

「はて、何の事やら」

「あんたは俺に甘いシエロが気に入らなかった。だからシエロが俺を嫌う理由を何か与えたかったんだ」

「責任転嫁も甚だしいな小猿。据え膳で手を出したのは貴様だろう」

「これだけお膳立てされて手出さない男があるかよ」

「やはり下町の人間は獣だと証明されたわけだ」

「……………っ！」

怒りに駆られて顔を上げれば男の黒い瞳が、此方を見下している。

「生憎私はお前のような下らんことはしない。欲しい物が目の前にあって、それに手を伸ばす輩は総じてガキだ」

その言い方はまるで、この男もこれが欲しいみたいじゃないか。それで、でも手は出さずにじっと影のように寄り添う。それも一つの愛なのだとその目は語り、自分の感情はそこまで高尚な物ではなく、下らない醜い浅ましい恋に過ぎんと軽蔑されている。

「あの小娘と同じ顔ならば、この方を癒すこともあるか。そう思ったのが見込み違いだ」

「な、何だよそれ」

「二度も言わずな。貴様は見込み違いだ。この方を傷付けるしか脳のない溝鼠。貴様は手順を誤った。あの小娘と同じ手順を踏むのが正解だと誤った」

「間違い……？」

間違いはこの手で触れてしまったことではなく、順序にあると男は語る。

「薄汚い小僧、貴様は男だ。おまけにガキだ。欲しい物は欲しいし我慢が出来ない醜悪な生き物だ。だからこそ貴様が耐えるに意味がある」

男の身で同じ男に抱かれるならば屈辱だ。屈辱を堪え忍んでまだ好意を告げるなら、揺らぐ心もあるだろう。

しかしそこまでの勇氣もなく、言い訳のため呪いに付け込み女のままのこの人に手を出した。覚悟も勇氣も苦痛を差し出すこともなく、欲しい物だけ奪っていった。お前の思いなどその程度なのだとこの男に、何も見ていなかったはずの男に看破されている。

「そこまでされれば頑ななこの方も、認めざるを得ない。貴様から向けられるそれが確かに愛と呼べる物なのだ。そうなればこの方の心も開けていっただろう。手を出したという引け目も与えられる。その胸の隙を突けばこんなことをしなくとも、何時か貴様はこの方をどうにでも出来たはずだ」

何のためにシャロンの衣装を置いてやったと思っていると男は嘆

息。

「貴様はシャロン様を汚した者達とそうは変わらん。許せないと言いなから、貴様は許されないことをした。結局の所貴様はこの方に恋こそしたかもしれないが、貴様はシエロ様を愛してなどいないのだ」

「お、俺は……」

「自身の男を捨てられぬまま、相手に男を捨てると抜かすか小僧。なんと理不尽な好意があつたものだ」

もう、何も言えない。男はもう、振り向かない。だからカロンも何も言えない。

言い訳を聞いて欲しい人はまだ眠っている。不幸なことに、幸いなことに。

その口から目覚めて一番、飛び出す言葉は何だろう。それを思うと恐ろしい。泣き喚くだろうか。脅えるだろうか。嫌いだと、二度と顔も見たくないと言われるのだろうか。

それならいつその海の上で、俺を罵ってくれればいい。俺は海へ帰る。叩き付けられて海へ還る。魂も天に昇らず、そのまま海の底へ沈むんだ。水妖の壺に囚われて、転生も許されず未来永劫嘆き悲しみ続ける。許してくれと歌い続ける。

10:くろねこのとおりみち(後書き)

あれ?どうしてこうなった。

捜査を進める上でこいつらの関係どうにかする 証明書がある 試験
がエロ展開 その練習 あれ?

今回は精神はB.Lだが肉体的にはN.L。

歌姫マイナーにセクハラされるシエロに滾って暴走してしまっただん
だろうカロン君。試験では自分がやられるてやるから、その前に前
金身体で払ってくれ展開。

発想が健全な青少年とは言えない主人公(笑)

11：海の歌姫

海神の娘

『いつそ私と貴方の魂を、同じ壺に閉じこめましょう。
そうして抜け殻のように生きて滅んで……』

後は暗い海の底、壺を沈めて二人で空を見上げるの。
二人で歌えば永遠も、きつと楽しいものでしょう!』

*

夜の海は暗い。空の上から眺める海も、そう……そうは違わない。
カロンは屋敷を飛び出して、行く当てもなく街を彷徨う。そうして辿り着いた高台でぼんやり海を眺める。

(シエロ……)

シャロンの身代わりでも良い。一時の嘘でも良い。あの人の心が欲しい。どうすれば手に入るだろう。どうせ何をやっても無理だ。口頭ではそうわかってる。わかっけていても心がそれを認めない。口付けで駄目なら。それ以上。それ以上が駄目なら更に奥深くまで。何がいけないのか。そっくりだって言って笑ってくれた。

俺が男だからか？それなら呪いで男になったシャロンを受け入れ、エコーのシャロンへの気持ちの否定をしないシエロがどうして、俺だけは否定するのか。

俺がシャロンより遅く出会ったからか？でもこればかりはどうしようもないじゃないか。

俺がシャロンと違って、人魚の生まれ変わりじゃないからか？俺は唯の人間だから？だからシエロの中に流れる血が俺を拒むのか？

幾重のどうして。そればかりが身体を支配する。堪らなく苦しい。お前はあの人を癒せない、傷付けることしかできないと、アルバに言われた。まったくその通りだと思う。

(だけどそれはシエロだって同じじゃないか)

酷いことをしておいて、言い逃れなんだと俺だって思う。それでもシエロは何時も俺に苦しい思いをさせて来た。大好きなはずの妹をなぜか疎ましく感じてしまうことが、どんなに辛いか。人の中であつという間にシャロン以上の存在になっておきながら、当の本人は此方を歯牙にも掛けない。街の何処を歩いても、誰と話しても…シャロンとの思い出ばかり。この街にカロンという人間の居場所はない。シエロでさえ受け入れてはくれない。

(ああ、シャロン……)

本当に申し訳なく思う。可愛い妹。誰より大事だった妹。その仇討ちのためにここまで来たはずなのに、もし今日今ここにシャロンが生きていたのなら……この手で殺してしまっていたかも知れないと、カロンは思ってしまう。目の前であの人が誰かと仲良くしていたら、それだけで苦しく切なく辛いのだ。

「あ、あの……か……カロン君、ですよね？」

「え？」

「あ、ご……ごめんなさい！急に話しかけたりしてっ！」

少女は勢いよく頭を下げる。そして……

「これ、使って」

手渡されたのは可愛らしい刺繍の施されたハンカチだ。そんなに高価には見えないが手作りのような温かみを感じさせる。

「ありがとう」

受け取り涙を拭いて……視界がはつきりすると、その子はどうも見覚えがある。

「歌姫ドリス！」

「え、ええと、うん。はい、ドリスです」

「なんで歌姫が俺の名前を知ってるんだ？」

「あ、あの……私貴方の妹さんの、シャロンさんと仲良くさせて頂いてまして。それで度々お兄さんの話を……それで似てらっしゃったのでもしかしてと」

「そっか」

正体がばれた。別にもうどうでも良い。今は海へと帰ることしか考えられないから。シャロンの復讐なんてもうどうにでもなれ。今はシャロンを殺した相手より、何をしても振り向いてくれないシエロの方が憎らしい。

「あはは……やっぱり私なんかのこと、覚えてないよね」

敬語と普通の女の子の口調を行き来させる歌姫ドリス。彼女も何かに戸惑っているようだった。

「覚えてるって何が？」

「私みんなより綺麗じゃないし……影が薄いつて良く言われるから。別に気にしてなんかいないんだけど……あのね私、カロン君と下町で会ったことがあるんだよ？」

「君と？俺が？」

「2年前まで私下町に暮らしていたの。それで、ほらね……2年前に大きな災害があったでしょう？」

その災害自体はカロンの記憶にある。町の大半が海水に侵される大惨事だった。

親父を失ってから初めてとも言える、大きな水害。かつて高波に挑むように人を救った親父の背中を追いかけるように必死に舟を漕いだ。

「あ、ああ。あつたな」

「私その時貴方の船に助けて貰ったの」

「……………ごめん」

カロンは素直に謝る。全く覚えていない。何人助けたのかとかそんなこと数える暇もないくらい必死だった。必死に生かそう、生きようと舟を漕いだ。

それがなんだろう。たかが恋に破れたくらいで、当時の必死さが今は滑稽に感じる程……今は死を見つめる自分がいる。

またシエロの傍に行き、何か否定されるくらいなら、その前に死にたい。不謹慎だが今この瞬間だけはシャロンの死体に憧れた。あのくらい滅茶苦茶になればもう、何も考えずに済むと。あそこまになれば……シエロも少しは凹んでくれるだろうか。その心の傷の一つくらいにはなれるだろうか。もしも自分が振り向いていたならこの馬鹿な男は死ななかつたのだと思ってくれるだろうか。

カロンの暗い瞳を見、ドリスはそれには触れずに首を振る。

「ううん、そうだと思う。お互い名乗る暇もなかったし、お礼を言う暇もなくて、私を安全なところまで置いたらカロン君、またすぐに他の人助けに漕ぎ出して……避難してる途中で貴方の名前を他

の人から教えて貰ったの！貴方は下町のヒーローなんだって！」

「……そんなんじゃないよ」

何処の世界のヒーローが、あんな風に無理矢理惚れた相手を抱くだろうか。振り向かせるだけの器量も度量もない。その程度の男がヒーローだつて？嗤わせる。

「そんなことないわ！だつて私……あの日のカロン君みたいになりたくて、歌姫になったの！貴方みたいにあの街を……貴方の暮らすあの街を、守れる存在になりたいって！」

「え……」

「ねえ、カロン君。貴方がそんなに悲しい目をしているのは、あの人の所為なんでしょう？リラが言ってたわ。シエラさんっていう綺麗な人……貴方の恋人なの？」

「シエラは……」

頷けたらどんなに良いか。嗚呼、でも……ここでシエロと呼べない様な俺には、その資格の欠片もない。こんな初めて会うような人の目さえ気にしている。

「あの人は、俺が大好きだった人だよ……だけどあの人には好きな人がいて、俺は振られたんだ」

「まあ！酷い女っ！遊ぶだけ遊んでカロン君を捨てるだなんて！許せない！」

ドリスの勘違いからの怒り。第三者にでもあの人を否定されるのは辛い。だから違つんだとカロンは首を振った。

「いや……違つんだ。嫌われるようなこと、したのは俺の方なんだ」

「え？」

「女の子がさ、好きでもない男に何かされるのって……辛いことだよな？」

自分への確認のため呟いた言葉。だけどそれは余りに無神経。下層街の歌姫であるドリスにとって、それは自らが行っている仕事を尋ねられたようなもの。カロンがそれに気付いたのは、ドリスの頬を透明な涙が一筋流れてからだ。

「……いつそ舌を嚙んで死のうか。何のためにここにいるのかわからない」

「ど、ドリス……」

「それでもね……カロン君。女の子って意外と凶太く神経据わってるの。今日の太陽は沈んだけれど、明日もあの海からまた昇るわ」

ふわりと優しく笑う歌姫ドリス。彼女の笑顔は力強い生命力に満ちていて、全てを肯定するような温かさで溢れる。その瞬間の歌姫は、エコーやシレナよりも愛らしい少女に見えた。それでもあの人には遠く及ばないと思う辺り、すっかり自分はあるの人に毒されてしまっているのだと思って胸が痛む。

「どうしようもないものはどうしようもない。そこから今できることを考える。だけど決して諦めたりはしない。そういう生き物なんだわって」

「そっか。それじゃあ……」

それじゃあ、あの子は駄目だ。あの子は姿形こそ女にもなるが、心は魂は男のままなのだ。そこまで強くもなく逞しくもない。あの子は思っていないか。“いつそ舌を嚙んで死のうか。何のためにここにいるのかわからない”……いや、もし仮に最中に舌を嚙まなか

ったのが……最悪の拒絶を選ばなかったということ。多少は絆される心があったのか？そう思ってはならない。

シエロが死を選ばなかったのは、復讐があるからだ。どんな屈辱を受けても、シャロンの仇を取るまでは死ねないのだあの男は。だから泣き喚いても死んで、逃げ出したりはしなかった。僅かでも許されただなんて思おうとする我が身の身勝手さをカロンは呪う。こんな最低な奴、あの人でなくとも好いてくれるはずがない。自分だって自分を肯定できないのに、どうしてそんな人間をあの人が肯定してくれるだろうか。

「……………もう一つ、聞いても良いか？」

「ええ」

「もしも好きな人に好きな人がいたら、女の子ならどうするんだ？」

何の解決にもならないけれど、それは現実逃避として聞いてみたくなったこと。

「二つに一つ」

「え？」

「諦めないか、諦めた振りをして見守って……………何時までも思い続ける」

「どう違うんだ？」

どちらも諦められないというのは共通している、しかし身を引いたように見えて引いていないというのはどういうことか。

「手段を選ぶか選ばないか。体裁を選ぶか選ばないか。でも結局自己満足みたいなどころもあるんだと思う誰かを思う事って性別関係無しに。だから本人が満足を感じられるかられないか。或いは

満たされない自分に酔うこと出来るか出来ないか」

「な、なんか難しいな」

ドリスの恋愛観はよく分からない。

「ねえカロン君。貴方はあの人の心が欲しいの？身体が欲しいの？それともどちらかを得ればもう一つも直に付いてくると思うの？」

心を求めるならば身体を手に入れてはならない。

身体が欲しいなら相手の心を殺す気構え。哀れになど思ってはならない。

そしてその片方で両方を得ることは出来ない、ドリスは冷酷な言葉をカロンに突きつける。

「俺は……」

「どっちも欲しい？」

「……うん」

「そうね。それは誰でもそう思うわ。私だってそう」

「……え？」

「だけどどちらかに優先順位を付けるならどっち？」

例え触れ合えなくても心で通じ合える仲。心は重ならないのに身体ばかり求め合う仲。どちらがマシかと夜に染まる歌姫が言う。

選べと言われても、やはり選べない。心が触れたら触れたい。もっと近づきたい。触れたらその心までこの手の中に欲しいと思う。

「男の人は良いわね。本命に手が出せなくても、他の女を抱けばいいもの」

ドリスは語る。本命には心を求め、その代用品に身体を求める。そしてどちらも得たつもりになるのが男だと、彼女は吐き捨てる。そしてその直後……

「……………カロン君、私は貴方が好き」

「……………え？」

女の子に告白されている。生まれて初めて。そう思うと死に傾いた心臓が、思い出したように生き急ぐ。

「あの日から、私はずっと貴方が好きだった」

あの日。それは2年前。2年間もずっと俺のことを想ってきたのだと彼女は切々と語る。

「でも歌姫になってからは……………別の世界の人間だから、私は貴方とどうこうなるつもりなんかなかった。何時か私が人魚になって下町を守って……………そこで貴方が笑って暮らしてくれるならそれでいいかなって思ってた」

「ドリス……………」

俺みたいな屑野郎のために、その身を汚して彼女は歌姫になった。今も頑張っている。時には死を望みながらも明日の光を信じて眠る。

「でも、こんなところでまた会えるなんて……………夢か奇跡か。もしかしたら運命なんかじゃないかなんて、馬鹿みたいだよ。浮かれて、はしゃいで……………私ったら」

「ごめん、俺は……………」

「ううん、いいの。カロン君はあの人が好きなんだものね。あんな綺麗な人、私絶対勝てないよ」

ボロボロと泣き出したドリスにどうすればいいのか解らなくなり、カロンは咄嗟に口を開いた。

「そ、そんなことない。君だって可愛いよ」

そんな言葉が口から零れれば、歌姫ドリスが胸へと飛び込む。そして至近距離での甘い声が、脳天へと攻撃を開始する。

「……本当？それなら私を貴方の恋人にしてくれる？」

「そ、それは……」

「……なんてね、冗談だよ。でも私はカロン君が大好き。貴方があの人をちゃんと大切だつて気持ちをお大切に出来るように……カロン君さえ良ければ私、何をされても良いんだよ？」

二度とあんな事がないように。シエロを泣かせないように。そういう駄目な欲を全部吐きだして……唯その心が欲しいのだと訴えていけばいい。そんな甘い悪魔の囁き。

「ねえ、目を瞑って。そうすれば何も解らなくなるから。この身体はこの胸は、この唇はあの人のお物。そう思ってくれて、いいんだよ？」

「や、止めてくれ」

彼女の姿はまるで、先程の自分のよう。

シャロンの代わりで良い。だから愛して。好きになって。一時で良い。

そうシエロに囁いたカロン自身を見せられているみたい。

(シエロが俺を拒んだのは……)

今カロンがドリスを拒むのと同じ理由だ。この唇に触れられたら、もう二度と触れられないあの人の感触が薄れる。カロンがしてしまったことは……二度と触れ合えないシャロンの温もりを、シエロの中から殺してしまうことだった。

それは、俺が嫌いだから拒むのではなくて……シャロンが大切だったから拒んだ。今自分が彼女の口付けを拒むのはそれと同じだ。それなのに俺は、嫌われてはいなかったのに……みすみす嫌われるようなことをしてしまった。そう思うと、もうどうにでもなれと不意に生じる諦め。

迫る唇を拒む力もなくなった。このまま目を閉じれば、何もかも忘れられるだろうか？

「!？」

ガサと揺れる草の音に、カロンの視線がシフトして……そこに会いたくて会いたくない人の姿を映す。

「きゃっ!」

「し、シエ……」

ドリスを引き剥がし、その人に弁解の言葉を……そう思った。けれどその人はまた泣いている。そうして何も言わずそのまま走り去る。

「待ってくれ!」

探しに来てくれた。あんな事をした俺のことを。そう思うと本当にあの人が愛しくて。

だけど追いかけてきてくれた人の目の前で、他の女とキスをして

しまつなんて……なんだかとても酷い裏切りを犯したような気になった。

(俺は……)

シエロにこんな気持ちをさせてきたんだ。シャロンを愛するあの
人に、俺が手を伸ばす度に、あの人は……こんな苦しい思いをして
いたなんて俺は知らなかった。

「シエロっ！」

相手は女の姿だ。子供の足には敵わない。やがては追いつきその
手を掴む。

「離して」

「嫌だ」

「離してよ！」

「嫌だ。離したら……俺の言葉これから何も、絶対聞いてくれな
いだろ」

シエロは嫌々と身を擦るが、手をふりほどけないと知りその場に
蹲る。空いた片手と両膝で顔を覆い隠して泣く。

「カロン君なんか、大嫌い」

覚悟はしていたがかなりショックだ。頭を思い切り金槌でぶん殴
られたような強い衝撃。此方も涙目になるがそれも仕方のないこと
だ。それだけのことをしたのだと受け入れる。

「シエロ……俺は」

「大嫌いなのに……何でだろう」

「シエロ？」

「君がいなくなったと思ったたら心配で、何かあったんじゃないかって馬鹿みたいに取り乱して僕は……」

「……シエロ？」

シエロの言葉には僅かの希望が見え隠れ。本当に不思議なことだが、完全に嫌われた訳でもないらしい。

「カロン君なんか嫌い……君が居ると僕がおかしくなる。変なんだ」

お前は元からどっか変だろとは、流石にこの状況では突っ込めなかった。

「君はシャロンじゃない。君には君の人生がある。だから君が誰を好きになろうと誰にキスしようとする君の勝手だし僕にはどうでも良いことなんだ」

「そ、そこまで言うか？」

「なのに僕は……見てられなかったんだ。僕にはシャロンが居るのに……一瞬でもそれが嫌だなんて、酷い裏切りだ！」

シャロンと同じ顔の人間が他の人間と親しくする。それが気に入らない。多分そう言うこと。自分はもうシャロンに触れられないのにおそらくそれはそういう葛藤。……でももしかして、ほんの少しでもカロンに対する嫉妬の気持ちがあるところにあるのではないかと、浮き足立つ心がある。

「ま、待てシエロ！」

「僕は僕が許せない！手を離してカロン君！」

すつくと立ち上がり海の見える崖まで歩いて行くシエロ。全体重かけて引くが、シエロの方が大人の体型に近い。カロンはずるずると引き摺られてしまう。

「何する気だよ」

「何するのも僕の勝手だよ」

「……いや違う。お前と俺は一蓮托生。お前が俺を嫌っても、それでも俺達は約束した。シャロンの仇を取るんだってお前、言ったじゃねえか！」

「僕は嫌だ。これ以上シャロンを裏切るくらいなら僕は死ぬ！それでシャロンに謝ってくる！仇取れなくてごめんって謝る！」

シエロは呪われている。海に飛び込めば海獣を呼ぶ。運良く高さで死ななかつたとしても人食い鯨に人食い鯨に襲われて必ず命を落とす。それが約束されている。

「駄目だ！」

「離して。離さないとカロン君も死ぬよ」

「お前が俺を嫌っても俺は約束を果たすまでお前から離れない。その途中でお前が死ぬなら仕方ない。俺もそこで死ぬだけだ」

「どうして？……なんでそんなこと言えるんだよ！？君にとつて僕なんか大した人間じゃない」

「それは俺が決めることだ」

「カロン君……」

「お前がシャロンに謝るなら、謝る原因作った俺も行くのが筋だ。俺はシャロンにぶん殴られてもそれでも……お前が諦められない。冥府でシャロンと蹴り付ける」

「な、何で僕なんかを」

「俺は、お前が好きだ」

その言葉に脅える風に一步後ずさるシエロ。それに恐れずカロ
ンも一步前へと崖へと進んで距離を元に戻す。

「俺もシャロンと同じだ。一目見て、俺はお前が好きになった。
ただどこんなの初めてで、どうしたらいいのか全然わかんねえし…
…お前はいつもいつもシャロンのことばかり考えてる」

「カロンの君……」

「俺はそれが……凄く、苦しい。俺だって……こんな思いずっと
する位なら今ここで、最期までお前の傍にいたい」

「僕は……」

シエロがその場にへたり込む。再びその青い瞳に大粒の涙を浮か
べた。

「あんなことされたのに、嫌じゃなかった。それが、堪らなく嫌
だった。僕は繰り返さない！僕は裏切っちゃいけない！やっと巡り
会えた彼女をまた裏切るなんて、僕は絶対にしてはならない！」

「嫌……じゃ、なかった……？」

「うん」

静かに頷くシエロにそんなこと言われた日には、涙腺までシンク
ロしたのかこっちまで泣けてくる。

「シャロンと同じ顔なのに、何もかもが違う。キスの仕方。手の
動き他にも色々。シャロンじゃないんだって思い知って辛いのに、
それが嫌じゃなくなっていくのが嫌なんだ」

言葉を最後まで待たず、背伸びをして無理矢理口付けて……カロ
ンは尋ねる。

「今の、嫌だった？」

「……嫌、……じゃない。いつも君は一生懸命で、君が必死なのが伝わって来る。どうしてそんな君を憎めるだろう」

「シエロ……」

それならもつと確かめたい。何が嫌で、嫌じゃないのか。その口で一つ一つ教えて欲しい。

そう思い再び背伸びをするけれど、にこりと笑うシエロの指に阻まれた。

「だから、これでお終いにしようカロン君。このままじゃ僕は近い将来君を嫌いじゃない、じゃなくて好きになってしまうような気がする。それは絶対に許されないことだ。僕はシャロンを裏切れない」

キスするため此方が腕から手を肩に移動させたのを見計らい、シエロはその手を振り払い、崖へと駆ける。

「短い間だけど楽しかった。僕の我が儘に付き合ってくれて、ありがとう」

最後にふわりと微笑んで、そのまま海へと身を投げた。

「シエロっ!!」

大急ぎで後を追う。迷うものか！近場の大きな石を抱えて一気に崖を飛び下りる。石の重さと海風が味方し何とかその手を捕まえる。

「カロン君!？」

見開かれた青い瞳に、根拠のない確信を持ってカロンは頷いた。その手を力一杯引き、シエロの身体を抱き寄せる。

「鯨にも鯨にも食わせない！俺がお前を守ってやる！」

「ふふ、シャロンならそこで鯨と鯨の降りの後に“私が貴方を食ってやる！”が入りそうだなあ」

「俺だって言おうとしたけど自重したんだ」

「あはははは、そうなんだ」

「シエロ、歌えるか？」

「どうして？」

「海面にぶつかる前に音をぶつけて落下の衝撃を弱まらせる。鯨鯨云々の前に水面に叩き付けられて死ぬってオチが目に見える」

「でも超音波だとカロン君耳塞げないし、大声だとそれはそれで鼓膜が大変だよ？」

「う……」

「でもそうだな……」

シエロは軽やかに歌う。すると眼下になにやら無数の透明な蠢く物体が生じる。

「何あれ」

「召喚魔法、海月君。僕のご先祖様の昔の友達らしくてね……縁あって召喚できるんだ。クッション代わりに落下したらそんなに危険ではないかも」

「お前そんなことも出来るのか！凄いな！」

「この間下に降りるときも空中召喚して踏み台階段にして安全圏まで降りたんだっただなあ」

「お前以外とアクティブだな」

「うん、でも最後に足を滑らせてあの様だったんだ」

「ああ」

確かに初対面時から情けない男だった。それを思い出してカロンが小さく笑む。水面はもう間近だ。海月は触手を伸ばして此方の身体を掴み、スピードの減速を手伝ってくれる。

「ぶはっ!」

海月のクッションのお陰で衝撃は和らいだ。しかし投げ出されて海水へ浸かってしまう。陸まで百メートルは有るだろうか。海獣が来る前に急いで逃げなければ。まるで泳げないシエロに海月を何個か抱かせてその腕を引き陸地へと泳ぎ始める。

「この海月意外と役に立つんだな」

「いやあ……でも一つ欠点があつてね、食べると美味しいらしいんだ。栄養価も高いし遭難したときに召喚すれば多分生き延びられるって言われているくらい特殊な海月なんだって彼らも自負してて」「それ、欠点じゃないだろ。下町で海月屋でも開いたら良いんじゃないか?」

「いや、ええとご先祖様の友達だし、僕の友達だし食べるのはちよつとそれに……だからね、つまり……」

「うわああっ!」

水面を過ぎる幾つもの暗い影。こんなに早く鮫が現れるなんて聞いていない。

「僕にも本人達にもそれが何故なのかよく解らないみたいだけどあまりにも美味しい出汁が漂っているのかすぐに鮫を呼んでしまう欠点があるんだ」

「そういつことは早く言えっ！シエロ！海月を放せ！」

召喚した海月が片っ端から食べられていく。それを見、カロンはシエロの手から海月を奪い遠くへ投げる。

「え！メドウーサ！クヴァレ！ウォーターマザー！シームーンっ！」

「俺に掴まれ！ていうか一匹ずつ名前あんのかよ……」

幸い人間よりもその海月は美味らしい。海月に鮫達が群がる内に陸を指指そうとカロンは賭に出る。

「シエロ！身体の花抜け！流れに身を任せろ！ってそこで照れるな！」

「は、はい」

なんなんだこいつ。こんな時に命掛かってるのに嫌らしい発想するなんてこいつも大概変態じゃないか。確かにエロいシーンでありそんな台詞が混ざっていたが。

「お前……こんな時によく笑えるな」

「カロン君の所為だよ」

「は？」

「僕本当に死ぬつもりだったのについて来るし」

「それはお前が……」

「カロン君が来ちゃった所為で、なんだか全然死ねる気がしない。君は冥界の渡し守には向いていないね」

「当たり前だ。俺は生きてる奴のための渡し守だ！だからお前を死なせない」

「……そっか」

何を思っただけでシエロが笑うのか解らないが、少なくとも先程よりは思い詰めていないらしい。これなら落ち着いて話が出来る。安全なところまで行けば。

必死に手足を動かして……進む内に近づく何か。

「あ……あれ、俺の舟だ！何でこんな所に？まあいいや！乗れシエロ！」

さてはオボロスの奴、ちゃんと繋がらなかったな。舌打ちしかけるカロンも、友人のその適当さで今助けられている。咎めるわけにはいかないし、櫂を手取る。

「よし！逃げるぞシエロ！」

俺は船頭だ。舟と櫂さえあれば恐れるものなど何もない。みるみる陸が近づいてくる。見慣れた下町までもうすぐだ。

「見てるかシエロ！どんどん遠離っていくぞ」

「ああ、僕のアクアマール……アーグワマードレ……ヴァッサムツター……マールルーナ……マールルーナ……メーアモント。君たちと一緒にぶかぶか海月風呂をした日々のことは忘れないよ……うっつ」

「そんなにあいつら名前あんのかよ！？って全部くらげって意味じゃねえか……！」

「あいたっ」

思わず櫂で頭を叩いてしまった。ツッコミのつもりが強くなりすぎた。

「うわあっ！」

「大丈夫かシエロっ！！」

舟から投げ出されたシエロ。引っ張り上げようと手を伸ばし水中で揺れる影を見る。

「……っ！」

引っ張り上げる途中でシエロの足が噛まれた。このまま引っ張ればシエロの足が食いちぎられる。

「くそっ！」

一度手を離しカロンは櫂を手に水中に身を投げる。

（離れろってんだ！）

飛び込む勢いで振り下ろした一撃。それは良かった。しかし水中での水の抵抗、櫂を振り回すのは地上よりも遅れてしまう。

（くそっ！）

蹴りの方が早い。連続で蹴りを入れるが相手はシエロの足を放さない。流れる血の臭いに海月を補食していた奴らが躍り寄る。

もう駄目か。シエロも水中に引き摺り込まれて息が出来ない。このままじゃ捕食云々の前に溺死する。シエロは泳ぐことも息を止めることもよくわからない、天上暮らしの箱入りだ。

さっきまで死ぬのを諦めたような顔をしていた癖に、今度はあっさりと生きることが諦める。今会いに行くよシャロン、と海の中から空を見上げて優しく微笑む。

（ “ そんなの認めるもんか！” ）

沸々と湧き上がる怒り。

（ “ シエ口を放せっ！” ）

怒りのままに權を薙ぎ払う。水の流れが味方をしてくれたのか、すんなりと攻撃が決まった。鮫がシエ口の足から口を離す。

シエ口はカロンの攻撃が、叫びが聞こえたのか、目を見開いて…
…そして口をこう動かした。

“ カロン君、歌って ”

意味は解らない。それでも、確かにシエ口の声が聞こえた気がした。

理屈は解らないが何かを喋っていた方が攻撃が決まりやすい。シヤロンが人魚の生まれ変わりならその兄である自分にも何か恩恵があつたのかもしれない。そう決めつけてカロンは口を開いた。

いつもシヤロンが歌っていた歌。シエ口が歌って見せた歌。俺は鼻歌だけの歌。それに今歌詞を付ける。

シエ口は死なせない。そういう強い意志と、今の自分が持つ理不尽な怒りと悲しみ……それと僅かな幸せを織り上げて、カロンは歌った。

《 ゆらゆら大海原を 漂う小さな舟

求めた岸は遙か 届かぬ想い乗せ

嗚呼愛しい貴方よ 空と海の此方に

二人歩く街並も 砂の城消えゆく

愛しい空よシエロ　どうか僕を愛して
貴方まで届く言葉　一つだけ僕に下さい
ゆらゆら嗚呼波間に　送る人魚あなたへの涙

ゆらゆら貴方の傍に　居るだけで苦しい
ゆらゆら貴女の瞳　僕だけ映したい
嗚呼愛しいあの子の空　この腕伸ばしても
二人別つ時が来て　貴方を呑み込む闇

愛しい貴方よ　忘れないでいて
貴方の傍には僕がいる　お化け鯨の胃の中だって
ゆらゆら　嗚呼闇間に　笑い流した涙

ゆらゆら　嗚呼貴方と　暗い海の底まで
ゆらゆら　嗚呼何時か　想い届く日まで　》

するとどうしたことだろう。鯨たちの動きが止まる。

(シエロ！)

その際にシエロを抱いて海面へ。再び、舟へと上がる。見れば人
食い鯨たちはゆらゆらと、沖の方へと帰って行く。

「大丈夫かシエロ!？」
「うん、平気。凍らせて止血したからしばらくは」
「そっか。じゃあ……」

そこで手に權がないことを思い出す。しかし辺りを見回せば舟の

横まで浮かんできてくれた。

「カロン君……君とシャロンは、双子だったよね」

「そうだけど？」

「そっか」

「それが何だって言うんだ？」

「君もウンディーネだったんだってことだよ」

「は？」

突然の言葉にカロンの櫂を持つ手が止まった。

「君の歌は確かだ。それに海獣を鎮める歌なんて、海神の娘にしか歌えない。君とシャロンは人魚の魂を二分して生まれてきたんだ」

「俺が……俺が人魚!？」

シャロンのことを聞いた時以上に信じられない。

「全く酷なことをしてくれたものだ。それじゃ僕が君を嫌えるわけが無いじゃないか」

驚くカロンの傍らで、シエロはぐったりと舟に横たわり……ぶつぶつと言っている。

「でも俺、呪われてないぞ」

「そ、それは……き……君が僕なんかを好きになるから。僕は呪いでこんなことになるけど元々は男だから、男に恋をしたって性別が変わるわけが無いじゃないか」

「でも俺今海水被ったけど」

「あのねえカロン君。強姦が結ばれたって表現に変わるなら世の中のお伽話は大変なことになるよ。要するに君がシャロンと同じ呪

いを得るには……想いが通じ合った上でそういうことをしないとだね」

「つまり俺に呪いが発動したら、その時はシエロが俺に惚れた時ってことか」

なるほどとカロンが内容確認したところで、シエロが両手で顔を覆いながら暴れている。

「こら！暴れるな！舟沈んだらどうしてくれる！」

「嫌だああ！どうしてこんなことになるんだっ！僕にプライベートシィはないの！？なんで僕の裏切りを明確化してしまうんだ君の呪いはっ！」

「だけど俺も自在性別移動出来た方がシャロンの仕事やる上では楽じゃないか？正体ばれる確率も減るし」

「なんで君はノリノリなんだよカロン君んんんっ！」

「シャロンには俺も一緒に謝ってやるから諦める。俺も人魚なんだろう？それならお前が俺に惚れない訳がないじゃないか。むしろ俺に振り向かない方が半分は先祖への背徳行為じゃないのか？」

「半分はそうだけど半分は裏切りなんだってば！」

「意固地だなお前は」

「僕は僕のご先祖様みたいに軽薄な男にだけはなりたくない。生涯同じ人を一人だけを愛するって決めてるんだ！だから駄目ったら駄目！」

「嫌じゃなかった癖に」

「嫌じゃなかったってだけで、別に良かったって訳でもないからね！」

「でもお前欲求不満なんじゃないの？」

「マイナスさんの言葉悪用して流用乱用するの止めてっ！僕はそこまであれじゃないんだ！」

「あれってなんだよ。俺ガキだからよくわかんねー」

「う、うづう。カロン君そんなに僕を怒らせて楽しいの!？」

「ああ、楽しい」

「ひ、酷いよカロン君!この数日で僕虐めに拍車が掛かっている。誰に毒されたの?アルバ?マイナスさん?エコー?」

「……そんなことよりもう着いた。その足じゃ歩けないだろ。掴まれ」

「うわあっ!」

水路に入って下町へ。舟を繋いで陸へ上がる。シエロの服や髪は水を吸っていて重かったがこれが命の重さかと思うとこの重さまで愛しく感じる。どうしようもない俺。

「この間と違う家だね」

「俺の家、殿下の部下に随分荒らされてたみたいだからな」

通り過ぎた家は酷い荒れようだった。あれでは傷の手当て所かゆつくり休めやしない。

「つーわけで、オボロスの家を拝借した。あいつの鍵の隠し場所は知ってるからな」

「君、幾ら友達だからってそれは酷いんじゃない……」

「いーんだよ。あいつん家あいつしか居ないし。そのあいつも仕事でよく家空けてたし。その間俺が掃除任されてたんだ。この位当然の報酬だ。それにこいつの家のベッドの方がふかふかしてて寝心地が良い」

「……あはは、そんな理由なら……仕方ないね」

シエロがくすくす笑う。

「痛むか?」

「そりゃあ、まあ」

「染みるけど我慢しろよ。とりあえず応急手当だ。明日下町の医者に連れて行く」

「うん……でも多分大丈夫だよ。僕は人魚の血を引いてるし、怪我の治りは早いんだ」

人魚の肉は食べれば不老不死になると言う話もある。その子孫なのだから身体の作りは多少普通の人より丈夫なのだとシエロは言う。

「そうなのか？でも俺やシャロンはそんなことないぞ？」

「シャロンや君は生まれ変わり、魂だけだから。身体の方は普通の人間なんだからそれは難しいと思うよ」

そこでカロロンが納得すると、一度会話が途切れる。寝台に腰掛けて、手当てされた片足をシエロはプラプラさせている。

二人とも水に濡れた所為でびしょ濡れだ。タオルを借りて身体は拭いたが肌寒い。着替えを適当に借りたがシエロにはサイズが合わない。だからドレス姿のまま、時折クシャミをする。毛布を渡してやったがまだ寒そうだ。そんなことよりなんかベッドに女の子が腰掛けてる図ってエロい。そんなことは勿論ないんだろうけど、誘われてる図に見えるから困る。

（待て待て、こういうやましいことばかり考えるからシエロに嫌われるんだ）

しかしどうにも女シエロがけしからん姿なのは事実なので、健全な青少年としては仕方のないことだと思っ。

「シエロ、寒くないか？」

「え？」

「勘違いすんな！風呂沸かすって言うってんだ」

勘違いされるようなことをしてきたし、考えていただけに説得力は無い。しかしこの悪友の家はなかなか設備が良い。こぢんまりとしているが、ちゃんと風呂もある。シエロを真水の風呂に入れて男に戻せば此方の精神衛生上も宜しいはず。そうに違いない。カロンはそう結論づけてさっさと風呂を沸かすことにした。

「はあ……やっぱりお風呂は気持ちいいねー」

幸せそうな笑顔でシエロが出てくる。手当をした足は入れなかったがすっかり暖まることが出来たみたいだ。

少しサイズが小さいのか臍が見えるのがエロい。触りたくなくなるような腰をしている。しつとりと水気を帯びた髪はいつもよりも長くて尻以上の長さを保つ。女の時より足は細くなつてて尻周りの肉も減ったけどこれはこれで……

（つて俺相手が男に戻っても結局それかあああつ！どんだけ盛つてんだ俺はっ！自覚えたての猿かつ！人魚の子孫ってなんか変なフェロモンでも出してんのかくそっ！）

「カロン君？」

壁に頭を打ち付け始めたカロンにシエロが目を瞬かせる。

「き、気にすんな。唯の下町健康法だ」

「へえ、下町の文化は面白いなあ」

興味深いとシエロが笑う。しまった、下町風評被害。ていうかシエロもシエロだ。そんな変な話信じるな。

「お、俺も入ってくる」
「行つてらしゃーい」

ひらひらと手を振るシエロはもう俺を全然恐れてもいないようだ。そりゃそうだよな。男に戻れば俺みたいなガキ、怖いことなんか無いんだろうな。そう思うとそれはそれで憂鬱だ。

ブルーな気分で風呂を上げれば、シエロが横になりぼーっと虚空を見上げている。

「シエロ？」

「あ、カロン君」

「どうかしたのか？」

「あのね、ここからだと言が見えるんだ」

寝台横の窓を指差し、シエロは不思議だねと自分がいた街を指差した。

「ここからあの街はあんなに遠いんだな。それに海の音、こつちの方がずつと近くに聞こえる」

「新鮮か？」

「うん、だけど少し怖いな」

「怖い？」

「あの海の音もつと近くに迫ってきたら、僕は多分すぐに死んでしまう。下町の人達は毎日こんな気持ちで暮らしているのかと思うと、何も知らずに上で暮らしていた僕が、何だか申し訳なく思えてくるんだ」

それならお前が王になればよ。そうは言えなかった。シャロンを失ったシエロは玉座を求めないだろう。この街への感傷は、復讐を得

乱他時点で切り捨てたからこそ。見捨ててしまったから感じる胸の痛みだ。

「怖くて眠れないとか言うんじゃないだろうな？」

「僕は空に來たその日からちゃんと眠れた君の方が不思議だよ。怖くなかったの？もし街が落ちたらとか」

「いいか賢い馬鹿貴族。庶民って言うのはその日一日を生きるのに精一杯だ。だから明日のことは今日考えない。今日悩むのは今日の悩みだ。明日の悩みはまた明日悩めばいい」

「なるほど、僕は余計なことまで考えすぎているのかな」

シエロは笑って身体をずらした。一人分の寝台だが、二人で眠れないこともない。

「俺はあつちで寝るから良いよ。お前怪我人だろ」

やはり海が怖いのか、高いところで眠りたいらしいシエロは自分がベッドから降りることはない。それで自分だけ安全圏にいるのは申し訳ないと彼は言う。

「年下の子を床で寝せるわけにはいかないよ。それともカロン君は女の僕とじゃないと同衾したくないっていうのかな？」

「俺が何かするとか思わないのか？」

「仮に君に今の僕が襲えるならそれはそれで評価してあげるよ」

「い、言ったな！宣戦布告だな！」

「さあ、どうだろう。波の音で何も聞こえないな。……というか流石にカロン君は友達の家で寝台で悪さをするような子には見えないうってぎゃああああ！ちよっ！変なところ触らないでよ！」

「やっぱ胸は無くなるんだな。あの脂肪何処に消えてるんだ？ていうかお前がどうぞって言ったんじゃないか」

「そうは言っていないよ」

甘く見すぎたとシエロが額を押さえる。

「シャロンはまだ解るよ、元は女の子だし。そう思えば精神的な背徳観念もないだろう。だけどカロン君。君は男の子だ。それに君が好きなのは呪いが掛かっている時の僕だろうか？そんな無理してこっちの僕まで好きになった振りはしなくていいんだよ」

「そ、そりゃあ女のお前は好きだけど……俺が惚れたきっかけは下町で会った今のお前だ」

「え……？」

その割りに対応酷くなかった？基本的に女の時は優しいけどと俺を疑問視するシエロの声。

「信じられねえ？」

「うん」

「真顔で頷くなよ」

覆い被さって額がくつつくほど近づいてもシエロに警戒心は見られない。一度あんなことをされておいてどこまで俺を舐めているんだこいつは。

（仕方ない……）

カロンは自分の服のボタンを外す。それに何事かとシエロは戸惑う。

「カロン君？」

「シエロ……練習しようぜ。今度は明日と同じでお前が俺に色々

……」
「そ、それは駄目だよ！僕からなんて、そんなのもっと裏切りだ
！」

寝台から転げ落ちる様な勢いで足を引きずり逃げ出そうとするシエロ。その顔はまた涙目だが、その背中を全体重かけて踏みつけてカロンは逃がさない。

「お前がシャロン相手ならどっちでもいいって言った様に俺だつて……」

「カロン君……」

「俺はお前が相手なら……」

何されてもいい。足を離してシエロの青を見つめるがその目は曖昧に微笑んで……シエロはカロンの額に口付けるだけ。親が子供におやすみなさいと言うように愛情深いものだったけど、それはカロンの欲しいそれではなかった。

「今日はもう遅いし、明日も大変だから早く寝ようね？夜更かしは背が伸びなくなるよ」

「だからそうやって俺を子供扱いするな！」

くそ。今に見ている。いつか絶対に俺も呪いを発動させてやる。そんな奇立ちも、この人が生きているからだと思えば次第に気は和らいでいく。本当に何か一つ間違えれば失っていたかも知れないのだ。今はこうして……この人が生きて居て、その隣にいられるだけで……カロンは十分幸せだった。

*

裏切りの王子

『いつそ貴女を裏切ったこの僕を、この上ない残酷な罰が襲えばいい。』

それが明示されているなら裏切りなど、誰が犯すものだろう？
『？』

*

「やれやれ……」

疲れていたのだろう。すんなり眠りに落ちたカロンの寝顔を見守って、そこに失った人の面影を見出すだけで、シエロは歓喜し苦悩する。

よりにもよって人魚姫の魂が二つに分かれていたとは。裏切りの代償は余りに重い。運命の人が二人もいて、その二人を相手に裏切るなど強いられる。どちらを選んでも裏切りで、振り向かないのも裏切りで。こんな事が解っていたならシャロンとも何も起こらぬ内に自分は命を絶つべきだった。しかしその場合シャロンはもっと不幸な人生を歩んでいただろうか？それなら少しは彼女の幸福の手伝いを自分は出来たのだろうか？

「いや……」

結局守れず死なせてしまった。それでは先祖と同じだ。

(カロン君……)

振り向くことは絶対に出来ないけど、君をシャロンみたいな目には遭わせない。今度こそ守れと貸し与えられた尊い命なのだと思う。

「でも、君をあそこまで追い詰めてしまっなんて……やっぱり僕は復讐なんか望まずに、君に会いに行かずにシャロンに会いに行くべきだったのかな」

この少年は女のシエロのみならず、男の姿のシエロを含めて好きだなどと言った。それを嫌だと思わない、思えない心が問題なのだやがてそれは裏切りに繋がってしまう。

(だけど……)

死ぬかもしれない。死ぬと解ってて一緒に海へと落ちてくれた子。どうして嫌うことが出来るだろう？

あそこでカロンが人魚の力を出さなければ二人ともあそこで死んでいたのは間違いない。

「はあ……」

あんな必死な姿見せられたら多少なりとも心は揺れる。

(シャロン……どうか僕を戒めてくれ)

11：海の歌姫（後書き）

カロンが吹っ切れた。
ドリスが怖い。

シエロは海月パラダイス。

12: Charon = Huldbrand という歌姫

裏切りの王子

『君は僕を助けてくれた。君がいなければ僕はずっと死んでいった。』

死んでいるままだった。

だから僕は君に感謝している。

君が海に帰れないというのなら、僕が君の家に居場所になるう。

帰る場所がないのなら、そうずっとここにいて良いんだよ。』

*

「カロン君はいいよね」

自宅に戻って自分の服に着替えることが出来たカロンを羨まし気にシエロは見る。

昨日海に落ちた時は自分は女の格好。半乾きの服は当然女物。オポロスの服を借りようにもサイズが異なりこれでは出歩けるような代物ではない。よってシエロは再び塩水で女になるしかない。

「シャロンの1年前の服じゃ入らないだろお前には。ウエストは大丈夫でも胸と尻がアウト。裾の広がるスカートなら入るけど嫌がったのはお前だろ」

「あ、あんな短い丈のスカート恥ずかしいよ」

「お前の足が長いのが悪い」

そう結論づけられては、返す言葉もなくなって……シエロは舟の

中膝を抱えて俯いた。服からはまだ僅かに磯の香りがする。

「あら、カロン君！最近見かけないから心配してたのよ」

「いや、俺もちよっと違うバイト初めまして」

「あら、そうだったの。下町の船頭さんが少なくなると不便になるわねー、でも下町で仕事しても食べていけないって、みんな外へ出て行っちゃうものね。仕方ないわ」

小舟で街を進む、道ですれ違ってお喋り好きの女達。べらべらと喋り出す中年女性とカロンは愛想良く相手をする。

(カロン君だってかなりの女好きだよ、アルバとそんなに違わないじゃないか)

こんな愛想の良いカロンを見ると、昨日の言葉もどこまで本当なのか解らない。少しカロンが浮かれているのもシエロと一緒にだからではなくて、女のシエロと一緒にだからなんじゃないかと疑ってしまう。

「こら、あんた。あんまりカロン君独り占めしてるとそっちのお嬢ちゃんに失礼だよ」

「あらあら、お客さん乗ってたの？お邪魔しちゃってごめんなさいね。ってあらあら！随分と綺麗な子じゃないの！カロン君も隅に置けないわねえ！雇われ先のお嬢さんかい？」

「あんら、そうなの？あたしやってつきりカロンちゃんの彼女かと思っただよ」

「ち、違います！僕は別にそんなんじゃない……」

今度はシエロが中年女性達に絡まれる。娯楽と話題に飢えているのか根掘り葉掘り聞きたがるその女達にシエロはどうしたらいいの

かわからない。空の淑女達とこの熟女達は大分テンションが違う。

「ええと、あの……」

「その辺で勘弁してくださいよ。こいつ、照れ屋なんです」

「カロン君……」

ずいとお前に進み出て自分より小さな背中を守られる。何だかとても自分が自分で情けない。

しかしそんなカロンの行動に、女性達も空気を読んでくれたようでくすくす笑いながらその場を後にする。

「ほら、シエロ」

「な、何？」

手渡された赤い果物に首を傾げれば、カロンがにやと笑う。

「おばちゃん達から、デートの邪魔したお詫びだって」

「で、ででででーとなんかじゃないよ！」

真っ赤になつて俯くも、カロンはまだにやついてこちらを見ている。周りからはそんなふうに見られていたのかと思うとシエロはまた舟から飛び下りたい気持ちで一杯になる。

「別にそう見えるならそれで良いだろ。今日の試験も上手く行くって自信持てるし俺も」

「カロン君……」

最初は僕とシャロンの思い出を取り戻したいって言ってくれていた。そのために証明書を取り戻そうって。そう言われた時は本当に嬉しかった。

(でも……)

カロンを真似て、シエロも渡された果物をそのまま齧り付く。酸味が口いっぱい広がった。

(カロン君が本当に僕なんかを好きだって言うんなら……)

一緒に試験を受けるのは、とても苦しいことなんじゃないだろうか？彼にとつて僕が縋るシャロンとの思い出なんて、無くなつてしまえばいい部類のものであるはずだ。そう思うとシエロは、目の前の少年の考えがよくわからなくなる。

(……カロン君はきつと、役者なんだ)

彼は歌姫としてよりも、役者としての才能があつたんだろう。シヤロンになりきろうとして、なりきつた結果……僕なんかを好きになつたような錯覚に陥っているだけ。多分それだけなんだ。それで自分の心を見失っている。僕なんかを好きだなんて思い込んでしまっている。そこに僕が甘えたり付け入るようなことがあつてはならない。

まだ数日しか一緒に過ごしていないけれど、その間にもいろいろあつたけれど……僕は彼を心憎くは思っていないし、基本的には良い子なんだとも思う。彼の優しさに何度助けられたかも解らない。

時々シャロンの話に出てきた彼女のお兄さん。こんな風にじゃなくっていつか会つてみたいとは思っていた。でもそれは多分僕が人魚になつたシャロンとの結婚を願い出る時だったのかな。そうしたら僕はカロン君にそこで一発くらいは殴られていたんだろう。そう、そういう出会いでも良かったはずだ。シャロンさえここにいてくれれば僕がこうして揺れることもなく、カロン君だって自分の心を見

失わずにいられたはずだ。

(別に人魚の子孫は僕だけじゃない)

他の選定侯家には女の子もいる。エコーだってそうだ。シャロンと瓜二つのお兄さんとかなれば、彼女だって揺らぐはず。愛しのシャロンと義理の姉妹になれるならそれはそれで彼女にとっては鼻血物だろう。

先祖の罪の償いと、人魚を幸せにすること。彼を幸せにするのは僕でなくても構わなかったはずだ。それなのにカロン君は僕なんかが良いと言う。それは本当に早計だよと否定しようと思うのに、水面に揺れるこの舟みたいに僕の心は揺れる。

彼にあそこまで言われて、強く拒絶できない。シャロンへの裏切りだ。裏切りになつてはならない。それを理解しながら、歌姫ドリスとのことに傷ついたり、彼に色々されるのが嫌じゃなかったり……。彼の言葉に、行動に……。死んだはずの心が脈打つようで、裏切りの時を刻む。

「シエロ」

「あ、な、ななな何？」

「折角街案内してんのに返事が無いっていうのはどうなんだ？俺だって凹むんだけど」

「あ、ぐぐぐぐぐぐぐめんー！」

「それはそうと、着いたぜゲート。ここがお前の家が管理してるゲートだよな？」

舟を停泊させ、カロンが空へと続くその階段を指差した。

「にしても長いな……お前こんな所俺を抱えて上つたのか？」

「ううん、違うよ」

「んじやまた海月階段か？」
「それも違うよ」

そういえばまだ話して居なかった。シエロはそれを思い出す。

「お帰りなさいませフルトブラント様！アルバ様から連絡は受けております」

「ああ、ありがとう。お疲れ様」

僕が階段ではなく、螺旋階段支える太い柱に近づくと……カロン君が疑問符を浮かべた。

「螺旋階段上るんじやないのか？」

「ううん、僕の体力でこんなところあんな短時間で上れる訳が無いじゃないか。大体今から階段使って夜まで戻れるかも怪しいよ」

柱に掛かる扉を開けて彼を中へと誘えば、背後から歓声が上がる。柱の中は小さな部屋。部屋の足下にはプールがあつて、そのプールから伸びる一本の筒。それは海底から空へと伸びる水の道。水が上へ上へと上っていく大自然の昇降機のような物。

「ゲートはそれぞれ海水の吹き上げポイントに作つてある。だから下から上は上ろうと思えば一気に上れるんだよ」

「へえ、便利だな」

「唯問題はここの海水は地中から吹き出すものが多く含まれていて、塩分も豊富。僕は息を止めないで済むのは助かるんだけど……カロン君はそうもいかないよね」

あの時は気を失つていてくれたから何とかなつたけど、今回はもうも行かない。この道の通過を認められているのが選定侯家の中で

も呪われた物だけというのには理由がある。

「カロン君、もし息続かなくなったらその時は仕方ない。不可抗力だから僕から空気奪って良いよ。塩分の過剰摂取は人間にはよくないからね」

「え？それならお前だつて」

「生憎僕は幾らか人じゃない」

プールの水は凄くしょっぱい。けれどこの水が僕の呪いを更に深める。

「先祖返りつて言うのは人魚の血も強いってこと。塩分の急激な過剰摂取はその塩分をどうにかしないとって人魚の血が僕の身体に働きかける。結果この様さ」

あまり人に見せたい物じゃない。両耳の横上には大きな鰭が出来るし足は鱗と尾びれに変わってしまう。昨日も最悪、海水をがぼがぼ飲もうかなとは思ったけれど、ここまでの塩分は無かったから変身するまでかなりの量を体内に取り入れなければならぬし、時間が掛かる。第一人魚の姿になったからって相手が僕を食べなくなるわけじゃない。

「カロン君？」

見れば彼は両手で鼻を押さえている。気味悪どころかツボにはまってしまうたらしい。

「ちょっと止めてよ！鼻血にだって鮫は寄ってくるんだからっ！ゲートの底を破られたら危険なんだよ？唯でさえ呪いがあるから高速で移動しないと危ないのに」

鼻血止まるまでプールに入るなと教えるも、何故か僕が逆ギレされた。

「お前が馬鹿だ！人魚の格好になったのに服を着てるなんて邪道だ！絵画とかの人魚を見てみる！胸を隠すのは髪の毛以外俺は許さない！」

「カロン君……」

そんな力説されたら余計に君は女の僕が好きだけなんじゃないかって思えてくるよ。

シエロが溜息を吐く間も、カロンは何やら力説していた。もう面倒だし確かに服を着ていない方が早く泳げる。どっちにしる鼻血を出されるなら早く泳げた方が良い。

「もう何でもいいや。カロン君、早く行こう。僕に掴まって」

先程までの勢いは何処へ行ってしまったのか。おずおずと抱き付いてきた少年にシエロは苦笑し、水に飛び込む。プールの中から筒へと繋がる穴へと潜り、後は水に押されるままに鰭を動かさひたすら上へ。途中カロンの苦しそうな呻きが聞こえたで見ると息が切れかかっている。この水の勢いだと言えないのだ。

彼は魂こそ人魚だが、身体は人間。歌の本質は魂にある。だから水中での守りも奇跡も歌わなければそれを成せず、呼吸が出来ない。先程その解決法を教えたのに、深く考えていなかったのか。人魚を見て頭から抜けたのか。この子は無自覚で卑怯な子だ。

今のシエロは水中でも呼吸が出来る。だから口を塞がれても、その空気を奪われても問題ない。そう教えてあげたのに……

(あくまで僕からさせるつもりか)

不可抗力とはいえ、あの事故とは毛色が異なる。明確に、僕から裏切りを犯せと彼は言う。彼の無意識が。

(シャロン……君のお兄さんを死なせるわけにはいかない)

人工呼吸は裏切りにカウントしないで欲しいなと心の中で詫びながら、カロンに空気を送る。それに気が付いたのか、彼は水中で目を見開いて……目に染みたのだろう。痛そうに目を閉じた。

「ぶはっ！」

「はあっ……着いたね」

柱の上にもまたプール。そこを上がればまた部屋がある。こういう時のために上にはシャワー室と、真水と着替えを備えた部屋がある。その先にはまだ部屋があり、全体的に上は下より広い作りになっているのだ。先の談話室には机や椅子、寝台もありちよつとした休憩スペースが。階段を上って力尽きた人間が居た場合、そこを貸し与えることもある。

唯、この身体だと隣の部屋まで移動するのも一苦労だ。

「カロン君？」

びちびちと這いずりながら、シエロは身体を拭くためのタオルに手を伸ばし、カロンにも手渡したが、どうも反応がない。もしかして塩水飲み過ぎたんだろうか。

様子を窺おうと顔を覗き込むと、冷たい水の中から出てきたとは思えないほど顔が真っ赤だ。僕にあんなことをしておいて今更人工呼吸一つでそんなに照れられても……

シエロはそう思うのだが、カロンにとってはそうではないらしい。

(今更そんな顔されたら僕だって……)

急に恥ずかしくなる。視線を逸らせば会話も途絶え、微妙な沈黙が流れる。

「それ、どうすれば治るんだ」

「これ……？」

「歩けないだろ」

「ああ、それは」

簡単だよと言おうとすれば、扉を開ける黒い影。

「お帰りなさいませシエロ様」

「あ、アルバ！」

執事はその手に水筒を抱えていた。帰ってきた気配を察し、隣室から真水を持ってきてくれたのだろう。

海に落ちたと聞き、予め戻るならここだろうと待機してくれていたのかもしれない。うっすら彼の目の下に隈があることに気付いてシエロは頭が上がらなくなる。何だかんだで昔と変わらずこの男は優しいのだな。

「ありがとう、助かったよ」

水筒の水を飲んで体内の塩分を中和する。それに伴い身体が人間の女のそれへと戻る。ここから男に戻るには、更に身体を真水で洗って乾かす必要があった。けれどそのための設備はここに備わっている。

「水を飲むと戻るのか」

「うん。人魚化はシャロンの呪いと同じような切り換えだね」

他にももう一つ切り換え方法があるにはあるけど、今はまだカロンには関係ないことの上に、少し恥ずかしいので話したくなかった。

「シエロ様」

「うん、解った。男に戻ってそっちの服着ればいいんだよね。あ、カロン君も着替えるならシャワー浴びるよね？」

「お前が先で良い」

「解った、ありがとう」

レディーファーストのつもりなんだろうか。そう思うと少し微笑ましくて胸がこそばゆい。お言葉に甘えてシエロは隣室に向かった。

*

海神の娘

『貴方は海のように優しい人。貴方の傍では呼吸が出来る。

貴方は優しい水。貴方は悲しい歌。

私は愉快的な波。私は楽しい歌。二人で歌えばそうきつと、寂れた屋敷にも棺の中にも海の底にも日の光が届くことでしょう。

ねえ、優しい貴方。

貴方は私を裏切っても、貴方が私を殺すことなど無いのでし

ようね。』

*

「……和解したようだな下町小僧」
「……別に」

明後日の方向を向いたまま、黒衣の男がカロンに話しかけて来る。カロンもどこその方向を向いたままそれに応じてみたが、話にならない。仕方ないので男の方へと向き直るが、アルバはまだ明後日を見つめている。

「で？下町でまた一発やらかしたのか？あの様子だと小僧、またシエロ様に手を出したな」

「出してねえよ！」

「出さんか愚か者っ！」

「ぶはっ！」

目を逸らしたままの男に思い切りぶん殴られた。

「あのお美しいシエロ様を前になんだその言い草は！普通そこは和解し男でもお前が好きだとか戯れ言を抜かして手を出す方向性ではないのか！？」

「あんたの妄想を押しつけるなっ！っっていうかなんだそれは！！」

いや、手出そうとしたけど。たけどお互い疲れていたし。第一今のシエロは俺相手に使い物にならなそうだ。だってシャロンが死んでまだ四日だ。喪に服してる間だ。不能になってもおかしくない。そうなれば今日の試験だって怪しい。俺から何とかしないとダメでてるくらいなのに。そうなるやっぱり俺が襲うしかないってそれじゃあまたシエロを傷付けるだけじゃないか。

「ていうか……お前、シエロが好きだろ」

「無論お慕いしているが、何か？」

「はあ、良いお風呂だったあ……」

「それは何よりです」

「だ、駄目だシエロ！そいつの前でそんな無防備なっ！」

「あはは、カロン君。アルバは男に興味はないんだって」

何も解っていない湯上がりシエロは暑いからってブラウスのボタン全開だ。身体を拭いたから男に戻っているが、服の間から見える素肌がなんともエロい。

「まったくもって失敬な。男のシエロ様にも興味があるのはカロン様でしょうに」

「ぐっ……ぐぐぐ」

否定できないのが辛い。

「あ、ああ好きだ！その何が悪いんだ！だから他の男の前でそんな姿すんな馬鹿っ！」

「か、……カロン君？」

ボタンをぶちぶちと閉じ始めたカロンに、シエロは湯上がりだからという言い訳が通じない程に顔を赤く染め上げた。

「……んじゃ俺が入ってくる」

むしゃくしゃした気持ちを水でも浴びて忘れよう。タオルと着替えを引っつかみ、カロンは部屋を後にした。

あの二人を残すのは心配だったが、あの変態の嗜好から見て今のシエロに手を出すことはないだろう。そんな展開あるのなら、俺がここに来るより前に既にどうにでもなっていそうだ。

「……………裏切り、か」

俺の思いはシエロに裏切りを犯させること。だからそこで思いが通じたとしても、きっと何か報いがある。俺がシエロに裏切られないとも限らない。

それなら裏切られる前に俺がシエロを殺してしまえば……。思いが通じたその瞬間に、この手で殺めてしまったら、それはきっと永遠だ。

(…って何考えてるんだ、俺は……)

必死に首を振る。その邪念を振り払おうと。

(でも、そうだ)

その理屈で言うならば、シャロンをシエロが殺した可能性だって……ゼロではない。俺はそんなモノ信じないけれど。

(……………信用できないのはアルバの方だ)

あの執事だって歪んでいてもシエロが好きなのは確かなら、シャロンを疎ましく思う心はあったはず。何か一つ歯車狂えばあいつが犯人にだって十分なり得る。

(シャロン……)

一日ぶりに事件のことを思い出した。昨日はくるねこ亭から帰宅して、そこからずっとシエロのことはかり考えていた。事件のじの字も思い出せないほどどっぴりと。

どうしてだろう。日に日にシャロンの事件解決、復讐を……願う

気持ちがやましくなる。大切な妹を思う気持ちが欠けていく。シエロが心配、シエロを守りたい、シエロの力になりたい……シエロと一緒にいたい。そのための復讐。

可愛い妹を哀れむ気持ちが日に日に薄れていく。それどころかシヤロンの影に俺は脅え始めている。これではまるで……

(俺がシヤロンに復讐されているみたいだ)

シエロを奪おうとしている俺に、シヤロンの影が躍り寄り……その罪を糾弾しようとする歩みを進める。

浴室の鏡を覗き込むだけで、とてつもない深い罪の意識に苛まれる。冷たい水を頭から被っても、それでもあの人に焦がれる想いが消えない。

あのナルキスって男が羨ましい。いつそあのくらい楽天的に、自分というものを愛することが自分にも出来たなら。シエロを想う自分を肯定して好きでいられたらどんなに良いものか。

「……ん？」

そこでカロンは気が付いた。

「あの男ナルキストなのになんで、シエロが気に入ったんだ？」

カロンが風呂から上がれば、シエロはアルバから書類を受け取り何やら至難顔。

「シエロ？」

「あ、お帰りカロン君」

「何かあったのか」

「厄介なことに下層街の歌姫二人が手を組んだ」

ばさと書類を机に置くシエロは困ったと眉根を寄せる。

「え？」

「元々ドリスとマイナスはそこそ交流のある仲だ。そして今回発覚したことだけど歌姫ドリスはカロン君……君に気があり、マイナスさんは僕に気がある」

「でも誰もシエロが歌姫シエラだとは知らないんだろ？」

それなら二人が手を組んだって大した情報は握れないはず。カロンはそう言ってみたが、シエロの顔色は優れない。

「……昨日あの後歌姫ドリスが屋敷に見舞いに来たんだ。仕事帰りにすみませんとね」

「しかしいい相手は出せません。今日は体調が優れませんのでとまた改めて頂きました」

「だけどそこで僕すら対応に出なかったというのは、少し怪しいと思わない？」

「あつ……」

「一応歌姫ドリスはシャロンの友達だ。その恋人である僕が使用人任せというのは失礼なことだ。余程のことがない限り、僕はそんなことはしない」

つまり余程のことがあった。そう認識されてしまった。歌姫ドリスに。

「そしてその後、ドリスをつけたアルバは……彼女がマイナスさんの仕事先に向かったのを見たんだっただね」

「はい、マイナス様の大声のお陰で粗方の話の内容は掴めました」

「……だから歌姫ドリスとマイナスには僕の正体がばれたと見て

いい。そうならば僕が傍に置く君の正体も怪しまれる」

「今夜の城での試験で、二人の歌姫はその証拠を掴みに来るはず
です」

「万が一バレたら口封じに僕らはそれぞれの歌姫と添い遂げるこ
とになりかねない。……勿論彼女たちが犯人でないならその後協力
してくれるかもしれないけど」

「俺はそんなの嫌だ！」

そんな最悪の事態。それにもメリットがあるみたいな言い方止し
てくれ。味方なんか要らない。復讐が成るなら彼女たちを騙して一
時的に恋人関係を結んだ振りをして良い。何かある前に復讐を遂
げて、終わったら自殺して逃げる。そんな淡々とした計画を練らな
いで欲しい。俺以外……味方なんて。俺にはお前しか居ないのに。
他に何も要らないのに。お前にはそうじゃないみたいなきを言葉
に宿さないで欲しい。

「カロン君……」

「俺はお前以外となんか……」

欲しいのはこの人の心。他の奴の心なんか欲しくない。だけど上
手く言葉に出来ない。震えた手で掴んだ胸ぐらを、カロンは……そ
っと放した。

「そ、それにあんな危ない女にお前を渡せない！何されるかわか
ったもんじゃないだろ!？」

昨日のマイナスの言動を思い出す。例え惚れた男相手でも、あの
女が安全だとは思えない。気に入ったと言ったシエラを公衆の面前
でセクハラするような女だ。

「そうですね。以前シャロン様を救いに赴かれた時、シエロ様は彼女の身代わりになって三日三晩彼女の虐待を受けたのでしたね」

「あ、アルバ！それは内緒だって言ったのに！！」

「最初は玩具として欲しがっていた彼女が本格的に貴方に惚れたのも、それに耐えたシエロ様の雄姿あつてこそ」

惚れた女のために拷問の身代わりを申し出て、それに耐え抜いた。悲鳴も上げず睨み付ける目の光も死なせずに、苦痛を堪え忍んだ。そこでそんなシエロにシャロンはますます惚れ直し、マイナスもシエロの外見だけではなくその魂に惚れたのだと言う。そんなの見せられたら多分俺だってシエロを惚れ直す。こんなおろおろなよなよした女々しい奴が、そんな男気を見せたのか。想像しただけで、シエロの横顔に俺まで惚れ惚れしてしまう。

「もし仮に女の姿で、その時の傷跡でも見られたらそれは決定打になります」

「お前そんな怪我あつたか？」

思い返してみるとカロンもシエロの半裸くらいは見ている。しかし心当たりは特にない。

「髪の毛で見えないと思うよ。基本的に背中とかお尻とかばかり打たれたり蠟落とされたりしたから」

「へ、へえ……」

「それに僕は回復力が高いし、殆どの傷は治ったよ」

「それには彼女も2日目3日目で気付いたんでしょうね」

「アルバ、それ以上は言うな」

「……はい、畏まりました」

シエロが強い口調でそれを咎めると、お喋りなアルバも口を閉ざ

した。シエロには俺に聞かせたくないことがあるらしい。それはこの執事は知っているのに、俺には話したくない。共に過ごした月日の違いは分かるが、除け者にされているような……シエロから拒絶されているような感覚に陥り、少し悲しくなる。

「要するに、マイナスの前ではシエロが女になったら絶対守れてことだな」

「ええ。素肌を晒させるようなことは無いようにお願いします」

貴様にそれが出来るならなと、執事から挑戦的な視線が届く。カロンはそれを見返して、強く睨み付ける。

「シエロは俺が守る」

「僕のが年上なのに」

背伸びして格好付けた台詞を吐いたのに、シエロがいじけている。面倒臭い。面倒臭いがそんな姿も可愛いとか思った時点で俺の負けだ。

「ですがシエロ様の呪いの発動条件までは掴んでいないでしょう。此方からボロを出さない限り問題はないはずです」

「そうだと良いんだけどね……アルバ、ナルキス周りの情報収集も抜かりなく頼んだよ。彼は愚かではないけれど馬鹿だ。何時馬鹿なことをするとも限らない」

「はっ、畏まりました」

「な、なあシエロ……あの男って昔お前と何かあったのか？」

「ナルキス？何もないよ……唯幼なじみだっただけだよ。同じ選定侯家の人間で親同士は仲が悪いけどね」

シエロはそれだけと言うがどうもそんな気はしない。

「……彼も僕ほどじゃないけど呪いを持った人間なんだ。海水くらの濃度の塩水を浴びれば彼も女になると思う。僕も彼も呪いが発動した姿でそれと知って顔を合わせたことはない。けどだから彼は僕に興味があるらしい」

「なんでそうなるんだ？」

「彼は自分が大好きだ。だから自分と同じ境遇の僕がそれなりに好きなんだ。自分の分身か何かだと思っっているみたい」

彼は外見だけでなく魂の自己愛者でもあるとシエロは言う。同じ人魚の末裔で、同じ男で、同じ呪いを受けているシエロは自分の分身或いは一部として認めてしまっているのだとか。

「んじゃあいつ結局男が好きなのか？」

暫しの沈黙。シエロもアルバもお前が言うなみたいな視線を俺へと送る。その意味にはたと気付いてカロンは立ち上がり机を思い切り叩く。

「別に俺は男が好きってわけじゃない！俺はシエロが好きなんだ！」

「カロン君、その言い方は語弊があるよ。世の中の同性愛者さんに失礼だ。何も人が人を好きになることは悪いことじゃない」

「お前は俺に失礼だ！悪いことじゃないなら俺がお前好きでもいいじゃないか！」

「それはいいけど押しつけはいけないことなんだよカロン君。シヤロンが死んでも僕はシヤロンの恋人だ」

「うっ……お、お前だつて嫌じゃ無い癖に！」

「い、嫌ではないけど別に今は好きでもないって言った！」

「今はそれでもその内好きになりそうだって言ったじゃないか！」

「助けてシヤロン！僕に光を！君への愛を守らせてくれ！僕の星！僕の歌姫っ！」

「覚悟決めろよーお前は俺に惚れる運命なんだよほれほれ人魚の魂がお前を呼んでるぜーシエ口好き好き超々愛してる（棒読み）」

「くうっ！僕は負けない！そんな悪の言葉に耳を傾ける物か！っていうか棒読み酷いっ！そんなんで僕は攻略されたりしないんだからっ！せめてもうちょっと感情込めてよ……」

ぱこばこと耳を押さえつけるシエ口の手をギリギリ外そうとするカロン。その図を見て執事が冷笑。

「楽しそうですねシエ口様」

「た、楽しくないっ！」

アルバも見えてないで助けてよとシエ口は涙目。それに溜息を吐き、アルバが口を開く。シエ口を助ける言葉ではなく、話の軌道を戻す言葉を。

「というよりナルキス様は女の歌姫達が祭り上げられている今日の現状が気に入らないようですね。美しさだけならその辺の歌姫より勝っている自分がシエ口様が崇められないこの時代に憤っていますっしやいます」

「はあ……やれやれ。今はやる気がないけどさ、もし彼が王を指したらとんでもないことになるよ。この国の価値観から崩壊しかねない。醜い遣伝子は死に絶えるべきとか言っただけで顔面ランク付けて以下は問答無用で去勢か死刑とかさせそうだよね」

「おそろししようもねえ！！」

「幸い彼は歌姫に興味がない。だから恋人を作らない。だからアルセイド侯の恋人は居ない。よって人魚を得ることも国王になる権利も今の彼は放棄している」

「そんな彼が半年前に興味を持った歌姫が一人」

それこそが歌姫シエラなのだとアルバが言った。

「不本意だけどあの男は僕を良く見ている。シエラの髪が劇のウィッグじゃなくて僕と同じ地毛だと変態の嗅覚で見抜いたんだろう」

「そこそこ好きなシエロ様にそっくりな歌姫。それが別人か、はたまた呪われたシエロ様の姿なのかと興味を持ち始めたのでしょうね」

「最悪だ。あの馬鹿なら僕を人魚にするとか言いかねない。あんな自己愛者の鏡になるため娶られるなんて絶対嫌だ。向こうの家もうちの家も他の家に人魚出されるよりはいいんじゃないかね?とか言いそうなところがもつと嫌だ」

あんな男の子供生むくらいなら舌嚙んで死んでやると、シエロは机に突っ伏した。

「だってあいつ絶対睦言とかまで気持ちの悪い自分を讚えるポエムとかに違いないよお……そんな状況絶対御免だあ!絶対僕がある程度あいつ褒めないとかあいつ出せなくて長時間拷問に遭うようなものだよっ!」

想像力逞しいなシエロ。でも否定できないし実際そんな感じがするから困る。

今の俺の喘ぎ声格好良くなかった?色っぽくなかった?なあなあと逐一随時聞いてきそう。相手する側が可哀想だから菫蕪でも使えと言いつ放ちたい。その後その菫蕪でも使ってステーキでも作ってちやんと美味しく頂いてしまえ。自分で始末しろ。

(でも、そうか。なるほどな……)

あのナルキスという男は、昨日たまたま通りかかった下層街でシエラという単語を聞いて颯爽と駆けつけた。その歌姫の正体を暴くために。シエラは上層街には現れないとあの男は言った。元々劇をやったのは中層街で。だから中層街を重点的に、それでも見つからないので下層街での捜索を行っていたのだろうな。

「にしても……お前ってつくづく対人運無いな」

「全くです。出会って3日の溝鼠に襲われる位不運なお方でいらつしやいます」

「お前ねちつくくて嫌な奴だな」

「出会って3日で惚れた相手を無理矢理物手籠めにしたガキに言われたくないですね」

「そのお膳立てした奴にだけは俺も言われたくない」

「だから、二人ともその話はもう止めてよっ！こんな昼間から、そんな恥ずかしいこと言わないで！」

襲われた事実より、周りで猥談される方が辛いとシエラは真っ赤な顔で怒っている。

「僕は別にあのことは怒ってないから！僕はカロン君の大事なシヤロンに手を出した。それも事実だ。だからあの位されて当然だよ。恋人なんて家族の許しがなければ合法的な強姦魔とそう違わないんだから」

そういうつもりで手を出したわけではないのだけれど、シエラの中では呪いを解くためとはいえ婚前交渉に踏み切った自分への天罰だという解釈が成されていた。

「はあ……」

まだまだ先が思いやられる。あと何回こいつに俺は想いを伝えれば、ちゃんと本気でその意を汲んでくれるのだろう。

シエロとはまだまだ心がすれ違っている。こんな状態で試験に挑めるのだろうか？ ドリスもマイナスも粗探しをしに来るだろう。いや……

「エコーも、確実に来るよな」

カロンの発言に、シエロが再び凍り付く。

「だって、彼女はシャロンが好きなんだろ？ それなら来るだろ。

“愛しのシャロンの濡れ場ハアハア”みたいな」

「それなら確実にあいつも来るよ……」 人気歌姫の妹を夜一人で歩かせない俺様格好いい” みたいな心境で」

「……はあ」

「……はあ。アルセイドの兄妹って、似てねえけど変態で厄介だっつのは共通してるんだな」

頭を抱えるカロンとシエロに、微笑を湛えたアルバが口を挟む。

「ですが流石にネレイドのお嬢様はいらっしゃらないでしょう」

「そ、そうだよな。何もライバルの濡れ場なんか好き好んで見に来る馬鹿はいないよな」

万が一そこに護衛でオボロスなんか連れてこられたら流石に俺も顔から火が出る。友人の目の前でそんな濡れ場なんかやってられるか。

「シエロ、どうしても奴らを欺せないと思っただら……その時は俺

にしてくれていい」

「そ、そんなの駄目だよ！」

「俺はそうされても仕方ないこと、お前にしたたる！」

「僕はそんな仕返しとかでそんなこと……出来ないよ」

それは突然。俯くシエロにツカツカと歩み寄るアルバ。
容赦なくその頬に平手を打つ。

「シエロに何すんだ、てめえっ！」

初日に自分もしたということを一瞬忘れてカロンは憤る。しかし
使用人はそんなカロンを鼻で笑って一瞥、シエロへと視線を戻す。

「シエロ様。貴方のシャロン様への愛はその程度ですか？」

「アルバ……？」

「復讐を望むのならば、どうぞ冷酷におなりなさいシエロ様。先
程歌姫達を計算の内へ入れたように、この少年も計算に組み込みな
さいませ」

「な、何言ってるんだよ。アルバまで……」

「幸いこの馬鹿なガキは貴方様の美貌にやられてしまってます。
身代わりでも構わない。抱かせてくれないのなら嘘でも良いから抱
いてくれと、どこぞの恋愛三文芝居の馬鹿女のようなことを宣って
います。その愚かさを嘲笑い、存分に踏み荒らし、復讐の糧となさ
いませ。そうすれば周りの目は欺け、貴方様は愛しのシャロン様と
触れ合う錯覚に僅かながら心癒されることでしょう」

「僕はそんなの望んでいないっ！」

「シエロ……」

「僕は癒されなくていいっ！この痛みが、悲しみが……シャロ
ンが僕にくれた最後の物なんだから！」

あくまでシエロはカロンを拒む。抱かれたくないし抱かない。その言葉がカロンの胸に突き刺さる。裏切りを感じる度に芽生える罪の意識さえ、シャロンを呼び起こす。それさえ僕はシャロンに縛られているのだと実感できて愛おしいのだと、シエロは言っているようだ。

お芝居でも一線は越えられない。襲われるのは不可抗力だと流せても、自分から何かをしてしまったら、完全な裏切りになるとシエロは言う。

それはカロンも解る。だからだ。空気をくれるためとは言え、先程の口付けにあんなに舞い上がってしまったのは。事故でもなく、意図して……シエロからしてくれたのは始めてだから。そう、あれが。

「それにカロン君は、真剣なんだ。そんな風に何かするのはカロン君にとって、失礼極まりないことだ」

嫌いじゃない。どうでもいいわけじゃない。だから冷酷に計算に組み込めない。その位の情はカロンに対して持っている。シエロが顔を上げてアルバを睨んだ。

「だってそれは……僕を好きだと言ってくれたカロン君に対する裏切りだ。そんな日が来るかどうか解らない。それでも僕が彼に何かするとすれば、その時は……僕がシャロンを裏切ることを受け入れる日だ」

「シエロ……」

真剣な想いには真剣に応えたい。真心には誠意を持って応じたい。先祖の過ちが反面教師としてシエロの人格形成に協力をして来た。ふしだらな男だけにはなるまいと、強く自分を律する彼の姿は凜として美しい。

例えこの想いが届かなくとも、この人を好きになったこと。それは自分にとって何よりの誇りだとカロンには思えた。

「最悪、僕が一人二役でシャロンの声真似で喘ぐ振りをしてもいい。シャロンは男声も出せる歌姫だ。低音シャロンの喘ぎなら、男のままでも僕は出せる。カロン君は、そんな馬鹿で愚かで滑稽な僕を見ていてくれればいい。唯、傍にいて……」

君を傷付けるようなことは絶対にするものかと彼は言う。けれど行動ではなくこれまで何度も彼の言葉に傷ついた。今更お前が何を言う。そう思う心もあるけれど……今、自分は求められている。傍にいて欲しいと願われている。それはとても、嬉しいこと。

「安心しろ。お前が嫌だっていつでも俺は傍にいてやる」

昨日のことを思い出せとカロンが笑ってみせれば、シエロもくすと小さな笑みを漏らした。

「お前の恥ずかしい姿、一番近くの特等席からじっくり観察させてもらおうじゃねえか」

「ひいっ！カロン君、一言余計だよ！それなかったらちよつと格好良いなと思ったのに！」

壁際まで後ずさるシエロに腹を抱えてカロンが笑えば、からかわれたのだと感じたシエロが顔を赤くし何か言い返したそうに口をぱくぱくさせていた。

「か、カロン君なんか、カロン君なんか……だ、大っ嫌い……まではないかないけど、ちよつと嫌いっ！」

「ちよつとつてどのくらいだよ」

「ミツクルベジタブルのニンジンくらい嫌い」

「お前そんなところまでシャロンと同じか！？ニンジン馬鹿にするなよ！？あれにはビタミンAになるカロチンが豊富に含まれていて目にはとても良いんだ！」

「ニンジンが無いなら苺でも食べればいいじゃないか」

「苺に入っているのはビタミンCであってだな……なるほど。お前とシャロンの同棲生活は如何に偏った食事だったかを俺は理解した！これからはニンジン入りパスタを食わせてやるから覚悟しろ！」

「そ、そんな横暴！僕が許さない！僕の家キッチンノ覇権は僕の物だ！」

よくわからない対立を続ける俺とシエロに黒衣の男は割り入って

……

「どうでもいいですがカロン様、ドジツ子シエロ様は茹でる鍋の塩水をいつ転んでぶちまけても良いように予め女装で調理場に立たれますよ」

「うっ……駄目だ落ち着け俺。悪魔の囁きに耳を貸しては駄目だ。これもシエロの健康のためなんだ。心を鬼にするんだカロン」

「シャロン様が贈られたフリルのエプロンやら、屋敷のメイドが着ていた服ですとかそれはそれは男子冥利に尽きるようなお姿を。」

女装は女装で、呪い発動はそれはそれで美味しいとシャロン様にはご好評頂いております」

「ぐっ……」

見たい。心底見たい。女シエロが男の服着てたのもそれはそれでエロかったが、今の男シエロに女装だと！？それはそれで見てみたい。嫌がって恥ずかしがる様を拝みたい。それでシエロが手料理を作ってくれるのか。

「カロン君には裸エプロンはしないからね」

「シャロンにはしてたのかよ!!」

「だってシャロンはエプロン一つ残して僕の洋服も下着も全部浴槽に沈めたりするんだもんっ! 次の日風邪引くし、風邪引いてる顔が良いと言われて襲われるし散々だったよ」

ていうか服くらい新しく買えよとか思わないでもないが、節約生活をしていたらしいシエロはそれも苦で、第一買い物に行けるような格好ではなかったのだろう。この執事に頼んだところで、そういう命令しても買いに行ってくれそうにもない。

「あ、そっか。その手があったか」

「シエロ様、今は墓穴です」

「か、カロン君は僕が好きなんだよね? それなら僕にそんな酷いことしないよね?」

「諦めるシエロ。そしてお前も男なら理解しろ。男の抱く愛とは時に非情な物だということを! お前に復讐をさせるのもまた愛だ! 故に愛とは非情なる物なんだ! 愛故に人は心を鬼にして、時に悪魔に魂すら売るっ!」

「うっ……ひ、否定できない!」

カロンの力説に、シエロが若干引き下がる。

「それでニンジン食べるのとどっちが良い?」

「……ニンジン食べます」

「よし、偉い! 農家の皆さんも今のお前のことはきつと褒めてくれるぞ」

「そ、そうかな」

いや、なんでこんなことでそんな嬉しそうな顔をするんだシエロ。

うっかりノリでシャロンを褒める時みたいに頭を撫でてしまった。
恥ずかしくなったカロンはそのまま撫でる早さを増して素早く回避。

(こいつ本当、時々年下みたいな顔すんなあ……)

「ですがご安心下さい。昨晚折角夕食を作ったというのに食べな
かったお二人への罰として、既にお二方の着替えは全て浴室に沈め
てあります」

「な、何てことをするんだアルバ！カロン君が風邪を引いたら大
変じゃないか！」

「でしたらシエロ様が暖めて差し上げたら宜しいのでは？」

「だ、だからどうしてそういう方向に持っていくんだアルバはっ
！僕の執事なのに僕の敵なの？カロン君の味方なの？そりゃあカロ
ン君の方がちっちゃくて可愛いけど……はっ、そうかアルバは子供
が好きだったんだね！だから昔は優しくかったけど最近はっ……うっ、
僕だって好きで背が伸びた訳じゃないんだよ！？背が伸びると服も
新調しないといけないし家計に負担が……」

「いや、シエロ……それはないと思う」

「え？」

見当違いの方向に勘違いを始めるシエロに、カロンのみならずア
ルバも嫌そうな顔。

「生憎私は溝臭いガキには毛ほどの興味もありません」

「そうなの？それじゃあ強いて言うなら歌姫の中では誰がタイプ
なんだい？」

「強いて言うならシエラ様です」

「そっか。アルバはあのくらいの胸のサイズが好みなんだね。マ
イナスさんくらいあると駄目なんだ？」

「……………」

悪意なくここまでフラグスルーをされるとは、この執事も哀れかもしれない。カロンは始めてアルバを哀れに思った。

(もしかしてあいつ、全然気付かないシエロの腹を立てて捻くれてあんなったんじゃないのか?)

手を出す勇気がないまま何年もこんなスルーされたら、あの程度には歪むだろうか。シエロの嫌がる顔とか泣きながら助けを求める顔とかを求めるようになっても致し方がないような気もする。

信頼されると言えばそうなんだろうけれど、シエロには直球勝負で口説かないところになってしまおうと言う实例を見せられた。

(俺も気をつけよう)

シエロにはストレートに好きだを念仏のように呟いた方が多分まだ効果があるな、これは多分。

「それでその夕食ってのはどうなったんだ？」

勿体ないなと口にすれば、アルバがはじめてカロンに理解を示すように微笑。

「ええ、それは……昨日訪れた客人に振る舞いました」

「客人？歌姫ドリスか？」

「いいえ、その後に訪れた客です」

「その後？」

そんな話聞いていないとシエロも呆気にとられる。

「ドリス様との密談の後、マイナス様がシャロンに会わせると乗り込んでいらつしました。下層街にはまだシャロン襲撃、記憶喪失事件が知られていなかったようで、彼女との話でそれを知ったのでしょうか」

ドリスは今日は体調が優れないと断られたから、もう一度来ると言うことは出来ない。だからマイナスを使ってもう一度探りを入れさせに来たのだとアルバは語る。

「彼女が昨日のお二人の夕食は全て平らげてしましまして、逆にお代わりを申しつけられたくらいです」

「そう言えばあの女、昼間も3人分頼んでたな。あれ一人で食べるつもりだったのか」

その栄養全部胸に行ってるんじゃないかな。カロンは歌姫マイナスの脅威の胸囲を思い出す。鼻血が出そうになった。

(い、いや！でかけりゃいってもんじゃないんだ！)

程ほどに、こう……手で掴んで掴みきれなくて手から余る感じで色々挟めそうなくらいはあって、横になっても重力に負けずそれなりにはある。そう、シエロくらいが俺は良い。あんまりでかいと可愛い服とか着せられなくなるし、何事も程ほどにだ。あんまりでかすぎると何人男相手にしてきたんだよって不安にもなる。

よくわからない思考にピリオドを打ち領くカロンを余所に、シエロは真剣な眼差しでアルバとの対話の望む。

「どこまで知っているような感じだった？」

「何も知らない素振りでした。それで義妹の見舞いに来るのは当然だとよくもまあ」

「……彼女はシャロンの死を知っているのかな？」

「彼女は単純に見えて計算高い。それはシエロ様もよくご存知でしょう？悪女としての質、役者としての位は四人の歌姫の中で恐らく最も彼女が優れていて、悪質です」

「あの女が……？」

何食わぬ顔で会話にカロンも加わった。

しかし歌姫マイナスが？どうもそうは見えなかった。セクハラ爺を憑依させるシャーマン的な能力があるとか言われたら信じるかもしれないが、あのドS女王に役者の才があるとはカロンには信じられない。

「シャロン様の救出が遅れたのは彼女の演技力のためでもありません。歌姫マイナスは人の弱みを握り、脅すのが上手い。そしてその気になれば貴族らしい淑女を演じる力もあります」

「まさかあ」

「いや、事実だよ。彼女は最初からあんな売り出し方をしていたわけじゃない。事が露見するまでは清純な歌姫を演じていた。唯肝心の歌が下手だったからそんなにファンは付かなかったけど」

「何が凄いと云いますと、完全にやる目的で彼女を呼んだ男に指一本触れさせないまま翌朝までに完全な奴隷としての調教を行い、そのお仕置き欲しさに相手から金を出させるといふ卓越した加虐スキルの持ち主だと言っことす」

「一度調教されれば、完全に彼女の言いなり。彼女にとって不利益な情報を表に出すことは絶対にならない」

「は、はあ……そうなのか」

そりゃあボンテージ姿の女王様に一度くらい罅られるのも男の口マンかもしれないが、指一本触れさせないままそこまで人を貶め、金だけ出させるようにするとは……確かにある意味恐ろしい。

「下層街では夜の女王と悪名高い歌姫だ。一時期地味に勢力を持っていた。歌は心を支配するけれど、身体まではどうこうできない。そういう歌もあるけれど、歌姫シャロンの歌は何も観客にそういう気持ちを持たせたいわけではなかったからね。ある意味で、強敵だったよ」

観客が歌姫を見る目は唯の憧れだけではない。やましい気持ちや下心。そう言った物が必ず存在する。そこを刺激する歌姫マイナスは厄介な存在。

「あれで歌まで良かったら、本当に強敵になっていたと僕は思う。彼女が音痴で良かったよ」

「でもさシエロ、人類皆被虐属性つてわけでもないんだから、少なくとも簡単にSかMかって分けるなら半分は絶対彼女に屈しないんじゃないのか？」

「そこが彼女の恐ろしさなんだよカロン君」

「え？」

自分は何も間違ったことを言っていない。そのはずだが、シエロはカロンを否定する。歌姫マイナスはそんな単純な女ではないのだと。

「彼女はSでありMでありSだ」

「……は？」

「彼女は僕を痛めつけたいと思いつつながら、僕に痛めつけられたいとも思っている。全てを虐げ続ける彼女が望むものは、そんな自分を虐げられる、虐げられたいと思える相手さ」

「あの、よくわかんねえんだけど」

「彼女のファンはそこに魅せられてるんだよ。何よりも強く。誰

よりも多くを従える。そんな女が心の奥底では誰かに征服されるのを待っている。そう思えばこそ彼女に惹かれる者もいる。純粹に彼女に苛められたいという者だけでなく、そんな彼女を苛めたいという方面からも彼女はモテるのさ」

歌姫マイナスと夜に二人きりになれば、彼女に落とせない女はたまにはいても男はまずいない。それに耐えたからこそシエロに更なる興味を持った。そう言えるのかも知れない。

「ついでに情報によればマイナス様は生娘だそうです」

「さ、ささささ詐欺だああああああああああ！！！！いやいやいやいや、あの胸でそれはねーよ！ねーだろ！無いって言えよ！絶対嘘だ！絶対嘘だ！」

女シエロよりも大きい胸で、シエロにあんなセクハラしてくるような女が男を知らないわけがない。カロンは叫ぶが、シエロは肩をすくめる。

「嘘か本当かはさておき、そうかもしれないと思わせられればそれだけで馬鹿な男はついてくる。その辺が上手いんだよ。彼女、少なくとも客の誰とも寝ていない。それはある種の幻想を抱かせるには十分だ」

「ある程度のかなりの割合で、浅はかな男という生き物は処女属性を持っていますからね。まったく度し難い。人妻の色気が解らんとは真理を得ていない」

「それはお前が人の物に興奮する寝取り属性があるってだけだろ。あと男全員がそういう奴みたいない方止める。俺は非処女でもシエロが好きだ」

「そ、そういう言い方しないでよー！」

「男時も女時共にどちらもシャロン様によって貫通済みですから

ね。女の場合は前と後ろ共に」

「アルバもそういうこと言うの止めてっばっ！」

「シャロン……お前って奴は」

一応シエロは元々は男なんだから、女の時まで後ろまでやってしまっつていっつのはどうなんだ？お兄ちゃんは段々お前のことが解らなくなつて来た。いや、確かに泣いて嫌がるシエロはありかもしれないが。

「と、兎に角だ！歌姫ドリスだけじゃない！カロンの君は歌姫マイナスにも注意をしてくれ！どんな手を使ってくるか解らない」

「具体的にはどんな手なんだ？」

「それは僕は彼女じゃないから解らないけれど、君の心の隙を突いてくることはあるはずだ」

「心の隙……」

弱み。それは確かにある。言われたくない言葉、他人から責められたくない部分。そつとして置いて欲しい場所がある。

「カロン君、彼女に何を言われても耳を貸しちゃ駄目だ。彼女の言葉は……一度シャロンの心をも折った。それくらい強力だ」

「シャロンを……？」

いつも笑っていて、俺なんかよりずっと強い。そんな心を持つ妹が、打ち負かされた事がある。そんな相手に迫られて、太刀打ちできるのだろうか？カロンは不安に襲われる。

「ごめん、こんなこと言ったら不安にもなるよね。でも知らないよりは知っていてもraithたい。そうすれば対処のしようもあるかもしれない」

「そんなこと言われても……」

「うん。だから僕も考えた。カロン君、これを見て」

「え？」

「アルバに頼んで出して来て貰ったんだ」

シエロが一枚の紙を手渡して来る。

「今回のシャロンの記憶喪失、それは養子先のナイアード家の管理不届きとして僕は責める。報酬の取り分があっちの方が多いつてことはつまりシャロンを守る責任は彼らの方にこそある。シャロンの送迎をきちんと行わなかった彼らの責任だと僕は主張する。これはシャロンの恋人として当然の権利だ。幸い僕の方は恋人証明書を紛失はしていなかったからこの届け出は受理された」

「そう言えば……お前」

“ 今日から君はこのフルトブランド家の養子だ！”

確かシエロはそう言った。

「“Charonn=Naias……をHuldbbrand家の養子として認める”」

書類に記された、その一文。たった一文字の違い。それが俺とシヤロンを区別した。

「君とシャロンは同じ綴りだろう？Naiadと書けばシャロンだけど、シャロンの前の苗字だと周りは思う。これは僕としては君を示す意味でこう表記させて貰った」

恋人証明書は再発行してもシャロンの物。カロンの物にはならな

い。これのように一文字が変わっていても、それはシャロンの物だ。シエロの心が変わらない限り、永遠に。

だからそれに代わる形を探してくれた。最初は利害関係のため、復讐を遂行するための手段として求めたこと……そこにシエロは意味を付け加えた。

「シエロ……」

「君は安心して僕の所に帰って来てくれていい。僕に苛ついても、僕と喧嘩をしても、何があっても帰って来てくれていい。僕は君が帰って来てくれるのを待っている。あんまり遅いと心配で昨日みに探しに行くかもしれないけど」

シエロの癖に。涙もろくて女々しいこの男に、今自分が泣かせられている。悔しいけれど、それ以上に……嬉しくて、死んでしまいたいそう。

「いいのか？本当に……？お、……お前が、俺を嫌って……出て行って言うことは」

「それは無いよ」

罵られて追い出されるのが怖い。こんなに優しくされたら。不安がるカロンにシエロは笑う。

「君と出会ってからの毎日が楽しい。僕はもう二度とそんな風に感じることはないんだって思っていた」

「シエロ……本当に？」

楽しいものか。俺はこの人を傷付けた。それなのにこの人は、そんなことを言う。

「僕は復讐をしているはずなのに、その日常がこんなに楽しくて良いのかなって解らなくなる。その位君は僕を支えてくれている。僕は君にとっても感謝しているんだ」

だからこれは今の僕が君に出来る精一杯のお礼の形のつもりなんだと、シエロはカロンに訴える。

「……………帰る場所がないのならそうずっと、ここにいて良いんだよ」

「……………何だ、それ？」

「僕のご先祖様が、海神の娘を口説いた台詞だよ」

「く、くどつ……………」

「あはは。正確には同居するきっかけになった台詞だね」

(「じ、こいつ……………」)

シエロは邪気無く笑うが、どこまで分かっているんだこの男は。

「復讐が終わった時、僕はそれからどうするのか。何を思うのか。今の僕には解らない……………だけど、その後も君は何時でも帰って来てくれて良い。うちの屋敷を自由に使ってくれて良い」

「しかしそれではシエロ様。その時はカロン様にシエロ様の部屋で寝泊まりを認め、シエロ様の匂いすーはーすーはーその後ソロ活動にしても構わないと言ったことですか」

「あ、アルバ！どうしてそういう卑猥なことばかり……………うん、いいけど。それでカロン君の気が晴れるならって、そういう意味じゃなくてっ！カロン君、勘違いしないで！僕はそう言っつもりでこんなことしたんじゃないっ……………！」

口籠もり、シエロの視線が落ち込んだ。

「僕は不甲斐ないから、君をちゃんと守ってあげられないかもしれない。僕がシャロンを想う気持ちが君を傷付けてしまうかもしれない。それでも僕は、何があっても君を嫌ったりしない」

そついう好きではないけれど、嫌いではない。愛してはいないけど好きだよと、その言葉が語りかける。

「……だから安心して帰ってきてくれて良いんだ。また何食わぬ顔でただいまって言うてくれて良いんだ。それで僕は君を許せる。何があってもだ」

他の歌姫に傷付けられても、弱みを握られても心配しないで。どんな悪評を流されても何を知っても君を嫌ったりはしない。約束するよとシエロがその場に跪く。そして片手を差し出した。

「……これ、受け取ってくれるかな？」

「……？」

受け取ると、フルトブランド家の人魚の紋章に“Charon”
H u i l d b r a n d”の文字が刻まれたブローチだった。

それを受け取ったカロンが何時それを突っ返すか。投げ捨てるか。緊張した様子のシエロにカロンは苦笑。そんな風に負の想像をする男では、ブローチをそのまま素直に付けてやる気はしなかった。

(俺をもっと、信頼してくれよ……シエロ)

こんなに嬉しいんだ。返せって言われても返す物か。それくらい解れ。解らないなら……

「!？」

自分もしゃがみ込み、そのまま顔を近づける。目の前で見開かれた青い瞳。そんなシエロの反応に、カロンは満足気に笑って見せた。

「ただいま、シエロ」

「……お、お帰り」

こんな悪戯のようなキスもこの一言で許してくれるんだろうと微笑めば、不意打ちだとシエロがその場にへたり込む。

「俺の言葉を知っていて、俺に手を出せる高さに降りたお前が悪い」

ざまあないぜと笑いながら、ブローチを襟へと付ける。

シャロンが空に行ってしまったから、毎日一人きりの家。ただいまもお帰りもない。お早うもお休みもない。自分の家なのに、あそこは家ではなかった。

シャロンとシエロの関係に、割って入ることはまだ出来ない。もしかしたら一生掛けても出来ないのかもしれない。

(それでも)

俺とシエロの関係に、シャロンが割ってはいることもない。この形はこの名前は俺だけの物。この空に来てはじめて自分だけの物を手に入れた。空に手が届いた。

「ありがとう、シエロ」

「どういたしまして」

カロンらしかぬ素直な言葉に、シエロが小さく笑う。それがカロンにはほんの少し申し訳なさそうに見えたけど、そんなことは気にしない。

帰る場所がある。それが保証されるだけで、こんなにも怖い物知らずになれるなんて……カロンは知らなかった。

12: Charon = Huldrand という歌姫 (後書き)

こいつら、いちやついてやがる。草葉の陰のシャロンちゃんあなくちおしや。

マイナー姉さんとドリスちゃんが手を組んだと。悪女の香りが迫ってくるぜ。

これからどんなえげついでを仕掛けてくるかと思うとぞくぞくします。

エコーさんも色々企んでるはず。

シレネちゃんらが癒やし。あの子とオボロスが作中の癒やしだ。

でもそう言うのに限って怪しいって言う説もあるから安心は出来ない。

執事も執事で何か変態だし信頼できない。

推理やトリックより精神的に追い詰められて犯人とかもうどうでもいいやつてなるくらい別の意味でハラハラするようなミステリーが書きたいです安西先生。

それミステリーやない。サスペンスや。

どうでもいいけどサスペンダーよりガーターが好きです。どうでもいいや。

13・悪魔の幕間劇『海神の娘（ウンディーネ）』（前書き）

昔話と、本編の外側の悪魔達の話。推理には何ら関係ありません。

13：悪魔の幕間劇『海神の娘（ウンディーネ）』

『海神の娘』

昔々、あるところに一人の男が居ました。

その騎士はとても許されない罪を犯しました。

海神の娘の一人に恋をされながら、彼は彼女の想いに応えなかったのです。

何故ならそれは禁じられていました。そしてその騎士はまだ本当の恋を知らず、恋とは何かをよく知らなかったのです。

ですから自分をよく知りもせず、外見だけでいきなり好きになりましたなどと言われても、この人はきつと私を理解してはくれないのだろうと思ってしまういました。自分が老いて醜くなったなら、この美しい娘はすぐに何処かへ行ってしまはず。

騎士はこれまで何度も恋をされ、そしてすぐに振られました。向こうから愛を囁いてきて、それですぐに嫌いだという女という生き物が、彼はよく分からなかったのです。自分が何かいけないことをしたのだろうか。そう思いぼーっとしていても、女は機嫌を損ねる生き物です。何をしても、何をせずとも恋は嵐のように現れ去ります。

どうせ今回の嵐もその内過ぎるだろう。騎士はぼーっ和海を眺めて歌を歌います。

娘がそれに愛を乗せて歌ってきますが、騎士は意味のない歌を歌います。愛のあの字も無い歌です。それには海神の娘も怒り狂います。

自分を無視してこんな手酷い振り方をした相手が、娘は次第に憎くて憎くて堪らなくなりました。海神は人と娘達の恋を禁じてはいましたが、自慢の可愛い娘が振られるというのも勘に障りました。

破れた恋にさめざめと娘は泣きます。

『おお！愛しい我が娘！お前はどうかしたら泣きやむのだ？』

『ええ、ええお父様！私の涙を止める術はただ一つ！私はあの男の魂が欲しいのです。』

『おお、なんと！あの男の魂と申したか？』

『ええ、お父様。私はあの騎士様の魂が欲しいのです。私を妻にし魂を授けてくれぬのなら、私はかの人の魂を壺へと閉じ込め私が滅ぶ間際まで傍に置きたいのです』

『おお！なんと健気な娘じゃ！我が子ながらまったくお前は素晴らしい娘だ！こんな女を振るとは許せん！あの男！万死に値する！冥府の神に頼んであの男を今日にでも死なせよう！そしてその魂を譲り受けよう！何、海運事故で死んだ人間の魂いくつかと交換してやれば良い。』

『まあ！お父様お素敵！格好いい！頼もしいわ！流石私達のお父様！』

こうして美しいその騎士は、冷たい海の底へ壺に閉じ込められ沈められました。

何故死んだのか解らず、人々は嘆き悲しみ彼を棺に入れました。

けれど魂が抜けた彼の身体は、不思議なことに腐らず、何年も何百年も棺桶の中で眠りました。

哀れな騎士の魂は、何百年も海の底で歌います。何がいけなかったのだろうか。

僕が犯した罪とは何か。嗚呼、恋とは何か。

勝手に傷ついて、勝手に人をこんな暗い場所に閉じ込めて。それが愛だというのだろうか。

その娘はもう他の海の豪族の元へと嫁ぎ、この哀れな騎士とのことなど忘れてしまいました。名前も顔も、存在すら思い出せない彼方へ追いやられ、騎士は理解します。

この冷たい海の底に沈められたのは、女がこの魂を求めたからではなく、復讐を望んだからなのだ。

自分を不幸にした男を、不幸にさせたかっただけ。それが恋という物の末路か。

そう思うと彼は悲しくて、けれど魂だけでは涙を流すことも出来ずに彼は唯歌います。

そうして何百年。その歌声に引き寄せられた一人の娘。彼女の名前はウンディーネ。海神の娘の中で最も幼いお姫様。

彼女はそこが罪人を奉る墓所だとも知らず、沢山の透明な壺が並べられたその場所を探検に来たのです。

壺の中にはキラキラと、それぞれ違う色を光を放つ綺麗な物が入っています。その光はそれぞれ異なりますが、その大半は鈍い光を発する物……悲鳴のような歌を歌う物。悲鳴の玩具箱。悲しみの宝石箱。

なんだか娘は怖くなり、引き返そうとしましたが悲鳴の渦に巻き込まれ、方向が解らなくなります。心細くてめそめそと泣きながら暗い海の底を彷徨う娘。そんな娘の耳に綺麗な歌声が届きます。

『あれは何かしら？』

声に引き寄せられるよう、進んだ先に一つの壺。その中にはこれまで見たどんな魂よりも綺麗な青い光を放つ魂がありました。

『まあ、綺麗……』

こんな綺麗な魂の持ち主。こんな素敵な歌声の持ち主。顔も知ら

ないその人に、娘は恋をしてしまいます。

『ねえ、貴方はどうして泣いているの？』

騎士は答えます。何故殺されたのかが解らない。この世の中はなんと無理不尽な物だなあ。そう思うと泣かずにはいられないのだと。

『ねえ、素敵な騎士様。貴方はどうしたら泣き止むの？』

騎士は答えます。それは僕が消えることだと。

『ねえ、騎士様。どうして貴方は消えたいの？』

騎士は答えます。自分はまだちゃんと死ねていない。だからこんなに苦しいのだ。ちゃんと死ぬことが出来なければ生まれ変わることも出来ない。こんな暗い冷たい場所にいたのでは未来永劫このままだ。嫌なことも悲しいことも忘れられず、唯こんな気持ちで歌うことしか出来ないのなら、どうか誰かに殺して貰いたい。

『こうして歌っていれば、何時か冥府の王にも歌声が届くかもしれない。僕の歌で彼が哀れんでくださったのなら、その時はちゃんと僕を殺してくれるだろうから、僕はそれまで歌おうと思うんだ』

『その必要はございませんわ』

『どうしてそう思うんだい？』

『私が貴方様の魂を、地上にお返しいたします。そうすれば残りの人生を全うし、然るべき日に天寿を迎えることも出来るでしょう』

娘は壺を胸に抱いて、深海から空を見上げて飛び上がります。そして地上へ上がり、壺を叩き割りました。

するとその青白い魂はフラフラと遠くへ飛んでいき、やがて見え

なくなりました。

しかし海神は罪人を逃がしたウンディーネに大層怒り、海から勘当してしまいました。海に拒まれた娘の尾びれは人間のような二本の足へと変わり、何処へなりと行くがいいと冷たく娘に語りかけます。

『あの男の魂を再び海に沈めるまで、お前は海へ帰って来てはならぬ！』

けれど歩けば歩く度、足には痛みが走ります。彼女の足は歩く度に血を流すような痛みを知るよう呪われていたのです。父から贈られたのは冷たい言葉と、その痛み。

帰る場所を失い、行く当てもないウンディーネは海を見つめて涙を流して歌います。そんなウンディーネの肩を叩く一人の男がありました。

『初めまして、可愛らしいお嬢さん。君が僕を助けてくれた人だね』

『まあ、その声！貴方はあの……』

『可愛らしいお嬢さん、どうして君は泣いているんだい？』

『それは貴方の姿を見ることが出来て嬉しいからですわ』

『本当に？』

『……お慕いする貴方の力になれて嬉しいはずなのに、それだけで満足のはずなのに……帰る場所を無くして一瞬でも貴方を憎く思ってしまった自分が情けなくて、醜くて……私はそれが悲しいのです』

『それならお嬢さん、この手をお取り下さい。貴方に家がないのなら居場所がないのなら、僕がそれになりましょう』

騎士は娘を抱きかかえ、足が痛まないようにと寂れた屋敷へ招きます。

『僕が死んでいる内に屋敷から人は出払って、家も蜘蛛の巣だらけ。一人では掃除も出来ないと困っていたのです』

『まあ！それは大変だわ！』

戯けた騎士の言葉に、くすくすとウンディーネは笑います。

『可愛らしいお嬢さん、貴方は僕の命の恩人です。帰る場所がないというのなら、ここに何時までもいてくださって構いません』

こうして二人は仲良く暮らし始めました。両足の痛みも幸せを感じることで呪いの力が引いていき、二人で街を歩けるようにもなりました。娘も騎士もこれまで感じたことがないような幸せをその暮らしに見出しました。

騎士も恋とはこういう物のことをいうのかと、その輪郭を掴みかけ始めたそんなある日、屋敷を訪ねるものがありました。

その騎士はとある王家の血を引いていました。騎士が死んでいる内に、王家の血は途絶えかけ……生き返った騎士を王にと使いの者が現れたのです。

ウンディーネも騎士の妹として城に招かれましたが、王になるならそれ相応の貴婦人とそう遂げなければならぬと家臣達は言いました。

『嗚呼、愛しいお兄様。貴方があの人を妻へと迎えたその日には、私は再び帰る場所を失うのですね。』

再び足の痛みが甦って来たウンディーネ。さめざめと泣きながら、夜風に吹かれて一人歌を歌います。

『嗚呼、愛しいウンディーネ。僕は君を妻に迎えたい。それが駄目

だというのなら、こんな国知るものか！一緒に何処かへ逃げよう！
そしてひっそりと暮らそう。』

『まあ！私なんかでよろしいんですか？私は魂も持たない、水妖に
ございます。私などに関われば、貴方までお父様の逆鱗に触れてし
まうかもしれません。』

『それでも僕は君を愛している。どんな呪いの前にもこの恋の魔法
は解けはしない！』

騎士の強い決意に負けて、国はとうとう二人の結婚を認め二人を
祝福しました。

とりあえずは、めでたしめでたし。

*

ここで終わってしまえば良かったのにと人は言うでしょう。
けれど悪魔は違います。

「やれやれ、長い前書きがあったものだ。それでこれは悲劇か？
それとも喜劇かね？」

「やつと盛り上がって来ましたねお兄様。それでどっちが死ぬの
？それともどっちも？国は滅ぶのかしら？」

「まったくこれだから神というものは自分勝手に困るね。我々悪
魔の方が余程親切ではないか！少なくとも騙しはするが我々は嘘は
吐かない……ような気がしないでもないような事もあったような気
がするから」

「右からエフィアル、アムニシア、エペンヴァ！ちょっとあんた
達！このイストリア様の舞台を観るのになあにその蛆以下の感想は
！そんなもん小悪魔でも使い魔でも出せる感想よ！カタスト口に至
つては私の招待に応えないって時点で喧嘩売ってる！くっそお……

手始めにその内あいつの領地から攻め滅ぼしてやるんだから！」

物語の悪魔イストリアは観客である同僚悪魔のあんまりな感想にご立腹。

悪夢の悪魔エフィアルティスは、戦ばかりしていた脳筋なので文学なんて物に触れたことが無く、気の利いた褒め言葉一つ出て来ないくらいでもない悪魔です。イストリアはその男から寄せられる好意には当然気付いていましたが、はつきり言って顔と戦闘力しか取り柄のない男の伴侶になる気はなく溜息を吐きますが、悪夢の悪魔はそれでも楽しそうです。それはそうでしょう。

(愛しのイストリア様にご招待されたってんだもの。もう少し気の利いた土産持つてきなさいよ)

せめて美少年美少女100ダース詰め合わせお中元セットとか。魔王たる者そこら辺の世界から美少年誘拐して来るのが代名詞であるべきだとイストリアは考えます。この中で一番魔王らしい風格のある同僚からの土産が薔薇の花束だけなんて腹の足しにもなりません。

(しょうもない男)

ちつと舌打ちをすれば、悪夢の悪魔の隣にいる夢現の悪魔、眠りの森の魔女アムニシアが睨んできます。悪夢の悪魔の妹であるこの悪魔はとんでもないブラコンです。兄を褒めても貶しても、殺意と敵意を送ってくる、おっかない女です。ある意味、最強の座にいる兄の悪魔よりも最強です。別次元で最強を恣にしている物語の悪魔が相手でも、タイミング間違えば勝てません。殆どの場合相打ち。同じような力を持つ以上、天敵であることは違いありませんが、イストリア自身……兄のエフィアルティスなどよりはこのアムニシア

の方が余程話がわかる奴なので気に入ってました。だからいかにエフィアルが無駄イケメンでも「一回くらい食ってポイ捨てすつか」とは言えません。そんなことしようものならアムニシアに殺されまです。手を出した時点で大変なことになります。だからさつさとフラグ折れるーと呪いの視線をエフィアルティスに送るのですが、何を勘違いしたのかあの馬鹿男。勝手にそれをフラグとしてカウントするように「大丈夫俺は解っている」スマイルを送ってきます。死ぬばいいのに。イストリアは割と本気で考えました。

「エングリマ。あんた何泣いてるのよ。これ舌打ちする所じゃない。リア充爆発しやがれって！」

「酷いよティモリア！人と人ならざる者の恋、素敵じゃないか！お願いイスト！ここで終わらせてあげて！物語の悪魔の君ならピリオド打ってあげられるんでしょ？シナリオ書き換えられるんでしょ？二人を幸せにさせてあげてよ！」

視線を逸らした先で罪と罰の双子の悪魔が喧嘩をしています。兄或いは弟の罪の悪魔エングリマは悪魔の風上にも置けず、人魚と人間が幸せになったことに感動している阿呆です。一方姉或いは妹の罰の悪魔ティモリアはそんな片割れの様子を辟易しています。イストリアとしては当然この罰の悪魔の方が大好きです。

「だが断る」

「さつすがトリア！ねえねえ！この男がろくでもない方向に進もうとしたらちゃんと修正入れるんでしょね？勿論浮気くらいさせるでしょ？」

「モリアの頼みじゃ断れないわね。というか浮気くらい悪魔文学王道中の王道！あつて当然でしょ」

「だめええええ！やめてあげて！可哀想だよ！ここで終わらせようよー！」

「ひっひっひ！エングリマの泣き顔のために頑張つてよトリア！300年は何も出来ないくらい懲らしめてやってちょうだい！」

「まあ、基本は成り行きに任せようと思っただけだね。人間なんてもん、基本放置が一番面白いことになるから。唯……」

「唯？」

「人間の癖に調子に乗つて、自分の欲望をもつとお綺麗な何かに昇華しようとしやがったら、私も手は抜かないわ。徹底的に追い詰めて本性曝いて晒してやる！」

「期待してるわ」

物語の悪魔は他人の不幸から糧を得ます。世界の一つから一人主人公を選んで、その世界ごと一冊の本に閉じこめる。その人物を軸とする物語が不幸な結末になればなるほど、悪魔の物語の評価は上がる。それを糧にイストリアは魔力を高める。他人の不幸が蜜の味とは正にこのこと。

執筆だけでもそれなりに魔力は上がりますが、最高なのは上演会。大勢の悪魔を集めて、リアルタイムで執筆。世界を操り本の内容を映し出す。物語の悪魔が登場人物達の声を思いを声色変えて歌います。ある世界のある時代にある活動写真のようなものでしょうか？そうやって人の不幸を大勢の悪魔に鑑賞させて、多くの嘲笑が得られればより多くの魔力が得られるのです。それも位の高い悪魔であればあるほどいい。

気難しく風変わりで悪魔らしかぬ連中もいる一筋縄ではいかない同僚達を呼んだのは、ここらで格の違いというものを見せつけるため。

（私にはあんたら馬鹿を本に閉じこめることも出来る。あんたらの人生、いや魔王生さえ私の手の中！どう料理してやるうかしら。その内これは他人事ではなくなるのよ？）

精々、許し乞いの言葉を考える。全員その顔涙と苦痛に歪ませて
這い蹲らせてやるとイストリアは妖しく笑い、羽ペンを手に取りま
した。

「さて、それでは長らくお待たせ致しました！誰が死ぬか！何人
死ぬか！皆様お好きに賭けなさいませ！バッドエンドはこの物語の
悪魔が保証致します！悲鳴の演奏会の始まりですわ！無事にめでた
く王子は人魚姫を裏切って、これはそこから更にページを捲った先
の物語！」

さあ、全員血祭りに上げてやる。物語の悪魔が口を三日月型に嗤
わせて、再び歌を紡ぎました。

13・悪魔の幕間劇『海神の娘（ウンディーネ）』（後書き）

イストリアがはっちゃけてます。

調子に乗るから封印とかされるんだ。

これは封印される以前の話みたいです。

14： 歌姫（前書き）

そろそろ推理パートへのカウントダウン。
なのにバカップル注意報。

物語の悪魔

『悲劇は約束されています。
悲恋も保証されています。』

けれど契約者。あなたの狂気を私は見守りましょう。
このまま愉しませてくれるなら、あなたの幸福だけは保証し
ましょう。

いまはまだ、この劇を記す羽ペン、インクはあなたの手の
中
に
『

*

「まったく、ドリス。俺の歌姫は使える女だ。お前達とは比べ
ものにならない」

イリオン「アクアリウスは笑う。お気に入りの歌姫より、昨晚届
けられた情報は自身も知らぬ物だった。

「シエロ「フルトブランド……」

王家の呪いは薄まった。それは他の選定侯家も変わらないはず。
先祖返りなどあの外見だけだと思った。現に嘘か本当か自称伝説
の王子の再来というアルセイドの家のナルキスもあの外見。伝説の
王子は黒髪ではない。一度死に、魂を海へと沈められた王子の髪は
青く染まっていたという。

先祖返りだというあの男の髪は海というよりは空色だ。しかし今
この時代の誰よりも、血が濃く現れていると考えるのは誤りではな

い。

「呪いについて調べるのだ使えん者共！書庫を父様の部屋をくまなく探れ！王家には海獣の呪い以外の何かか隠されているに違いない！」

*

（な、何だよこの人の群れっ！）

（みんな君のあられもない姿が見たくて集まった群衆さ）

（あられもない声上げるのはお前なんだってのも知らずにいい気なものだ）

（だからそういふこと言わないでよ）

夜に城に集まった人の多さにカロンは目眩を感じていた。

バレたら大変なことになる。最悪、死刑。あの歌姫二人にバレたなら、俺はシエロの傍にいられなくなるかもしれない。

歌姫ドリスは嫌いではないけれど、好きではない。それはシエロが自分に対して思っていることに近いけれど別物だ。

（俺はあの子を好きになることは絶対にならない）

その確信を抱いている。シエロのように「近い将来好きになっってしまう」なんて微塵も思わない。

（シエロ……）

これから演技とはいえ、俺達は恋人同士の振りをする。そう思うと緊張する。だけど胸を打つ鼓動は緊張だけでもない。こんな大勢の人の前で、この人が俺の物だと言えたならどんなに素敵なことだ

ろう。

いや、でも今は……襟のブローチ。貰った名前。少なくとも俺はこの人の物だ。宝物に触れるように、そっと襟へと片手を伸ばす。それに触れれば緊張も、幾らか解けた。

「大丈夫だよ、シャロン」

「あ、そっか」

もう何時誰に聞かれてもおかしくない。演技は始まっている。

(今は俺がちゃんとシャロンをやらないと)

「でも、こんなに一杯の人の前で……なんだかどきどきして来ちゃった」

「緊張してる?」

「それはシエロでしょ? シャロンちゃんはこんな平気よ。いつも人前で歌ってたんでしょ? でも……シエロはそうじゃない。…ほら、どくどく言ってる」

胸へと手を這わせれば、シエロが目を逸らす。取り繕ったような顔しているが、本当だったらしい。掌に触れる心臓はかなりの早さ。折角格好付けてたのに台無しだよとシエロが眉根を寄せる。

仕方ないのでカロンはちよいちよいと手招き。その耳元で囁いてやる。

(俺がついてる。大丈夫だ)

「うわわわっわわっ!」

囁いた方の耳を押さえてシエロが真っ赤な顔になる。

「耳、弱いのか？」

「そ、そんなことはないと思うよ。忘れちゃった？」

「まだ思い出せないわ。会場ってどっち？」

「謁見の間だからあっちだよ」

シエロに手を引かれ、待合室から長い廊下を歩く。その間もテープの向こうから観客達が黄色と野太い声援で出迎えてくれる。たしかに女も男も居る。シャロンは本当に多くの人に愛された歌姫なんだな。妹への応援は素直に有り難い。そう受け取るうとした時だ。

「シャロンちゃんから離れる！」

「選定侯だからって調子にのってんじゃねえ！男は顔じゃないよねシャロンちゃああん！」

「シャロン様あああ！シャロン様を汚すなんて、最低よ！」

シエロを罵るファン達の声。それはカロンのとつての逆鱗だ。

「私のシエロになんてこと言うのよ！」

「みんな君の怪我を心配しているファンだよ。不甲斐ない僕を怒って当然さ。君は僕の恋人である前に、みんなから愛されている歌姫なんだ」

「シエロ……」

地味に良い声で僕の恋人とか言われるとドキドキする。演技とは解っていてもだ。

「そうだ！引つ込め野郎！」

「男なんかお呼びじゃねえんだよ！」

しかしシエロがそうやって甘やかすからファン達が付け上がるの

だ。シャロンがどう対応していたのかわからないが、今の俺は記憶喪失という設定だ。多少のオフレコは許して欲しい。

「私の大切な人を苛めないで！」

カロンがシエロを庇うよう前へ出れば、その場は一瞬にしてしんと静まりかえる。

「みんな酷いよ！どうしてシエロにそんな酷いこと言うの？私心細くて、何も解らなくて、この人が傍にいてくれたからここまで来られたのに！シエロが私の忘れたこと思い出させてくれて、みんなのことも少しずつ思い出してきたの！また歌いたいわって思えたの！みんなはいつも私の大切な人にそんな酷い言葉ばかり言うてたの！？シャロン、悲しいよ！こんなことなら歌姫なんか嫌あつ！みんながシエロ苛めるなら……」

「駄目だよシャロン。人魚になるのが君の夢だったじゃないか。僕なんかのために夢を捨てては駄目だよ」

「シエロ……」

何を言われても怒らず、微笑を湛えるシエロにファンの一部がぐらついた。

「そ、そうよ。ちょっと言い過ぎよ！っていかイケメンじゃね？シエロ様」

「お金持ちで美形で性格まで良いなんて……そこら辺の男じゃ太刀打ち出来ないわよ」

「ああ、彼ならシャロンちゃんを任せられる」

「つうか元々今日の、あの二人のバカップルぶり見に来る話だったんじゃない？それをわざわざ叩きに来るなんて暇人過ぎるっていか」

その場の流れが不穏になった。それを見て、困った顔のシエロが観客達のテープにすうと近寄った。

「そんなことを言わないください。どんな形であれ僕のシヤロンを大切に想って下さる方は、僕にとっても大切なお客様。今宵はお恥ずかしい限りですが、どうぞごゆっくりして行って下さいませ。シヤロンを応援して下さい方を、僕はこの世でシヤロンの次に愛しております」

おい、馬鹿シエロ。何てことを言うんだ。そんな良い声で可愛い笑顔でそんなこと言うな。見る、黄色と野太い声援が上ったじゃないか。これお前シヤロンのファン掠め取ったりしてないか？大丈夫なのか？シエロ否定してた男共も今の笑顔にぐらついて新たな扉開きかけて理性との格闘してるぞ。

「きいやああああ！シヤロン様の次に愛してるだなんてそんな私！私にはシヤロン様があ！」

「ばっか！今のは私に言ったのよ！」

「あ、あいつ本当に男か？か、可愛い……」

「し、シヤロンちゃんよりタイプだ」

「それはない！ない……ないが、抜けるレベルだ」

「だから言つたる？あれはついててもついてなくてもおにゃのことして脳内変換して萌えるべきって。おまえら修行足りないじゃないじゃね？」

「いや、むしろ男だからいい！男の子でありがとうシエロ様っ！」

おい、シエロ。なんつーことしてくれたんだ。視線で訴えるもシエロは苦笑。

「毎回こんなことしたら仕事の邪魔だからって僕は下層街に付いていけなくなつたんだ」

「ここ数日のシャロンの情報を聞く限り、こういう時は何とこのだろうか？」

「だ、駄目だめ！シエロをいやらしい目で見て良いのはシャロンちゃんだけなんだからっ！」

シエロの腕に抱き付いて独占欲をアピールすれば、観客は再びシヤロンに夢中。

「おませなシャロン様可愛いいいいい！」

「嫉妬するシヤロンちゃん最高だ！」

「脳内変換トレース俺！シャロンちゃんが俺の腕に抱き付いている。押し当てられるこぶりな胸が……はあはあ」

若干危ない奴もいたが、俺の行動はそんなに間違つた対応ではなかったらしい。

シエロはほつと息を吐く俺の肩を抱き、廊下を抜ける。

「さ、ファンサービスはこの辺までにしておこうか」

どうやら一般のファンが入れるのはあの通路までだったらしい。

「あくまで今日のは試験であって仕事じゃない。仕事としてはオフだ。会場に入ることが許されるのは基本的に上層街レベルの貴族だけ」

「それじゃあ……」

「でも、そういう人達の連れとして来る連中を止める権利はない」

そう言う形でマイナスとドリスは潜り込むはずだとシエロは言う。上層街貴族というと余裕でエコーやナルキスは足を伸ばせる。ドリスは殿下との繋がりもある。マイナスはシャロンの身内だと言えば無理矢理でも強行突破出来るだろう。そう思うと再びからだが強張る。

「そう言えばさっきアルバと何を話してたの？」

「……………それは、秘密」

「えー！気になるなあ」

俺は黒衣の男から一つ秘策を授けられた。それを使わずに済めばいいと思う。思うが万が一正体バレが危なくなったらそれに踏み切る。

（あいつらが曝きたいのはシエロが女、或いは俺が男という証拠）

つまりどちらか一つが否定できれば、有耶無耶にして逃げ切る事が出来る。この策はシエロを傷付けることになるから出来れば使いたくはない。そこまで追い詰められないことを願うばかりだ。

「……………着いた。この先が謁見の間だ」

「ここが……………」

長い廊下を越え庭園を抜け現れた大きな扉。その前には以前下町まで降りてきた騎士達のそれと似た、いやもっと厳つく立派な鎧を纏った騎士達が居る。

「歌姫シャロン、それからフルトブラント様でいらっしやいますね？」

「ええ。今宵は再発行の手続きに参りました」
「此方へどうぞ」

重苦しい音をたて、鉄の扉が開く。

(うわっ！)

その先には薄暗い桃色の証明。窓を全て閉め切った垂れ幕。謁見の間の床の一部が盛り上がり、ちよつとしたコロシラムのよう。その凹んだ部分には天蓋部分の取り外されたようなキングサイズのベッドがある。壁の四方には待ちかまえるような観客達。ご丁寧に寝転がるための椅子まで並べられている。ドリンクのサービスもあるのかあつちこつちでオーダーが上がる。

妙なことと言えば観客達は皆一様に仮面を付けていることか。しかもその仮面は全てが同じようなデザイン。いや、仮面だけじゃない。正装と言えば聞こえは良いが、観客達のスーツとドレス……そのデザインも色も似通っている。これでは何処に誰が潜んでいるかもわかつたものじゃない。どこにエコーがドリスがマイナスが。一瞬の油断も禁物だと、カロンは息を呑む。

「これはこれは、よくぞ参った」

「陛下、この度は………え、イリオン殿下!？」

「俺では不服かフルトブラント?」

「いえ……」

玉座の前で待ちかまえる男の姿にシエロは驚愕。カロンもそこにいる男を目に留める。見ればまだ若い男。シエロよりは幾つか年上か。外見色は恐らく金髪碧眼。シエロやナルキスと比較するならば、つと見は確かに王子様っぽくはある。顔は決して悪くはないのだが、性格の悪さが顔まで滲み出ているような、生意気で調子に乗った勘

違い男の顔をしている。この手に權を握っていたら問答無用で一発ぶん殴りたくなる類の顔だ。あんなのに気に入られているなんて、ドリスも可哀想に。

「父上は今宵はお加減が優れないとのことだな。進行はこのイリオン様が代役だ。感謝するが良いフルトブラント」

そして恩着せがましい。本当にカロロンが嫌いなタイプの貴族そのもの。

「さて、役者も揃ったところで始めよう……そう言いたいところなのだがお前達は再発行だったな。高貴な家の皆様方も、一度この者達の睦言はご覧になったとのことだ。同じものを二度見る程つまらんこともないはず」

殿下が妙なことを言い出した。そしてその不穏な言葉に観客達がざわめき立つ。

「シエロ＝フルトブラント、その娘を愛しているか」

「はい、この空よりも高く」

「歌姫シャロン、その男を愛しているか」

「ええ、あの海よりも深く」

「よかろう、ならば問題はない。趣向を変えることにしよう。幸いここには歌姫シャロンのファンだけ集まったわけでもない」

殿下の薄ら笑いにガラガラと運び込まれる積み荷達。会場の装飾を少しずつ変えていく。

「実はだなシエロ。貴様はその女顔だろう？前回の試験も何、肝心の部分は隠れて見えなかったわけだ。お前が本当に男なのか疑う

声が出ていたんだよ」

「!？」

突然の言いがかり。それでも会場の客の半数以上が、これは面白い趣向だとそれに同意する傾向。

「もしそれが真実なら、お前は法を犯していることになるなあシエロ？お前とシャロンの恋人契約も恋人証明も、お前が男という前提で成り立つシステムだ。お前のシャロンへの資金援助が本当に法を犯していないのか、今日ここで後腐れ無く証明して行くといい」

「し、シエロに何を!？」

躍り寄る兵士達からシエロを庇うよう進み出るが、殿下は歪んだ笑みを浮かべるだけ。

「唯の性交など見てもつまらん。もう少し観客へのスパイスが要るだろう？何貴様らが恋人になってもう一年。普通の趣向は貴様らも飽きてきた頃だろう？そんな蛆虫共に俺からの贈り物だ！心して受け取れ！」

積み荷の荷物を蹴って床へとぶちまける殿下。そこから出てきたのは、観客達と同じ服と仮面。

「手始めにフルトブラント。貴様がここで着替えるが、愛する女にこの観衆の前で生着替えをさせるか選ぶのだな」

シエロか俺の正体を暴く。そのための策か。残念ながら俺は男だ。ご丁寧にも男の服も女の服も一式セット。下着まで替えさせる気だ。こんな着替えなんかさせられたら俺が男だとバレてしまう。

「そ、そんなこと……シエロは選定侯です！そんな人前で辱めを」
「ならば歌姫貴様が脱げ。第一これは試験だ。貴様の胸が小さかろうが、シエロの3本目の足が短ろうが細かろうが、この部屋で起こったことは外へは持ち出してはならぬ。その上で観覧するのがこの試験である。故に他言無用だ、多少の辱めも何、問題なかるう。今宵の皆様方は紳士淑女でいらっしやる！そんな礼節に欠けた方が居るはずもなかるう！」

紳士に淑女？ふざけるな！その前に変態って言葉を修飾し忘れてるんじゃないか？

この会場の変態貴族共！普通に女が何かされるのに飽きて来たんだ。それでシエロみたいなのがまた来たりするから、今度はシエロが何かされるのが見たくなった。そういうことなんだろう？

「……解りました。私が……僕が脱ぎます。僕のシャロンの素肌を人前でさらすくらいなら、僕がやります」

「シエロ……」

「はっはっは！流石は色男のフルトブラント！前回の試験でも歌姫を脱がせなかったお前ならそうしてくれると思ったぞ！はっはっはっは……は！？」

服に手を掛けたシエロを見て、高笑いをしていた殿下の言葉が止まる。

「皆さん僕のシャロンの艶姿をご期待していたところ、男の僕が脱ぐだなんてお目汚しも失礼かと思いましたが、……本日はゆっくりお楽しみ下さい。精一杯頑張らせていただきます」

シエロの美声が甘く発した言葉。色っぽい流し目で会場を見回す。

歓声さえ消える静寂の中、あつちこつちから生唾を飲み息を殺し凝視する仮面の貴族達。

(し、シエロ……容赦ねえっ！)

そんなもの間近で見た俺や殿下は魂を抜かれてしまったようにそれに見惚れるばかり。

まずは下から脱ぎ始め、下着まで捨てる。流石に今日ばかりはあの変態執事も男物を用意してくれたようだ。そしていつしか上着も捨て、裾の長いブラウス一枚。その長さが際どいラインをうまく隠している。それに観客の興奮もいよいよ高まる。

「む、胸は無いぞ。やはり男か？」

「いや、まだわからん。あの顔だ」

「いや、むしろそのまま！男であってくれ！あの顔で男だからいいのだ！」

上からゆつくりと適度に焦らしながら、ボタン一つ一つを外す白い指の動きが艶めかしい。人々の視線に恥じらい頬を染めた顔が愛らしい。

「シエロ……」

「大丈夫だよシャロン。僕は男だ。この位……何ともない」

「……………」

「し、シャロン？」

背後からそつとカロンが抱き付くとシエロは驚いたようだ。シエロの背中側にはマイナスにいたぶられた傷があるはず。それが誰かの目に留まっではいけないだろう。

「何をする歌姫！」

「あら？裸の王様だつてマントくらいは羽織っていらつしやらないかしら？それに殿下、全裸より何か一つでも残してが方が色香がありますわ」

そう訴えるが、一部の客と殿下は不満そうだ。

「離れる歌姫。着替えの邪魔だ！また全世界の尻フェチの方に謝罪しろ。今の貴様の行動は許されざる蛮行だ」

てめーが尻フェチかよとカロンは内心苦く突っ込んだ。ていうかライバルでそれなりに憎く思ってるはずの男の尻を凝視するとかどうということだこの変態。いやでも確かに男のままでもいい尻してやがる。

「シャロン、ありがとう。でも僕は大丈夫だよ」

「でも」

「……それでも裸の僕が可哀想だと思ってくれるなら、どうか首筋でも噛んで君のキスで飾らせてくれ」

「え！？」

シエロの奴、アドリブでバカップルっぽいこと言って来た。その位ならセーフ基準なのか？シエロの中では。

「……解ったわ」

ここで拒むのはシャロンらしくない。そう頷いて、カロンはシエロの首に腕を回した。白いその首筋を吸い上げて……これが呪いのように消えなければいいのと思いつながら口付けの跡を残す。

「ありがとう。これで僕は君で着飾っている。……もう恥ずかしいこともない」

そう言ってシエロはボタンを全て外して、ブラウスをも床へと放る。

「ご覧の通りシエロフルトブランドは男ですが、皆様方……ただ私とシャロンの恋人関係に問題があるとお疑いで？」

会場を見回すシエロに、観客は大騒ぎ。箱入り選定侯の裸なんてある意味歌姫のヌードより稀少かも。街中ですぐ脱ぐナルキスとは違って……つまりはレアだ。連れて来たお抱えの画家に早くデッサンをしると命じる変態まで居る。

「ちょっと殿下！あんなこと許すんですか！？ここで見た物持ち出し厳禁ではありませんの！？」

カロンはそのマナー違反に腹を立てて、場を仕切る男を睨む。俺の……いや、シャロンのシエロの裸を絵にして持ち替えるなんて許せない。それで色々思い出してあんなことかするつもりなんだろう。

強く迫られるのに慣れていないのか殿下は狼狽える。頼りにならない。もうこの手でその貴族をぶん殴ろうか。カロンが思った時だった。

「美は目で記憶に留めるべし。紙になど映したところで完全には記録できないのだから」

手にした酒で紙を台無しにして笑う黒髪の男。

「裸もなかなか美しいじゃないかシエロ。俺ほどではないが」

「……………」
「ふつ、礼も入れないほど感極まったか。俺が幾ら格好良いからと言って無闇に惚れるなよシエロ。如何に親友のお前が相手とは言え、俺がお前の想いに応えてやれるか解らない」

目を逸らすシエロ。親しげに話しかけないで欲しいとその顔に書いてある。ナルキスは一応助けてくれたらしいのに、余程苦手なのか。

（おい、シエロ。なんか親友って事になってるらしいぞあつちの設定では）

カロロンが小声で囁くと、シエロは一言死にたいと答えてくれた。

「まあ、どうしても美男の裸を描きたいというのならあれの親友であるこのナルキス様が一肌脱いでやろう！さあさあ！遠慮は要らん！この美しい裸体を存分に愛で崇め描き記すが良い！」

「兵共、この露出狂を摘み出せ」

高速で衣服を脱ぎ捨てたナルキスから目を逸らし、殿下が冷たく一言。兵士達に腕を引かれて男は退場。それに伴い悲しげな伴奏が流れた。またお抱えの楽団連れて来ていたのか。

「ごほん、ええーああー……………とんだ闖入者があつたが今後このよ
うな事はないよう試験運営を務めたいと思う。真に失礼した」

場の空気のいたたまれなさに、流石の殿下も謝罪する。殿下もナルキスのことはシエロとは別次元で苦手というか嫌いらしい。

「私は構いませんが、あれで皆様が気分を害されたのでしたら私も謝りましょう。彼も私と同じ選定侯。ある意味で身内であるのは確かです」

友人とは絶対に言わず、それでもシエロも申し訳なさそうな顔。そんなシエロの憂い顔に会場の空気は再び色めき立つ。ナルキスだつて黙つていればかなりの美形に分類されるのに、美を愛する変態貴族達をあそこまでドン引きさせるとは……人間顔じゃないんだな、中身あつての顔なんだなと、カロンはぼんやり考えた。

「それで殿下？私はどちらを着れば宜しいので？なんなら会場の皆様がお決めになつても構いませんよ」

謝罪の意味を込めてなんなら女装でも如何？そんな含み言葉に歓声、女装コールが上がる。この人ら、欲望に忠実すぎる。

「……着ましたけど、これでいいですか？」

シエロは羞恥を隠して平静を装う声を出す。その微妙に平静になれていない感が逆に初初しい感じで悪くない。

「し、シエロ……」

それでもこんな人前でお前なんて事をしてるんだ！そう怒鳴りたくなる気持ちを抑えてカロンはシャロンを演じる。

「シエロ可愛いっ！！流石私のアモーレっ！愛してるっ！」

すかさず抱き付き頬に首に唇に、あつちこつちに口付けてバカッブルを演じ、いちやつけば……殿下がごほんと咳払い。

「あー、静粛に！これはまだ前座なのだから皆様！歌姫シャロンもあまりはしゃがないように」

「女の子の格好してシエロ、ときどきしてるの？シエロ、女の子みたい」

「し、シャロン……」

「あのねえ、女の子はこことかここが弱いんだよ？シエロはどうかなあ？」

「ひゃっ！し、しゃろん……っん」

「へえ、格好一つで弱くなっちゃうんだ？そんな可愛い顔するから女だなんて疑いかけられるのよもうっ！罰としてシャロンちゃんによるシャロンちゃんのためのセクハラの刑っ！」

「だ、駄目だってばシャロンっ！そ、そんなところ触っちゃ駄目……っ！だめだよ！本当、そこは僕っ」

「俺の話を聞けそのバカップルっ！」

「あー！殿下今バカップルって言った！認めた！絶対言った！みんなも聞いたよね？それじゃもう再発行認めてくれるんだよね？」

「い、今はそういう意味ではない！」

咳き込む殿下は部下に命じてシエロに近づき仮面を装着させる。

何事かと戸惑うカロンをも兵士達は捕まえて、布で目隠しをする。

「な、何するの！？」

「暴れるな。すぐに外してやる」

その言葉通り、1分後には目隠しは外された。

「さて、これより本番だ。歌姫シャロン……貴様があの男を愛しているというのなら、この会場からあの男を捜し出せ」

「な……」

カロンが連れてこられたのは玉座のある壇上。階下には大勢の人が溢れている。

辺りを見回せば、同じドレスを着た人間が大勢。薄暗い証明では髪の色もよくはわからない。そしてどいつもこいつもあの仮面。

「着替えたのが貴様なら、探すのはあの男の役目だったのだが……こうなった以上今度は貴様があれへの愛を見せる番。存分に証明して見せるがいい」

「証明って言われても……」

「何、貴様らしく知らん秘密。それを何題かクイズを出しふるいに掛けるも良い。片っ端から口付けをして本物を見つけても良い。どんな手を使っても構わん。見事本物を見つけ出せば、貴様からあれへの愛というのを認めてやる。ただし皆様方には暫く何も言葉を紡がないでいただく。特にシエロ！貴様が喋った場合には今回の試験、貴様らは失格だ！」

「くっ……」

此方が質問しても答えを答えて貰えない。か×かで場所を移動させるとかなら出来そうだが、この人数……ふるいにかけるには時間と労力が掛かる。そこでミスが生じる可能性だつて。

「しかし歌姫シャロン、貴様は病み上がりで記憶喪失だったな。どこまであれを覚えているかも怪しい。……しかしそんな中で本物を見つけてこそ、その愛は嘘偽りない物だという証明にならぬか？」

前座の流れに多少目移りはしたが、有名な歌姫シャロンにキス、或いはそれ以上のサービスをして貰えるかも知れない。そんなこの試験に、観客達は再び浮き足立つ。少なくとも今喜んだ奴はシエロではない。しかし歓声の大きさに、それを洩つただらうシエロの声

も掻き消され、何の手がかりも残らない。

(……………とりあえずスーツの人の中にシエロがいることはありえない)

床にはシエロが選ばなかったスーツがまだ捨て置かれている。

「……………それじゃアドレスの方々、ちょっと前へと出てきてくださ
い」

カロンはまずドレスの人間を選別。女になるとシエロは背が縮む。だから周りの女達と背丈はそんなに変わらない。それで見抜くのは不可能だ。色つきの証明の性で、シエロの髪色もわからない。ウィッグを被っている観客まで居る。

(あの一分でシエロの髪型変えられたり、ウィッグを被せられなかったとも言えないんだよな)

顔も仮面で隠されて、外見でシエロを見つけ出すのは不可能だ。

「殿下、私が話す分には良いのよね？」

「ああ、構わん」

「それじゃあ、行くわよシエロ」

カロンはすうと息を吸う。

「ねえ、シエロ……………覚えてる？そう、お風呂場でのこと。こんなところで嫌がる貴方の顔は……………とっても可愛かったわ」

シャロンの声を真似て、昨日の情事を甘くうっとり語ってやれば

……その場に座り込んだドレスの女が一人。

「見つけた！」

あんな恥ずかしいこと言えば本人は耐えきれずその場に蹲る。シエロは恥ずかしがり屋だ。間違いない。そう思って近づくも……何だか、嫌な予感がする。

「シヤロン……あいかわらず良い声……がくっ」

「その声、エーコ!?」

何でかエコーがその場に倒れ込む。目を白黒させるカロンの耳に触れる歌姫の吐息は熱を帯びている。どうやら興奮しているらしい。

「まったく、あの程度の言葉に腰を抜かすとは。我が妹ながら情けない」

「な、ナルキス!……さん」

歌姫シヤロンなどより、この俺の方が美声だろうとその声は疑問を上げる。

「あと我が妹よ。その仮面はあまりお前には似合っていない。お前も醜くは無いのだからもう少し外見に気を使え。仮面はこんな大勢と同じ物ではなく、オリジナリティー溢れる唯一無二の飾りのある優雅で優美で華やかな物がいいだろう。俺の持参した仮面を貸してやる」

「や、止めて下さい兄様!これ前見えなかつ!シヤロンが見えない!それに重くて外れない!」

ナルキスはカロンの抱き付くエコーの視界を塞いで引き剥がし、

さっさと抱きかかえる。無論当然の如く全裸。床に落ちているシエロが着なかつた服を拾い、ふうと息を吐いた。

「シエロならここにいないぞ。先程廊下に連れ出され、俺が脱いだ服を着せられまた戻されていた」

「え!？」

ドレス姿の人間の中にシエロがいると考えた。その時点で既に外れだったのだと教えられ、カロンは辺りを見回した。その中に、仮面を外して申し訳なさそうな顔をしたシエロが居る。

「不正解だ、歌姫シャロン。よって今宵の試験は失格……」

死刑宣告を語るような残酷な響きを宿し、殿下が下卑た笑みを浮かべる。それに必死に食い付くシエロ。

「待つてください殿下。シャロンはまだ病み上がりです。彼女のミスは恋人である私が取り戻します。それが恋人として当然のことです!」

シエロの言葉を予見していたように殿下はにやりと笑う。

「……よかろう、ならばチャンスをやる。だがシエロ、そこまで言うのだ。貴様がそれを外した時にはそれ相応の覚悟があるのだからな?再試験はこんな生温いことはせんぞ?」

相手の欲しい物は解っている。だからどう言えば殿下が呑むかを察しシエロは宣言。

「存じております。その時は……僕は次期王位継承権を放棄しま

しよう。フルトブラントの家は今代の人魚の伴侶は出せない。それでどうですか？」

その言葉を待っていた。殿下が怪しく口元を笑んだのを見、カロンはこれだけは止めさせなければと強く感じて声を張り上げる。

「いいえ！外したのは私です殿下！その時は私が歌姫を止め、人魚の座を諦め……この人の恋人に、妻になることも諦めます」

「歌姫シャロンが、引退！？」

カロンの言葉に観客達はざわめく。

「シャロン、私との約束破るつもり！？」

「だがな妹、そうなればあの歌姫がシエロと添い遂げることは出来なくなるが？」

「あ……」

エコーがナルキスの言葉に惑う。シャロンとまた一緒に歌おうと交わした約束。けれどその約束を捨てれば、忌々しいシエロというシャロンの恋人がいなくなる。友情と目先の欲というかどっちもある意味下心でしかない歌姫エコー。大いに悩み始める。

それは多分他の歌姫達にとっても好都合。シャロンが消えればフルトブラントという後ろ盾を得ることが出来る新たな歌姫が生まれる。貴族達もより自分に有利な方向へと考え始める者がいる。シエロが新たな歌姫を持ち上げるまで空いた時間で他の歌姫を人魚にすることが出来るかも知れない。或いは自分の身内をフルトブラント家に送り込む大チャンス。これに反対する者は歌姫シャロンの支援者くらい。

しかし下心無くシャロンの願いに共感するような支援者ならば、今日こんな所に来ていない。来ている上流階級のファンは、どうせ

ろくでもない奴ら。シエロの守りが無くなったシャロンを拾って煮るなり焼くなり企むのだろう。だから今日この場で……カロンの言葉に反対の意を唱えたのはシエロだけだった。

「シャロン……それは駄目だ」

「いいのよシエロ。その時は貴方は他の方と王を目指して……私の願いをどうか叶えて」

「……僕が愛しているのは」

他の誰かじゃなくて、君なんだ。君の代わりなんて居ない。そう言いかけたシエロの瞳が揺れる。それはシャロンへの言葉。それでも俺を相手に言う言葉。それを言ってしまったらカロンという人間を拒絶する。気付いてしまったシエロは、俺をじつと見つめて、そこで言葉を改めて……

「僕は君が好きだ。君を信頼している。僕は君以外とは組めない」

「シエロ……」

「僕の歌姫は、君だ。君だけだ」

共に復讐をと誓った。そのパートナーにはカロンの代わりは居ない。そしてそれだけではないとシエロは続ける。

「君だつて記憶を無くしてまだ解らないことも多いだろうに、一緒にまた試験を受けようと言って貰えて僕は……本当に嬉しかったんだ」

「……シエロ」

多少の嘘を織り交ぜながら、それでもカロンへの言葉をシエロは紡ぐ。シャロンとの思い出の形を、二人の関係性の証を取り戻そう。そう告げられた時は嬉しかったのだと。

今となつてはそんなもの取り戻さなければ、活動資金のためと嘯いて無理矢理シエロに肉体関係を迫れるかもしれない。そんな風にも思つけど、あの時……シエロは本当に嬉しそうに笑つたんだ。

涙を飲み込んでいたシエロがあの時から、俺の前でちゃんと涙を見せるようになった。それはこの人にとって危険なことだけど、俺の前ではその危険を冒してくれる。無意識かも知れない。だけど俺がその時この人を守つてやれるとこの人が……心を預けてくれる証拠なんじゃないか？

そうだ。そう思えばこそ。俺はこの人の笑顔が見たい。涙が見たい。そんな嘯く繋がりではなく、何時かちゃんとシヤロンからこの人を奪いたい。

そのためにはシヤロンがちゃんとシエロの恋人で居てくれなくては困る。俺はこの人の愛人ではなく恋人になりたいのだ。

「君がそれを言ってくれた時はまだ、君はそういう気持ちじゃなかったかもしれない。それでも僕はそんな君の優しさが……」

「違うっ！」

「シヤロン？」

「その時にはもう、思い出していたわ！一目見て、貴方が好きになりました……私は、あの日のように」

それはシヤロンがシエロに恋をした日のように。そのつもりで言ったのに、何故かもつと昔の物語を語っているような錯覚。その既視感に、シエロの瞳も揺れ動く。俺の言葉が波になり、彼の心に押し寄せていくのが見て取れる。

「貴方の傍に他の人がなんて、私も嫌。でも私は貴方なら私を間違えないと信じてる！だから全てを賭けられる！」

「シヤロン……」

「貴方が好きです、シエロ。私を遠ざけないで。私の居場所は、

貴方なの」

両手を伸ばしてその首に腕を回して、シエロは逃げない。そつと目を閉じ待っていてくれる。拒まない。受け入れようとしてくれる。いる。

それが嬉しくて、深く口付ける。ヒールのある靴は彼との距離を縮めてくれる。

呼吸の合間に目を開ける彼は、此方が目を閉じていないことを知るや否や顔を真っ赤に染める。恥ずかしいからそんな風に見ないでと言いたげな視線に、カロンは意地悪く笑いかけてやった。一番傍で恥ずかしい様見てやるって言ったじゃないかと。

「くっ……」

ここまで他人の見事ないちゃつきっぷりを見せられるとは、もはや拷問だと言わんばかりの殿下の苦しげなうめき声。いつそ認定証出してこの場を退散したい。いやでも駄目だ。そんな葛藤がそこにある。

「さあ、殿下。私は何をすれば良いのですか？どんな難問難題も、僕は僕と彼女のために解きましょう」

14： 歌姫（後書き）

次回が暗号回。

15 : の □ □ (前書き)

暗号回。無駄伏線の回収なるか？

物語の悪魔

『さあさあ！愉快的皆様方！ようこそいらつしゃいました！
これより物語の悪魔の契約者たる人の子より、出題をさせていただきます。』

愚かで滑稽な人間が苦しみ藻掻く様をお楽しみ下さい！
勿論、それが解けたから悲劇のヒロインが幸せになれるはずありません！
ですからどうぞご安心を。

推理小説で探偵が死なないなどと、いつどこの世界の誰が
決めましたでしょうか？

人間の定義など我々悪魔には、どうでもいいことです。』

*

(くそっ……)

アクアリウスは苦虫を噛み潰す。

(いや、待て……)

そして思い出す。俺の歌姫から託されていた物がある。懐から取り出すは、一枚の手紙。困ったときはこれを開けると言われている。歌姫ドリユアスも今日ここに来ているはずだ。しかしこれだけ同じ格好の人間がいればいかにアクアリウスと言えど、彼女を見つ

ることは出来ない。何度も抱いたはずの女一人見つけるのすら難しい。それはこれだけのバカッブルぶりを見せつける歌姫シャロンも変わらない。如何にシエロと言えど、不可能事はある。

人魚の王子の再来？先祖返り？ふざけるな。王位はこのままこのイリオン様が世襲する！他の選定侯家に譲ってなるものか。

(……………ふむ)

手紙を開いてみたが、まったく意味が分からない。だがそれがいい。

(これならばいける)

どうにでも後付けで解釈、蘊蓄たればいい。アクアリウスは領いて、その手紙をシエロの元へと放り投げた。

「まずはシエロ、この謎を解いてみよ」

*

「はい、シエロ」

「ありがとう、シャロン」

シエロが手紙を拾おうと腰をかがめる前に、カロンがそれを掴んで此方へ渡す。その行為に礼をし、シエロは手紙を開く。

「な、なんなのこれ？」

「……………」

隣で手紙を覗き込んだカロン。彼はなんじゃこりゃと顔をしかめ

る。それはシエロも変わらない。しかし殿下がああいう以上、これが何らかの暗号であることは間違いない。

(だけどあの殿下にこんな頭が回るとは思えない)

おそらく他の者。歌姫ドリス、或いはその従者メリア辺りの入れ知恵だろう。手紙には、こうある。

- “ 1 : 下町の少年渡し守
2 : 商家の歌姫
3 : 呪われた人魚の末裔
4 : オペラ座の歌姫
5 : オペラ座にて
6 : 下層歌姫
7 : 暗い月夜の暗い地下室
8 : 墜ちた歌姫
9 : 黒衣の男と見舞客
10 : くるねこのとおりみち
11 : 海の歌姫
12 : Charon = Huldbrand という歌姫
14 : の歌姫
15 : の ”

何かのプログラム？目次？演目？わからない。しかしぱっと見て解ることはいくつつかある。

(まずは偶数)

歌姫という単語が入っているのは、2、4、6、8、11、12、14。11という例外を除き全てが偶数。そして6と8だけ歌姫の

前に“の”がない。

(次は表記だ)

本来偶数という縛りがあれば10にも“歌姫”が入るはず。そこだけ何故か平仮名。“くるねこのとおりみち”……これに無理矢理数字を当てはめるなら、“96ね5の10り3ち”？

これだけでは意味が不明だ。しかし何らかの意味があるのだろう。とりあえずは保留。

(そして次に気になるのは12以降)

13番が欠けている。これは縁起が悪いから？しかしそれなら4や9を抜くべきではないのか？意図的に13が抜けている意味は何？そして14と15。

「殿下、これは14、15番の空白を埋めると言う質問で宜しいのですか？それともそれを埋めた上で何かに答えると？」

「そ、それは貴様が考えろ！あくまで俺は出題者！答えを言うわけにはいかんし不要なヒントは貴様にやらん」

「そうですか、ありがとうございます」

やはりこの反応。腐れ殿下が考えた物ではない。殿下は何も解っていない。だから答えられない。答えが分かっているのなら調子に乗ったこの男、ボロを出してヒントをもたらしてもいいはず。どうせ僕には解けまいと、そう見下して動くはず。それが無いと言ったとは、この男も答えを知らないということ。

「……………」

シエロはじつと手紙を見つめる。少なくともこの手紙を渡した人間は、僕とカロン君を知っている。でなければ解らない単語がある。

(そうだ、次は配役)

この手紙には人物を差す言葉が多く記されている。

“ 1 : 下町の少年渡し守 : これはカロンニナイアス

2 : 商家の歌姫 : これは歌姫シレナニネレイド

3 : 呪われた人魚の末裔 : これは選定侯家の人間を指す ? それなら僕シエロニフルトブランド。或いはナルキスニアルセイド、エコーニアルセイド、イリオンニアクアリウス。ただし“呪われた人魚”の末裔か、“呪われた”人魚の末裔かで該当者が変わってくる。

4 : オペラ座の歌姫 : これは歌劇の歌姫であるエコーニアルセイドと考えるのが妥当。

5 : オペラ座にて

6 : 下層歌姫 : これは歌姫ドリスニエウリード、或いは歌姫マインスニナイアード。

7 : 暗い月夜の暗い地下室

8 : 墜ちた歌姫 : これは歌姫メリアニオレアード ? それとも歌姫シャロンニナイアード ?

9 : 黒衣の男と見舞客 : 僕の周りで黒衣の男と呼べるのはアルバーダニグアイタ。客がシャロンへの見舞いを意味するならば、エコーにシレナ、ドリスにメリア、それからマイナス。

10 : くるねこのとおりみち

11 : 海の歌姫 : これは漠然としている。人魚を意味する言葉なのだろうか ?

12 : CharonニHuldrandという歌姫 : これはカロン、或いはシャロン。

14： の歌姫…これが意味するところはまだわからない。
15： の 『 』 ”

そう、この手紙は……脅迫文のように恐ろしい。シエロという人間の周りをここ数日観察していたとしか思えない。役者が周りの人々で符合するのはまだいい。

(15は保留。そして5番、7番、10番……)

人物を指さないのは基本この3つ。これは場所を意味している。何が恐ろしいと言えばそれは7番。

(地下室……)

その3文字がなによりシエロを恐怖させる。他のことなら確かに他人が知り得る情報かもしれない。少なくとも不可能とは言えない。しかし地下室。シャロンの死体の安置場所。それを指すこの言葉。唯の偶然？それにしても出来すぎている。

死体を隠すなら普通の部屋には置けない。その比喻表現がたまたま符合したとも取れるが、少なくともこの手紙を書いた人間は……“シャロンの死を確信している”。そして僕に脅迫してきているのだ。

「ねえシエロ……この文字って、あの
「…」

カロン君が真つ先に気が付いたのは僕とは違つところ。僕はこの謎を解こうと言葉を意味を見た。けれど彼はそうじゃない。まず文字について目を留めた。

(そうだ、これは……)

“ 16時に上層街、いつもの場所で。
シャロン”

あの手紙と同じだ。定規で線を引いたような筆跡を辿らせない妙な文字。これは偶然か？今の手紙には15までしかない。だがあの手紙は16時を指している。

「なるほど……僕は16時。つまりはこの手紙の差出人を当てればいいんですね」

「シエロ、どういうこと？」

「後で説明するよ。君は君が見ておかしいと思ったところを教えたい。それが僕にとつて何よりの支えだ。シャロンからの助言はあつても結構ですよね殿下？僕らは一心同体、恋人ですから」

「ふ、ふん！構わん！これが解けなければその恋人関係も今宵で終わり！精々最後の共同作業と行くが良い！」

殿下の許可は出た。まだ見えない事ばかりだが、カロン君のお陰でわかつて来た。

「ありがとう。君が隣にいてくれて良かった。君とならどんな謎も解けるような気がするよ」

「し、シエロ……」

心からの感謝と賛辞をもって彼に微笑めば、照れから彼は視線を手紙へと戻した。そして更なるヒントを僕へと送る。

「シエロ、これ……上層街がない」

「え？」

「オペラ座は中層街。くろねこ亭は下層街。上層街で待ってるのなら、それを指す言葉がないとおかしい」

「そうだね……」

強いて言うならば番と9番。しかしそれは上層街の代名詞とまでは言えない。それが上層街の僕の屋敷だと解つても、オペラ座やくるねこ亭ほどのインパクトはない。上層街を意味する代名詞なら、そう……この城くらいのインパクトが欲しい。

「いや……待てよ」

上層街ランクの歌姫。それを意味するのはシャロンとエコー。上層街とはつまり、該当する数字の上という意味。シャロンより上の数字で待つ、という意味ならばそれは11番か7番。

海で待つてる、地下室で待つてるとは、その表現は僕にとってはどちらも怖い。しかしシャロンに当てはまる数字は、シャロンだという確証がないものが多い。それならば明確にそれを知れるのはエコーの4番。犯人は3番で待つ。つまりは3番に該当する人物がこの手紙を書きました、と言っているに等しい。

「シエロ、そう言えば選定侯家って4つだったよね？」

「ああ、そうだよ。僕のフルトブランド。ナルキスのアルセイド。陛下のアクアリウス……はアクアリウト家が王位に就いたときの變化形。それから……」

「なんていうか上層街の人達って伸ばす苗字多いわよね。ナイアード、ネレイド、エウリド……」

「うん、そうだね。ここら一帯では貴族の家は伸ばす音が高貴っていう觀念があつて、貴族の称号がある程度のお金持ちは苗字を改名出来るんだ。だからみんな貴族らしさを求めてそうする」

「でも選定侯家は違うのね」

「僕らの家は特殊だからね。一時期の流行で苗字を変えるわけにはいかない」

「それもそうね。それじゃあもう一つの選定侯家の名前も伸びないんだ？」

「うん、もう一つはエウリュディ家。だけど今は血が途絶えたと聞いて……いや、待てよ」

シエロは気付く。3番に該当するのは……現存するその3家とは限らない。

「アルバ！大至急選定侯家の家系図を！」

「おいフルトブランド！あの男は貴様の恋人ではないだろう！」

「ですが彼は僕の使用人、彼は僕の手足、言うなれば僕自身です。何か問題でも？」

「お持ちしましたシエロ様」

「は、早っ！何なんだ貴様の使用人は……！」

「嫌な胸騒ぎがしましたので、予め家系図を常備しておきました」

「ええい！主共々忌々しいっ！流石はシエロ！貴様の手足だ！」

「お褒めにあずかり光栄です、イリオン様」

「我が名はアクアリウス！使用人風情が妄りに王子の名を呼ぶな！」

「これは失礼。ですか王名を名乗るべきは陛下だけかと思いましたが、アクアリウト様」

「ふ、不快な男だ！注意をしておけシエロ！っておい！貴様俺を無視するな！そっちがその気ならこっちにも考えがある！」

殿下は大声を張り上げて、大声を上げる。

「今から会場の皆様方にも同じ内容の暗号を配る！あの忌々しいフルトブランドより先に答えを導き出せた方には俺が褒美を出そう

「さあ！どうせ奴が答えを出すまで暇だろう皆様方！存分にあの男を出し抜いてくれるがいい！」

馬鹿の一つ覚えのように、執念深いこの男は記憶力だけは良い。暗記した手紙の内容を書き記し配布し始める。

けれどそれを意味するところが解るのは犯人くらいだろう。ほとんどの客はまったくヒントのない暗号に頭を抱え始める。それはそうだ。この暗号は四日前のあの手紙があって始めて機能する。シエロの心配事は専ら、あの馬鹿殿下が適当な答えを正解としてわめき立てないかと言うことくらい。その手にあの馬鹿殿下が気付く前に、さっさとこの謎を解こう。

シエロが受け取るは、アルバが懐から出した家系図。まずはじまりの王家はフルトブランドから四つに分かれる。断絶したというエウリュディ家。そこから分かれた名前を漁る。そのどれかに見覚えは聞き覚えはないだろうか。

膨大に広がり薄れていく家名を漁りながら、シエロはこれまでの他の疑問を再び繰り返す。

歌姫という単語。11という例外を除き全て偶数。そして6と8だけ歌姫の前に“の”がない。

平仮名。“くろねこのとおりみち”……“96ね5の10り3ち”。歌姫のあれはここにかかる？どこから“の”を抜けてこと？例えばくろねことおりみち？

それから13番が欠けている。意図的に13が抜けている意味は何？

「シエロ様、十二支という物をご存知ですか？」

「聞いたことはあるよ」

「では“ね”が子年……鼠を意味するとはご存知で？」

「アルバ、実は鼠好きなんじゃない？そんな雑学知ってるなんて」

「他国では常識にございます」
「うっ……ごめん」

博識な使用人を前に、どうせ僕は井の中の蛙だよとシエロは肩を落とす。

「王になるには他国文化風習を理解することも必要にございます。当然アクアリウス様はご存知でしたでしょうね？」
「と、とととと当然だ！」

あ、絶対嘘だな。

「無論俺も知らんぞ。しかし物思い耽るシエロ、その眼差しはなかなか美しい。俺ほどではないが」

「うん、ナルキス君は黙ってて。思考の邪魔だ」
「ふっ、俺の美声がお前の思考を遮ってしまうとは。嗚呼、俺は俺の美しさが恐ろしい！我が友を苦しめるこの美しき俺に神よ報いを与え給え！」

つい相手にしてしまった所為で余計ナルキスが五月蠅い。相手にするんじゃなかった。

シエロは片耳を塞ぎ、執事アルバと相棒カロンへと意識を戻す。

「それで子というのは何時を意味する言葉なんだい？」
「……くるねこのとおりみち、“96ね5の10り3ち”、この残った平仮名を表すと」

「ああ、関係ないこと聞いたんだね。ごめん」
「“ねのち”……つまりは“子後”、“ねずみのうしろ”となります」

「ねーうしとらうー……丑の刻！丑の刻参りって奴なら私も知っ

てる！」

「ああ、それなら僕も」

「何でそう言うのは知ってるんですかお二方、そこで目を逸らさないでください」

カロン君は「大事な妹に悪い男でも付いたら呪ってやろうと思って古今東西の呪いについて調べたことがある」みたいな顔をしている。危なかった。シスコン恐るべし。もし何か違っていたら僕がその対象になっていたのかも知れない。これ以上呪いが増えるなんてなったら大変なところだった。

「いや、僕は以前殿下が僕の髪の毛を欲しがってたからなんだろうなと思ってアルバに聞いたじゃないか。その時君が教えてくれたんだよ」

「そう言えばそんなこともありましたね。呪い返しはしておきましたからご安心を」

「き、貴様あ！数年前俺が複雑怪奇骨折をしたのはお前の所為か！」

「それはお前が階段で転び受け身を取り損ね美しくない落下をしたからだろう。何かにつけて俺の親友シエロの所為にするのは美しくないぞ？被害妄想ほど醜い妄想はない」

「貴様の自己愛妄想の方が百倍醜いわっ！」

ナルキスと殿下が言い争いを始めた。煩わしいので放置しよう。

出来れば二人とも部屋の外でやってくれればもっといいのに。その位空気が読めたらナルキスを知人から友人に僕の中でランクアップしてやつても良い。しかし生憎彼はそんな男ではない。故に今日も彼は僕の知人に過ぎない。

「つまり“96ね5の10り3ち”は丑に關係する」

「ちなみに丑は磨羯宮まかじきゅうを意味し、黄道十二宮の10番目を指します。十二支はそれぞれ黄道十二宮と置き換えることが出来るのです」
 「ああ、なるほど！それなら僕も解るよ。それじゃあそれぞれ何か関係しそうな情報を書き記してみようか」

| | | | | |
|----|---|----------|-----|---|
| 1 | 子 | 23時? 01時 | 宝瓶宮 | 水 |
| 2 | 丑 | 01時? 03時 | 磨羯宮 | 土 |
| 3 | 寅 | 03時? 05時 | 人馬宮 | 木 |
| 4 | 卯 | 05時? 07時 | 天蝸宮 | 木 |
| 5 | 辰 | 07時? 09時 | 天秤宮 | 土 |
| 6 | 巳 | 09時? 11時 | 処女宮 | 火 |
| 7 | 午 | 11時? 13時 | 獅子宮 | 火 |
| 8 | 未 | 13時? 15時 | 巨蟹宮 | 土 |
| 9 | 申 | 15時? 17時 | 双児宮 | 金 |
| 10 | 酉 | 17時? 19時 | 金牛宮 | 金 |
| 11 | 戌 | 19時? 21時 | 白羊宮 | 土 |
| 12 | 亥 | 21時? 23時 | 双魚宮 | 水 |

「この国は水と密接な関係を持つから、水元素と関わりのある星座なんかは僕も知ってるよ。昔父様に神話とか占星術の基礎とか叩き込まれたもの。でもアルバ、これおかしくない？水属性は巨蟹宮天蝸宮双魚宮の三つだったはずだよ」

「ええ！？水瓶座って如何にも水って感じなのに水じじゃないの！？」
 「うん、アストロロジカル・サインにおける水瓶座は風属性だよ。一覧にすると」

- “ 1 白羊宮 火
- 2 金牛宮 地

| | | |
|----|-----|---|
| 3 | 双児宮 | 風 |
| 4 | 巨蟹宮 | 水 |
| 5 | 獅子宮 | 火 |
| 6 | 処女宮 | 地 |
| 7 | 天秤宮 | 風 |
| 8 | 天蠍宮 | 水 |
| 9 | 人馬宮 | 火 |
| 10 | 磨羯宮 | 地 |
| 11 | 宝瓶宮 | 風 |
| 12 | 双魚宮 | 水 |

”

「こんな感じになるよ」

「へえ……殿下の苗字は水瓶座っぽいのに風属性なんだ」

「それは確か分家した時に如何にも水！って名前を名乗ったのは良い物の、その時代の当主には占星術の知識がなかったんだって」

「ああ……確かにその血継いでそうね陛下は」

「シエロ様、五行と此方の占星術は似て非なる物。アクアリウトの家は東洋に関心があったとこのことで其方を取り入れたとの説もあります。五行では宝瓶宮は確かに水にございます」

「くろね」……」

専門用語が出て来たのを機にわけわかんねと、話から外れていたカロンが不意に……小さく呟く。

「どうしたのシャロン？」

「昔母さんが話してくれた昔話に、この十二支ってのあったような気がする。猫が除け者になる話だろ？」

「……君は13番目が猫だって考えるの？」

「ふっ」

「は、鼻で笑ったわねアルバっ！」

「これは失礼シャロン様。猫が来たのは翌日です。13番目はイタチであったという話ですよ。ですから月初めをついたちとよぶのだとか」

「イタチとは向こうではどういう認識の生き物なのかなアルバ？」

「妖怪の類と言われております」

「妖怪？」

「此方で言う悪魔のようなものです」

「……悪魔か。だけど話が脱線してるね。“96ね5の10り3ち”の丑は、この十二支の順番では2番目。手紙では“呪われた人魚の未裔”を示す」

「しかしその磨羯宮、山羊座は黄道十二星では10番目。それが指すのは“くろねこのとおりみち”。堂々巡りですね」

「だけどこの手紙を書いた人が僕への挑戦でこれを出したなら、僕の知る占星術をメインに添えてくるだろう。もう一度10番に戻ると言うことは、まだ10番に隠されている言葉がある。今度は数字の方を見てみよう：“96ね5の10り3ち”、“965103”」

「くろこひまさ？黒子暇さでもう犯人は黒子雇っているナルキスさんじゃありませんの？」

「いや、シャロンそれは流石にあんまりだ」

遠目で見れば疑われる罪深い俺悲劇格好いいとかナルキスはほざいている。なんだか怒りを通り越してやるせない気持ちになるが、やっぱりあれが犯人でも良いかもしれない。

「くろ、こい、03？誰か苦労した恋でもしてたのかな。いや、違うか……そうだな。おかしいといえばこのプログラム表、0番がない」

「普通ゼロなんてないんじゃない？」

「だけどシャロン。それじゃあ暗号としてあんまりだ。0が付く

のが10番だけっていうのはその10番について謎が潜んでいる現状としてあまりに酷い。暗号として成立しない欠陥品も良いところだ。だからこれには前条件として13以外に0が欠けている。そう考えなければ推理のしようがない」

「だけどそんなこと言ってもシエロ、これ引つ繰り返しても逆さにしてもヒントなんか……」

「っ！でかしたシャロン！」

「え？」

カロンの逆さにしたのは僕がメモした紙、それから手紙。数字と平仮名。そこには共通点があった。

「つまり、0を抜かせというのがヒント！」

「ゼロを？それなら965103…が96513になる？黒子遺産？……余計わからないんだけど何これシエロ」

「つまりねシャロン、“くろねこのとおりみち”この平仮名を見て？おもしろいと思わない？まああるくなっている文字が多い。ゼロが隠されている文字の何て多いことか」

「あ！」

「この“くろねこのとおりみち”から文字に の付いている文字を取るう。そうすると“くろことりち”」

「黒子と理知？」

「数字にしますと“965”とりち。数字が3つまで減らされましたね」

「シエロ、理知ってどういう意味？」

「理性と知恵。要するに本能や感情に支配されず論理的に考え判断しろという差出人からの助言かもしれないね」

「い、嫌味な奴ねそいつ」

差出人からの挑戦的な言葉に、カロンが拳を固めている。この様

子だと差出人についての見当も立っていないのだろう。

(僕は大体解ってきたけど……)

手紙とメモを見ながら片目で視線を送った家系図で、それにめぼしい名前は見つけていた。

(9番6番5番は……5：オペラ座にて6：下層歌姫 9：黒衣の男と見舞客)

この全てに該当する歌姫は一人だけ。彼女はあの日オペラ座にいた。そして下層街の歌姫。僕は会っていないが見舞いにも来ていた。

「差出人はドリユアス」エウリード。エウリュディ家の末端エウリイド家……没落して貴族として消えた家名の一つ。彼女は元は貴族だったのか」

「ええ、ドリス！？だって彼女下町に住んでたって」

「没落して空から下へ降りたんだろう。その時点で貴族としては死んだんだ。てつきり歌姫として見栄え聞こえの良いうちに、適当に貴族風の名前を名乗ったのかと思っていたよ」

パチパチパチと、乾いた拍手。そこを見れば一人の女が歩み寄る。仮面の下から現れたのは歌姫ドリス、その人の顔。

「流石ですねフルトブランド様。流石はシャロンが選んだお方……」

あんなことがあったんだ。歌姫ドリスのことはカロン君は苦手のはず。

ボロが出てはならないとシエロはカロンを庇い前へと進む。

「殿下のお気に入りとの情報はアルバから聞いていましたし、最初からそうではないかと思いましたが、そんな推理では興醒めでしょうから頑張らせていただきました」

「うふふ。けれど14、15番に触れずに答えを出してしまうなんて驚きました」

「これには無駄な情報を、知識をひけらかしたくなるミスリード要因が多い。目移りさせて混乱させるのが狙いかと思いましたが」

「フルトブランド様はとても聡明でいらっしゃるのね。ええ、オペラ座でのあの花束を見た時から、一度貴方とはこうして知恵比べをしたいと思っておりましたの。なかなか素敵な花言葉でしたから」

“あなたはわたしをだませない”

その意味を正しく理解したのは3人の歌姫の中でこの歌姫ドリスだけ。それに思い当たる真実をこの女は知っていると言うこと。

この女がシャロンを……そう思うと目が熱い。瞳が燃えているようにその女を凝視する。

「シエロ」

カロンの呼びかけに、シエロは我に返る。その声はその青い瞳は冷静になれと訴えかけてくるようだ。

「……ありがとう、シャロン」

大丈夫だよと微笑んで、シエロは息を吸う。そうだ。まだ犯人と決まったわけではない。そこまでの証拠はない。けれどこの女は多くを知っている。その上で僕を脅迫してきている。迂闊な真似は出来ない。

「ですが美しく気高く聡明なフルトブランド様。そんな貴方であつても未来は読めないと言つことがよく分かりました。それが解るのでしたら貴方はこの空白の14、15のタイトルを埋めることが出来たはずですよ」

「……と、申しますと?」

「14番はさておき15番はノーヒントです。ヒントは見えない0番13番に隠しました。人間には見えませんわ。所詮我々人間など一冊の本の中を生きる……歴史書の一頁にも満たない、一行以下の存在」

何を言っているんだこの女は。シエロはまるで悪魔に魅入られたような、不思議事を語る歌姫ドリスを僅かに恐れる。彼女からは底知れぬ狂気が垣間見えるのだ。

「けれどスポットライトが当たることでは人は主役になれるのです。そうすることで一行以下の存在が、一冊の本を描くでしょう」

「どういふことですか?」

「さて、哀れなシエロ様にせめてもの情けです。15番の空白を教えてあげましょう。貴方は既に悲劇に喜劇に組み込まれております!」

「小娘……っ、まさか!?」

「アルバ……?何か知っているの?」

「あらあら執事様?過去に貴方も私と同じようなことをしたのですね」

歌姫ドリスを睨むアルバ。様子がおかしい。この執事は情勢に対してこんな剥き出しの敵愾心を向けるなんて。その様子があまりに見慣れず、シエロは胸騒ぎを覚える。ぎゅっと腕に抱き付いた、カロンの温かみに支えられなんとか平静を保ってはいたが……歌姫ド

リスは何かおかしい。歪んでいるなんてものじゃない。彼女は闇だ。とてつもなく深く大きな暗い闇。

「貴方の喜びを悲しみに、幸せを苦痛に変えるそのタイトルは、『悪魔の脚本『海神の柱』』……………近い未来の貴方を予言しますわシエロ様！」

歌姫は、高らかに歌う。それはそれは幸せそうに、呪いの言葉を吐き捨てる。

「貴方は決して貴方の愛しい人と添い遂げられない！」

「貴方は報いのため貴方が愛しい人に忘れられることでしょう！」

「美しいシエロ様、貴方は王にはなれません」

「海神の怒りはやがて貴方を滅ぼすでしょう！」

「ですが簡単に貴方は死ねません。人魚の血が生きながら身を食われる苦痛を与えてくれるでしょうから！」

一言一言が、胸を貫く刃のようだ。目に見えない剣で串刺しにされているような感覚。ドリスの言葉には不思議な重みがある。紡がれた言葉がそっくりそのまま本当になってしまふような……………そんな手遅れの危機感めいた物を送り付ける言葉だった。

「アクアリウス様、再発行をお認めなさって？その方が引き裂かれる痛みも強くなりますわ。あの生意気な小娘も、打ち拉がれれば幾らも従順になるでしょう」

「む……………お前がそう言うのならばそうなのだろうなドリス。よかろう、歌姫シャロン！貴様とシエロの恋人証明書、その再発行を許可しよう！」

「まあ、良かったですねシャロン？」

カロンにくすくすと笑みかける歌姫ドリス。その狂気じみた好意から、幼い彼を守ろうとシエロはカロンを背中に庇う。それにドリスは嫉妬するでもなく眼を細め、妖しげに笑うだけ。

「せいぜい短い余生をお楽しみ下さいシエロ様。それまでシャロンとお幸せに。大いにいちやつかれて結構ですわ、どうせ壊れてしまふ愛なら存分に幸せだった方が、より深い絶望が貴方のもとへ訪れますもの」

暗号回。遊び心で遊んだ結果、こうなりました。

丁度9話目までやって偶数に歌姫がついてるのをみてこれは使えるってなって。

だけど一つズレが来た。それなら10番を意味深にひらがなにしよう。

しかし、くろことりち？黒子ってなんやねん。そこからナルキスさんの部下が黒子になりました(笑)

そもそも世界観が安定しない。イタリアっぽいイメージの国を想定してるのに、暗号はひらがなのね。作者が外国語に疎いから仕方ないね。

ひらがなは解るのに干支わからんのねシエロ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6067x/>

悪魔の脚本『海神の歌姫～Il diva del mare～』

2011年10月28日08時12分発行